小田富士雄編

宝満山の地宝

財団法人 太宰府顕彰会刊

宝満山の地宝

―宝満山の遺跡と遺物―

小田富士雄編

財団法人 太宰府顕彰会 刊

本刊行は、モーターボート競走公益資金による財団法人日本船舶振興会の補助金を受けて実施したものである。



Ⅰ．宝満山遠望

— 筑紫野市阿志岐方面より望む —



Ⅱ．奈良三彩および緑釉陶

— 宝満山上宮遺跡 —



Ⅲ. 褐 釉 水 注

— 辛 野 地 区 —

刊行にあたって

宝満山は、太宰府の東北に聳える霊山である。この山には、古くから竈門神社が鎮座し、また奈良時代の神宮寺建立、延暦二十二年の最澄来訪以来、仏教文化も栄えた山である。最近では、一般登山者の愛好の的にもなっている山で、この山に歴史的遺産の多く存在することは、夙に知られるところであった。

昭和三十五年、「宝満山文化綜合調査会」が発足し、考古、文献、民俗、祭祀、石造美術、修験道の各分野ごとに調査研究がなされる計画がたてられた。然るに、その後の諸般の事情により、その報告書の発刊を見ずに今日に至った。

しかしながら、遺跡と遺物（考古）関係に関しては、小田富士雄氏を中心に、調査研究が進められ、その後、太宰府天満宮の小西信二氏の熱心な現地踏査などもあり、その遺跡、遺物の明らかになる物、莫大な数となった。

今回、昭和五十七年度太宰府顕彰会の事業として、昭和三十五年、三十六年の調査を基礎に、その後の成果を加えて、遺跡、遺物関係の報告書を発刊することになった。

本報告書作成にあたっては、九州歴史資料館・八尋和泉氏、倉住靖彦氏、森田勉氏、北九州市立歴史博物館・武末純一氏、太宰府天満宮文化研究所・森弘子氏という新進気鋭の諸先生方にも参画いただいたことは、さらに今後の宝満山研究にとって明るい将来を想起させるものである。

本報告書発刊によって、これまでの文献調査の成果たる、中野幡能氏の『筑前国宝満山信仰史の研究』に述べられていることが、遺跡と遺物によって、さらに確たるものとして認識されるに至った。しかし、宝満山は高く、山は深い。宝満山の全容を解明するには、更なる調査が必要であろう。本報告書が、その解明の手がかりへの第一歩となり、

宝満山の信仰と歴史、ひいては、日本民族が古来崇拝してきた霊山、あるいはその信仰の理解にとって一助とならんことを願ってやまない。

財団法人太宰府顕彰会

会長　西高辻　信貞

『宝満山の地宝』の上梓によせて

『宝満山の地宝』なる一書が公刊されるに至ったことは誠に慶ばしい。

かつて昭和三十五(一九六〇)年八月、太宰府天満宮宮司・西高辻信貞氏の発願で「宝満山の綜合文化調査」を行うため、故長沼賢海先生とともに不肖もその発起人に加えられ、且つ修験道関係の調査を担当せよということであった。その後、不肖は何等為すことなく、誠に申し訳なく思いつつも荏苒その日を送って来た。然るに此の度、他の研究者諸氏の多年にわたる熱心な調査研究の成果をまとめて、頭書の題名の一本として上梓され、西高辻宮司の念願と期待に応えられたことは、不肖の怠慢を恥ずるとともに、編集された諸氏に対し敬服感謝に堪えない。

本書は三部に分かれ、その第一部は「古代における宝満山信仰とその活動」として、ここでこの山名の由来に触れ、それが御笠山、竈門山(七世紀初めに置かれた大宰府のその鬼門に当るこの山に鎮守神として祀られた竈神にちなんだ名)、宝満山(玉依姫を祀る山)の順序で起こったものらしいこと。次いで「竈門神社と竈門山寺」の項において、その寺の方は平安中期大山寺と呼ばれ、天台の延暦寺の援助の下に神宮寺としての勢力を持つに至ったことを述べている。(以上、主として小田富士雄執筆)

第二部は昭和三十五(一九六〇)年十月から同三十六年四月の間に三回にわたり、鏡山猛、渡辺正気、小田富士雄、鬻久嗣郎、宮小路賀宏の諸氏が共同して現地踏査と遺跡発掘調査を行ったその詳細な報告である。

第三部では、前記二部の踏査発掘の報告以外に、宝満山近辺地域より多年にわたり、小西信二氏、故山内興隆氏外多数諸氏の資料蒐集家の収蔵品や、天満宮宝物館、竈門神社下宮の保管品その他につき、考古学的文化史的見地から調査研究を進めた結果を地域別にして報告したものである。

この第二部、第三部を通じて明らかにせられたことは、この山の上宮地域において、既に奈良朝時代に祭祀に用い

られた奈良三彩器の破片や、奈良朝時代の貨幣が数多く発見されていることで、従ってそれ以前からこの竈門山神に対する信仰があり、従って更に遡って白鳳時代に心蓮上人初登山の伝も、心蓮そのものの実在の人物か否かが一つの問題は別として、それ以前から山岳行者が此の山に登山錬行したであろうことは推察せられる。下宮も奈良時代にはあったことは、この地域から奈良時代の古瓦が出ていることで明らかである。その後平安朝、鎌倉時代、南北朝、室町時代、戦国時代、徳川時代と、この山の宮にも寺にも修験行者にも変遷盛衰のあったことが遺跡遺品の調査によってほぼ明らかにせられている。これら調査担当者としては既に名を挙げた諸氏の外、八尋和泉、武末純一、森田勉、倉住靖彦、その他である。記して敬意と謝意を表する。

干潟龍祥

例言

一、本書は一九六〇年、六一年に宝満山文化綜合調査会（代表・西高辻信貞）が主催して実施した調査のうち、考古学部門の報告とその後の収集資料調査を中心にまとめたものである。

一、調査実施後二〇年以上を経過しているので、当時の関係者にもかなり身辺の異同を生じているところから、調査当時から関与していた小田富士雄が本書の構成、編集にあたり、関連資料の調査には新たにつぎの各氏に執筆者を要請した。

倉住靖彦、森田勉、八尋和泉（福岡県立九州歴史資料館）、武末純一（北九州市立歴史博物館）、森弘子、小西信二（太宰府天満宮）

なお執筆分担分については第一、二、四部ではその冒頭扉に、また第三部では各文章中の末尾に明記しておいた。

一、本書掲載の写真は遺跡関係を小田、遺物関係を武末が撮影したが、巻首図版Ⅰ、宝満山遺跡の一部は太宰府天満宮文化研究所の提供である。このほか九州歴史資料館、朝日新聞社、福岡市葦書房、八尋和泉氏より提供をうけたものについては掲載箇所または図版目次の項に明記しておいた。

一、挿図については本書挿図目次の項に作図者、提供者などを掲げておいた。

一、遺物挿図のうち図版と対照できるものについては各遺物図の番号の下に（1―2）のように記して対応させている。すなわち1は図版一を、2は図版一のなかの遺物番号を表わしている。

目　次

刊行にあたって……西高辻信貞
『宝満山の地宝』の上梓によせて……干潟龍祥
例　言
第一部　序　説……1
Ⅰ　古代における宝満山信仰とその活動……小田富士雄……3
1　伝説上の宝満山……3
2　竈門神社と竈門山寺……8
3　大山寺の活動……12
Ⅱ　宝満山歴史年表……森弘子……18
第二部　宝満山遺跡の調査……小田富士雄……49
Ⅰ　調査経過の概要……51
Ⅱ　法城窟の調査……57
Ⅲ　上宮祭祀遺跡の調査……59
Ⅳ　下宮礎石群遺構の調査……65

第三部　宝満山関連遺物の調査……小田富士雄・倉住靖彦・小西信二・武末純一……75
森田勉・八尋和泉

はじめに……77
Ⅰ　上宮地区……79
1　施釉陶……79
2　貨幣……80
3　滑石製有孔円板……83
4　陶製品……83
5　瓦製施文鉢……84
6　瓦塔……84
7　墨書土師器……84
8　銅製儀鏡……86
9　金銅製仏像……88
10　懸仏とその付属品……89
11　銅製付属品……91
12　銅製香炉蓋……91
13　銅製品残片・銅滓……91
14　石硯……91
Ⅱ　下宮地区……94
1　古瓦……94
2　土師器……103
3　須恵器……103
4　陶器……103
5　中国陶磁……103
6　中園出土の中国陶磁・滑石製品……105
Ⅲ　御獄・本谷地区……108
1　古瓦……111
2　土師器……113

Ⅳ 辛野(九重ヶ原)地区……114
3 須恵器……113
4 製塩土器……114
5 瓦器……114
6 中国陶磁……114
Ⅴ 南谷地区……122
1 古瓦……114
2 土師器……114
3 須恵器……116
4 中国陶磁・高麗陶磁……116
Ⅵ 北谷地区……125
1 古瓦……122
2 土師器……122
3 中国陶磁……123
4 滑石製石鍋……124
Ⅶ 花見ヶ丘火葬墓……126
1 瓦器……125
2 中国陶磁……125
Ⅷ 経塚遺物(宝満山経塚)……127
1 銅製経筒……127
2 金銅菩薩形立像……130
Ⅸ 下宮宝物……135
1 銅戈……135
2 懸仏……135
3 唐獅子(菊目石製)……135
4 木造狛犬……136
5 水鏡……138
6 銅鏡……140
付・大南窟出土遺物……143

1 土師器……143
2 須恵器……143
3 瓦器……144
4 中国陶磁……144
第四部 結 語……小田富士雄……145
編集後記……150

挿図目次

第1図　宝満山とその周辺地形図（二万五千分の一「太宰府」分載）……2
第2図　宝満山の遺跡(1)（草書房提供、小田撮影）……43
第3図　宝満山の遺跡(2)（小田撮影）……44
第4図　宝満山の遺跡(3)（草書房提供、小田撮影）……45
第5図　宝満山の遺跡(4)（草書房提供、小田撮影）……46
第6図　宝満山の遺跡(5)（朝日新聞社提供、小田撮影）……47
第7図　宝満山史跡探訪略地図（小西原図、「古都太宰府を守る会」発行による）……53
第8図　法城窟平面実測図（渡辺実測、小田製図）……58
第9図　法城窟Aトレンチ断面土層実測図（鶴久測、武末製図）……59
第10図　上宮祭祀遺跡平面略測図（渡辺作成、小田製図）……60
第11図　上宮祭祀遺跡トレンチ断面土層実測図（渡辺測、小田製図）……61
第12図　上宮祭祀遺跡出土遺物実測図 ―土師器―（小田測、武末製図）……62
第13図　上宮祭祀遺跡出土遺物実測図 ―須恵器・灰釉陶―（小田・鶴久・武末測、武末製図）……63
第14図　下宮礎石群平面実測図（渡辺・小田・鶴久・宮小路実測、武末製図）……67
第15図　下宮礎石群第1～5・7・8トレンチ断面土層実測図（小田・鶴久実測、武末製図）……68

第16図　下宮礎石群発掘古瓦拓影(1)（小田作成）……70
第17図　下宮礎石群発掘古瓦拓影(2)（小田作成）……71
第18図　下宮礎石群発掘土師器・瓦器・陶器・石鍋実測図（小田・鶴久実測、武末製図）……73
第19図　宝満山関連資料発見地区小字要図（小西・武末作成、武末製図）……78
第20図　上宮地区遺物採集地付近地形図（小西原図、小田作成）……79
第21図　上宮地区採集施釉陶実測図（小田実測、武末製図）……80
第22図　上宮地区採集皇朝銭三種拓影・写真（小田作成）……81
第23図　参考資料・皇朝十二銭（滋賀県大中の湖南遺跡出土）（小田提供）……82
第24図　上宮地区採集陶製品・瓦製品・瓦塔実測図（小田実測、武末製図）……83
第25図　上宮地区採集墨書土師器実測図（武末・小田実測、武末製図）……85
第26図　上宮地区採集滑石製品・銅製品（儀鏡・懸仏など）実測図（小田実測、武末製図）……87
第27図　上宮地区採集石硯実測図（小田実測、武末製図）……91
第28図　下宮地区遺物採集地付近地形図（小西原図、武末作成）……92
第29図　下宮地区採集古瓦拓影・実測図(1)（小田作成、武末製図）……95
第30図　下宮地区採集古瓦拓影・実測図(2)（小田作成、武末製図）……97
第31図　下宮地区（字御供屋、字山の内）採集古瓦拓影・実測図（小田作成、武末製図）……99
第32図　下宮地区（字御供屋）採集鬼瓦（小田作成）……100
第33図　下宮地区（字大門九一八地点）採集古瓦拓影・実測図（小田作成、武末製図）……101

第34図　下宮地区採集土師器・須恵器・陶器・中国陶磁実測図……102
（小田・森田・武末実測、武末製図）
第35図　下宮地区（内山・中園）採集中国陶磁・滑石製品実測図（小田実測、武末製図）……105
第36図　御獄・本谷地区・辛野（九重ヶ原）地区・南谷地区・北谷地区遺物採集地付近地形図……106
（小西原図、武末作成）
第37図　本谷地区妙見祠礎石群略測図（小西作成、武末製図）……109
第38図　本谷地区妙見祠礎石群写真（小西提供）……110
第39図　本谷地区妙見祠礎石群採集古瓦拓影（小田作成）……111
第40図　本谷地区採集古瓦拓影・実測図（小田作成、武末製図）……112
第41図　本谷地区妙見祠礎石群採集土師器・瓦器実測図（武末実測製図）……113
第42図　本谷地区採集土師器・須恵器・製塩土器実測図（森田実測製図）……113
第43図　辛野（九重ヶ原）地区採集土師器・中国陶磁実測図（小田実測、武末製図）……115
第44図　辛野（九重ヶ原）地区採集須恵器実測図（小田実測、武末製図）……116
第45図　中国産長胴陶製壺参考品（小田提供）……117
第46図　中国産褐釉水注参考品（小田・桑野陽吉提供）……118
第47図　辛野（九重ヶ原）地区採集中国陶磁・高麗陶磁実測図（小田・森田・武末実測、武末製図）……121
第48図　南谷地区採集古瓦・土師器・中国陶磁拓影・実測図（小田作成実測、武末製図）……123
第49図　南谷地区採集滑石製石鍋実測図（小田実測、武末製図）……124

図版目次

巻首図版　Ⅰ　宝満山遠望 ―筑紫野市阿志岐方面より望む―

Ⅱ　奈良三彩および緑釉陶 ―宝満山上宮遺跡

Ⅲ　褐釉水注 ―辛野地区―

第50図　北谷地区採集瓦器・中国陶磁実測図（小田・武末実測、武末製図）……125

第51図　花見ヶ丘出土蔵骨器実測図（小田実測、武末製図）……126

第52図　参考資料・長治三年銘銅製経筒（小田提供）……127

第53図　宝満山経塚出土銅製経筒・金銅仏実測図（小田・武末実測、武末製図）……128

第54図　経筒内容復原図（石田茂作氏による）……129

第55図　下宮宝物・中広形銅戈拓影実測図（小田手拓実測、武末製図）……134

第56図　下宮宝物・懸仏実測図（小田実測、武末製図）……135

第57図　下宮宝物・唐獅子の現況（八尋提供）……136

第58図　下宮宝物・吽形狛犬の面貌（八尋提供）……137

第59図　大南窟出土土器実測図（武末実測製図）……143

【宝満山遺跡の調査】

図版　一　法城窟1

図版　二　法城窟2

図版　三　法城窟3

図版　四　上宮祭祀遺跡1

図版　五　上宮祭祀遺跡2

図版　六　上宮祭祀遺跡3

図版　七　上宮祭祀遺跡4　遺物1―土師器―

図版　八　上宮祭祀遺跡5　遺物2―土師器―

図版　九　上宮祭祀遺跡6　遺物3―土師器―

図版一〇　上宮祭祀遺跡7　遺物4―須恵器・灰釉陶―

図版一一　下宮礎石群1　空から見た下宮付近の景観1

図版一二　下宮礎石群2　空から見た下宮付近の景観2

図版一三　下宮礎石群3　礎石群発掘状況全景

図版一四　下宮礎石群4　各礎石発掘状況1

図版一五　下宮礎石群5　各礎石発掘状況2

図版一六　下宮礎石群6　各礎石発掘状況3

図版一七　下宮礎石群7　第2トレンチ上層遺物―石鍋、土師器、瓦器、陶器、瓦

図版一八　下宮礎石群8　第3トレンチ上層遺物―瓦
図版一九　下宮礎石群9　第4トレンチ上層遺物―瓦
図版二〇　下宮礎石群10　第4トレンチ下層遺物―土師器、陶器、瓦
図版二一　下宮礎石群11　第4トレンチ下層遺物―瓦
図版二二　下宮礎石群12　第5トレンチ下層遺物―土師器
図版二三　下宮礎石群13　第5トレンチ遺物―瓦
図版二四　下宮礎石群14　第5トレンチ下層遺物―瓦
図版二五　下宮礎石群15　第7トレンチ上層遺物―陶器・瓦器・瓦
図版二六　下宮礎石群16　第8トレンチ遺物―陶器・瓦器・瓦
図版二七　下宮礎石群17　遺物―陶器・瓦
図版二八　下宮礎石群18　遺物―瓦・瓦器

【宝満山関連遺物の調査】

図版二九　上宮地区1　滑石製品・陶製品・瓦製品・瓦塔
図版三〇　上宮地区2　墨書土師器
図版三一　上宮地区3　金銅製仏手・未開蓮華・中国貨幣
図版三二　上宮地区4　懸仏1
図版三三　上宮地区5　懸仏2・付属品
図版三四　上宮地区6　銅製香炉蓋・銅製品残片・銅滓

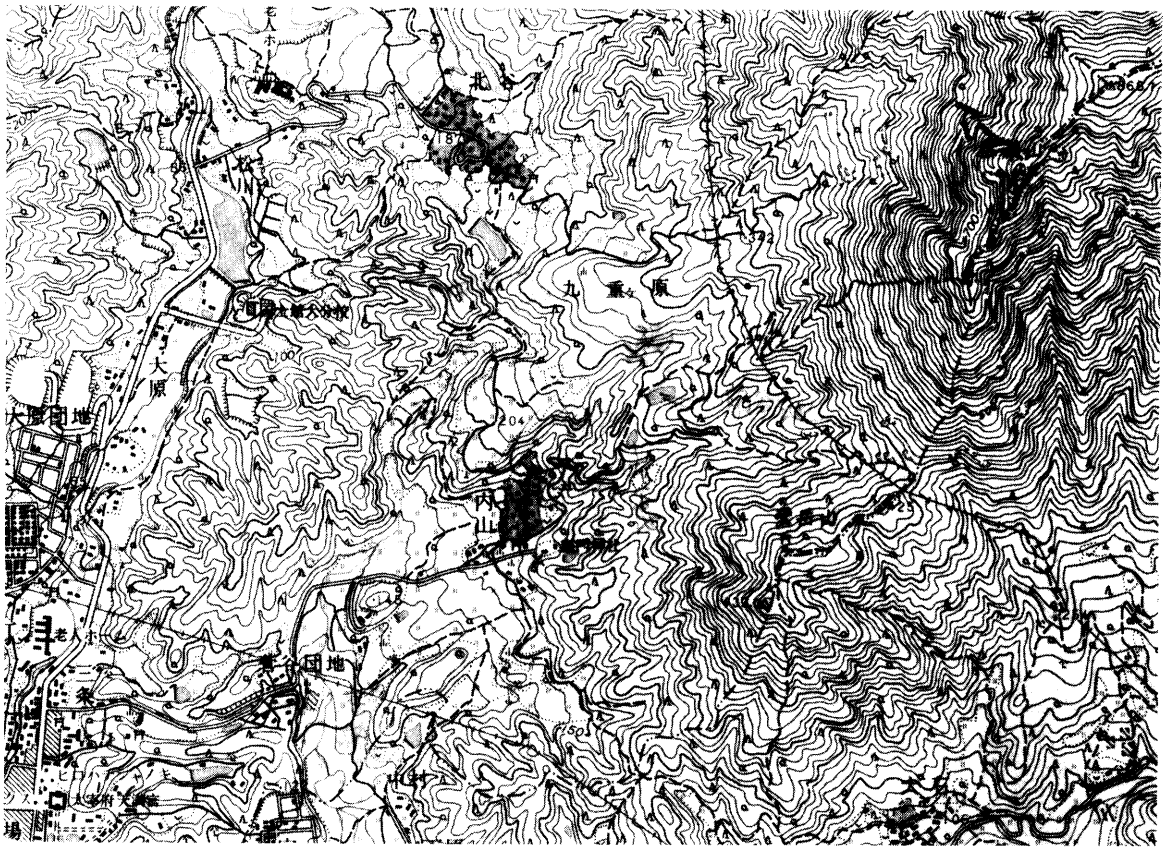
図版三五　上宮地区7　石硯
図版三六　下宮地区(御供屋)1　古瓦1
図版三七　下宮地区(山の内・大門・地蔵原)2　古瓦2
図版三八　下宮地区(大門・地蔵原)3　土師器・須恵器
図版三九　下宮地区(大門・地蔵原)4　中国陶磁1
図版四〇　下宮地区(大門・地蔵原)5　中国陶磁2・古瓦3
図版四一　下宮地区(中園)6　中国陶磁3・滑石製品
図版四二　下宮地区(大門・地蔵原)7・辛野(中堂)地区・南谷地区1　中国陶磁・陶器・石鍋
図版四四　御獄・本谷地区1　古瓦1・中国陶磁
図版四五　御獄・本谷地区2・辛野(九重ヶ原)地区1　古瓦2・須恵器
図版四六　辛野(九重ヶ原)地区2　土師器1・中国陶磁
図版四七　辛野(九重ヶ原)地区3　褐彩陶双耳付水注
図版四八　辛野(九重ヶ原)地区4　中国陶磁1・陶器・古瓦1
図版四九　辛野(九重ヶ原)地区5　中国陶磁2
図版五〇　辛野(九重ヶ原)地区6　土師器2・古瓦2・中国陶磁3
図版五一　辛野(九重ヶ原)地区7　中国陶磁4
図版五二　南谷地区2　古瓦・中国陶磁1
図版五三　南谷地区3　土師器

図版五四　南谷地区4　中国陶磁2（白磁）
図版五五　南谷地区5　中国陶磁3（青磁）
図版五六　北谷地区1　瓦器・中国陶磁
図版五七　花見ヶ丘・北谷地区2　須恵器・瓦器
図版五八　宝満山経塚遺物1　銅製経筒
図版五九　宝満山経塚遺物2　金銅菩薩形立像1
図版六〇　宝満山経塚遺物3　金銅菩薩形立像2　細部
図版六一　下宮宝物1　銅戈
図版六二　下宮宝物2　唐獅子（菊目石製）一軀
図版六三　下宮宝物3　木造狛犬1　一対　（八尋和泉提供）
図版六四　下宮宝物4　木造狛犬2　吽形　（同　右）
図版六五　下宮宝物5　木造狛犬3・獅子頭眉（同　右）
図版六六　下宮宝物6　水鏡・銅鏡1　（同　右）
図版六七　下宮宝物7　銅鏡2　（同　右）

第一部　序　説

Ⅰ　古代における宝満山信仰とその活動 …… 小田富士雄

Ⅱ　宝満山歴史年表 …… 森　弘子



第1図　宝満山とその周辺地形図(2万5千分の1「太宰府」分載)

I　古代における宝満山信仰とその活動

1、伝説上の宝満山

宝満山は福岡県太宰府市と筑紫野市にまたがる標高八二九・六米で円錐台形の山容をなす霊山である。北は尾根伝いに仏頂山、頭巾山、三郡山、砥石山につづき、東南に大根地山、古処山が望見される。また、南西山麓には太宰府市街をはじめとする古代大宰府郭内の地を望むことができる。

この山には古来竈門神社が鎮座し、いまも山頂に上宮（第6図）、中腹に中宮跡（第5図）、山麓に下宮（第2図）が在る。『延喜式』巻十・神名帳の筑前国御笠郡の項に「竈門神社名神大」と記載された式内社である。この山については貝原篤信（益軒）の『筑前國續風土記』（一七〇六年完成）に詳しい。

「此山は、國の中央にありて、いと高く、造化神秀のあつまれる所にして、神霊のとゝまります地なれはにや、筑紫の國の惣鎮守と稱す。凡國土には、鎮守となれる山あり。是を鎮山と云。神霊ありて、其國をしつめ守り給へり。山城近江に愛宕、比叡、伊吹あり。武蔵の秩父山、甲斐の白峯、信濃の淺間嶽、加賀の白山、越中の立山、伯耆の大山、日向の霧島、肥後の阿蘇、豊前の彦山、豊後の油布山の類の如し。かゝる大山には、必神霊ありて、自餘にことなれり。然れは國の福を祈り、禍をはらひ、年の豊を願ひ、凶を除き、或旱に雨をこひ、霪雨に晴をいのるも、皆鎭山におゐて行ふへし。其精誠を致さは、必應驗あらん事、うたかふへからす。此山は峯高くそひえ、雲霧ふかくおほひ、烟氣つねに絶えす。故に竈門山と云。又御笠山とも云。太宰府は此山下にある故、御笠の里と云。此山を或は寶滿とも號す。滿山岩石多くして、其形勢良工の削なせるか如し。誠に奇絶の境地也。篤信かつて諸國の名山を多く歴觀せしに、かゝる所はいまた見す。此山上に登れは、一瞬の間に、數百里の外までかへり見て、衆山の小なるを一覽し、

九川の内、近國は皆眼下一望の内にあり。西北には壹岐對馬はるかに見えたり。秋天晴朗の時は、しらぬ新羅の山も、ほのかに見ゆ。まことに廣大なるなかめ也。」（巻之七・御笠郡上・竈門山神社の項）

「御笠」の地名起源は『日本書記』第九、神功皇后紀に、

「元年三月戊子。皇后欲レ擊二熊鷲一而自二橿日ノ宮一還二于松峡宮一。時飄風忽ニ起テ。御笠墮（フキオトサレヌ）レ風。時人號テ其處ヲ曰二御笠一也。」（国史大系本）

とある説話に由来している。

宝満山の山容は山岳崇拝の対象となるにふさわしい秀でた姿を呈している。故大場磐雄氏の分類では〝浅間式霊山〟に属することとなろう。(1) 神霊が山中の巨岩に宿り、また天に最も近い山頂に神が天下ってくるという古代人の思考は、八世紀代の『常陸國風土記』や『出雲國風土記』などにうかがわれる。(2) 巨岩、奇岩の景観に秀でた宝満山にあっても例外ではなかったであろう。

またこの山に竈門山の名称があることについては続風土記にもその由来について「雲霧ふかくおほひ、烟気つねに絶えす」という説明があるが、貞享年中（一六八四―八七）に旧記を集めて編まれた『竈門山旧記』(3) にはまた別の由来が記されている。

「伝ニ曰、カマト山ト云事昔シ天津御神天降在マシテ国津御神成出給ウ時、清浄ノ水ヲ以テ湯ニワカシユアヒサセ玉ウト也。此山ノ頂ニ水上ナキ水有リ。俗ニ曰ウ老人影ヲ移（写）せハ若ク見へ、衰ヘタル形ヲ移（写）ハ健ニ見ユル。中古以来益影ノ井トモ申也。此水ヲ湯アヒノ水ニ撰ヒトリ玉ウト也。其上ニ鼎ノ如三ツ立タル石有。高サ一丈余三石ノ間一丈、今道ニシテ其中間ヲ通ル。爰ヲカマト石トモ竈門岳トモ申也。此石ニ釜ヲス（据）へ湯ヲワカシ玉ウト申。此ニカケタル釜石ト成リ、蓋トナリ、釜石、釜ノ蓋石と云石有リ。去ルニ依テ名トスト云ウト火ヲモヤシ玉ウ。御神火焼ノ皇子と申テ此鼎石の辺ニ祭ル竈ノ神ノ御事也。諸人崇ムル処ノ三宝是也。或書ニ曰、応神天皇粕屋郡宇美村ニテ誕生ノ時此ノ清浄水ヲ湯ニワカシ産湯ニサセ玉ウト有。」

いま中宮跡から上宮に向う途中に在る「仙竈岩」がこれにあたる（第5図）。三岩鼎立し、その一つに「仙竈」の刻銘がある。仙崖和尚の書でその傍らの岩には近世顚覆していたので文化一三年（一八一六）四月に座主信雅が復旧したことを刻んでいる。「竈門岳」の名称はここが小さな峰をなすところから出たのであろう。

竈門山に座す神霊を祀るところから発して、やがて竈門神社が設営されるにいたったが、『延喜式』によればその祭神は一座であり、固有の神名は不明である。『續風土記』には、

「祭る所の神は、海神の女玉依姫也。鸕鷀草葺不合尊の御后也。日向國高知尾岳にて、神武天皇を産給ひて後、竈門山に入玉ふたかや。相殿の神二座あり。左は神功皇后、右は八幡大神なり。」

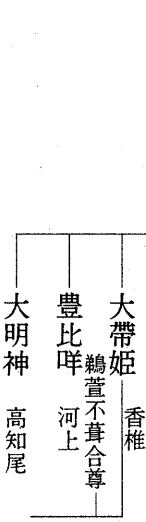
とあって、いつの頃からか三座の固有神が祀られるようになったことがうかがわれる。また『竈門山旧記』にも

「竈門之明神其由来ヲ奉尋ニ水海神ノ御女子玉依姫ト申。」

とあるが、さらにまたつぎのような別の所伝もみられる。

「世ニ崇敬シ奉ル始ハ天智天皇ノ御宇都ヲ太宰府ニ建玉ウ時、鬼門ニ当リ竈門山ノ頂ニ八百万神之神祭リシ玉ヒ真板木ヲ立端出縄ヲ引初メ玉ウ。」

『八幡宇佐宮御託宣集』[4]第二巻には「或記云。娑竭羅龍王娘五人」の系図が記されている。



また天平勝宝七年（七五五）の神託として、

「大帯姫者吾母。卽娑竭羅龍王乃夫人也。竈門明神波吾姨。龍女波吾妹。是十一面觀音之變身也。」

と述べられている。中野幡能氏[5]は竈門社と宇佐八幡宮の関係は筥崎宮の遷座以来のことで、「宝満大菩薩」と称されるようになったのも平安時代末期からであろうと推測されている。

一方、宝満山のような山容は、古来仏教や修験の徒が入山して修業するに適しているところから、早くからこの方面の影響が及ぼされて神仏習合的傾向がみられるようになった。仏教公伝以前にさかのぼって豊前の彦山や求菩提山に開基伝承がのこされているのはその証となろう。宝満山でも天武天皇の白鳳二年（六七四）に心蓮上人が入山して修業した伝承がある。

「天武天皇ノ御宇心蓮上人常ニ楜阿伽ノ水ヲ以テ山中ヲ修行ス。白鳳二年二月十日壬午辰ノ一天ニ山谷震動シ異香繽紛トシテ忽然ト貴婦人現シ給ヒ貴婦人上人ニ告而曰、我ハ是玉依姫ノ靈現国ヲ守リ民ヲ爲ニ鎮護一ニ此山中居スル事年久シ。（中略）忽チ雲霧四方ニ合シ貴婦人変シテ金剛神ト顕レ玉イ、御手ニ錫(鉄)杖ヲ横ヘ九頭ノ竜馬ニ駕シ十神其躰異形也。上人感歎シ其所今ノ針ノ耳戸ト申。昔ノ石門也。竜馬ノ蹄一ツ地ニ付処今尚其印有リ。俗人是ヲ馬蹄石ト呼ヲ上人感歎シテ時ノ官領ニ申ニ此旨一奏聞ス。天皇聞召貴異ノ思ヒヲナシ有司ニ宣下有テ御社ヲ立神慮ヲ安ンセシム。今ノ上宮是也。宝満宮ト申ス事宝ハ珍財ノ至極ナルカ故ニ玉ヲト云字作ルト也。満ハ塩(潮)ノ起リ來テ至極ナルヲ満ト可レ云。然ルニ依ト云字ヲ満ノ字ニ書改宝満ノ二字ト玉依ノ二字ト一和通用スヘキカ、宮トハ勅定ヲ以立始メシカ故亦勅宮トモ申也。然ルニ此宮ヲ以テ鎮護国家の惣廟トス。心蓮上人ハ白鳳十二(六八四)年六月十日ニ寂ス。北ニ当テ丸山有。其頂ニ奉レ葬リ仏頂山東尾寺ト号。」（竈門山旧記）

このような伝承が成立した時期は不詳であるが、玉依姫が変じて金剛神に顕現した所伝などは明らかに神仏習合させた修験道における守護神の思想を盛りこんで形成されていることを示している。また上宮が玉依姫を祀る勅宮に始まる伝承や〝宝満山〟の字義などについてふれられている。

心蓮入寂の地とされる仏頂山東尾寺の跡は上宮から尾根伝いに東北方に十分ほどの仏頂山頂（八六九米）と伝えられ、心蓮上人の墓と称される石祠が近年再興されている（第5図）。

つぎに登場するのは役小角である。修験道の開祖とされるその人物は、後世修験道の隆盛とともに神格化され、日本各地の霊山にはほとんど入山した伝承が付会されるようになった。(2) 宝満山もまた例外ではない。

「四十二代文武天皇ノ御宇役小角登山在マシ四十九日振鈴登旦(檀)シ明神之影向ヲ祈リ玉ウ。其地七ヶ所岩屋是也。其岩屋窟宝城窟福城窟釵窟大南窟藤窟宝塔窟釜蓋窟俗名ヲ付テ呼ト見ヘタリ。此外ニ雨宝ノ岩屋ト云処有リ。小角俄ニ雨ニ相(会)此岩屋ニテ凌玉ウ。小角雨ニ宝ノ岩屋トノ玉ウ。後世雨宝童子ヲ安置ス。側(傍)ニ獅子童子、竜樹菩薩在マス。行者修行ノ砌出現シ玉ウ是処ト也。同所竈門山法(法)立灌頂ノ地也。其下ニ滝有。獅子滝ト云。行者阿伽水汲玉ウ水也。雨乞之節秘法所也。小角神道ノ明ナル事ヲ祈リ、七ヶ所修座一々異形ニ御影ヲ顕シ玉ヘルナリ。猶高徳ノ深事有ヘシト至心念咒祈ケルニ、四十九日ノ暁天ニ山谷鳴動シ草木色ヲ変シ大慈大悲ノ観世音出現シ玉ウ。並ニ阿●(弥)佗釈迦薬師普賢文珠持国増長広目多聞愛染地蔵囲饒シ玉ウ。小角正ニ礼拝信敬シテ自レ此以来本地垂跡ノ二門ヲ立当神ヲ祭リ奉ル。十神之尊形旧記ニ伝フ。十社皇子ト申ス御末社也。各々本地ヲ配立。松尾皇子(不動持国天)金凝(普賢大狗)竈尾(勢至増長)竈門(釈迦)根本(地蔵)中津尾(文珠)降日(薬師)照日(愛染)釵皇子(弥陀)天智(多聞弥勒)乙宮竜口(広目天)十一神也。十社皇子ト云時ハ一社ヲ除而別宮トシ百廿末社内トス。小角吾法ノ不レ絶カタメ久シク深仙ニ行座シ香精ノ流ヲクミ竈門山ヲ金剛界トシ日子(彦)山ヲ胎蔵界トシ金台両部ノ際聞ニ八葉九尊ヲ修立シ十二因縁ノ道場十界曼多羅是也。役ノ小角遺法ノ峯行満補ニ属之一ヲ次才委旨教師ノ伝ヲ可レ聞。其後義覚義玄智証増命増誉等試レス之。」(竈門山旧記)

役小角を導入して山内の修行窟を設定し、また各神仏の本地垂迹関係を定め、彦山との関係を規定するなど、修験の山としての整備がなされている。

ところで後述するように確実な史料にあらわれる「竈門神」や「竈門大神」といわれる神がこの山に鎮座する本来の神であろうことは推察されるのであるがその内容については明確でない。そこで竜神の系譜をひく玉依姫とは別系統に属する竈門神についてもふれておく必要があろう。大陸では古来炉や竈を神聖視し、家族の繁栄を祈る家神として信仰されている。中野幡能氏は大宰府設置のときに「鬼門除」のために山頂に八百万神を祀ったという伝承に注目

して、このときに大宰府鎮護のために竈神が勧請されたであろうと推測されている。(6) このような大陸系の神が祀られた背景として、北九州地方は古くから半島や大陸の門戸であったから、とくに半島との関係で、この地方にも韓系の神を祀る祭祀集団が強かったであろうことをあげている。また六世紀代の近畿地方で古墳のなかに竈、釜、甑のミニチュアを一組として副葬する事例に注目した水野正好氏は、百済・漢人系の外来氏族の居住地にみられる特異現象であること、故地における竈信仰の慣行を継承したものであることなどを指摘された。(7) さらに平安時代になっても平野神社の祭神のなかに久度・古開の二神として現用の釜竈につく神格、使用ずみの釜竈に宿る神格が祀られていることをあげている。また岡山県大飛島祭祀遺跡は八～九世紀の遣唐使往来にかかわる祭祀が行われたものと推測されているが、ここでも竈形ミニチュアが発見されている。(8) 律令時代には竈形ミニチュアは神への祭料となっており、国家的な竈神として定着していたというべきであろう。のちに最澄が渡唐に際して竈門山に祈願している背景も察せられる面があろう。

以上によって原始的な山霊信仰の系譜をひき、玉依姫に神格化された系統のものはのちに修験信仰に継承されてゆき、また大陸系の竈信仰の系譜をひき、律令時代の国家神として竈門神に神格化された系統のものは太宰府鎮護のために勧請されたであろうと考えられるのである。

2、竈門神社と竈門山寺

竈門山に関する記録は九世紀になって登場する。

延暦廿二年(八〇三)閏十月廿三日。最澄和上於二太宰府竈門山寺一。爲二渡海四船平達一。敬二造檀(像)●薬師佛四軀一。高六尺餘。其名号二无勝淨土善名稱吉祥王如來一已上(『扶桑略記』抄二・桓武天皇)

同様の記述は『金玉』、『叡岳要記』にもみえている。遣唐使船は翌二三年五月一二日に難波を出発しているので、

最澄はそれに先立って前年から大宰府に至り、竈門山寺のほか豊前の宇佐八幡神宮寺や賀春(香)神宮寺に講経祈願しているのである。(9) いずれも渡来神にかかわる神宮寺であったことが注目されよう。またこの記録によって八世紀にさかのぼって竈門神社が存在し、またその神宮寺である竈門山寺が存在したことも知られる点で重要な史料である。一九五三～五七年に現在の下宮の地に在る礎石群付近から奈良時代に比定される一組の瓦当資料が発見された事実はその証となろう。(10)

やがて無事帰朝した最澄は弘仁五年（八一四）春、神恩を謝して八幡神宮寺や賀春神宮寺で読経している（『叡山大師傳』）。その後承和七年（八四〇）に竈門神に叙位のことがあってから、年を追うて昇格している。以下それを追うてみよう。

承和七（八四〇）　四・二一　従五位下竈門神に従五位上を授く（続日本後紀）
嘉祥三（八五〇）一〇・七　竈門神正五位上を授けらる（文徳実録）
貞観元（八五九）　一・二七　正五位下(上カ)竈門神に従四位下を授く（三代実録）
元慶三（八七九）　六・八　従四位下竈門神に従四位上を授く（三代実録）
寛平八（八九六）　九・四　従四位上竈門神に正四位上を授く（日本紀略）
延長五（九二七）　竈門神社を名神大社に列す（延喜式）
嘉承元（一一〇六）一一・三　従一位竈門宮に正一位を授く（中右記・百錬抄）

このように竈門神社は大宰府の鎮護神として府の厚い保護を受けて昇格を重ねたが、さらに一方では最澄の参詣が以後この神社、神宮寺の地位を一層高めることに役立ったであろうことは否定できない。承和九年（八四二）七月二二日には祟りあるによって筑前・宗像神、竈門神、肥後・健磐龍神などに奉幣使を遣わしている（続日本後紀）。

また承和一四年（八四七）には唐から帰朝した円仁が転経報謝している。

「十一月廿八日。於二大山寺一始入唐時所レ祈金剛般若五仟巻。皆先馳レ使。奉レ送二綵帛一。同日。早朝一時發二遣綵帛使一訖。便轉レ經。同日。爲二竈門大神一轉二一千巻一。」（入唐求法巡禮行記・巻第四）

翌二九日午前には住吉大神、午後には香椎名神のために転経、一二月一日午前には筑前名神、午後には「松浦少貳靈」（藤原広嗣）、二日には香春名神、三月には八幡菩薩（宇佐八幡宮）のために転経している。これらの読経報謝業は最澄以来渡唐僧のあいだに定着したのであろうが、これらによって叡山系仏教との関係をさらに深めてゆくこととなった。承平三年（九三三）に最澄遺記によって沙弥證覚が竈門山に宝塔一基を造立したごときはその証であろう。

「府牒　筥埼宮

應令造立神宮寺多寶塔壹基事

牒、得千部寺僧兼祐申狀偁、謹案天台傳教大師去弘仁八年遺記云、爲六道衆生直至佛道發願、於日本國書寫六千部法花經、建立六箇基寶塔、一一塔上層安置千部經王、下壇令修法花三昧、其安置建立之處、叡山東西塔、上野下野國、筑前竈門山、豐前宇佐宮彌勒寺者、而大師在世及滅後僅所成五處塔也、就中竈門山分塔、沙彌證覺在俗之日、以去承平三年造立已成、上安千部經、下修三昧法、宛如大師本願、未成一處塔者、謂宇佐彌勒寺分也、（中略）

承平七年十月四日　　大典惟宗朝臣（花押）

參議帥橘朝臣『公頼（自署）』　　」

（『大日本古文書・家わけ第四』石清水文書之二・四八一号）

元来「竈門山寺」の名称は竈門神社の神宮寺として発足した由来にもとづく自然発生的呼称であろう。承平三年（九三三）に竈門山に宝塔を造立した前掲文書にも寺号は現われていない。ただ円仁（七九四―八六四）が承和一四年（八四七）に報謝のため綵帛を送ったことを記録する『入唐求法巡禮行記』には「大山寺」の寺号がみえ、これが竈門山寺にあたるであろうことは推測できるのであるが、この原本は現存せず、一三世紀代の写本が最古のものである。したがって円仁生存中に選述されたものであれば寺号は九世紀代までさかのぼせうるが、没後に子弟が選述したことが考えられる場合には承和年中に寺号が成立していた確証は得られないことになる。これ以外では長保五年（一〇〇三）に皇慶らが入宋を中止して「大山寺」で阿闍梨景雲から両部大法を受けた記録（明匠略傳）まで寺号は記録されて

いない。おそらく一〇世紀ごろまでは寺号が成立していたとしても、神宮寺の活動がまだ活発でなかったために竈門山寺の通称が流布していたのであろう。一二世紀以降「大山寺」、「有智山(内山)」の両名称が用いられ、南北朝以降は後者が用いられている。要するに竈門神の昇格、叡山との交渉という経過のなかで、神宮寺としての竈門山寺もあわせて重きをなして寺号が定着するにいたったものであろう。

また竈門神社の方も位階昇進とあわせて朝廷、大宰府からも注目されるようになった。以下編年的に竈門社関係の記録を追うてみよう。

天元二年(九七九)には太政官符をもって住吉・香椎・筑紫・筥崎の諸社とともに大宮司をもって貫主とすることが定められた(類聚符宣抄)。また応徳二年(一〇八五)には神領八〇庄を朝廷より賜わったと伝えられている。『竈門山旧記』にはつぎのような記録がある。

「七十二代白河院御宇綸旨ヲ下シ玉ウ。其趣、竈門山大神ノ社九州惣鎮守不レ混二諸社一別宮也。聖朝安穏(寧)。宜抽二懇祈一。神領八十荘任二一条家別当一諸般可レ依二座主下知一者依二天気一如レ件。応徳二年五月九日左大史小槻宿禰。左中弁藤原朝臣。太宰権帥大江朝臣ニ当ル。又下知状ニ曰ク、竈門嶽宝満宮ハ九州鎮守ノ霊社一府尊崇之名神也。山高嵐唱二常楽我常響一渓深而大慈大悲之流レ潔シ。誠可レ謂二厳重神屈無双之霊神一矣。然則以二当社一爲二天長地久御願所一不レ令レ混二余社一可レ抽二精誠一。西州武官不レ猥二寺社一。阿闍梨僧都可二以相勤一者下知如レ件。応徳二年五月九日左大史小槻宿禰。左中弁藤原朝臣。竈門山座主別当ニ当ル文章不審。右伝如レ此。此時神領一国一所寄附ノ田園所々ニ有リ。其印シニハ当社勧請ハ其謂也。」

ここに引用された綸旨の原文書は現存しないが、旧記編纂時まで存在したか、すでに散逸したものの写しが保存されていたかのいずれかであろう。当時の綸旨の形式を踏んでいるのでそれに基づいて引用されたのであろうと思われる。しかし一方では「八十荘」という数はあまりに大きいので作文ではないかと疑うむきもないではない。

応徳二年(一〇八五)九月五日には陰陽寮から竈門社御遷宮の日時が勘申された(石清水文書)。

長治二年（一一〇五）三月三日上宮焼亡し、五月一九日このことを卜っている（記中右）。

天永二年（一一一一）一〇月六日には大宰府から言上した竈門神社の怪異を卜っている（記中右）。

天永三年（一一一二）四月一二日には陰陽寮で竈門上宮御遷宮の日時を勘申している（石清水文書）。

保延六年（一一四〇）閏五月五日には大山、香椎、筥崎等の大衆神人等が張本となって「宰府已下屋舎数十家」を焼払うという濫妨を働いている（百錬抄・十三代要略・石清水八幡宮記録）。この頃には大宰府の権威も失墜し、大山寺の力はそれを凌ぐまでに成長していた。大山寺の活動についてはさらに次項でくわしくふれることにする。

久寿二年（一一五五）四月二六日、「大宰府言上竈（ママ）宮為天火所焼由之文」（記台）。落雷による焼亡であったことが知られる。

平治元年（一一五九）「竈門宮焼亡」（百錬抄、平治元・八・二）。

3、大山寺の活動

康和四年（一一〇二）、宇佐八幡宮は当宮領府内左郭七条二坊に在る薗地に対して大山寺が押妨を致した旨を大宰府に訴えた事件がある（平安遺文二六五七号）。その結果、「於二宰府一対決、被レ進二宮府解一之間、依二文書之理一、被三停二止大山寺之妨一」れて大山寺の敗北に終った。宇佐宮側のいう「文書之理」とは「件薗元者是典（主カ）代大中臣有助所領也、而以去永保二年二月十二日相二副次第文書一、限二永代一所レ沽二却大宮司公則宿禰一也、其後為二当宮御領一無二他妨一」しというにあった。すなわち大山寺は宇佐宮が買得した府内の地に干渉を加えたのであり、当時勢威を誇った宇佐宮と対決する程の成長振りを示したのである。

これより二年後の長治元年には延暦寺大衆の使と号する悪僧が大山寺領庄園に濫妨を働いた事件がある。この事件の内容は翌二年正月、検非違使庁から大宰府にこの悪僧を捕えて差出すよう通知した文書によってうかがわれる

（卅五文集）。すなわち、長治元年一一月八日、時の大山寺別当法橋上人位光清が、この事件の張本人として信厳法師（前別当定、後見俊）上座宗胤法師、並びに叡山大衆使（法薬禅師使）と称する僧（名字不明）を処罰すべき宣旨を下行するよう中央に申請した。寺家では「度々雖二訴申一、府全無二承諾一」く、その上「被レ成二府奉行於彼悪僧等之方一」たがために、「寺家所司庄民等、皆寄二彼方一、忽諸寺家政所畢、就中信厳、宗胤等為二悪僧之方人一、借二請宋人等物一、申二成府奉行一、窓二凌庄民等一、恣猥行二苛法一」い、これが「有レ限寺家佛事修理之勤、已及二闕怠一」べることを訴えたのである。これによれば府官人のうちに寺家の訴状をとりあげず、これらの僧と結托する者があって、悪僧は寺家の庄園に立入り庄民に苛法を行ったことが知られる。しかもその名目は宋人等の物を借請けるというにあった。ここで注目されるのは、(1)被の悪僧が叡山の使と号することによって容易に寺領内に立入ることが出来たこと。(2)別当光清と上座宗胤及前別当後見人信厳が相反目していること。(3)大宰府官人が叡山側の悪僧と結んで大山寺に製肘を加えていること。(4)寺領立入りの口実が宋人の物を借り請けると称していることである。これらの問題に触れながら当時の大山寺の性格をうかがってみよう。

(1)からは前述したように、延暦寺と大山寺の関係深いことが察せられ、延暦寺僧が使者と号して寺領内に立入ったのは、完全ではなくとも、ある程度両者の間にすでに本末関係が成立していたのではないかと思われる。そしてその時期を何時頃に求むべきであろうか。さきに大山寺という寺称をもつに至った時期を一〇世紀代以前に求めたが、このことは大山寺が叡山の威をかりて竈門宮から分離しうる傾向が大きいことも参考にしておいてよかろう。『中右記』の長治二年（一一〇五）一〇月三〇日条によれば、「大山者是天台之末寺也」と註されていて、当時すでに延暦寺の末寺となっていたことが知られる。さらにさかのぼって康和四年（一一〇二）に大山寺が府内に所在する宇佐八幡宮領に干渉を加えた事件を想起するならば、これ以前までのぼせて考えてもよいのではなかろうか。かつて、片山直義氏は観世音寺、三宅寺等の「北九州の大寺院が中央の大寺と本末関係を結んでその庄園的支配関係に入るのは一二世紀初頭頃である」[11]と述べられて、大山寺が延暦寺の末寺になったのもこの頃に求めたい意向を示されたが、この点ではさして異論をさしはさむべき要はないであろう。

(2)及び(3)については、この事件の経過を今少し詳しくたどってみる必要がある。当時の大山寺別当は石清水八幡宮二五代別当光清で、長治元年には二一歳であった。彼は天台座主僧正仁覚に師事し(石清水祠官系図)、「慶朝法印為二天台座主一之時、依二院宣一」(「中右記」長治二・十・卅條)って大山寺別当に補せられたのである。またこの時大宰権帥の職に在ったのは藤原季仲で、事件の起る前年、康和五年(一一〇三)六月七日に赴任した(公卿補任、殿暦、中右記、本朝世紀)。そうして長治二年六月二日の陣定によれば、

「諸卿定申大宰権帥季仲同二意于八幡別当光清一、射二危竈門社神輿一、殺二害日吉神人一事、并竈門宮可レ為二八幡末社一哉否事」(百錬抄)

とあって光清と季仲が結んでいることが知られる。延暦寺側の大衆神人等との乱闘中に季仲が竈門宮神輿を射たことは彼等を著しく刺戟して、延暦寺衆徒及び日吉社神人が朝廷に嗷訴するところとなり(殿暦、中右記、百錬抄・長治二・八・廿九、及び九・五條)、遂に一〇月二八日に季仲は停任召還するよう決定された(中右記)。光清もまたこれに連座して「奉レ射二竈門宮神輿一并日吉社専当殺害」の責任を問われて一一月一日別当職を罷免されたが、同三日には再び本職に還補されている(平戸記、百錬抄、愚管抄)。しかし延暦寺衆徒はこの処置に服さず、一〇月二九日、三〇日に祇園社神輿を奉じて陽明門に到り、季仲・光清両人を流罪に処せられんことを嗷訴した。時に石清水八幡宮神人等、待賢門に参入して光清の無実を訴え、延暦寺衆徒との間に乱闘を惹起した(殿暦、中右記、頼資卿記、天台座主記、百錬抄)。かくして一二月二九日、季仲は周防国に配流され、その従類六人も遠流に処せられて(公卿補任、殿暦、中右記、百錬抄、永昌記)、事件は落着した。光清がこのような処置から免がれ、一時別当職を解かれたがすぐに還補されたのは、石清水八幡宮神人の嗷訴によるものであった。結局、叡山大衆の態度をこれほど硬化させたのは、季仲、光清派がこの事件中に竈門社神輿を射たことと、日吉社神人(おそらく専当円徳法師なる者であろう)を殺害したことであった。

以上の経過を通じて考えられることは、事件の当初、長治元年一一月に別当光清が信厳、宗胤を訴えたのは、単に竈門宮内における両者の内訌に発しているとみられる向きがある。おそらく別当職などの競望をめぐる反目がたまたま叡山の使者と号する悪僧の出現によって、信厳方がこれと結托して引入れたものであろう。こうして大宰府官人の

中にもこれと内通する者があって光清の訴状をとりあげなかったと思われる。そこで光清は更に中央に訴える手段に出たため、事件は表面化して検非違使の所管に移り、ここに新しい段階に入ったのである。大宰帥藤原季仲が光清派に加担して乱闘を起したので、事件は本家の延暦寺と石清水八幡宮の争闘に転化されるに至った。かくして両派のようなバックを持たない藤原季仲のみが流罪に処せられるという結果に終ったのである。片山直義氏はこの事件を評価して、「この事件はおそらくこの当時八幡宮の支配下にあった大山寺に対して、延暦寺がこれを押領しようとした強引な策略であったと思われるのであるが、それが事実において成功しているのである」[11]と述べられたが、事件の当初からこのような意図があったというより、経過途上において変質していった結果とも考えられよう。

(4)からは大山寺領中に対宋貿易に便利な位置を占める庄園があったと考えられ、庄園入部の一つの目的が暗示される。またこれに府官人の内応する者があったことも考え合せるならば、「借ニ請宋人等物一」けるという口実はかならずしも空文であったとは思われない。この当時北九州地方で日宋貿易に対する積極的活動が行われているのは顕著な事実である。[12]延暦寺方と石清水宮方の争闘は単に大山寺及びその寺領を末寺として主張したのみならず、対宋貿易の足場を獲得する狙いもあったのであろう。

この事件で今一つ見逃せないのは、当時の大山寺が多くの大衆を擁していたと思われることである。別当光清と大宰帥季仲に対抗して神輿を持出して乱闘したという経過の中には、中央の叡山その他の大寺における兵器を帯した大衆の嗷訴、乱闘あるいは座主排斥などの動向と相似た性格が考えあわされる。このような大衆の武力化する傾向はこの後一層助長されてくるのである。これら大衆神人の動きは大宰府の権力をもってしても容易に阻止し難くなって来た。保延六年（一一四〇）閏五月五日、「九國所ゝ大衆神人焼ニ拂宰府已下屋舎数十家一」うに至り、大宰権帥藤原顕頼はこれを中央に訴えるという事件があった（百錬抄、十三代要略、保延六・六・廿條）。そしてこの張本は大山、香椎、筥崎の大衆神人であった。また、この頃には竈門山修験もかなり系統化されていたようで、後白河法皇の撰になる『梁塵秘抄』には「竈門の本山彦の山」と詠まれている。彦山を本山とする本末関係がすでに成立していたのであろう。

このような活発な動きをみせた大山寺ではあるが、その寺領庄園については、これを具体的に知る史料がない。前項でも述べたように一一～二世紀頃の竈門山には八〇余所の庄園があったといわれるが、個々の庄について知るべき史料は欠けている。

さきに大宰帥藤原季仲を失脚させ、さらに石清水八幡宮とも事を構えて大山寺領の完全支配に成功した延暦寺は、さらに安楽寺の末寺化をも画策した。この具体的動向は元永元年（一一一八）、安楽寺別当を競望して成らなかった事件（中右記、二・廿九、五・廿二、七・十三各條）にはじまる。(13) 下って永暦元年（一一六〇）一〇月一二日、延暦寺大衆が日吉社神輿を奉じて入京し、竈門宮、大山寺、安楽寺の焼亡を訴えたが（百錬抄）、これも安楽寺末寺化への示威に他ならなかったと考えられる。かくして古代末期における大山寺は延暦寺の積極的援助の下にその威勢を誇示しながら中世をむかえるに至った。

（この項は註10所掲文献の旧稿を一部補正して収録した。）

註

(1) 大場磐雄『祭祀遺跡―神道考古学の基礎的研究―』（第一部第二章第一節）一九七〇
(2) 小田富士雄「古代の求菩提山とその信仰」（北九州市立歴史博物館『研究紀要』1）一九七九
(3) 小田富士雄「筑前『竈門山旧記』校本」（『九州考古学研究・歴史時代篇』）一九七七
(4) 古代学協会編『史料拾遺』第一巻、一九六六
(5) 中野幡能編著『筑前国宝満山信仰史の研究』一九八〇
(6) 中野幡能「太宰府天満宮と宝満山」（『菅原道真と太宰府天満宮』下巻）一九七五
(7) 水野正好「外来系氏族と竈の信仰」（大阪府の歴史第二号）一九七二
(8) 鎌木義昌・間壁忠彦『大飛島遺跡―古代の祭祀―』一九六四
(9) 鏡山猛「日唐交通と新羅神の信仰」（『九州考古学論攷』）一九七二

(10) 小田富士雄「筑前・竈門山寺」（『九州考古学研究・歴史時代篇』一九七七
(11) 片山直義「古代末期における安楽寺領」（『福岡学芸大学紀要』第五号）一九五五
(12) 森克己『日宋貿易の研究』一九四八
(13) 小田富士雄「筑前・安楽寺」（『九州考古学研究・歴史時代篇』一九七七

Ⅱ 宝満山歴史年表

日本紀年	西暦	宝満山関係事項	出典	参考事項
継体二五	五三一			北魏僧善正彦山を開く
欽明 八	五三八			百済聖明王、仏像・経論を献じる
				白村江の戦(百済・日本軍敗退)
天智 二	六六三			防人・烽をおき、水城を築く
三	六六四	大宰府の鬼門よけのため竈門山頂に八百萬神をまつる	旧記・縁起・続風附	
天武 二	六七三	心蓮、山中にて修行中、二月十日玉依姫示現す。社殿造立	旧記・縁起・続風附	
一二	六八三	六月一〇日、心蓮寂す。仏頂山に葬り東尾寺と号す	旧記・縁起・続風・図会	
文武 一	六九七	役小角、宝満山七窟に神明を祈り、宝満金剛界・彦山胎蔵界とす	入峰・年忌表	
大宝 一	七〇一	役小角再来し、宝満山と孔大山の間に三部習合の霊場二十八ヶ所を開く	入峰	役小角、彦山に登り三季入峯を修歴す
慶雲 一	七〇四	役小角、宝満山で修行し霊場をひらく	旧記・縁起・続風・続風拾・図会	役小角、求菩提山に登山
文武御宇	六九七～七〇七			
和銅 七	七一四	行基、竈門山阿弥陀寺浄土院建立	年忌表	観世音寺落慶
天平一八	七四六			行基没する
天平勝宝一	七四九		宇佐託宣集	
七	七五五	「竈門明神波吾姨」という八幡神の託宣ある		最澄、延暦寺を創建
延暦 七	七八八			
延暦二一	八〇二	最澄登山し、入唐求法の安全を祈り薬師仏七体を彫る	旧記・縁起・続風・図会	
二二	八〇三	閏一〇月二三日、最澄渡海の平安を祈り竈門山寺で薬師仏四体彫る	扶桑略記・金玉・叡山大師伝・続風拾	
〃	〃	空海登山し祈雨する	旧記・縁起・続風・続風	

延暦二三	八〇四			
二四	八〇五			
大同 一	八〇六			
弘仁 九	八一八			
承和 七	八四〇	四月、伝教大師有智山寺の辺に宝塔院を建立		
		四月二一日、竈門神に従五位上を授けられる		
九	八四二	七月三日、崇あるにより竈門神社等諸社に奉幣せらる		
一四	八四七	一一月二八日、円仁、大山寺において竈門神のため一千巻転経を行なう		
嘉祥 三	八五〇	一〇月七日、正五位上を授けられる		
仁寿 二	八五二	四月、円珍、博多浜において竈門社等のため七日転経をなす		
三	八五三			
貞観 一	八五九	一月二七日、従四位下を授けらる		
		国神に位階をおくり給う		
二	八六〇			
元慶 三	八七九	六月八日、従四位上を授けらる		
寛平 七	八九五			
八	八九六	九月四日、正四位上を授けらる		
延喜 一	九〇一	観世音寺西大門において八幡神の託宣あり		
三	九〇三	三月、下宮建立		
一〇	九一〇	九月、北谷遙拝所建立		
二一	九二一	観世音寺西大門において八幡神の託宣あり筥崎宮造立へ		

		拾・続風附・図会
		続風・続風拾・図会
		続日本後記・旧記・縁起・続風・続風拾
		続日本後記・旧記・縁起・続風・続風拾
		入唐求法巡礼行記
		文徳実録・旧記・縁起・続風・続風拾
		園城寺文書
		三代実録・続風・続風拾
		旧記・縁起
		三代実録・旧記・縁起・続風・続風拾
		日本紀略
		旧記・縁起・続風・続風拾
		竈門神社明細図書
		境外遙拝所明細帳
		筥崎宮縁起・伊呂波字類抄・宇佐託宣集・愚童訓・続風拾

		最澄・空海入唐
		最澄帰国、天台宗を伝える
		空海帰国、真言宗を伝える
		七月、円珍入唐す
		石清水八幡宮建立
		聖宝、金峰山に如意輪・蔵王権現を祀る
		菅原道真没す

延長 五	九二七	延喜式に名神大社に列せらる	延喜式	
承平 三	九三三	沙弥證覚、最澄の弘仁八年遺記に基づき宝塔を造立す	石清水文書	
天慶 三	九四〇			熊野神社正一位を授けらる
応和年中	961～3	役行者十四代弟子浄蔵登山す。浄戒座主のはじめ	旧記・縁起・続風附	
天元 二	九七九	宗像宮に大宮司を置く太政官符に、住吉・香椎・筑紫・竈門・筥崎が大宮司を以って貫主となすとある	類聚符宣抄・続風拾	
長保 五	一〇〇三	皇慶、延殷、寂照と共に入宋せんとして鎮西に到る。後入宋をやめ大山寺において景雲阿闍梨より両部大法を受く	日本高僧伝要文抄・明匠略伝	宇佐神人権帥平惟仲を訴える
寛弘 三	一〇〇六			興福寺衆徒強訴、これ以後衆徒の強訴さかんになる
四	一〇〇七	この頃、性空の弟子沙門高明、大山寺に住す		性空没す
長元 八	一〇三五			延暦寺・園城寺僧徒の闘争はじまる
文永年中	1264～75	大弐資通のとき、西府内山の住僧に持経者西範あり、四十余年法華を暗誦して往生を遂ぐ	拾遺往生伝	
天喜 五	一〇五七	大宰府内山の別処、山桃に禅僧あり、多年法華を暗誦して往生を遂ぐ	拾遺往生伝	
治暦 二	一〇六六	当代より座主浄戒坊と号す	座主次第	
延久 三	一〇七一	大雲寺僧成尋入宋、成尋母安全のねがいをこめ作った歌にかまとやまのことあり	成尋阿闍梨母日記	
後三条御宇	1068～72	筑前守藤原経衡、祈雨のため神鏡奉納	続風・続風拾	
永暦 一	一〇七七	安楽寺別当基円、同寺に一切経供養を行う。額は大山寺琳実別当の筆	安楽寺草創日記	
承暦 四	一〇八〇	大山寺別当院範上洛す	水左記	
永保 三	一〇八三	これより先石清水権別当頼清、大山寺別当になる。院範幽憤して死ぬ	宮寺縁事抄	
応徳 二	一〇八五	九州総鎮守の官符を下され神領八十庄贈らる	旧記・縁起・続風・続風拾・図会	
		九月五日、陰陽寮竈門社の遷宮日時を勘申する	石清水文書	
三	一〇八六	この年に成る『後拾遺集』三夏一七八に、つくしの大山寺と	後拾遺往生伝	白河上皇の院政はじまる

嘉保 一	一〇九四	いふ所に歌合し侍りけるによめる　元慶法師　わがやどの垣根なすぎそ郭公　いづれの里もおなじうの花	本朝高僧伝	
承徳 一	一〇九八	叡山喜見房阿闍梨、大江匡房と共に下向、有智山住の法相僧と議論して敗れる	聖光上人絵詞・続風拾	
康和 四	一一〇二	大山寺と八幡宇佐宮、大宰府宇佐町（一〇八二年宇佐大宮司公則買得）を相論する	八幡宇佐宮御神領大鏡	
長治 一	一一〇四	一〇月一九日、叡山大衆の使と号する悪僧、大山寺荘内で濫行を働く	卅五文集・中右記	
		一二月八日、大山寺別当光清濫行を働いた悪僧を奏状を呈し訴える	卅五文集・中右記	
二	一一〇五	一月、検非違使庁、大宰府に牒して大山寺荘に濫行する悪僧をとらえ進めしむ	卅五文集・中右記	
		三月三日、上宮焼亡する	卅五文集・中右記	
		五月四日、陣定竈門宮濫行のことを議する	中右記・卜部兼文勘文	
		六月二日、陣定竈門宮濫行のことを議する	中右記・殿暦・百錬抄・続風・続風附	
		八月二九日、大宰権帥藤原季仲、延暦寺衆徒・日吉社神人に訴えらる	中右記・殿暦・百錬抄	
		九月五日、季仲かさねて日吉社神人のため訴えられる	殿暦	
		一〇月二八日、大宰権帥季仲職をやめ召還される	中右記・殿暦・公卿補任・平戸記・続風・続風拾	
		一〇月三〇日、延暦寺衆徒祇園社神輿を奉じて陽明門に到り、前大宰権帥藤原季仲等を流罪に処せられんことを嗷訴し、石清水神人と闘乱する	殿暦・中右記・頼資卿記・天台座主記・百錬抄・愚管抄・石清水文書	大宰大弐藤原長房、彦山衆徒の強訴を恐れ京に帰る
		一一月三日、光清本職に還補される	中右記・百錬抄・愚管抄	
		一二月二日、陣定前大宰権帥藤原季仲等のことを議する	殿暦	延暦寺・興福寺・東大寺衆徒の強訴相つぐ
		一二月二九日、季仲を周防に配流し、従類六人を遠流に処する	中右記・殿暦・永昌記・公卿補任・百錬抄	

嘉承 一	一一〇六	二月一七日、季仲の配所を常陸に改めその子刑部少輔懐季、少納言実明を解官する 一一月三日、竈門宮に正一位を授ける	百錬抄・藤原基俊集・中右記・殿暦・公卿補任 中右記・百錬抄・続風・続風拾	
二	一一〇七	五月一七日、大宰府社司、竈門八幡などに犯過決断がないため玉体に祟が及ぶ由解状を奉る 竈門神社に怪異のことあるにより軒廊御卜を行う	永昌記	
天永 二	一一一一	四月一二日、陰陽寮竈門上宮遷宮日時を勘申する	中右記	
三	一一一二	鳥羽天皇、玉依姫竈門山大神社八幡大菩薩之伯母本朝之鎮守云々という宣旨を下す	石清水文書	
永久 四	一一一六	博多津唐坊大山船襲三郎船頭房、有智山明光房本観音玄義疏記等を書写す	旧記・縁起	
元永 一	一一一八		両巻疏知礼記・観音玄義疏記	
保延 六	一一四〇	閏五月五日、大宰府大山・香椎・筥崎等の僧徒神人等、大宰府已下屋舎数十家を焼く	百錬抄・十三代要略・石清水文書・八幡宇佐宮神領大鏡	
久安 二	一一四六	天変のため各社で修法。竈門宮に宸経をよせ転経修法	旧記・縁起・続風附	
久寿 二	一一五五	三月九日、某僧竈門山北谷村の木に青蓮院法眼真誉の字を書く	続風	
		四月二六日、竈門宮焼亡	台記	
平治 一	一一五九	八月二日、竈門宮焼亡	百錬抄	
永暦 一	一一六〇	延暦寺僧徒、日吉神輿を奉じ入洛。竈門宮ならびに大山寺・安楽寺の焼亡、治部少輔菅原貞衡合戦のことを訴える	百錬抄・続風拾・図会	延暦寺、安楽寺別当を競望し失敗
応保 二	一一六二	五月一五日、大隅国台明寺の大宰府への訴えの解状に「京都仁波本寺叡岳、鎮西仁波本山内山」とある	薩藩旧記	
仁安 二	一一六七	『梁塵秘抄』二に「筑紫の霊験所は、大山四王寺清水寺武蔵清瀧豊前国の企救の御堂な竈門の本山彦の山」とあり	梁塵秘抄二	平清盛太政大臣となる
四	一一六九			後白河法皇、院庁下文をもって
養和 一	一一八一			

文治 一	一一八五	山執当澄雲、源範頼のため大山寺を滅ぼされる由訴う		彦山を京都新熊野神社の荘園に施入する
四	一一八八	竈門宮大山寺曽波留を政所職に補す		壇ノ浦合戦、平家滅亡、守護・地頭の設置
五	一一八九	肥前国河原村下河原の畠地、河上宮と大山寺の二重支配下にあり鎮西探題北条英時神用物を河上宮に沙汰する	吉記 梅津文書 河上神社文書	源頼朝、征夷大将軍に任ぜられ幕府をひらく
建久 三	一一九二			
六	一一九五	大山寺の荘民狼藉を行なう 守護不入の権を保持	玉葉 続風拾・旧記	
建保 六	一二一八	九月、石清水八幡宮領筥崎宮留守行遍、大山寺寄人張光安を殺す。大山寺本寺延暦寺衆徒、日吉・北野・祇園の神輿を擁して嗷訴する	仁和寺日次記・百錬抄・業資王記・華頂要略・石清水文書・石清水八幡宮記録・南部文書・宮寺縁事抄・吾妻鏡・延暦寺護国縁起・次将装束抄・皇帝紀抄・歴代編年集成 石清水文書	「愚管抄」成る
承久 一	一二一九	一一月、肥前神崎荘官等、通事張光安博多管内の所領を荘領となさんことを請う	民経記紙背文書	承久の乱おこる
二	一二二〇	大山寺別当備中法橋代官下野房成慶等壱岐島公田百数十町を押領する	大川文書	
三	一二二一	大宰府において肥前大河行元代行友と伊福道行代大山寺俊行と、大河・伊福両村について相論する	歴代鎮西要略	
寛喜 一	一二二九	有智山僧義覚、博多円覚寺に僧円爾を害せんとする、宋商謝国明円爾を庇う		承天寺、横岳崇福寺創建
貞永 一	一二三二	有智山寺の衆徒博多承天寺を毀たんことを請う。勅して承天	聖一国師年譜・元亨釈書	
仁治 二	一二四一			
寛元 一	一二四三			

正元 一	一二五九	寺を官寺とする	・続風拾
		雷山院主職のことについて有智山忍辱房禅恵、禅林房俊盛、安光房永増かかわりをもつ	大悲王院文書
文永 二	一二六五	彦山の規則により宝満九人の先達に職位を認める	彦山順峰四十八宿次第
一一	一二七四		
弘安 四	一二八一	蒙古再び来襲、竈門神の冥助あり	蒙古来襲
八	一二八五	大山寺雑掌舜慶、竈門宮燈油料田請文を進める	旧記・縁起・続風拾
御宇多御宇	三七～二七	藤原経衡、祈雨のため天竺鏡に歌をそえて奉納する	高城寺文書
永仁 一	一二九三		新続古今和歌集・旧記・縁起・図会
二	一二九四	「天満宮小社御供給人人数注文案」に宝満宮御分とみえる	
建治 二	一二九六	肥前国比丘尼如仏、大山寺燈油領同国山田東郷薦原里卅一坪内二段を藤五郎大夫兼氏に譲る	広瀬文書・続風拾
正安 二	一三〇〇	有智山と原山と闘争するに依り、筑前国御家人中村弥二郎安楽寺に宿直を命ぜらる	
正和 二	一三一三	「宇佐託宣集」できる、中に「宝満大菩薩」の名みえる	宇佐託宣集
文保 二	一三一八	法眼幸栄入峰する	板碑銘・旧記・縁起・入峰
		二月一〇日、河上宮免田坪々領主交名注文案に大山寺領あり	河上神社文書
元応 一	一三一九	藤原貞村、岩に大文字を寄進	旧記・縁起・御伝記
正中 一	一三二四	八月二六日、東大寺衆徒筑前有智山及び原山の僧徒等に観世音寺の仏神事を勤行せしめんことを請う	東大寺文書
		七月一五日、筑前国粕屋郡左谷賢聖寺板碑に「天台別院有智山末寺於左谷山賢聖院」とあり	左谷賢聖寺板碑銘
二	一三二五	講堂の後に法華塔建つ（明治三年廃す）	続風拾・地理全誌
嘉暦 二	一三二七	鎮西探題北条英時、肥前河上宮社雑掌の訴により大山寺執行をして同社領河原村内下河原畠地神用物を弁進せしめる	河上神社文書・詫摩文書
元徳 一	一三二九	一一月二九日、河上神役対捍免田畠等注文写に大山寺領あり	河上神社文書
正慶 二	一三三三	閏二月一七日、平戸峰源藤五、大山寺々務律僧覚応を伴いて上京	博多日記
元弘 三	一三三三	肥後の菊池左衛門三郎、幼年期菊一と称し有智山にて稚児に	鎮西探題設置
			北条氏滅亡、鎮西探題滅ぶ。宇都

				あがっていた旨の記事あり
建武延元	三 一	一三三六	少弐貞経、菊池武敏等のため有智山城に攻められ自害す。この時社殿坊舎悉く焼失する	詫摩文書・阿蘇大宮司惟澄申状・太平記・梅松論・北肥戦志・馬場系図・武藤系図・旧記・縁起・続風・続風拾
建武延元	四 二	一三三七	阿闍梨順成、竈門社三神の本地仏の種字の彫刻勧進	続風拾・続風附
建武延元	五 三	一三三八	閏七月一一日、大宰少弐（頼尚）草野次郎をして筑前国一貴山寺山政所郎融の訴える有智山按察律師代琳智の狼藉について注申せしめる	修学院文書
正平観応	六 二	一三五一	源経茂、中村氏に対し有智山明意房を故殿の御時の如く扶持あるべきを令す	厳原内山家文書・馬廻御判物帳
			南洹、法花一部開結二経・一字一石三拝の石碑を建つ	旧記・縁起
正平和	七 一	一三五二		
正平文和	一〇 四	一三五五		
正平延文	一五 五	一三六〇	四月、龍造寺家経、有智山城を宿直警固す	龍造寺文書
正平康安	一六 一	一三六一	懐良親王、大宰府に座す。宝満山を要害にかまえる	太平記
建徳応安	一 三	一三七〇		
文中応安	一 五	一三七二	八月一一日、九州探題今川貞世、有智山城を攻めおとす	入江文書・深堀証文記録・北肥戦誌

				宮氏、求菩提山に初代座主を送り込む。長助法親王、彦山無量寿院に入御、彦山神宮大宮司兼座主職
				足利尊氏、一月九州に走り、四月京へ攻め上る
				南北朝の和議やぶれ南軍入京
				尊氏、義詮京都奪還
				今川貞世、九州探題となる

天授二	一三七六	一〇月二三日、征西将軍懐良親王、肥前青方固の有智山における軍忠を賞する	青方文書	
永和二		少弐頼澄、有智山城に大内義弘のため攻め敗られる	北肥戦誌	
弘和三 永徳三	一三八三			
元中九 明徳三	一三九二			懐良親王没す 南北朝合体
応永五	一三九八			
応永一四	一四〇七	九月二一日、宗像社家文書惣目録に若宮庄文書として「一通三宝院御書応永十四年九月廿一日内山寺免田正文不審之由事有之」とある	宗像社家文書惣目録	
嘉吉一	一四四一	一〇月一四日、大内教弘、宝満城に少弐教頼をうつ		
文安二	一四四五	三月五日、普門庵妙珍、宝満領馬場屋敷三ヶ所下地職を横岳崇福寺永源庵に寄進する	歴代鎮西要略・北肥戦誌 横岳古文書	
文正一	一四六六	一二月、天下地震により竈門山にて祈禱を行う	旧記・縁起・続風・続風拾	大友氏鑑の乱、彦山・求菩提の山伏もこれに応ず
応仁二	一四六八			
文明三	一四七一	江州永禅、宝満下宮の獅子頭・狛犬を彫る	獅子頭銘・旧記・続風附	彦山座主、藤原俊幸と称して宗貞国へ明国との修好を依頼す
明応三	一四九四	宝満上宮炎上する	北肥戦誌	求菩提山、聖護院末山となる
永正一五	一五一八	筑紫満門宝満上宮を再建する	北肥戦誌	
大永一	一五二一	大友義鑑、少弐資元と盟約を結び大内義隆を討たんとする。	万簡雑纂	
天文一	一五三二	その起請文に宝満薩埵の名みえる	続風附	ポルトガル船種子島に漂着、鉄砲伝来 ザビエル、鹿児島にキリスト教
二	一五三三	佐藤藤右衛、鉄索を寄進する		
一八	一五四九			

天文二一	一五五二		大友義鎮（宗麟）、高橋鑑種を宝満城主とする	歴代鎮西志・歴代鎮西要略
弘治　三	一五五七		大友宗麟、有智山・北谷・中堂原に検地を行なう	旧記・縁起・続風・続風拾
永禄　一	一五五八		二五坊山上に移住する	旧記・縁起・続風・続風拾
		九		
	一五六六		一一月、高橋鑑種宝満城によりて大友氏に叛く	問註所町野家譜・薦野家譜・立花家之記・宗像軍記・九州記・肥陽軍記・大友記・岌円覚書・元就公記・陰徳太平記
	一五六七	一〇	九月二〇日、天満宮神官等、神体・神宝を奉じ宝満山に戦火を避ける 七月七日、大友義鎮の将戸次鑑連等、高橋鑑種を岩屋城に攻め之を抜く、鑑種宝満城を保つ	太宰府神社文書・小鳥居文書・続風拾 立花文書・問註所町野家譜・稲員家記・大友家文書録・大友記・鑑連公戦功略記・薦野家譜・宗像軍記・九州記・陰徳太平記
	一五六八	一一	八月一〇日、大友宗麟、筑前志摩郡衆をして宝満城主高橋鑑種を攻めしむ	泊文書
	一五六九	一二	毛利元就、宝満城・古処山城へ兵糧を送る 二月、小早川隆景、河本左京亮を宝満城へ遣わす	佐藤保介文書 佐藤保介文書

を伝える

彦山霊仙寺南谷華蔵院住権少僧都阿吸房則伝「彦山峰中須密蔵」を著し、入峰等の理論を大系化する

六月、龍造寺隆信小石原より彦山に攻め上る。七月大友義統彦山に登山し衆徒を招き弟を座主の継席にするよう申し入れ一山の反対で帰国

元亀 一	一五七〇	大友宗麟、その部将吉弘鑑理の子鎮種をして高橋氏を継がしめ宝満・岩屋両城の城主とする	大友家文書録・大友記・高橋記・九州治乱記・九州記・肥陽軍記・薦野家譜	
天正 二	一五七四	草野鎮永・戸次道雪・原田可真らの起請文に宝満大菩薩の名みえる	鶴田文書	
四	一五七六	九月二四日、筑紫栄門宝満城を攻める	縁起・旧記・御伝記	
六	一五七八	龍造寺隆信・秋月種実・筑紫広門ら高橋紹運を宝満城に攻める	大友記	
		筑紫鎮慎の起請文に宝満大菩薩の名みえる	宗像神社文書	
		龍造寺隆信、宝満・立花両城を攻めんとして失敗	豊前覚書・龍造寺記・立花事実記・歴代鎮西要略	
七	一五七九	鐘江実続起請文に宝満大菩薩の名あり	肥前村田家文書	
八	一五八〇	三月、秋月種実・筑紫広門ら高橋紹運を宝満城に攻める	立花事実記・肥陽軍記・龍造寺記・別本大友記	
		戸次道雪・高橋紹運連署起請文に宝満大菩薩あり	熊本県史料中世編4	
九	一五八一	相良義陽起請文に宝満大菩薩の名あり	龍造寺家文書	
一〇	一五八二	毛利勢、宝満城を攻める。梁瀬三河入道、その賞として三井郡の地を与えられる	大友文書録	
一一	一五八三	大友義統、立花氏・薦野氏の宝満城留守を扶けるを賞する	大友文書録	
一二	一五八四	筑紫広門起請文に宝満大菩薩の名あり	龍造寺家文書	
		原田了栄・信種の連署起請文に宝満大菩薩の名あり	龍造寺家文書	
一三	一五八五	九月二三日、秋月種実・筑紫広門、宝満城を襲い焼く	上井覚兼日記・歴代鎮西志・北肥戦志・九州記・肥陽軍記・陰徳太平記	秋月種実、三男竹千代を彦山座主舜有の養子とし、政所坊連長伊良原善定の両名を人質として送り盟約を交す
		叶院蔵「役行者三十六童子像」、この年宝満山より持ち出す	役行者三十六童子像端裏	大友宗麟、彦山を攻め上宮はじめ経巻・仏像・記録・坊舎などことごとく焼く 本能寺の変、織田信長死す

一四	一五八六	七月一〇日、高橋紹運、竈門上宮に願文を納める		
		七月、高橋紹運、島津勢と戦い岩屋城に敗れる。宝満城も支える能わず高橋統増出て降る。この時宝満宮の宝物・古文書など焼失する		
		八月、島津義久撤兵する。二五日、立花統虎、宝満岩屋城を奪回する		
一五	一五八七	秋月種実、山伏を東坂下新地に移し、内山・北谷の社地坊舎を田圃とする		
		浄戒座主断絶		
		赤星慎重・木村恒種連署起請文に宝満大菩薩の名あり		
		秋月種実・筑紫広門らの起請文に宝満大菩薩の名あり		
		豊臣秀吉、二ヶ所の高櫓を建てる		
		豊臣秀吉、米百俵を寄進する		
文禄 一	一五九二	小早川隆景、米百石を寄進する		
		浄戒座主滅却する		
二	一五九三	小早川隆景登山し米百石寄進、毎年恒例とする		
		社殿造営はじめる		

三	一五九四	大峰修行再興		入峰	
慶長 四	一五九五	山口玄蕃頭、祈禱米十石奉納、毎年恒例とする		縁起	
二	一五九七	社殿・末社等完成する		旧記・縁起・続風・絵図	
		幸覚座主となる。これより座主輪番制		旧記・座主次第	
五	一六〇〇	黒田長政入国、宝満山に三百石を与えようとしたが辞退			関ケ原の戦、細川忠興、求菩提山に五十石を寄進
六	一六〇一	秋峰、彦山に至らず		入峰	
慶長 八	一六〇三				徳川家康、征夷大将軍となり幕府をひらく
一一	一六〇六	秋峰修行、彦山に至らず		入峰	
一八	一六一三				修験道、本山派・当山派として公認
元和 一	一六一五	林田左門兵衛、宝満山に禁獄される		旧記・続風附	
二	一六一六	幸吟、衆頭となる		旧記	
		秋峰、彦山に至らず		入峰	
四	一六一八	二月、黒田長政登山、神領宰府村のうち二十五石を寄進		井本文書・旧記・続風・続風拾	
六	一六二〇	講堂造立のため米百石下賜さる		旧記	
		夜須郡五玉山村佐藤与三郎ら鉄鎖再興寄進する		続風附	
八	一六二二	撞鐘成就		旧記	
寛永 一	一六二四	秋峰修行、彦山に至らず		入峰	
		善如坊・浄泉坊ほろび衆徒方の坊なくなる		続風	
二	一六二五	黒田忠之、石の鳥居を建立する		旧記・続風拾	
八	一六三一	修蔵坊幸任権宮司となる		佐々木文書	
九	一六三二	秋峰修行、彦山駈け復活		入峰	
一一	一六三四	幸重座主となる		座主次第	
一五	一六三八	秋峰修行		入峰	
		黒田忠之、米二十五石神納		旧記	
		幸吟衆頭辞退する		旧記	
一六	一六三九	幸伝衆頭となる		旧記	

	一八	一六四一	社殿・講堂焼失する
			黒田忠之、鏡二面寄進（福岡県文化財）
正保	一九	一六四二	公儀より材木伐採量定める
	二	一六四五	秋峰修行中福泉坊玉蔵、衆頭幸吟を殺す
			幸伝死す。幸吟再び衆頭となる
	三	一六四六	秋峰修行
	四	一六四七	講堂焼失
慶安	一	一六四八	黒田忠之社殿を造営する。同三年完成
	二	一六四九	黒田忠之鰐口寄進
	三	一六五〇	黒田忠之撞鐘寄進
承応	一	一六五二	一一月二〇日、大師講会執行
			財行坊幸岩、公儀に内訴して叡山の門徒となり山上を結戒の地とする
	二	一六五三	坊舎破滅して山下に蟄居する
明暦	二	一六五六	山徒山上にかえる
	三	一六五七	彦山の末寺となる
			秋峰修行
			心蓮九百七十五年忌、座主幸重、宮別当幸位
万治	一	一六五八	平石坊弘有衆頭となる
	二	一六五九	涅槃会、誕生会興行
			夏行大巡之行者八人中三人疫疾にかかる
	三	一六六〇	祈雨のため水鏡七日秘法を行なう
寛文	一	一六六一	幸重、大般若経一部・仏具等を調納
	二	一六六二	太宰府より登る道について大鳥居信兼と争論
	五	一六六五	八月二日、聖護院末山となる
			弘有、撞鐘を唐風に鋳造して寄進
	六	一六六六	弘有上洛、聖護院道寛親王にお目見え
			秋峰修行、小石原深仙宿香精水改める
	七	一六六七	上宮に希有り

旧記・続風・続風拾
鏡銘
旧記
旧記・入峰
旧記
入峰
旧記
旧記・続風・続風拾・御伝記
続風拾・続風附
続風附
旧記
旧記
旧記
英彦山神社文書・諸事書
入帳
入峰
年忌表
旧記
旧記
旧記
旧記
旧記
旧記
旧記
旧記
入峰
旧記

九	一六六九	九輪塔建立	続風拾
		弘有上洛する	旧記
		幸重、神前掛鏡三面・石灯籠十基・石仏十一体寄進する	旧記
		講堂に観音像寄進	石像銘
一一	一六七一	心蓮石像仏頂山に安置する	続風拾・井本文書
一二	一六七二	黒田光之、宝満山の内山八十万坪を寄進	旧記
		四壁境界山林安堵の願を言上する	井本文書
		六月六日、「竈門山水帳」できる	旧記
		一〇月、初午楽を中興する	鏡銘
		一一月、黒田光之、鏡寄進	旧記
		弘有座主となる	旧記
一三	一六七三	四月、山林坊別に分散、寺内境界相定める	旧記
延宝 一	一六七三	宝満宮草創一千年祭を行なう	旧記・年忌表
三	一六七五	幸重八十一歳にて没する	旧記
		山衆誦経。弘有一字一石の法華経書写、石廟を建立	旧記
四	一六七六	弘有上洛する、聖護院宮道晃親王に謁見	旧記・入峰
		秋峰修行、香精井掘る	旧記・続風拾・続風附
		黒田光之、平石坊弘有薬師堂撞鐘寄進	旧記
五	一六七七	講堂・鐘楼など修理する	旧記・続風拾・続風附
六〜七	一六七八〜九	石の鳥居再興	旧記
七	一六七九	入仏会調う	旧記
八	一六八〇	講堂の脇士毘沙門、飯縄を寄進	英彦山神社文書・寛文元禄書入書・相有行状記
天和 二	一六八二	彦山座主相有宝満山に駈ける。弘有作病をかまえて出合わず	石碑銘
貞享 三	一六八六	四月、平石坊弘有十三仏種子を彫る	寛文元禄書入書・勝円坊文書
		九月、彦山長床衆より福岡寺社奉行へ宝満山は彦山の末山に紛れなしと点合する	益軒日記
四	一六八七	一一月二七日、貝原益軒、藩主より宝満の返書命ぜらる。平石坊弘有、益軒宅訪問	英彦山神社誌
五	一六八八	一月、英彦山座主相有、宝満山別離のことで豊前坊宝前に誓願	

		貝原益軒、宝満山のことで奔走。弘有、禁錮に処せられる	益軒日記・座主次第・瑞華院誌料
貞享年中	一六八四～七	弘有「竈門山旧記」を著す	縁起
元禄　二	一六八九	平石坊弘有、国守の命により山を下り、彦山・宝満本末相立ち和平する	相有行状記
三	一六九〇	四月上旬、彦山宣度解脱院宝満山に入峰したが、平石坊音物門札を受けとらず	寛文元禄書入書・勝円坊文書
四	一六九一	秋峰修行	入峰・寛文元禄書入書・勝円坊文書
五	一六九二	綱政、山畠壱町の地寄進	続風拾
七	一六九四	彦山亀石坊、聖護院に参上し宝満山が彦山から離れたため混乱が生じたことを訴える。聖護院混乱をとめる文書を出す	瑞華院記録
九	一六九六	彦山と宝満山の和睦なる	福岡藩主記録・続風拾
		黒田綱政、宰府村のうち二五石寄進する	井本文書・福岡藩年表
一二	一六九九	楞伽院兼雅国家安全、綱政四十二歳の厄祓のため一四六年ぶりに春峰入峰する	続風・博多津要録・入峰
一三	一七〇〇	役行者千年忌博多津中信徒、本尊銅像を山上に安置	佐々木文書
一五	一七〇二	驚尾山(愛宕山)別当坊より「宝満派になるよう寺社奉行から仰せ付けられ、迷惑」につき彦山より公儀へ掛合い方を依頼する	英彦山神社文書・相有公行状記
元禄年中	一六八～一七三	弘有、『天満宮八百年忌』の記録を書く	満盛院文書
		藤井甚太郎一族の者で南部一条院に修行中の者を呼び、座主楞伽院をたてる。以後世襲	宝満山寛文以来之記
宝永　四	一七〇七	心蓮上人、千二十五年忌	年忌表
六	一七〇九	秋峰修行	入峰・英彦山神社文書・宝永六年書入
		下宮再興	竈門神社明細図書
享保　三	一七一八	秋峰修行	入峰
七	一七二二	上宮開殿千五十年祭、座主秀雅・宮司慶閤執行	年忌表
八	一七二三	行基菩薩九百七十五年忌	年忌表

求菩提山座主世襲となる

寺社奉行より「彦山は先規より別山紛れ無」との裁許状出される

一〇	一七二五	役行者千二十五年忌、座主秀雅、長床一老有弁執行	年忌表	
一一	一七二六	秋峰修行	入峰	
一二	一七二七	春峰修行	入峰	
一四	一七二九			彦山の勅額は、「英彦山」とすると仰せ出だされる
一七	一七三二	心蓮千五十年忌、座主秀雅、権宮司有弁執行	年忌表	
元文 二	一七三七	佐藤与三郎・伝兵衛、鉄索寄進	旧記	
三	一七三八	秋峰修行	入峰	
寛保 二	一七四二	秋峰修行	入峰	
		楞伽院真雅座主となる	座主次第	
寛延 一	一七四八	行基一千年忌	年忌表	
二	一七四九	秋峰修行	入峰	
三	一七五〇	中堂薬師再興	旧記書入	
		役行者千五十年忌	年忌表	
宝暦 四	一七五四	秋峰修行	入峰	
七	一七五七	心蓮千七十五年忌	年忌表	
九	一七五九	秋峰修行	入峰	
明和 一	一七六四	秋峰修行	入峰	
四	一七六七	春峰修行	入峰・入峰絵巻・年代記	
八	一七七一	秋峰修行	入峰	
		聖護院高祖堂修復の奉納銀納める	聖護院文書	
安永 一	一七七二	宝満宮創設一千百年祭、座主真雅・権宮司義英執行	年忌表	
三	一七七四	裏粕屋新宮浦金内新左衛門徳貞、鉄鎖寄進	続風附	
		博多土居町冶工岡田与三兵衛吉慶、鉄索寄進	続風附	
		兼雅座主となる	座主次第	
四	一七七五	秋峰修行	入峰・祈禱札	
		役行者千七十五年忌、長床一老俊泰	年忌表	
七	一七七九	小石原行者堂と山伏入峰の大宿を改造	黒田新続家譜	
九	一七八〇	秋峰修行	入峰・祈禱札	
天明 五	一七八五	秋峰修行	入峰	

七	一七八七	座主兼雅、藩主と問題をおこし聖護院、延寿王院にとりなし頼む	聖護院文書	
八	一七八八	秋峰修行	入峰	彦山座主妙有上京し天台の大僧都に昇進
寛政 一	一七八九	座主兼雅、継目御礼のため上京	聖護院文書	
二	一七九〇	四月、博多年行事笠平兵衛竈門山入峰之記録を書く	橋詰文書	
		春峰修行	入峰・祈禱札・年代記・竈門山入峰之記録	「筑前寺院帳」できる
		鳥居坊、宗像郡に流行の病を占い祈禱する	年代記	
六	一七九四	座主兼雅、国政上よくないことが重なり、下山しなければならなくなっていたが、これまでどおり住職申し付けらる	聖護院文書	
七	一七九五	秋峰修行	入峰	
八	一七九六	快晴祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
九	一七九七	秋峰修行	入峰	
一一	一七九九	箕面山役行者一千百年祭、座主楞伽院泰雅上京。大僧都に転任せらる	聖護院文書	
一二	一八〇〇	雨乞祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
享和 二	一八〇二	役行者千百年忌正当忌	年忌表	
三	一八〇三	太宰府中村入道了保、釜蓋窟に種子彫る	釜蓋窟銘	
		宝満知足院願出の神道護符伝法修行の儀に付、天満宮伝来の本地護摩供と紛れなきように一札を出す	西高辻文書	
		秋峰修行	入峰	
文化 一	一八〇四	五百羅漢造立開眼	年忌表・羅漢像銘	
二	一八〇五	雨乞祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
		坊中と霞下修験書き出す	聖護院文書	
三	一八〇六	聖護院門跡盈仁入峰、楞伽院泰雅以下宝満山伏供奉	入峰	
四	一八〇七	秋峰修行	松大路文書	
		宝満山知足院の祈禱により野狐つきとなる由訴えあり	福岡藩寺社記	
五	一八〇八	雨乞祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
六	一八〇九	雨乞祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	

九	一八一二	春峰修行	入峰・葛城峰中勤行日限覚	
		雨乞祈禱	福岡藩寺社記	
一〇	一八一三	五月、雨乞祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
		七月、快晴祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
一一	一八一四	黒田斉清、石燈籠寄進する。燈明代年々寄附とする	福岡藩寺社記・社記	
一三	一八一六	竈門岩（仙竈岩）再興	竈門岩由来・亀石銘・年忌表	
一四	一八一七	座主泰雅、聖護院への年頭の祝詞の書状を忘れたため、聖護院より催促状とどく	聖護院文書	
		百姓清助、南谷田中より塗金独鈷掘り出す	続風拾	
		七月、竈門山長床中、粕屋修験の件で口上書を聖護院に出す	聖護院文書	
文政 一	一八一八	楞伽院信雅、座主に就任	座主次第	
		彦山に入峰予定のため、入峰許可の令旨を聖護院に申請	聖護院文書	
		聖護院、信雅に浅黄を免許、上洛命令	入峰	
		秋峰修行	宝満山感応記	
二	一八一九	承天寺恵亮、宝満山に七日間断穀修行をする	松大路文書	
三	一八二〇	快晴祈禱仰せ付けらる	年忌表	
五	一八二二	宝満宮開殿千百五十年祭	福岡藩寺社記	
		雨乞祈禱仰せ付けらる	入峰	
		秋峰修行	福岡藩寺社記	
六	一八二三	雨乞祈禱仰せ付けらる	福岡藩寺社記	
七	一八二四	小石原行者堂遷座祭を竈門山も執行するよう願い出る	福岡藩寺社記・松大路文書・入峰・叶院文書	
		快晴祈禱仰せ付けらる	聖護院文書	
		座主信雅、聖護院より権大僧都、法印、薄紫総結袈裟・黄貝緒を免許される。一山の者もそれぞれ補任にあう。	入峰・叶院文書	
八	一八二五	秋峰修行	叶院文書・聖護院文書	
		叶院良貞新客として入峰、聖護院宮、桃地結袈裟免許。楞伽院、竈門山金胎両部の峰中怠慢なく執行の免許与える		

一二	一八二九	秋峰修行	入峰
天保 四	一八三三	水鏡祈禱	年忌表
五	一八三四	秋峰修行	入峰
七	一八三六	春峰修行	入峰・年忌表
一〇	一八三九	京都聖護院宮大峰修行、座主信雅上京供奉す	年忌表
		蓮乗院以下二十二名に補任状	聖護院文書
		財徳坊賢隆、大和奥駈修行をする。聖護院より権大僧都、法印、浅黄総免許さる	聖護院文書
一一	一八四〇	秋峰修行	入峰
弘化 二	一八四五	秋峰修行	入峰・叶院文書
		石井坊以下八山に補任状	聖護院文書
		周雅座主となる	座主次第
四	一八四七	秋峰修行	入峰
嘉永 二	一八四九	役行者一千百五十年忌、摂州箕面山供養・座主周雅上京する	年忌表
三	一八五〇	役行者千百五十年忌	年忌表
六	一八五三	水鏡祈禱	年忌表
		上宮焼失	入峰・祈禱札・永福院文書
		秋峰修行	田村文書
七	一八五四	上方地震多きにつき宝満宮などで神楽奉納	社記
安政 一	一八五四	黒田長溥本社再建	入峰・安政二彦山日録・祈禱札
二	一八五五	秋峰修行	松大路文書
五	一八五八	気候順能祈禱仰せ付けらる	宮崎文書・三角文書
六	一八五九	コレラ流行のため宝満宮の神輿を福岡萬町浜にもちだし、楞伽院以下二夜三日の祈禱。福岡城内、城下各地でも祈禱する	入峰・葛城峰中日割道筋之事・西高辻文書
七	一八六〇	春峰修行	松大路文書
万延 一	一八六〇	快晴祈禱仰せ付けらる	井本文書
文久 二	一八六二	修蔵坊、冨倉坊に山地売却する	

慶応 三	一八六三	聖護院に「筑前国竈門山并末山同派修験院名書上帳」を提出	聖護院文書		
一	一八六五	秋峰修行。笙窟のカメを再興	入峰		
三	一八六七	近年、久留米・佐賀領の配札を禁止され一山は法滅に至る。筑前国中に勧進帳を廻す	入峰 井本文書		大政奉還
明治 一	一八六八	座主以下九坊復師。座主周雅は藤井高門と改名。神職となり「宝満宮社務頭」となる	井本文書	神仏判然令出る	
二	一八六九	修蔵坊幸任、親孝行のため表彰される 福岡藩より禄二十石賜る 崇仏派十六坊は「竈門山派法頭」を組織し春峰行を行なう 別に寺号を賜り座主を宝仲寺と改め、旧国主黒田知藩事より二十石の寺領を拝領 山伏は神職に転じ藤井高門（元楞伽院周雅）配下となるよう	佐々木文書 福永文書 井本文書・入峰・祈禱札 井本文書	修験道廃止	
三	一八七〇	司祭局より命令	佐々木文書		
四	一八七一	福岡藩庁より寄付米九八石をうける 亀石坊以下一四坊復飾 廃仏毀釈行われる 元修蔵坊佐々木益雄親孝行の表彰をうける 一一月、社地・山林は上地となり社領廃せらる 水鏡祈禱	井本文書・佐々木文書 井本文書 神仏分離史料・地理全誌 佐々木文書 井本文書・社記	再度修験の祈禱禁止令でる	
五	一八七二	西高辻信厳参詣、藤井高門をたずねる 村社に列せられ祠掌一名置く 上宮開殿千二百年祭	太宰府神社文書 信厳日記 社記	内務省祈禱禁止を布告	
六	一八七三	旧坊中下山	井本文書		
七	一八七四	天満宮の更衣祭に宝満祠掌よびだされる	井本文書 信厳日記		
九	一八七六	水鏡祈禱	太宰府神社社務日誌		
一〇	一八七七	明治政府、公債証書によって旧配当録を下賜	井本文書		
一一	一八七八	本社大破損につき氏子信徒及び公衆の募金をもって修繕	社記		
一五	一八八二	元竈門一山の山伏、聖護院に入徒する	井本文書		

明治一六	一八八三	旧山伏、役行者像再興旧跡へ据置願い出る	佐々木文書	
一八	一八八五	六月、藤井高門以下旧坊中一九名、宝満山官林監護を願い出る	井本文書	
一九	一八八六	天台寺門派本山三井寺より実相院門跡博多に下向、竈門山入峰修行再興許可県知事より出る	入峰	三七年ぶりに聖護院深仙灌頂会再興
二〇	一八八七	内務省より保存金百円下附	社記	
		旧竈門山坊中並配下の山伏は三井寺の支配下となる	井本文書	
二二	一八八九	春峰修行・秋峰修行	入峰・永福院文書	
二四	一八九一	旧山伏、官有林払下げ願い出る	井本文書・佐々木文書	
		船曳鉄門「竈門山陵考」をあらわす	竈門山陵考	
二五	一八九二	官有林払下げ願、却下される	井本文書	
二六	一八九三	秋峰修行	佐々木文書	
二八	一八九五	官幣小社に昇格	社記・太宰府天満宮日誌	
		元吉祥坊吉田広盛離山する	佐々木文書	
三二	一八九九	西高辻信厳宮司仰せ付けられる	社記	
		役行者一千二百年忌につき入峰	井本文書	三月、天台修験道大峰行
三三	一九〇〇	旧坊中国有林下戻申請書を出す	井本文書	
三四	一九〇一	三月一日、大橋鎌輔宮司仰せ付けられる	社記	
		一〇月三一日、木庭保久宮司仰せ付けられる	社記	
三五	一九〇二	西高辻信稚宮司仰せ付けられる	社記	
		旧坊中竈門神社、官林払下げ願いを提出	井本文書	
三六	一九〇三	三月三一日、本田豊宮司仰せ付けられる	社記	
三七	一九〇四	一〇月三日、上宮焼失する	社記	
		旧坊中国有林下戻申請書を出す	井本文書	
三九	一八〇六	本田豊宮司「竈門山記」編纂発行	竈門山記	
四〇	一八〇七	国庫供進金として八百円定められる	社記	
四一	一八〇八	二月二五日、付属講社設置の件許可される	社記	
		七月二七日、上地林の内実測反別六十三町八畝二十一歩境内編入を許可される	社記	
四三	一九一〇	国庫供進金八百六拾参円に定められる	社記	

明治四五	一九一二	国庫供進金千二百円に改められる		社記
大正 一	一九一二	一〇月一四日、上宮造営落成。二三日、正遷宮祭	社記	
		後藤周次郎宮司仰せ付けられる	社記	
四	一九一五	基本金積立会設立の件許可される	社記	
九	一九二〇	大久保千濤宮司仰せ付けられる	社記	
一〇	一九二一	供進金四千百九拾壱円六拾銭に増額。上宮社務所落成	社記	
		「宝満竈門山の栞」発行		
一五	一九二六	二月二七日、本殿改築斧始祭執行	社記	
		四月二七日、供進金四千七百五拾二円に改める	社記	
一五	一九二六	一〇月一日、西高辻信任宮司仰せ付けられる	社記	
昭和 二	一九二七	本殿遷座祭執行	社記	
三	一九二八	天台寺門派入峰	修験	
五	一九三〇	祝祠舎兼幣殿・拝殿改築並に透塀・神饌所新築落成	社記	
六～七	一九三一～三二	上宮神殿修理	社記	
八	一九三三	国庫供進金五千円下付	社記	
九	一九三四	英彦山より入峰	修験	
一二	一九三七	中井藤一郎宮司仰せ付けられる	社記	
一四	一九三九	内山字御供屋谷百五坪外三筆、境内地へ編入許可	社記	
一五	一九四〇	内山字御供屋谷千八百三拾壱坪社有地として買収、国庫供進金六千二百八拾四円に増額	社記	
		紀元二千六百年記念『宝満山と竈門神社』発刊		
一六	一九四一	国庫供進金七千円に増額、境内整備工事、おおよその計画承認を受ける	社記	
一八	一九四三	境内拡張用地四千百七坪六合一勺買収。国庫供進金七千七百参拾五円に増額、外四百二拾五円追加下付	社記	
一九	一九四四	国庫供進金八千七拾五円に増額、新築社務所斎館竣工	社記	
二〇	一九四五	業合弘海宮司仰せ付けられる	社記	
		暴風雨により上宮社務所屋根飛ぶ。内山通称豆塚山、愛嶽田		

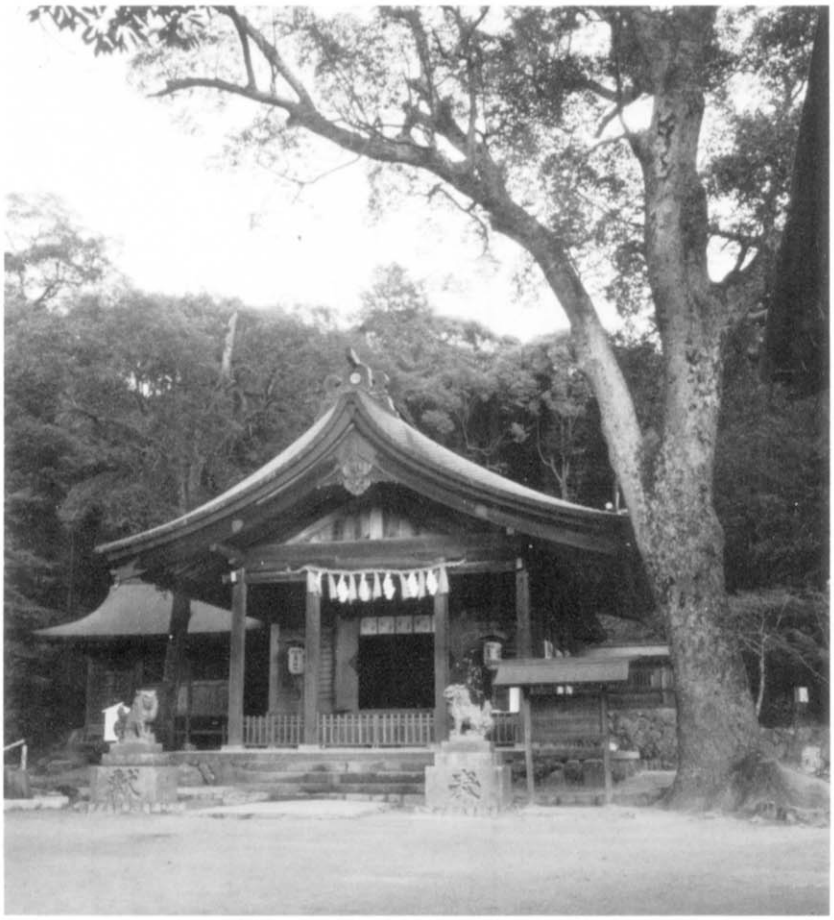
		及び山林、吉田広盛寄付			
昭和二一	一九四六	一二月一二日、上宮社務所及び下宮旧社務所公売入札、入札者下宮河内卯兵衛・上宮木村藤次郎	社記		
二三	一九四八	西高辻信貞宮司就任	社記		
二五	一九五〇	聖護院、入峰する			
二七	一九五二	荒川孝宮司就任。上宮焼失する	社記		
二九	一九五四	西高辻信貞宮司就任	社記		
三一	一九五六	一〇月一〇日、上宮再興地鎮祭執行	社記		
三二	一九五七	四月一六日、上宮神殿竣工祭執行	社記		
三五	一九六〇	「宝満山文化総合調査会」を組織			
四七	一九七二	聖護院、入峰採灯護摩供執行			
五〇	一九七五	「宝満山歴史散歩」出版			
五五	一九八〇	「宝満山信仰史の研究」出版			
五七	一九八二	心蓮千三百年忌 宝満山修験会組織、入峰採灯護摩供執行			神祇院廃止、官国幣社職制・神社関係職制廃止、神社庁設立

※事項の記述は、確実な史実として然るべきか否か疑問の点もあるが、そのまま書きあげた。今後の研究に俟ちたい。

※「鎮西竈門山入峰伝記」については、文禄三年、大峰修行再興後の記述のみを採用した。

※史料のうち次にあげるものは略号を用いた。

竈門山旧記……旧記　筑前国続風土記拾遺……続風拾
竈門山宝満宮縁起……縁起　鎮西竈門山入峰伝記……入峰
筑前国続風土記……続風　筑前名所図会……図会
筑前国続風土記附録……続風附





第2図　宝満山の遺跡(1)

上・竈門神社下宮拝殿（革書房提供）
下・下宮礎石群より花見ヶ丘、太宰府をのぞむ

第3図　宝満山の遺跡(2)



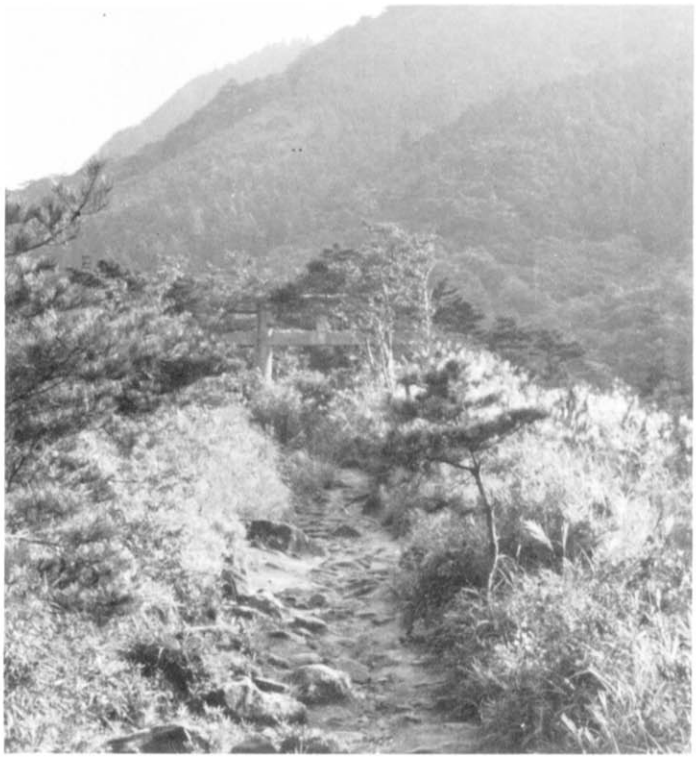
上宮より九重ヶ原をのぞむ



九重ヶ原 — 陶製蔵骨器出土地

右・一の鳥居
左・愛獄神社上宮







愛獄山より一の鳥居をのぞむ



元宝満山(仏頂山)——心蓮上人祠堂



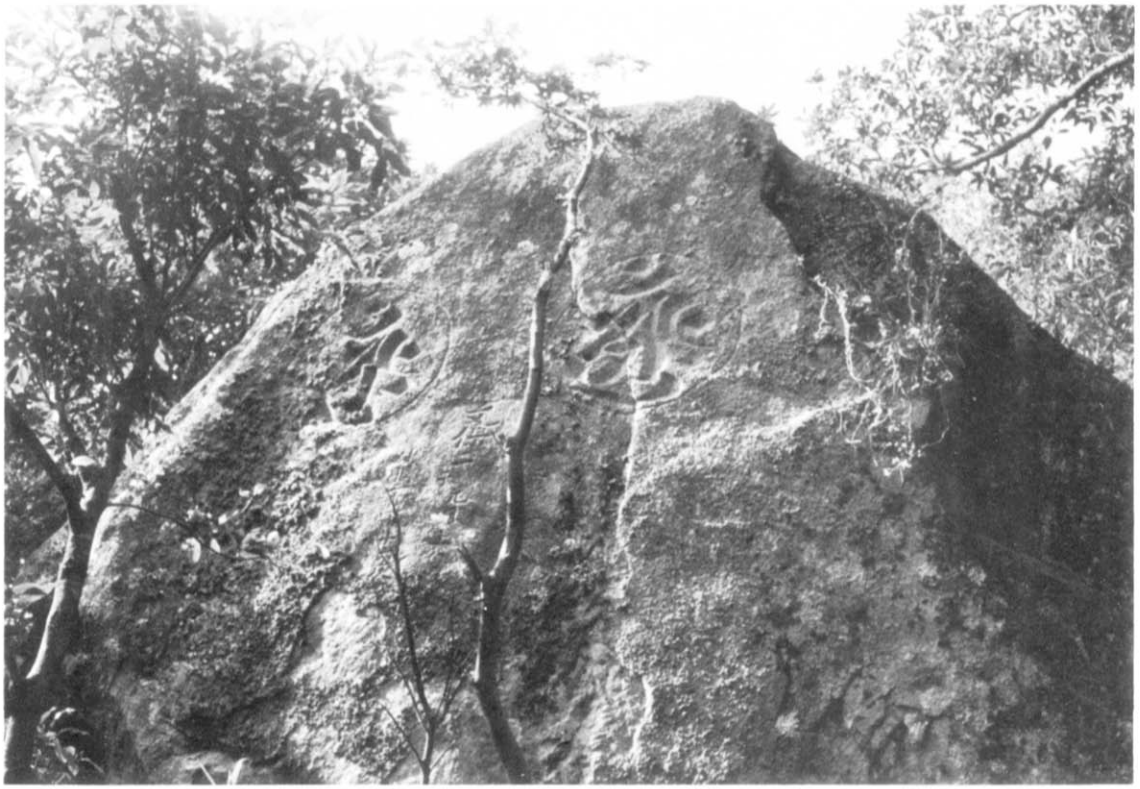
仙窟岩　（萃書房提供）



休　　堂　（萃書房提供）

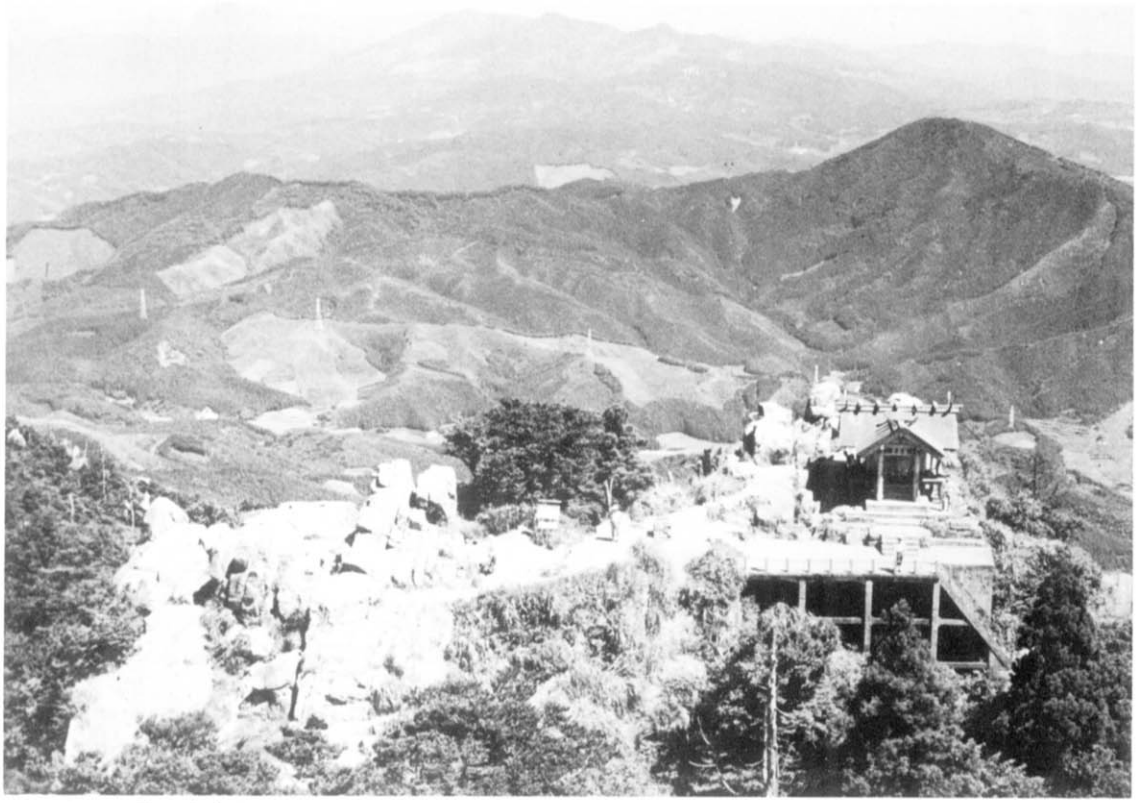


中　宮　跡



行者堂跡——磨崖梵字と文保二年銘

第6図　宝満山の遺跡(5)



空から見た上宮　（朝日新聞社提供）



仙竈岩より上宮南壁をのぞむ

第二部　宝満山遺跡の調査

小田富士雄

Ⅰ　調査経過の概要
Ⅱ　法城窟の調査
Ⅲ　上宮祭祀遺跡の調査
Ⅳ　下宮礎石群遺構の調査

I　調査経過の概要

宝満山の綜合文化調査が企画されたのは一九六〇（昭和三五）年八月のことであった。同年九月四日太宰府天満宮社務所に集合して第一回の会合が行われた。発起人として九州大学名誉教授長沼賢海、福岡女子大学校々長干潟龍祥、太宰府天満宮々司兼竈門神社宮司西高辻信貞の三氏が実現にあたられた。当日の会合によって「宝満山文化綜合調査会」（代表・西高辻信貞）が発足することとなり、当日の出席者をもってつぎのような学術班が編成された。

遺跡と遺物関係	鏡山　猛	九州大学文学部
	渡辺正気	福岡県教育庁
	小田富士雄	九州大学文学部
文献関係	檜垣元吉	九州大学教養部
	田村圓澄	九州大学文学部
民俗関係	三宅安太郎	
祭祀関係	筑紫　豊	福岡県教育庁
	神社庁	
石造美術関係	與崎　淳	
	太田静六	九州大学工学部
修験道関係	干潟龍祥	福岡女子大学校

またこの綜合調査にあたっての地元世話人としてつぎのような関係組織がつくられた。

	内山区	北谷区	原区
区長	木村藤策	斉藤久茂	安部新
古老	木村藤次郎・大庭源次郎	斉藤陸男（会計）	
		斉藤佐市・斉藤倉吉	平島徳助・木村弥助
婦人会	大庭ツマ子	田村与三・渡辺善郎	安部新六
青年関係	松崎弘志	斉藤みきえ	平島ミサヲ
	大庭利江	田村清弘	森木隆愛
町会議員	木村甚悟	渡辺広子	吉村幸子
		平島久光	小島忠平
氏子総代	木村甚悟（重複）	斉藤徳之助	小島伊右ヱ門
	松田幸七郎	斉藤喜代光	

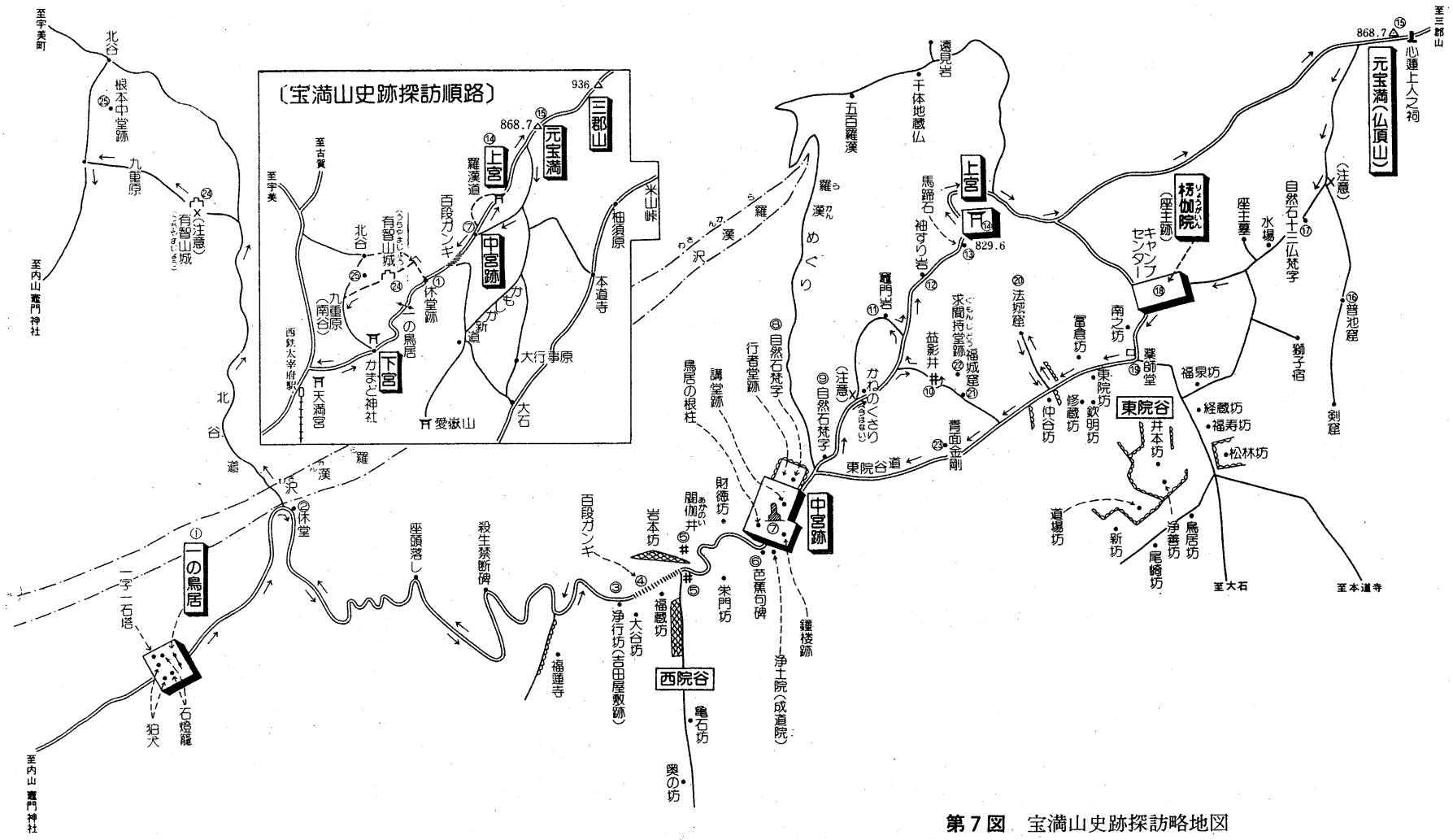
以上のような組織をもって綜合調査が実施されることになり、遺跡・遺物関係の現地調査に入ったのである。考古学的調査は一九六〇（昭和三五）年に二回、翌六一（昭和三六）年に一回と計三回実施した。

○第一次調査……一九六〇年一〇月六～九日

〔調査者〕小田富士雄・鷺久嗣郎（九州大学文学部学生）

〔調査概要〕七日朝から登山の予定であったが、風雨となったので断念して竈門宮下宮所蔵の宝物調査を行うこととして、和田竈門宮禰宜立会のもとに神殿に所蔵された物品を点検し、考古関係資料の記録を作成した。

翌八日は曇時折晴間のみえる天気となったので、下宮近くに居住して付近の遺物をも収集されている松田広美氏の案内で九重ヶ原上方の蔵骨器出土地とその付近を踏査した。ここでは蔵骨器、須恵器、青磁などの破片が採集できた。九重ヶ原南側の南谷上方には多くの屋敷跡と思われる石垣群がみられた。つづいて下宮を基点として宝満山の山中遺跡をめぐり上宮にいたって再び下宮に帰着する登山踏査を行った。巡歴コースはつぎのとおりである。



第7図　宝満山史跡探訪略地図

竈門宮下宮―一の鳥居―休堂跡―吉田屋敷跡―阿伽(あか)の井―中宮跡―行者堂跡―役小角窟―鉄(かね)の鎖(くさり)―仙竈岩(竈門岩)―袖摺岩―善哉岩―上宮―上宮裏遺跡―座主跡―水場―元宝満山(仏頂山)―(座主跡を経由して)法城窟―(カモシカ新道を下り)鳥追峠―愛獄神社―竈門宮下宮

当日の踏査記録によってつぎに内容を摘記しておこう。

(1)、吉田跡は草木繁茂して分け入ることができなかった。

(2)、行者堂跡に磨崖梵字と文保二年(一三一八)の紀年銘がある。(これは石造美術班で調査した)

「工彫藤原□□文保二戊午九月上旬法眼幸榮十六度」

(3)、役小角窟上面に磨崖梵字がある。銘文ともに削られて月輪のみが現存する。

(4)、鉄の鎖よこに磨崖梵字(削除・月輪のみあり)、紀年銘その他が刻まれているが判読できず。

(5)、仙竈岩(竈門岩)は三個の鼎立する大岩からなり左側の大岩面に「仙竈」の刻銘がある。通路右磨崖面にも刻銘があるが、苔多く判読はむずかしい。

(6)、上宮御神体は石造女神像(玉依姫)である。

(7)、上宮裏遺跡は上宮の背面崖中間の岩陰に土師器皿破片が多く散布し、昨秋にはロック・クライミング訓練中の学生によって皇朝銭(富寿神宝銅銭)が採集されている。崖末端や中途に土師器、須恵器の皿や椀の破片が散布している。上方より流出したものと思われる。

(8)、水場のやや下流水中より瓦器を発見した。上流に磨崖十三仏梵字および貞享三年(一六八六)の銘文を発見した。

(9)、元宝満山頂(仏頂山・標高八六八・七メートル)の心蓮上人墓は現在倒壊している石造祠堂であろうと思われる。(その後一九七八年宇美町有志によって再建された)

(10)、座主跡およびその下方付近には石垣で囲まれた平地が多く、坊跡に比定される建築遺構かと思われるが、礎石などは見られない。道路にて瓦器片採集。

(11)、法城窟は入口付近およびやや登った奥に三～四平方メートルの平坦地があるのみで、古くから多くの人が出入しているようで、発掘による成果はあまり期待できないであろうと予想される。

九日は北谷、只越地域の一般調査を実施した。北谷・斉藤徳之助、只越・田村与三、只越・井本菊二郎の諸氏を訪ねて情報を聴取した。その内容をつぎに摘記しておこう。

(1)、斉藤徳之助氏持山（北谷字冷林）を昭和三四年植林中に地下一尺強のあたりで丸底素焼鉢を掘出し、所蔵されていたので当日寄贈いただいた。火葬骨壺であろうか。発掘地点を案内されたが、内山から北谷に至る道筋であった。

(2)、中堂谷から内山の大場佐吉氏が石製の薬師像を掘出したことがある。

(3)、竈門神社北谷遙拝所の神殿内に施釉狛犬があるが由来不詳。帯出禁止である。

(4)、北谷公会堂に高さ一尺ばかりの石碑（野石）がある。伝教大師の墓という伝承もある。

(5)、北谷、字名大黒寺といわれる畑地（斉藤佐市氏所有）に座頭墓と伝えるところがあり、石積みがみられる。昔から手を触れることは禁じられている。

(6)、北谷に通称「御蔵様（おぞうさま）」といわれる祠がある。安政年間の棟札（米奉納記録あり）が現存する。御神体は後世変えられたといわれるが像形不詳である。

○**第二次調査**……一九六〇年一〇月一六～一九日

〔調査者〕鏡山猛・渡辺正気・小田富士雄・鷹久嗣郎、人夫二名

〔調査概要〕前回の踏査結果にもとづいて今回は法城窟付近の試掘と上宮背後の岩棚祭祀遺物の堆積層の試掘を企画し、余力があれば下宮下の礎石群の測量にまで及ぼすこととした。

一六日には小田、鷹久が先発して天満宮で測量器材を整備していただき、さらに最近天満宮が入手した「鎮西竈門山入峯伝記」一冊、「密事記」一冊、「竈門山伝記」下・一冊(上なし)、「竈門山舊記」乾・坤・二冊を借用した。夕方

石造美術班の輿崎淳氏来り、下宮社務所に同行して氏の石造関係調査の成果をうかがう。鏡山、渡辺両氏到着。夜鏡山、輿崎帰る。

一七日は渡辺、小田、靏久らと人夫二名で午前八時半より上宮にむけて登頂し、一〇時半頂上に到った。昼食後一二時より法城窟に下り試掘調査を開始、窟の内外にA～Dトレンチを設定し調査をすすめた。平面略測図、トレンチ土層図などを作成して終了した。RKBテレビの取材に便乗してライトを借用し、窟内を探索した。天満宮から木本満神官が天幕、炊事用具を持って到着し、設営にあたった。登山者がキャンプに利用している座主跡付近に設営して計六名が宿泊した。夕方から風が強く荒れ気味となった。夜に入り寒さが加わり焚火をつづける。夜半、上宮に登って遠望した福岡方面の夜景はすばらしいものであった。

一八日は上宮背後の岩棚遺跡（約二〇平方メートル）にトレンチを設定し、土師器包含層の調査にあたった。昼前鏡山、人夫一名登頂。調査を終えて午後六時半下宮に到着。午後七時半から下宮社務所で新聞記者発表を行なう。神社側から西高辻宮司、和田、井上、安恒の諸氏が出席した。本日は下宮社務所に宿泊。

一九日は下宮下の礎石群の測量調査を行なう。これまでの予察では南北八列、東西四列の総柱建築遺構で、僧坊跡の性格をもつものであろうと考えられた。一〇〇分の一平面図を作成して終了した。本日は西高辻宮司、安恒氏、西日本新聞記者の来訪があった。午後六時下宮本間権禰宜心得の先導で下宮参拝を終えて解散。

○第三次調査……一九六一年四月五～一二日

〔調査者〕鏡山猛・小田富士雄・靏久嗣郎・宮小路賀宏、人夫三名

〔調査概要〕今回の調査は下宮下礎石群の一部発掘を含む記録作成を企画した。

五日は小田、靏久が午後先発して天満宮で前回に調査した上宮背後の岩棚遺跡発掘の土師器類を実測し、夕方から西正寺住職山内興隆氏を訪ねて氏が収集している竈門神社付近採集古瓦について話をうかがった。天満宮社務所に宿泊。

六日朝から下宮に到り、礎石群の調査を開始した。本日から宮小路賀宏君、人夫三名が加わる。前回作成の実測図を検討した結果、さらに東側に礎石列の存在が予想されたのでトレンチを設けて探索したところ、さらに東西方向をとる二列の礎石群の存在が確認された。これは東側が社務所のある山側に接しているために土砂の堆積をかぶりやすく、埋没したものである。したがって南北八列、東西六列の配置をとる礎石群となった。

七日からは礎石個々の露出と、礎石の抜き去られたあとの根石群確認、平板測量図の作成、トレンチの設定と発掘など本格調査に入った。本日鏡山到着。岡崎敬、山内興隆、柳沢義幸らの見学あり。

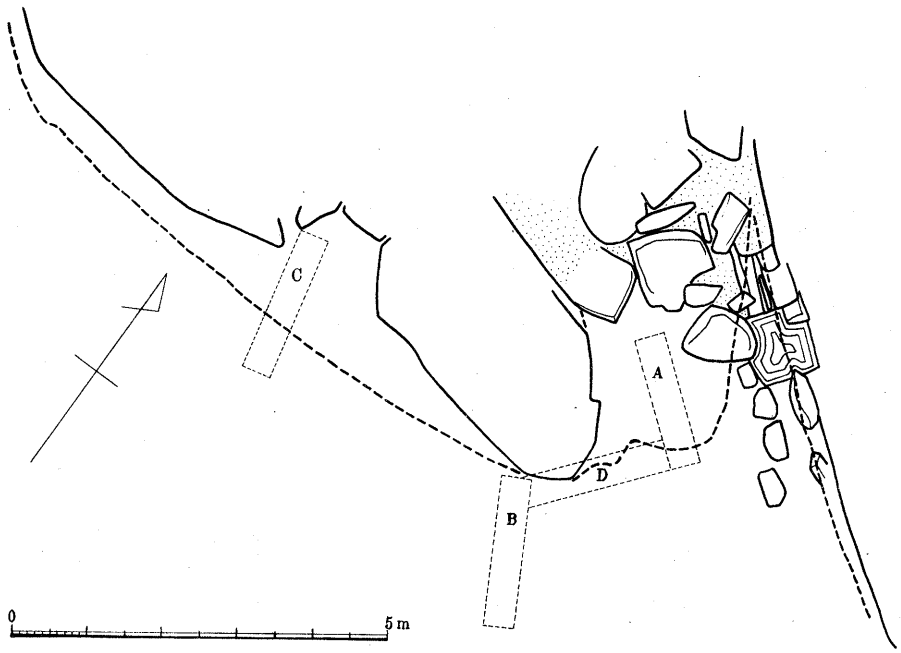
八日は雨となったが、あい間をぬって撮影、土層実測を行った。昼前から雨が激しくなったので作業を中止して下山した。

一一日は雨があがったので小田、靏久が朝から下宮に向い、作業を開始した。トレンチ発掘を継続したが午後四時雨が激しくなったので中止した。下宮宿泊。

一二日は曇時折小雨のなか発掘作業をすすめて計八ヶ所のトレンチを発掘完了し、土層実測図作成、写真撮影を終えて埋戻しを完了。午後四時終業した。礎石個々の実測を将来にのこしたが一応本日をもって第三次調査を終ることとして午後五時下山した。

Ⅱ　法城窟の調査（図版一～三）

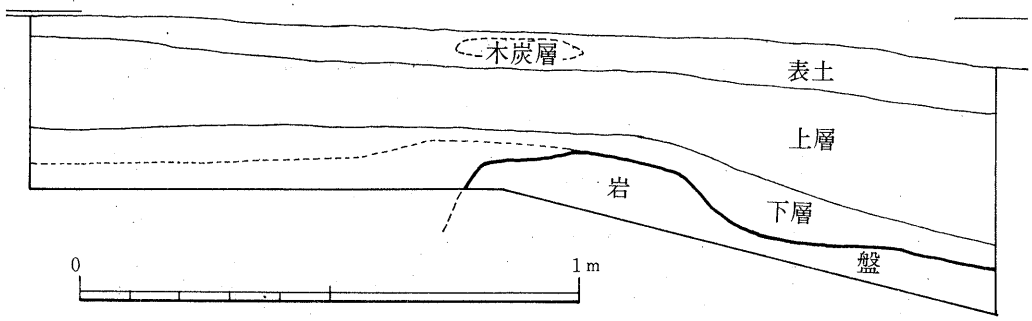
上宮から東方に少し下ったところにある東南むきの石窟である。花崗岩の巨岩からなる絶壁が累々と並ぶところにさらに上方より落下した巨岩がその前方にかぶさってできた石窟である。内部はさして広くはないが、奥は小岩塊が累積している。窟内に湧水源があり、東側の岩壁沿いに小池と流路をつくって下方に流している。奥の岩石上に玉依姫と思われる女神小像を安置しているが、近世以降の作と思われる。水分神としての民俗信仰によるものであろう。



第8図　法城窟平面実測図

内部はこれまでにも多くの人が出入した形跡があるので、発掘してもさして成果はないであろうと予想された。窟内中央（Aトレンチ）、外部中央（Bトレンチ）、西側巨岩庇下（Cトレンチ）にそれぞれ幅四〇センチ、長さ二メートルのトレンチを設定し、さらにA、B両者をつなぐ巨岩庇下にDトレンチを設けた。これらトレンチの選定は沖ノ島祭祀遺跡調査における岩陰祭祀などの経験を生かして設けたものである。以下発掘の所見をまとめておこう。

Aトレンチ　地表から一〇センチの深さまでは近代のキャンプなどによる焚火層（表土）で、近代の陶片一個が出土した。これより下、岩盤に至るまで大別して上、下二層に分れる。地表から三五センチまで掘下げたがすでに岩盤が現われてきた。上層は黄褐色風化土壌でほぼ水平に堆積しており、窟の外側に向うほどに腐蝕土壌化して黒褐色化してゆく。土師器片（皿）が多数と陶器片二個出土した。土師器はすべて底面に糸切痕がある。下層は黒褐色風化土壌で花崗岩の風化した砂利や炭を含んでいる。土師器や硬質（須恵器系）瓦器の破片が発見されたが、上層遺物と大差ない様子であった。下層の下半



第9図　法城窟Aトレンチ断面土層実測図

部は上層にちかい土壌に変化してゆく。

Bトレンチ　地表から一五センチの深さまで黒色含炭土壌の近代焚火層である。以下は黒褐色の花崗岩風化土壌である。これは落葉などを含む腐触土壌で遺物は包含されていない。

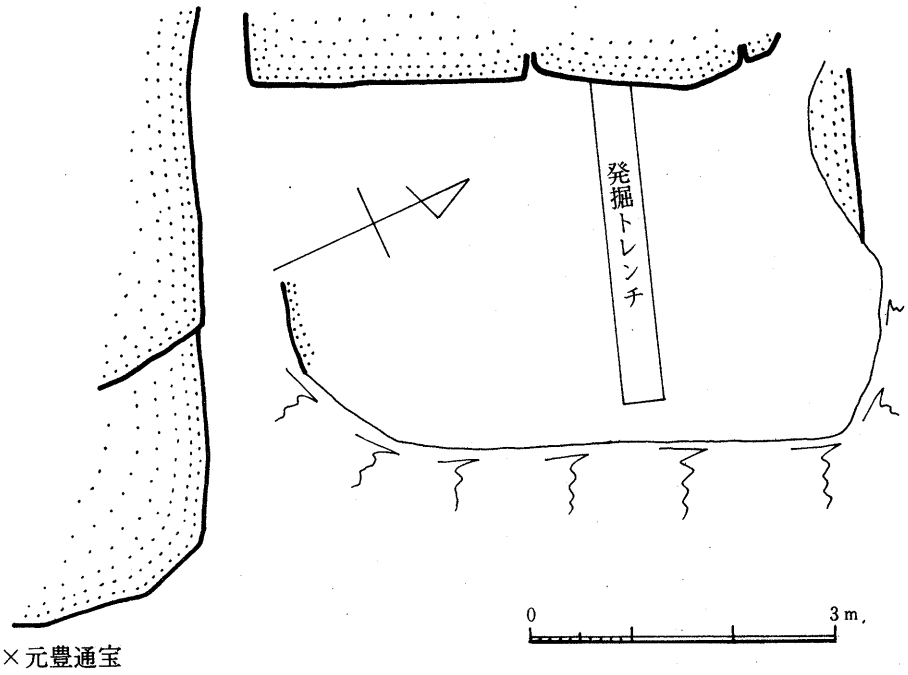
Cトレンチ　深さ五〇センチまで発掘したが、花崗岩の風化土壌で、岩陰から外部にむかうにつれて次第に汚染して腐蝕土となっている。遺物の発見はなく、岩陰は祭祀には利用されなかったと考えられる。

Dトレンチ　遺物の包含されている範囲を確かめる意図のもとに設定したが、窟内に限られていたことがわかった。深さ六〇センチまで掘下げたが岩盤には至らず、岩盤は急激に東に傾斜していることがうかがわれた。このことはAトレンチの断面でも東方に急傾斜している様子がみられた事実と一致する。地表から一五センチまで黒色含炭層（表土）、以下は黒褐色花崗岩風化土壌である。地表下四五センチで土師器片が若干発見された。

この石窟に法城窟の名称が付されて修験窟に数えられるようになったのは中世以降のことであろうと考えられる。

Ⅲ　上宮祭祀遺跡の調査（図版四～一〇）

標高八二九・六メートルの頂上に一九五七年再建された上宮社殿がある。この背面にあたる東側は切り立った巨岩の絶壁を形成している。この背壁を一〇メー



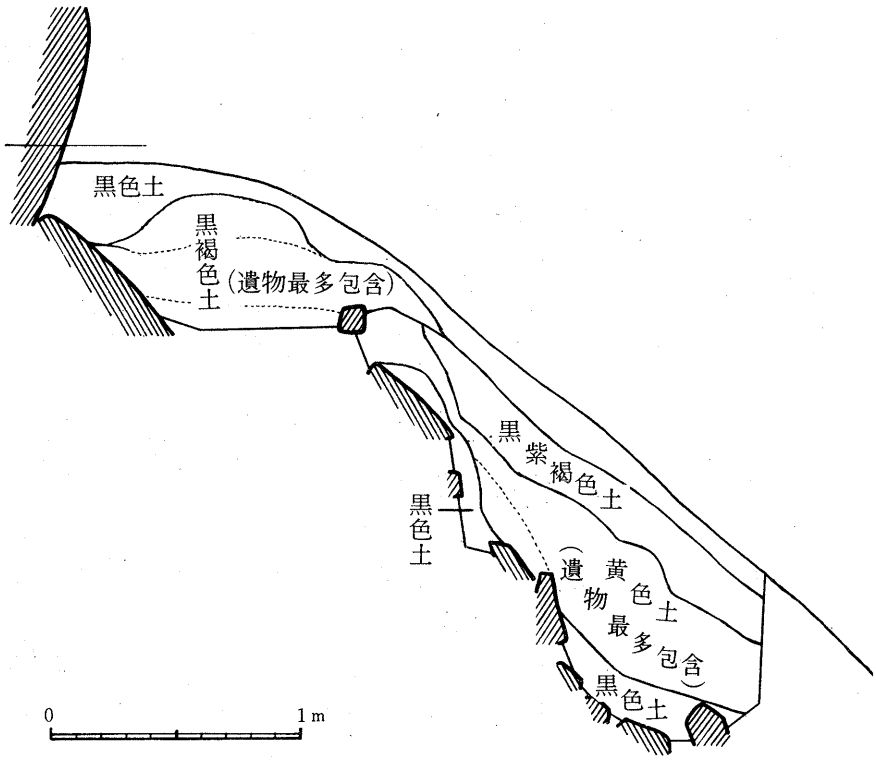
第10図　上宮祭祀遺跡平面略測図

トル余りも下ったところに西と南を巨岩で囲まれた岩棚状のテラスがある。広さは東西三・五メートル、南北六メートルばかりで、北側はさらに下にむかって絶壁をなし、東側も急傾斜で下方につづいている。上宮からここに至るには巨岩の割れ目を伝い、階段状の絶壁を下って到達する。樹木の繁茂する地表に土師器坏の破片が散布している。ここは登山者のロック・クライミングの練習に好適であるところから、これまでにも関係者に利用されてきている。その際に岩場の途中やこのテラスで遺物の存在に気づき、採集もなされてきたところから知られた遺跡である。

発掘はテラスの中央部を選んで東西方向に長さ二・八メートル、幅五〇センチのトレンチを設定した。平板その他の測量器材が容易に持ちこめないので、簡単な平面略測図を作成した。一部樹木の伐採を行なったが、せまい場所であるために全景の撮影も樹木か南壁に登って辛うじて可能な状況であった。

遺物は地表でも採集できる状態であるが、平坦面では六〇センチの深さまで、また東寄りでは約四〇度の急傾斜となり、岩盤までの深さは一メートルにも及び、この

間に遺物―主として土師器坏類が五〇センチの厚さの黄色土中に稠密な集積を示している。これをはさんだ上下の黒色～黒褐色土層は腐蝕土として汚染されたものである。岩壁の上方、上宮社殿裏（東側）の岩場には腐蝕土が堆積して土師器の破片が散乱している。テラスに堆積した土師器類は土砂の混入もないほどの状態がみられるが、おそらく上方から投棄されたものであったろう。発掘はテラス自体のせまさから拡張したり、トレンチの数を追加することは不可能であったから、トレンチ北面の東西方向断面を記録して終らざるをえなかった。

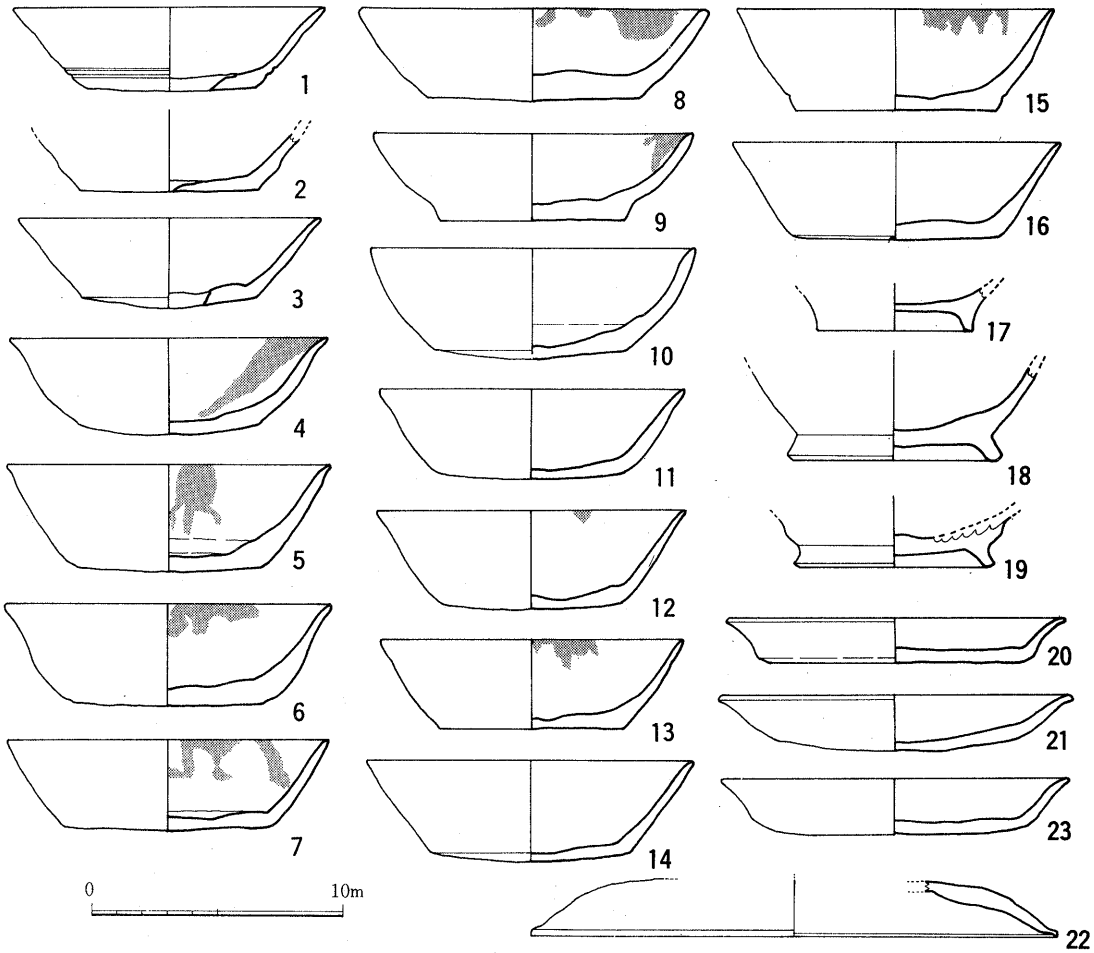


第11図　上宮祭祀遺跡トレンチ断面土層実測図

遺物の大部分は土師器の坏類で、さらに椀、皿、蓋が若干と須恵器の坏、椀、長頸瓶、壺、灰釉陶片などがある。

(1)**土師器**（図版七～九）

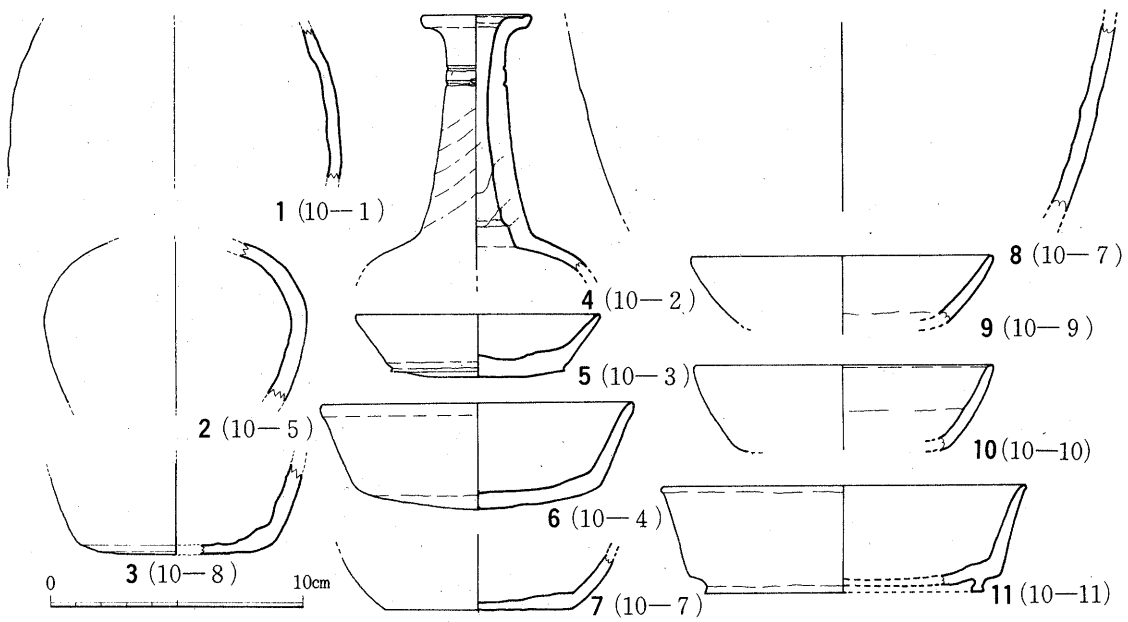
坏（第12図1～16）　出土品の大部分がこの類である。黄褐～黄白色を呈する堅い焼成で、細砂を含む良質胎土である。口径一二～一三センチ、高さ三～四センチ、底径七～八センチのほぼ同形成品である。一部に平坦底で側面がやや内湾気味の傾向をみせるもの（8・9・15）があるが、多くはやや外張出底で側面は直線的かややふくらみ気味に立上り、口縁部でわずかに外反気味となる特徴を示している。表面よく回転ナデ調整され、底面は篦切りはなしの



第12図　上宮祭祀遺跡出土遺物実測図　—土師器—　（番号は図版七・八の番号と一致する）

痕跡をとどめている。底面には板目痕をのこすものもあるが（図版九上）、糸切手法のものは一点も発見されなかった。また口縁部から内面にかけて油煙の付着しているものがかなりあって（第12図4～9・12・13・15）、燈明皿に使用されたであろうことをうかがわせる。このほか底部を二次穿孔したものもあって（図版九下、第12図1～3）、祭祀使用後に穿孔して廃棄したことが推察される。このほか内面に篦記号を刻んだもの（図版八下）や底部に墨書したものがある。

椀（第12図17～19）　黄白～黄褐色を呈する堅い焼成で、細砂を含む良質胎土である。坏類にくらべて量的には非常に少ない。完形品がないので口径、高さは不明であるが、付高台のある底部がのこっている。台径六～八・五センチで垂直のもの



第13図　上宮祭祀遺跡出土遺物実測図 —須恵器・灰釉陶—

（17）と外開きのもの（18・19）がある。側面の底部付近には製作時に器壁の厚さを調整するために加えられた回転篦削りの痕跡がよく残されている。

皿（第12図20・21・23）　坏にくらべて口径が大きく、高さの小さい平底形態のものである。底部は篦切りはなしで色調、焼成、胎土など坏と同じである。これも量は非常に少ない。口径一三～一四センチ、高さ一・八～二・二センチ、底径一〇～一一センチである。入念な回転ナデ調整されているが、平坦底、外湾側面の20は両者の転換部に篦削りによる回転面取りを明瞭に残している。また21・23は外ふくらみある底部をみせ、ゆるやかに外傾する側面へとつづいている。

蓋（第12図22）　赤褐色を呈し、焼成、胎土は皿類に同じ。一点検出されているが、これと見合うべき大きさの椀や坏は発見されなかった。口唇部は器肉うすく、三角形状の断面形は須恵器の蓋とも共通している。

(2)須恵器（図版一〇）

坏（第13図5～7・9・10）　平底、外傾側面をなし、灰黒色の堅い焼成で胎土に粒砂を含む。土師器にくらべて量は少ない。5は最小で口径九・七、高さ二・五センチで

あるが、そのほかは口径一二～一二・五センチ、高さ三～四センチ、底径八～九センチである。底部は篦切りはなしで内外は回転ナデ調整されている。底部は外ふくらみあるもの（6）と平坦底のもの（5・7）があり、側面も直線的に外傾するもの（6）とやや内湾気味に外傾するなど、土師器の坏と共通するところが多い。6のように口縁部の外側だけやや黒味をおびたものがあり、焼成時に同形同大の坏をいくつも重ねて焼成したであろうことの推察できるものがある。本来蓋を伴うものではなかったのであろう。

椀（第13図11）　破片であるが復原口径一四・四センチ、高さ四・二センチ、付高台復原径一一センチで、高台は低いが、坏部の底径は一二・三センチと腰張りが明瞭で、側面の立上りも坏類より外傾度が小さく、直線的である。発掘資料のなかでは最も古式の特徴をそなえており、上限は八世紀後半ごろまでのぼせうる。

長頸瓶（第13図2～4）　細長頸をのせた倒卵形長胴器体の瓶形である。完形品はないが、推定全高は一八～二〇センチ程度となろう。長頸は高さ約九センチ、径四・五～二・三センチで、口縁部で水平に広がり、口唇端は断面三角形状に凸出して口径四・四センチとなる。口縁下に二条の篦描線をめぐらし、粘土帯巻上げ技法でつくられ、回転ナデ仕上げされている。器体は径一〇センチ前後の最大径を肩部に設け、下方にすぼまってゆき、入念な回転ナデ調整で仕上げられている。底部は平底と思われ、回転篦削り調整されている。器体部と長頸部は別途に製作されて接合された様子が4の内面によく残されている（図版一〇の2）。

壺（第13図8）　大形壺の胴部と思われる破片がある。下胴部と思われ径二二～一八センチを測る。

(3)灰釉陶（第13図1）

長胴卵形器体に復原できる壺の破片で表面全体に緑色灰釉がかかっている。復原胴部最大径一三・二センチで瓶形をなす器形かと思われる。胎土は灰色良質で、内外とも入念な回転ナデ仕上げされている。九州産でない可能性がある。

今回の発掘トレンチで最も多いのは上述したように土師器の坏類で、ほぼ同一特徴を示すものが多い。ほぼ九世紀

代に比定されるものであろう。須恵器の坏や長頸瓶もまた同期に比定してよい。したがって祭祀行為の行われた中心時期が知られるのであるが、その上限はさらに八世紀後半代にまでたどることができ、下限は一〇世紀にまで及ぶこととなる。この推測はさらに後述する上宮付近の採集資料によって明確になってくるのである（本書第三部参照）。

九世紀を中心とする時期はすでに第一部でも述べたように、竈門神が叙位昇格をかさねていた時期であって、このような歴史的背景のもとに行われたであろう上宮祭祀の実態をうかがい知ることができたわけである。したがって式内社に列せられるに至ったその前後の竈門神興隆期を裏付ける祭祀遺跡としての意義を有するものであるから、将来ともにこの遺跡の本格的な調査と保存対策をのぞみたい。

Ⅳ　下宮礎石群遺構の調査（図版一一～二八）

下宮社殿に登る参道よこ（南側）隣接地に平地が広がっているが、ここに建物の礎石群がみられる。内山字御供屋（ごくや）谷に属し、神功皇后御座所跡の伝承が付会している。第二次調査の際、地勢の関係上南北方向に桁行をとる七間三間の総柱遺構かとみられた。柱間の配置は等間ではなく、各礎石は花崗岩を使用している。とくに東側は山側に接続していて土砂をかぶりやすい地形であるから、さらに礎石列が埋没している可能性があったので、第三次調査の際に探索を行ない、最終的には南北八列、東西六列の礎石列からなる七間五間の総柱礎石遺構であることが確認された。しかしすでに礎石が抜き取られて根石のみになったところもみられる。とくに北側の参道に接するところや西側最前列礎石付近は、これと平行する路によって削りこまれて崩れやすくなっており、この断面に古瓦の包含がのぞいている。

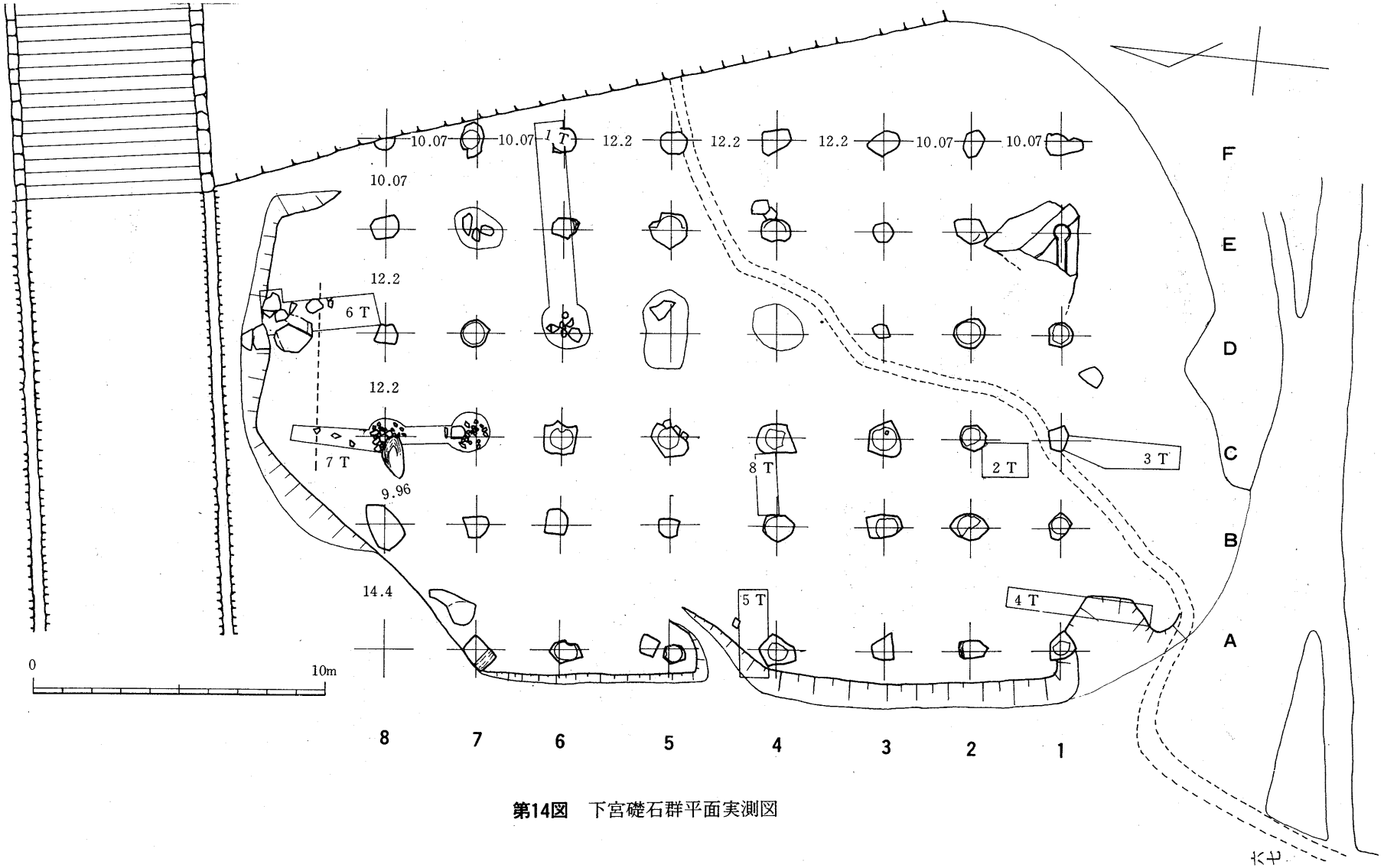
調査の便宜上、南北列礎石を南から1・2……8、東西列礎石を西からA・B……Fとし、発掘した箇所は第1、第2……第8トレンチと命名して作業を行なった。礎石が失われているところは8—A、7—C、8—C、4—D、5—D、6—Dである。また1—Eはこの場所に露頭している母岩の表面に径五〇センチばかりの枘穴を刳りこみ、

さらに西側にむけて幅三〇センチほどの地覆座を掘りこんだ珍しい造作がみられた（図版一四左上）。礎石には表面に円形一段造出柱座を備えたものと、なんらの設備のないものとがある（図版一四～一六）。前者には1—A・B・D・E、2—B・C・D、3—B・C、4—A・B・C・E、5—A・C・E、6—A・C・E、7—D・Fなどがあり、柱座径は七〇～八〇センチである。1—Eの刳込枘穴径が五〇センチほどであるのは柱木の径を示しているのであろう。また4—E、5—Eは柱座の南北に地覆方向の造出があり、3—Cの柱座上には小方形の枘孔が設けてある（図版一五右上）。礎石の表面は火中して荒れており、一部に剝離した状況もみうけられる。柱座を設けたものとそうでないものの配置に特別一定性はなく、創建当初のままではなく、再建などに際して集められた状態ではないかと推測される面がある。現礎石群の柱間法量を示せばつぎのようになる（数値は曲尺値で示す）。

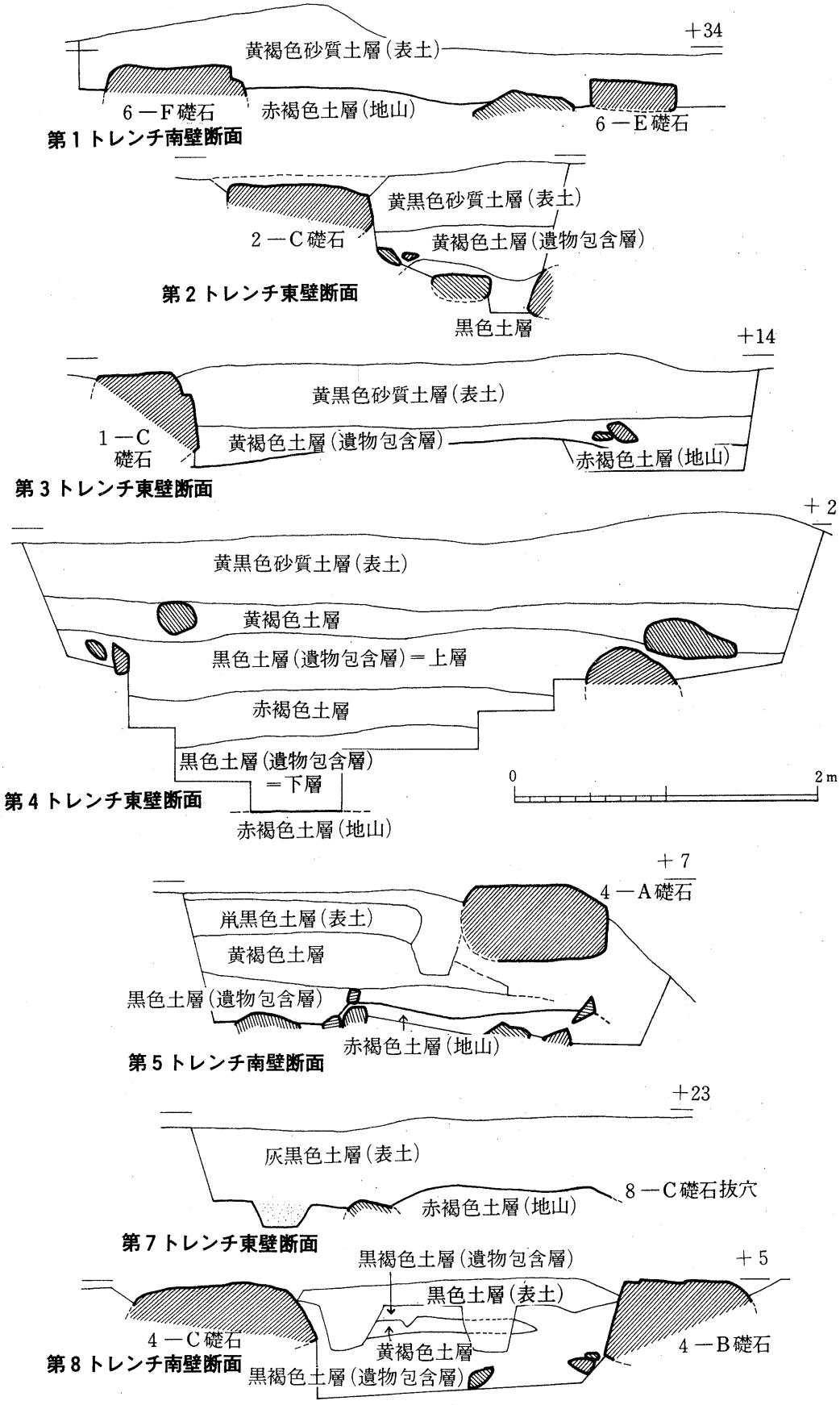
南→北　10.07＋10.07＋12.2＋12.2＋12.2＋10.07＋10.07 ＝ 76.88（尺）

西→東　14.4＋9.96＋12.2＋12.2＋10.07 ＝ 58.83（尺）

全体の規模は大がかりな建物であって、古代の寺院にみる金堂、講堂クラスであるが、総柱形式である点や、梁間五間の各柱間法量の構成などで首肯しがたいところがある。そこで計八ヶ所のトレンチを設けて地下の探索を行なって手がかりは得られないものかと考えた。すでに礎石の露出している西半部は表土層も浅いが、山側寄りの東半部は土砂の流出をかぶっていて表土層は五〇センチ前後に達する。その下に黄褐色土、黒色土の順で上、下二層の遺物包含層が水平に堆積しているのが通じての所見である。この遺物包含の上、下二層はあわせて五〇～六〇センチの厚さで地山に接続するが、山側寄りのF、E列や北側の7、8列では表土層下に地山が現われる。（第1、第6、第7トレンチ）。また第3トレンチでは表土下に二〇センチほどの上層遺物包含層がみられて地山に接続する。ところが第4トレンチでは遺物包含層だけでも一・二メートルに及び、両層の間には三〇センチばかりの赤褐色土層が介在している。したがって中心部から南および西側にかけて広く遺物包含層が水平堆積していることが推察され、とくに西側に傾斜する地形であるために、同一レベルの基段面を造成する必要上第4トレンチのあたりは地山までの層が深くなる



第14図　下宮礎石群平面実測図



第15図　下宮礫石群第1～5・7・8トレンチ断面土層実測図

のである。

さらに礎石と遺物包含層との関係は第2・第3・第5・第8トレンチの断面でみられるように上層包含層中に底面を据えるように礎石が置かれていることが確かめられた。また後述するように包含層の遺物には上、下両層とも共通するものがみられるので、この両層は同一時期の整地作業によって形成されたものと考えられる公算が大きいことがわかる。したがってこのような造成が行われたのは一一世紀後半以降のことと推察され、前述したように礎石の検討から創建時の遺構でなかろうと予想された推察は正しかったことが知られた。したがって現存する礎石群は創建時の礎石を転用して平安時代後期以降に再造成された基段上に再建された建物遺構であったと思われる。さらに創建の時期は第4トレンチ付近から奈良時代にさかのぼる一組の鴻臚館式古瓦が採集されているところから（本書第三部参照）、八世紀後半代までのぼせることができよう。

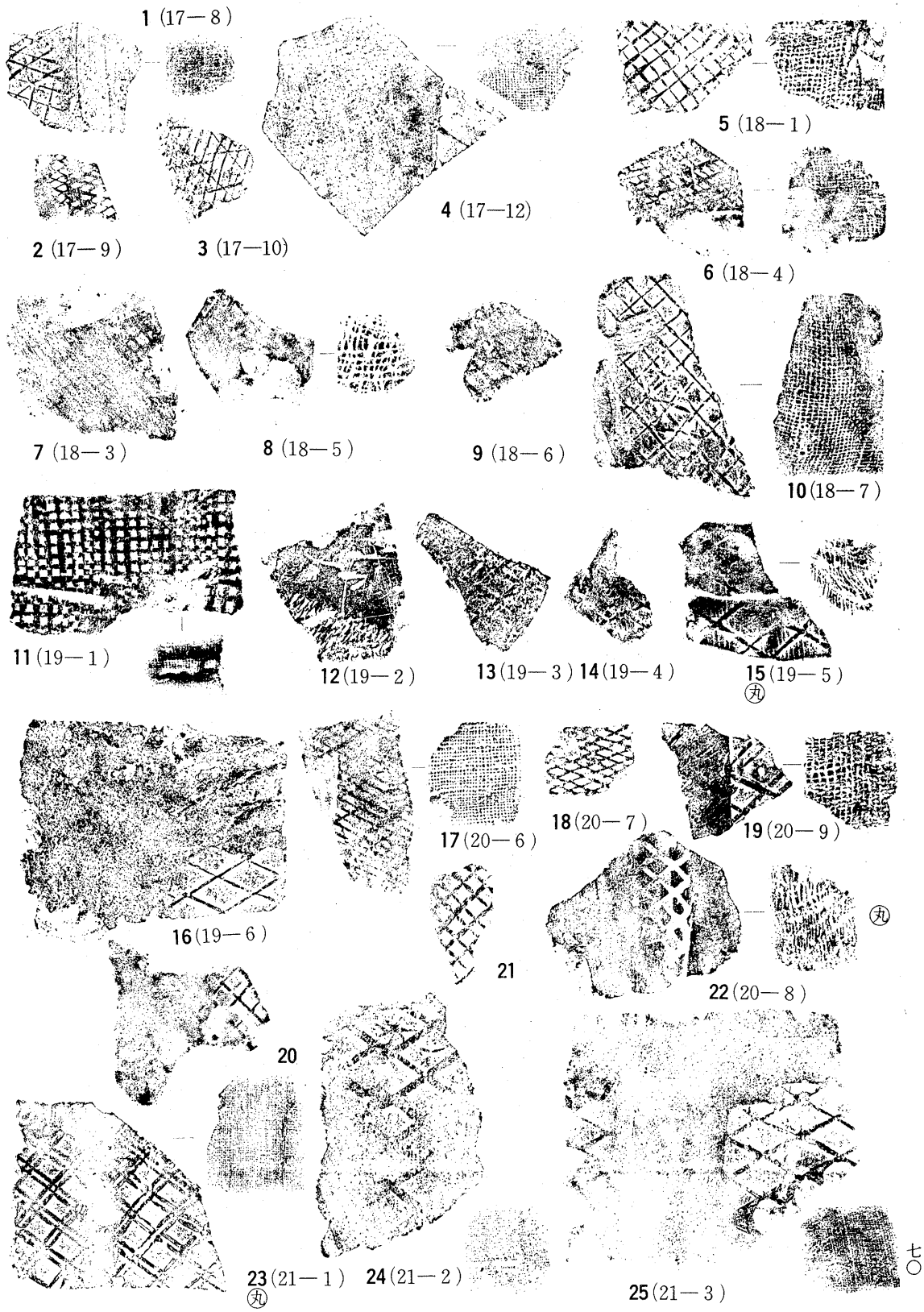
なお第6、第7トレンチで、最北端の8列の北二・四メートルばかりのところに基段の落ちこみ線と幅四〇センチばかりの溝断面が確かめられ、この建物の基段端構造の一部をかいまみることができた。

以上は当時のきわめて限られた時間と人数による調査であるから、まだ予察の域を出ないところが多い。個々の礎石の実測図作成も後日に期したがついに果たせなかった。本格的な調査とともにすべてを後人に委ねたい。

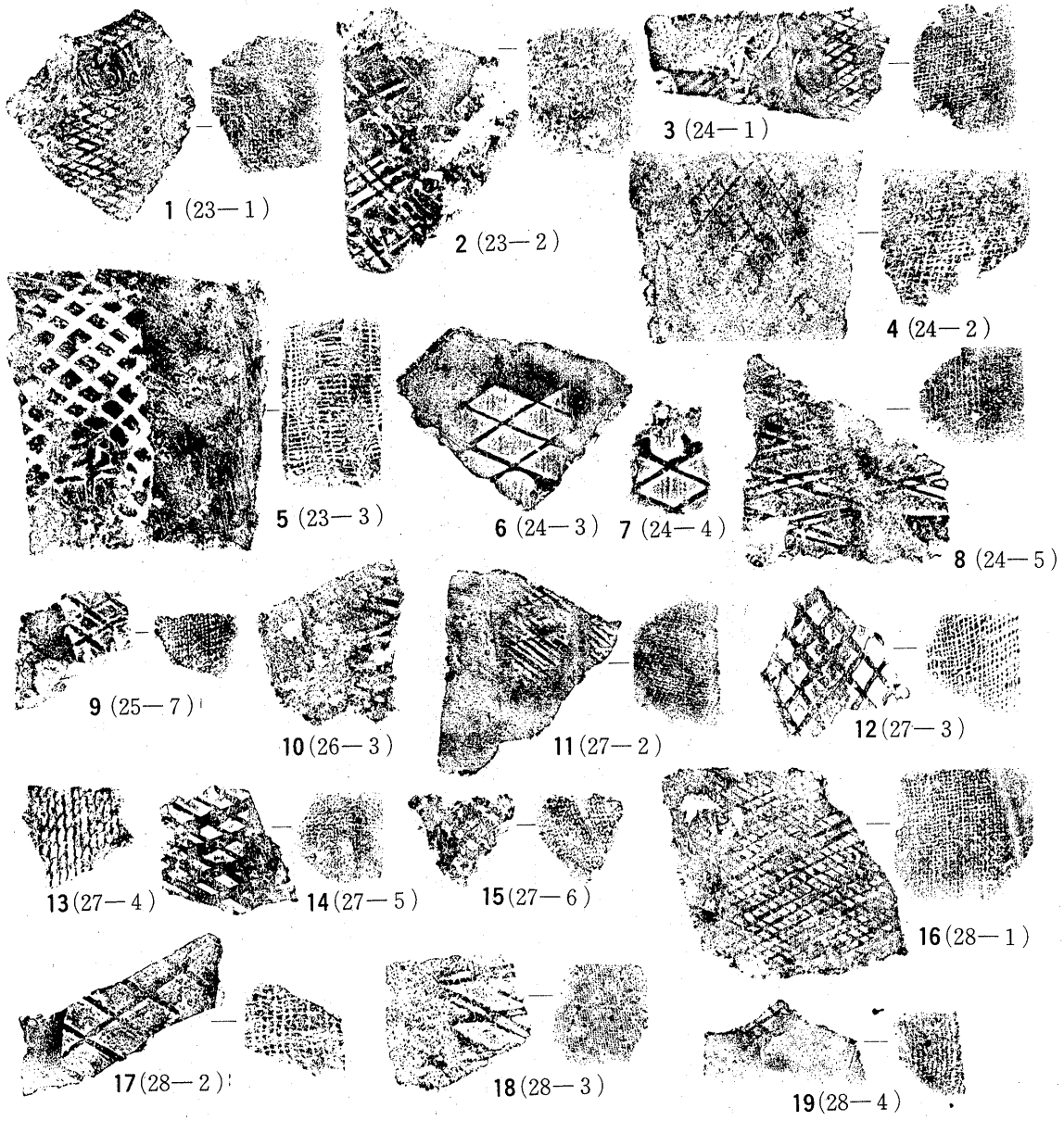
つぎに出土遺物は上、下二層にわたって発見されているが、これは遺物の内容からみて年代差を示すものではないと判断されるので、種類別に通覧することにする。各トレンチから発見された遺物のうち最も多いのは平瓦、丸瓦の破片である。ついで土師器、瓦器、陶器、石鍋、中国陶磁などがあるが、いずれも破片である。二次的な整地作業などによって埋没したために完形品は見あたらない。

(1)瓦（図版一七～二一・二三～二八）

平瓦片が圧倒的に多く、丸瓦片はきわめて少ない。また一部に縄目文様（第17図13）や正格子文様（第16図11）の奈良時代瓦があるが、ほとんどが格子文様の平安時代瓦である。細線小斜格子文の第16図2・6・18、第17図1・3



第16図　下宮礎石群発掘古瓦拓影(1)　($\frac{1}{3}$大)　(1～4・第2トレンチ上層，5～10・第3トレンチ上層 10～16・第4トレンチ上層，17～25・第4トレンチ下層)



第17図　下宮礎石群発掘古瓦拓影(2)　(1/3大)

(1・2・第5トレンチ上層，3～8・第5トレンチ下層
9・第7トレンチ上層，10・第8トレンチ上層，11・12・1—D～E
13・第1トレンチ6—E～F，14・5—D，16～19・4—D皿層)

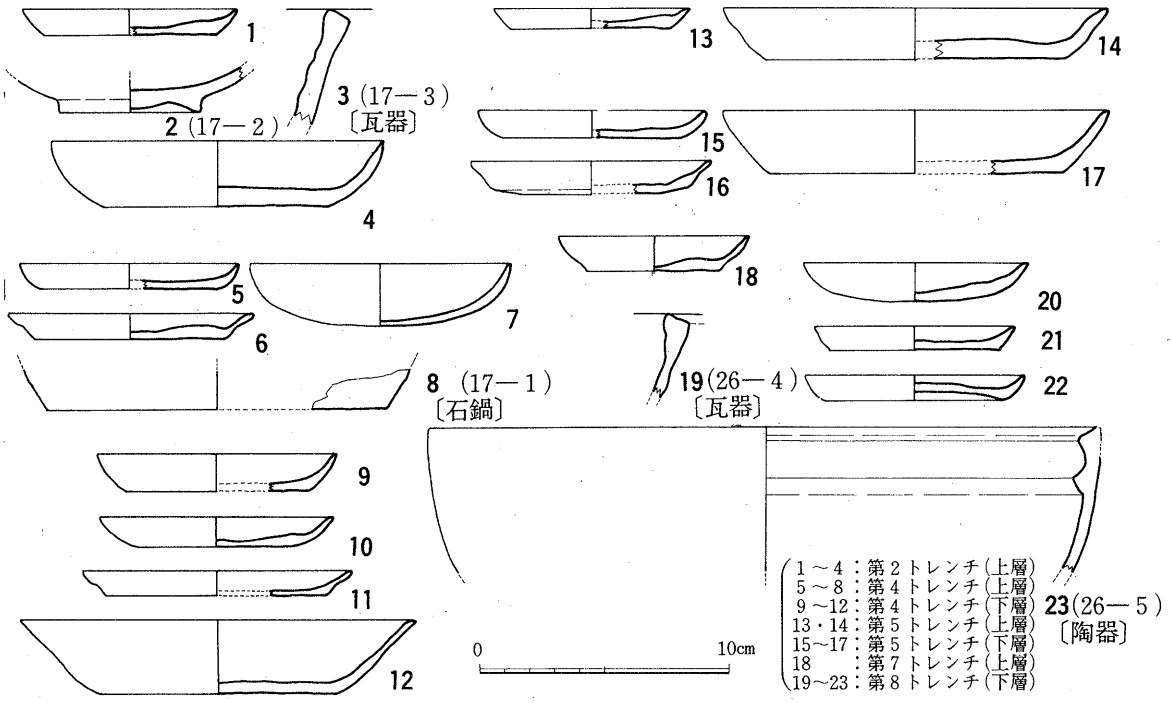
・16は九世紀代にまでさかのぼるであろう。このうち第17図1は格子上に雲状文を重ねていて注目される。一〇世紀代に比定される格子文瓦は最も種類が多いが、正格子文瓦では第16図5・10・20～22、第17図5などがあり、斜格子文瓦では第16図1・3・7～9・13・14・17などがある。なかでも第17図5、第16図22は正格子文の陰陽表現が一般の瓦にみるものと逆になり、「平」字を入れていて珍しい。「平井」銘瓦である。一一世紀代に比定されるものに第16図15・16・19・23～25、第17図2・6～8・17・18などがあげられよう。なかでも複線単位による格子文は「賀茂」銘を入れるものがしばしば発見されている。この系統の格子文様は観世音寺発見の一三世紀代巴文軒丸瓦にまで踏襲されている。また第16図15・25、第17図6はやや大形の斜格子内に四葉文を部分的に入れた特徴あるもので、「賀茂」銘瓦とともに太宰府地方独特の瓦文様である。

総じて九世紀代の瓦は格子目は細かく、凹面の布目痕も奈良時代からの踏襲であるが、一〇世紀代になると、格子目もやや大きくなり、布目痕も非常に粗くなる。また文字を入れる場合にはその部分を予め格子文を入れずにあけておくようになる。すなわち銘文予定区を設けてゆくようになる。一一世紀以降になると格子文はさらに大きくなり、布目痕は一転して非常に細かくなる。この傾向は一三世紀代にまで持続されてゆくようである。

(2)土師器（図版一七・二〇・二二）

皿（第18図1・5～7・9～18・20～22）　大別して大小二種ある。前者はさらに径八・五～一〇センチ未満、高さ一～一・五センチ（1・5・6・9・10・13・15・16・18・20～22）と、径一〇以上～一〇・七センチ、高さ一～二・四センチ（7・11）の大きさになる。ほとんど平底で板目痕あるものと、糸切痕あるもの（6・15・16）がみられるが、糸切痕はさらにナデ消されて不明になったものも少なくない。また丸底風な仕上げになるもの（7・20）もあるが少ない。黄～黄白色を呈し、やや軟質焼成である。

後者は径一三・二～一五・七センチ、高さ二～三センチの平底糸切痕あるものである。黄～黄褐色のやや軟質焼成である。



第18図　下宮礎石群発掘土師器・瓦器・陶器・石鍋実測図

小形品は側面形ともあわせて二～三種に分類することができようが、一〇世紀代と一一世紀以降のものが主体をなすようである。

椀（第18図2）　黄灰色軟質焼成の低い付高台を伴っている。台径五・七センチ。

(3)瓦器（図版一七・二五・二六・二八）

こね鉢の口縁部かと思われる灰色、やや硬質のもの（第18図3・19）、黒灰色やや軟質の鉢破片（図版二五の5、二八の4）がある。いずれも一一世紀以降に属する。

(4)陶器（図版一七・二〇・二五・二六・二八）

褐色を呈する硬質陶片が若干出土しているが大形の壺または甕の胴部破片であろう。口縁部のわかる第18図23は復原口径二六・八センチの半球形鉢形をなし、口縁下内面に二条の断面三角形帯をめぐらしている。これら陶片には一三世紀以降に及ぶものがあるかも知れない。

(5)滑石製石鍋（図版一七の1）

滑石製平底の石鍋破片がある。一一世紀以降であろう。

(6)中国陶磁

一一～一二世紀代に比定される華南系の玉縁口縁白磁椀や口禿口縁白磁椀などの破片が少量発見されている。

第三部　宝満山関連遺物の調査

小田富士雄
倉住靖彦
小西信二
武末純一
森田勉
八尋和泉

はじめに

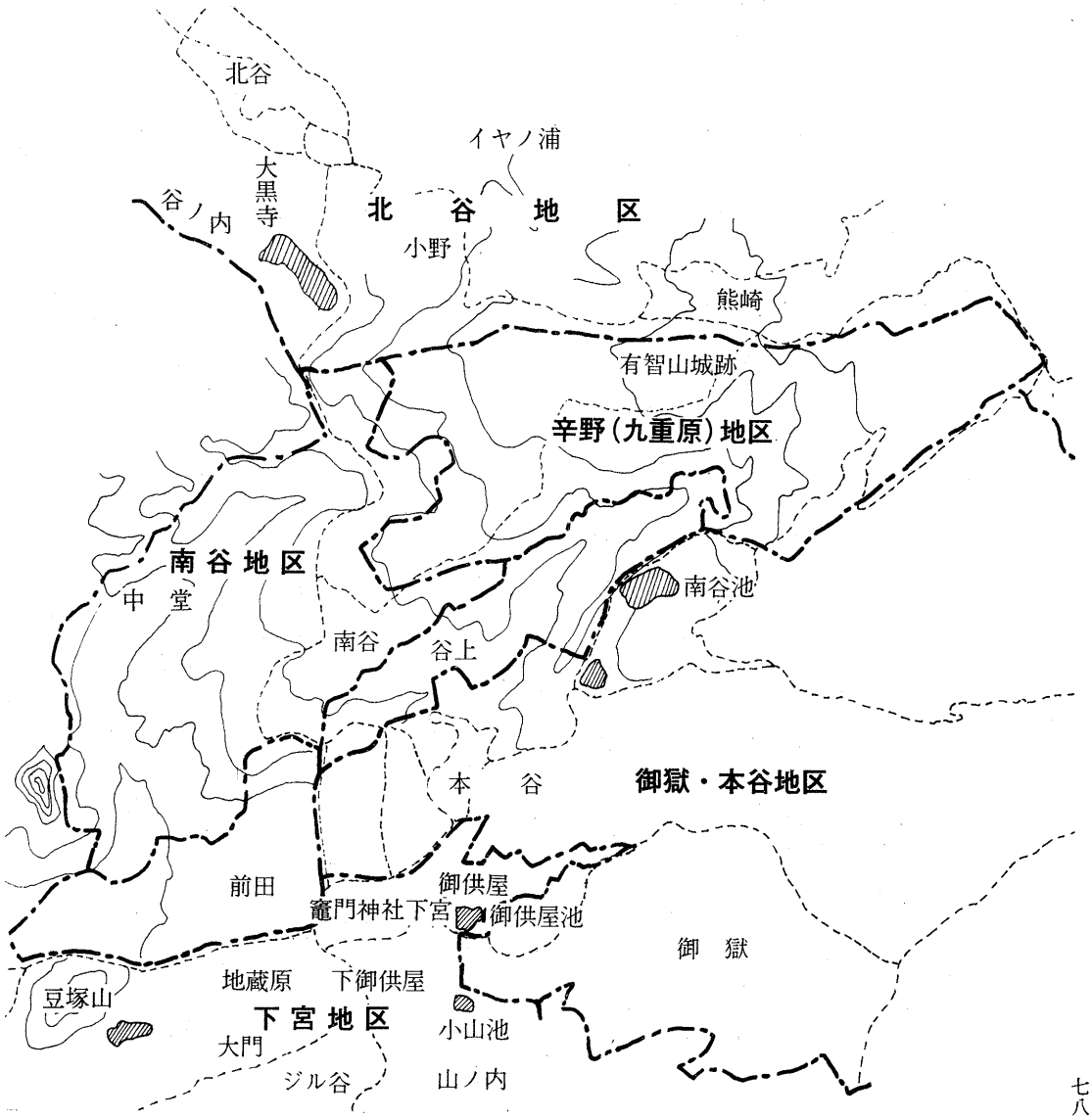
宝満山をめぐる遺跡は発掘調査を行った上宮地区や下宮地区だけにとどまらず、西側の北谷や九重ヶ原から南側にいたる山中から山麓にかけて広く分布している。一九六〇年から六一年にかけての調査時にこれらの地域をも合せて踏査し、各所で聞取調査、遺品の調査などをもすすめた。その後今回の報告書作成段階に至るまでに二〇数年を経過している。この間に各地で開発その他による新資料の発見は少なくない。とりわけ最近にいたる太宰府天満宮小西信二氏の熱心な踏査によって資料の収集には驚くべき質と量が加えられてきている。そこで最近にいたるまでの発見資料を網羅すべく、太宰府天満宮研究所の一室を借りて借用収集して整理にかかったのであるが、その莫大な量からして短時日の間では詳細を極めることは不可能である。そこでまず坊跡などで収集されている近世陶磁などはすべて割愛して後日を期することとした。また中世陶磁片も大量であるところから特徴あるものや重要と思われるものを選択するにとどめざるをえなかった。中世以降大山寺（有智山寺）関係の遺構や坊が、山中山麓に多く存在し、また少貳氏拠るところの有智山城跡ものこされているので、将来本格的な継続調査を幾度も重ねることによって次第に解明されることになろう。本報告はそのための最初の予察的段階に相当するものである。それでも各地に所蔵されている資料やすでに行方不明となった資料などを収集してみると、宝満山の歴史を知るためには重要な意味をもつものが少なくないことに驚かされる。

本報告に収録した資料は故山内興隆氏（西正寺住職）、小西信二氏、岩瀬正信氏、故河内卯兵衛氏、天満宮宝物館、竈門神社下宮、さらに内山、北谷などに在住の松田広美、大庭日佐彦、斉藤徳之助氏らの方々が所蔵保管されているものである。その出土地は広範にわたるため、地形を勘考していくつかの地区に整理して叙述することにした。つづいてこれらの地区より離れた遺物、下宮宝物資料などを加えて構成している。すなわちつぎのような項目にしたがっ

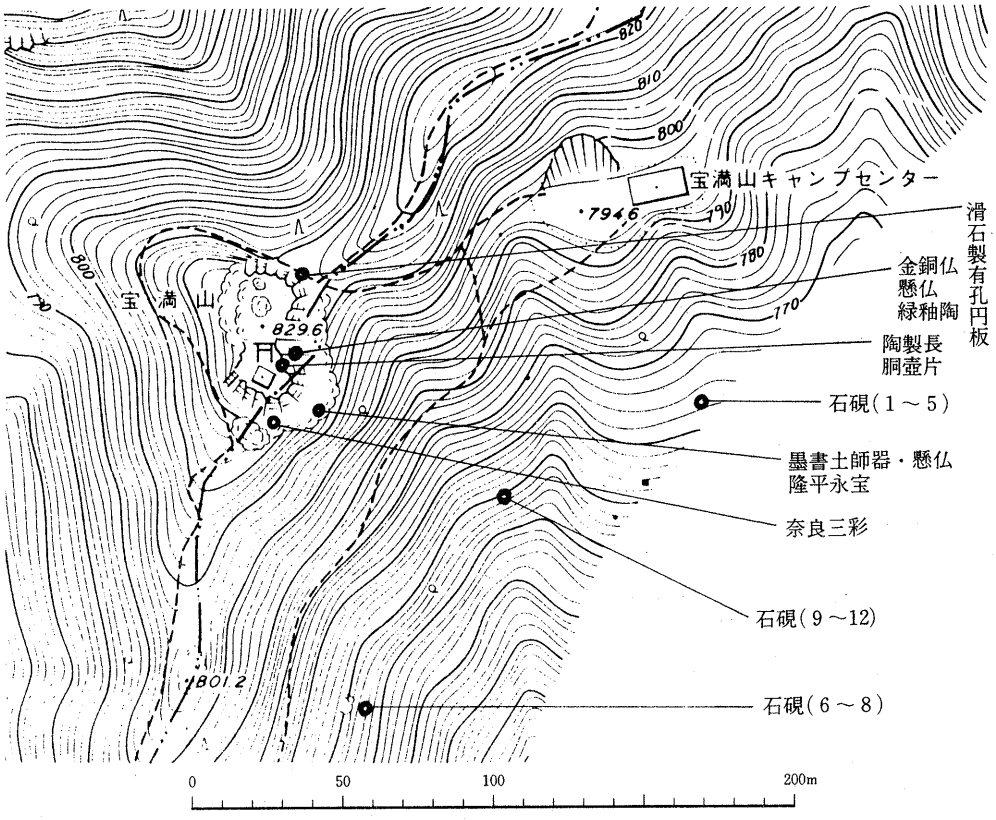
て叙述することとする。

Ⅰ　上宮地区
Ⅱ　下宮地区
Ⅲ　御獄・本谷地区
Ⅳ　辛野・九重ヶ原地区
Ⅴ　南谷地区
Ⅵ　北谷地区
Ⅶ　花見ヶ丘火葬墓
Ⅷ　経塚遺物
Ⅸ　下宮宝物
付・大南窟出土遺物

（小田）



第19図　宝満山関連資料発見地区小字要図



第20図　上宮地区遺物採集地付近地形図　（小西信二氏による）

Ⅰ 上宮地区

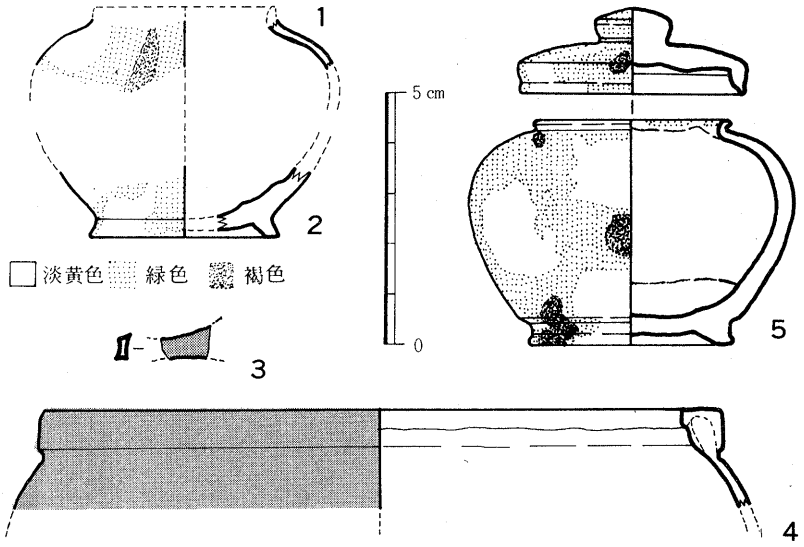
1、施釉陶（巻首図版Ⅱ）

三彩陶小壺（第21図1・2）　岩瀬正信氏採集の上半部と小西氏採集の下半部がある。いわゆる奈良三彩の小壺で同一個体であった可能性はきわめて高い。淡黄白色を呈する土師器質で、胎土はやや粗いザラつく感じであるが、釉は明るい発色で表面全体に細かい貫入がみられる。唐三彩のように表面にまず化粧土をかけて彩色するのとは異なり、胎土表面に直接、透明釉、緑釉、褐釉をかけている。奈良三彩には総じて緑釉が卓越しているが、本例も例外ではない。表面は底部にいたるまで、透明釉をかけ、これが胎土を反映して淡黄色となり、さらに緑釉を千鳥がけにし、緑釉部分に褐釉を少量重ねている。

器形は奈良三彩通有の短頸高台付の小壺に復原される。口径三・六センチ、胴径六・二センチ、高さ四・六～五センチ未満、台径三・八センチとなる。宗像郡・沖ノ島や岡山県笠岡市・大飛島などの奈良時代祭祀遺跡から出土している同類の奈良三彩小壺と比較してみても遜色はない。本来蓋を伴っていたであろう。参考に沖ノ島1号遺跡出土の三彩有蓋小壺の実測図を掲げておこう（第21図5）。

小西氏によれば発見場所は上宮社殿の南崖下約二〇メートルの地点で、約五平方メートルの緩傾斜地である。土師器、須恵器の堆積した表面からの発見であるという。　筑紫野市大字大石字水上七九九番地・神

の破片である。4は平坦口縁の壺破片で、復原口径一三・六センチである。九～一〇世紀ごろまでの時代幅をもたせて考えておきたい。上宮社殿北崖下傾斜地採集。



第21図　上宮地区採集施釉陶実測図　（但し5は宗像郡沖ノ島遺跡出土品）

地。

緑釉陶（第21図3・4）　淡黄色の土師器質で胎土も良質である。表面に濃緑色釉をかぶせている。3は香炉の蓋などを連想させる透孔部分

〔参考文献〕
小田富士雄「西日本の施釉陶 ―その出土遺跡を中心に―」（『日本の三彩と緑釉』）一九七四
小田富士雄「奈良三彩小壺」（『宗像沖ノ島』考察編第2章第5節）一九七九

（小田）

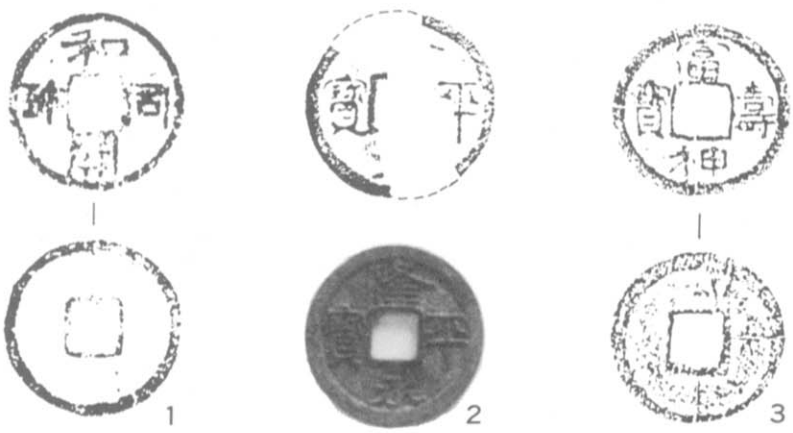
2、貨　幣

皇朝銭（第22図）　天満宮関係者によって採集されているものに和銅開珎（1）、隆平永宝（2）、があり、また登山者の採集になる富寿神宝（3）がある。和銅銭は和銅元年（七〇八）に鋳造されたわが国最初の銅銭である（一九六三年一〇月採集・行方不明）。隆平永宝は延暦一五年（七九六）鋳造され、旧銭一〇に対して新銭一と規定されている。採集当時は完形（2の下）であったが、いま破砕して二片を現存している（2の上）。富寿神宝は弘仁九年（八一八）鋳造された。本資料は上宮祭祀遺跡調査後に筆者のもとにもたらされ、その後返還した。

ところで、春日市在住の故鈴木基親氏の生存中に上宮付近での遺物採集日誌を閲覧させてもらったことがある（一九五九・二・一四）。当時の記録によれば、

一九二九・九・五　土製祝部式甕1、坏3

一九二九・九・二五　**和銅開珎1、神功開宝2、隆平永宝1**、土器3
一〇・二〇　管玉2、ガラス製小玉7、**神功開宝1、富寿神宝1**、土器（スエ器）15（内ニ長頸壺ヲ含ム）
一九三〇・二・七　**乾元大宝1**、土器1



第22図　上宮地区採集皇朝銭三種拓影・写真

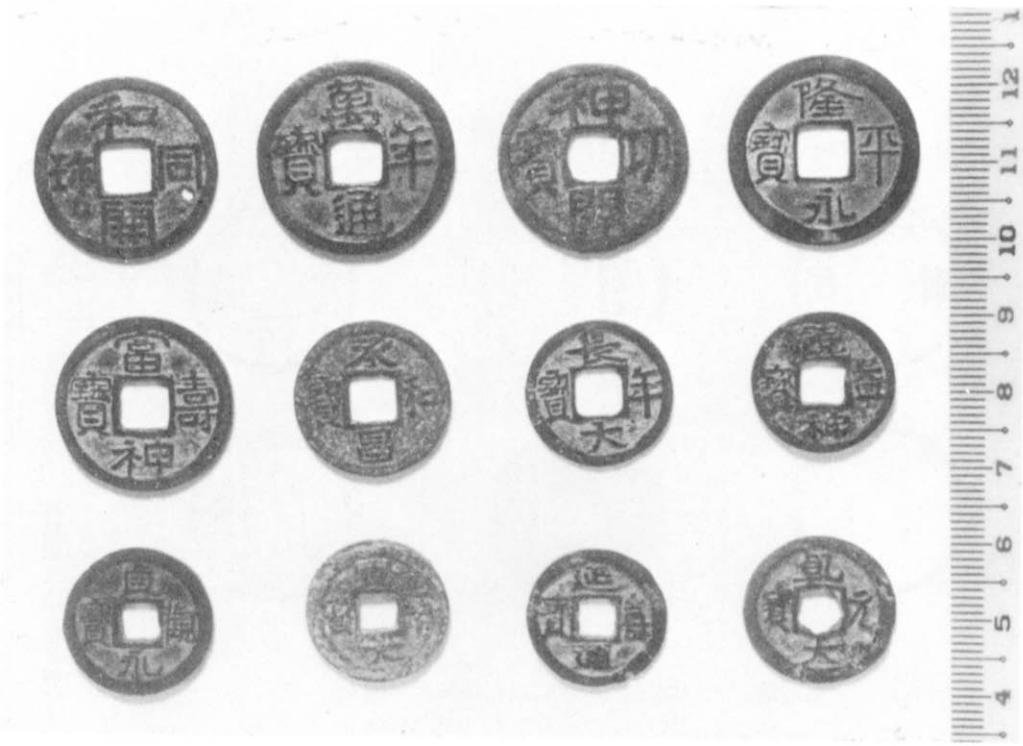
一九三〇・三・?（日付不詳）　**神功開宝2、隆平永宝3、延喜通宝1**、ガラス製小玉2
九・二一　懸佛3、**神功開宝1**、土器2
一九三八・九・七　**承和昌宝1**
ソノ他　日付詳カナラネドモ恐ラク昭和5年（一九三〇）頃ナラン
1、佛像一体アリ、全長五寸バカリ、同行者が採集、当時姪ノ浜（福岡市西区）ニアリシ古物屋ニ売却ストイウ（記憶では銅製座像らしい…小田註）
2、林田氏ナル古銭学者同行ノ折　**乾元大宝1**枚採集ス。

以上の遺物は多く知人の求めに応じて寄贈しすでに鈴木氏のところにはなかった。当時鈴木氏のところでは懸佛1、儀鏡2を拝見した。また鈴木氏の言によれば、故玉泉大梁氏が発掘されたことがあるという。

その後、春日市在住の亀井勇氏の採集品中に**万年通宝1**、懸佛1、土師器皿数個（内二個に墨書……後述）を見たことがあり、今回問合せたが、万年通宝銭はすでに手元にないということであった。

以上を総合してみると、既往の皇朝銭発見の内容はおどろくべきものがあり、今日そのほとんどが行方不明となったのは惜しまれる。上述の皇朝銭別発見数を整理してみるとつぎのようになる。

種別	鋳造年（西暦年）	数量
和銅開珎	和銅元年（七〇八）	2
万年通宝	天平宝字四年（七六〇）	1
神功開宝	天平神護元年（七六五）	6
隆平永宝	延暦一五年（七九六）	5



第23図　参考資料・皇朝十二銭　（滋賀県大中の湖南遺跡出土）

以上によって上宮祭祀遺跡は八世紀に始まり、一〇世紀中頃をすぎる頃までの奉賽品が含まれていることが明らかになり、筆者らの発掘調査における所見（本書第Ⅱ部参照）が実証された。

前述したように奈良三彩などを含む内容からして、沖ノ島や大飛島の祭祀内容とも共通するところが注目されよう。この両遺跡はいずれも遣唐使派遣などにかかわる国家的背景をもった祭祀遺跡であることが指摘されているが、宝満山の八世紀代にさかのぼる上宮祭祀にも同様な意味を考えてよいのではあるまいか。延暦年中に最澄が遣唐使に随行して入唐するにあたって、竈門神に祈願した史実は、まさにこのような当社の伝統的祭祀の歴史に基づくものであったろうと推察されるのである。

中国銭（図版三一）　天満宮宝物館に奉納されたもの（2～6・10～12・14・20・21）と小西氏採集品（1・7～9・13・15～19）計二一枚がある。その内容はつぎのとおりである。

富寿神宝	弘仁九年（八一八）	2
承和昌宝	承和二年（八三五）	1
長年大宝	嘉祥元年（八四八）	0
饒益神宝	貞観元年（八五九）	0
貞観永宝	貞観一二年（八七〇）	0
寛平大宝	寛平二年（八九〇）	0
延喜通宝	延喜七年（九〇七）	1
乾元大宝	天徳二年（九五八）	2

唐　代　開元通宝1（1）
北宋代　至道元宝1（2）　祥符元宝1（3）
天聖元宝2（4・5）　治平元宝4（6～9）
元豊通宝1（10）　元祐通宝1（11）
大観通宝1（12）　？1（13）
明　代　洪武通宝2（14・15）　永楽通宝6（16～21）

皇朝銭のあとをうけて鎌倉、室町時代まで奉賽銭として輸入銭が使用されていたことが知られる。

（小田）

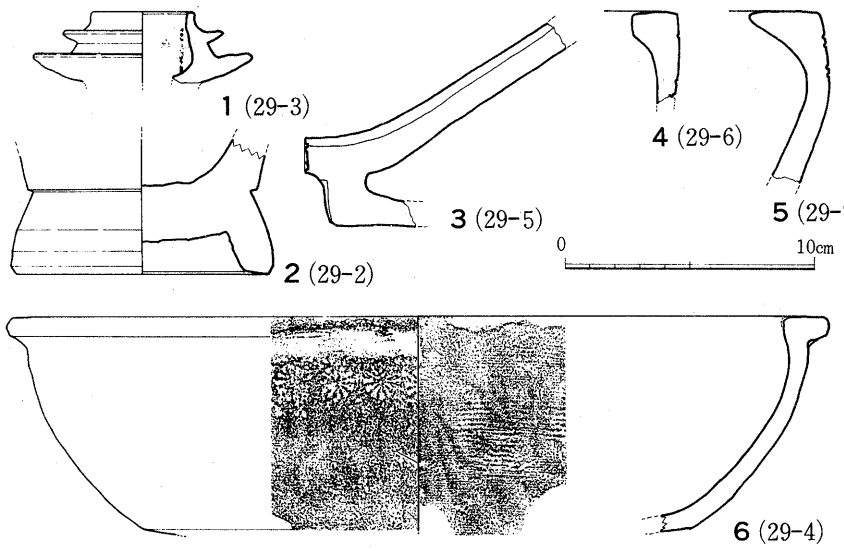
3、滑石製有孔円板（図版二九の1、第26図1）

上宮社殿北側の通称稚児落崖下から小西氏によって採集された。一部欠けているが、本来一辺三センチの方形板に切りとられ、四隅を削りおとして円形としたものであるが、まだ当初の状態をのこしている。厚さ三ミリ。中央に径二ミリの紐孔を設けて懸垂に備えている。宗像郡沖ノ島の1号祭祀遺跡（八～九世紀）でもみることができるので八世紀代までのぼせうるであろう。太宰府市大字北谷字宝満一番地（境内地）に属する。

（小田）

4、陶製品（図版二九の2～7）

陶製長胴壺片（図版二九の2、第24図2）　上宮社殿左後方の岩隙間



第24図　上宮地区採集陶製品・瓦製品・瓦塔実測図

から小西氏によって発見された。太宰府地方に多い陶製経筒に使用されているものの底部である(第45図参照)。径一〇・六センチの削出高台で、底部は厚く側面の回転削りは粗い。黄褐色の胎土にうすく緑褐釉をかぶせているが底部には及んでいない。これまでの出土例では三〇センチ前後の高さとなる。華南地方からの輸入品である。

陶製輪状器(図版二九の3、第24図1) 赤褐色の堅緻な焼成で、下部は剝離しているが輪状鍔形の上にもう一つの輪状鍔を付した立上りがある。口径四センチ、下段輪径八・八センチ、現高二・八センチ。用途、時代不詳。小西氏採集。

(小田)

〔参考文献〕

小田富士雄「九州発見の陶製経筒」(『九州考古学研究・歴史時代篇』)一九七七

5、瓦製施文鉢(図版二九の4・6・7、第24図4~6)

第24図6は黒灰色瓦質で、口縁部は平坦にして外側に凸出させた平底半球形鉢である。外面底部付近には横方向の篦削りを加え、内面は横方向の刷毛目調整が加えられる。さらに内外面ともナデ仕上げされ、外面口縁下に菊花印文が並列して施されている。口径三三センチ、高さ九センチ。小西氏採集。

第24図4・5は灰白~灰褐色を呈する瓦質焼成で、胎土も比較的緻密である。いずれも水平口縁で内側に凸出させる大形鉢である。4は口縁下に平行線と半截竹管を組合せて剣菱文風な施文をめぐらしたもの。4は雷文風印文をめぐらしたものである。ともに鎌倉時代以降に属する。6は小西氏採集。4、5は宮小路氏がキャンプ場付近(座主跡)で採集。

(小田)

6、瓦 塔(図版二九の5、第24図3)

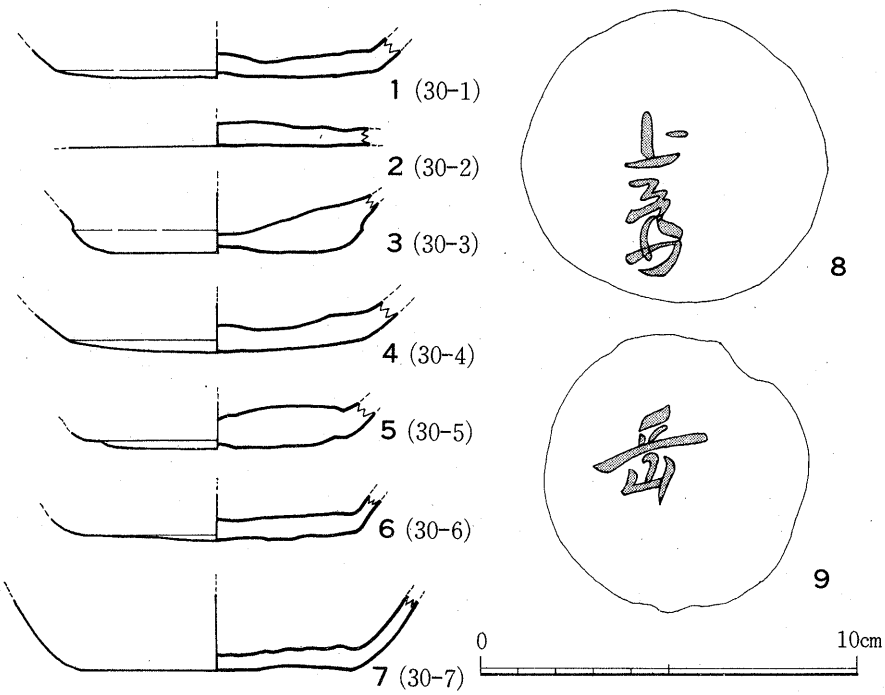
瓦製の塔雛形品の屋根部分である。全形は不明であるが、巴文瓦当を並列した丸瓦葺屋根を現わち、瓦当下には棰木を並列した表現がみられる。屋根は約三〇度の勾配をなし、灰褐色の堅い焼成で胎土はやや粗製である。現存軒先長さ一四・五センチである。宮小路氏がキャンプ場付近で採集したもの。鎌倉時代以降に属する。

(小田)

7、墨書土師器(図版三〇・第25図1~9)

いずれも外底面に墨書された土師器の底部である。1・3~9は坏で、2は皿の底部と思われる。8・9は亀井勇氏の採集品で現在は行方不明となっており、1~7は小西氏が「上宮社殿南東約三十米」の地点で採集したものである。

坏(1・3~9) 整形技法によって大きく二群にわけることができる。その一は外底面をヘラケズリして内面には研磨痕が認められるもの(1・4)で、いまひとつはそうした手法はみられず外面はナデと研磨で仕上げるがヘラ切りの痕が観察され、内面を回転ナデと指ナデで仕上げたもの(3・5~7)である。時期的には前者の方が先行すると思わ



第25図　上宮地区採集墨書土師器実測図

れ、8世紀末～9世紀前半代に位置づけられる。後者は9～10世紀という年代が与えられる。

7は内底面に炭化物が付着し、内部全面に煤がみられる。

皿（2）　小片であるが、坏の時期幅の中におさまるものであろう。

（武末）

つぎに墨書について考察を加えながら解説しておこう。

1　底部に「川□」と墨書されている。第二字は下端部が欠損しているが、明らかに之繞の文字であり、断定はできないにしても、「邊」字とみなしてほぼ大過ないだろう。この二字の位置、また文字をなすかどうか明らかではないが、現状右端上部にも墨痕が見られることなどからすれば、この二字以外にも文字が存在した可能性も考えられる。「川邊」が一つの成語をなすとすれば、それの意味が問題になるだろう。すなわち、人名、地名あるいはその他の場合などが考えられるが、現状ではそのいずれとも判断しうるだけの根拠となりうるものを見い出せないので、ここでは一、二の参考を記すにとどめておこう。まず人名とすれば、大宝二年の豊前国仲津郡丁里の戸籍に川辺勝氏が多数見られ、「日本三代実録」の貞観八年七月一五日条には肥前国基肆（肄）郡人の川辺豊穂の名が見られる。次に地名とみなせば、これまた大宝二年の戸籍で有名な筑前国嶋郡川辺里の名が存することは周知のとおりである。これらは当地からさほど遠くない地域に関係する川辺という名称の例であるが、この墨書土器との間に直接的な関連性を想定することはできず、あくまでも参考にすぎない。むしろ墨書土器の性格からすれば、他の意味を考え

るべきかもしれないが、現段階では具体的に想定できない。

2 底部に墨書文字が見られる。左下端に若干の欠損が見られるが、示偏の文字であることは間違いないだろう。旁をいかに判断するか困難であるが、それを「缶」とみなせば、これは「福」字と考えられ、示偏の文字としてはその可能性が最も大きい。としても、それの具体的な意味は明らかでない。

3 底部に「東」という墨書文字が見られる。墨が部分的に消失しているが、ほぼ判読できる。土器としては断片であるが、文字の大きさや位置などから見て、墨書はこの一字のみと考えられる。この「東」が具体的には何を意味するのか明らかでない。

4 底部のほぼ中央に墨書が見られる。これの天地は明らかでないので、図版では仮に掲げた。これの形状から見て、具体的な文字を想定することは不可能であり、むしろ何らかの記号とみなすのが妥当ではないだろうか。

5 底部のほぼ中央に墨書が見られる。一見したところでは「井」字のようにも見えるが、文字とみなすには運筆が不自然である。むしろ記号の一種とくに井桁を示す記号と解すべきかもしれない。いずれにしても、にわかに断定することはできないので、ここでは以上の二つの場合を併記しておく。

6 底部に墨書文字が見られ、「廿」と判読できる。廿はサ(ママ)と記されることもあり、これはさらに草書風に記したものであろう。番号とすれば、他の数字を記したものも存したのであろうが、それらは発見されていない。

7 底部のほぼ中央に墨書が見られるが、墨の消失が著しく、文字とは推定できるが、その具体的な想定は不可能である。

8 底部に「上□」と墨書されている。第二字はかなりくずしているので、判読は困難である。「宮」字かとも考えられるが、それを草書風に記した場合はこれほど複雑にはならないので、他の文字を想定するのが妥当であろう。しかし現段階では具体的に想定できないので、ここでは保留しておく。

9 底部に「岳」と墨書されている。これが具体的には何を意味するのか明らかでないが、上宮跡からの発見であることからすれば、これもそれに関連するのであろうか。

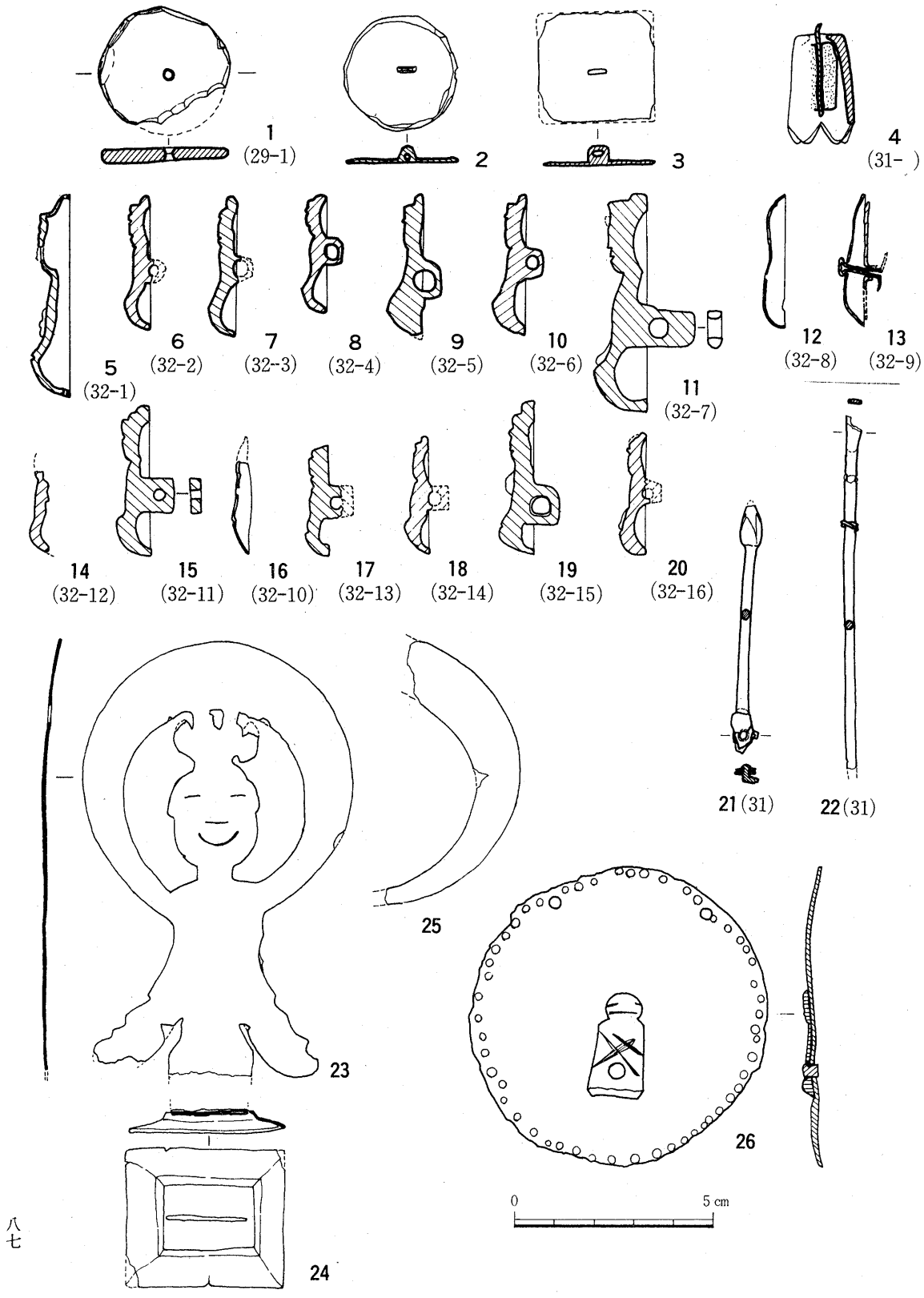
（倉住）

8、銅製儀鏡（第26図2・3）

故鈴木元親氏の採集品で、現在は行方不明となっている。円形（2）と方形（3）の二種がみられ、いずれも中央に紐をもつ鋳造品である。2は直径二・八センチ、高さ〇・四五センチをはかり、周縁は研磨している。3は周縁部分が傷んでいるが、一辺二・八～二・九センチ、高〇・五センチをはかる。

これらは奈良時代～平安時代前期のものと思われる。

（武末）



第26図　上宮地区採集滑石製品・銅製品(儀鏡・懸仏など)実測図

9、金銅製仏像

金銅の仏手（附）未開蓮華（図版三一の上、第26図21・22）

この仏手というのは、仏像の右肩から先の部分と未開蓮華とであるが、仏像の残片とはいえ、当山の仏教遺物として、盛時のおもかげを伝える意義深いものといえる。この蓮華をもった仏手の発見は、小西信二氏によって、一九七五年春、彼岸入りの頃、宝満山山頂の竈門神社上宮の東北側へ約三十メートルほど岩場を降りたところで採集されたものである（筑紫野市大字大石字水上七九九番地）。岩場の下のややフラットな面に、雨に洗われて露出していたところを発見されたといい、全体に緑青錆におおわれ、鍍金のあとものこしている。

右肩部の腕から指先まで、ムクの銅鋳造で、指先のこまやかなモデリングからみて、ろう型鋳造によるものと思われる。肩部付根に突出た枘（ホゾ）は、体部の肩枘穴へ、上から差込むと左右前後には動かないように固定される。このような枘差込みの構造を蟻枘立て（アリホゾ）（留め）と呼んでいる。

この右肩部の細部をみると、肩には天衣を被い、天衣の先は肘内側下で切れているが、その先端に鋲を残していて、おそらく銅板づくりの天衣が鋲止めされて、体部に沿って垂れていたものと思われる。丸みをもった肩から、肘を折って差し出した腕のモデリングは優美で、指先は親指と中指を捻じていて、掌をたてて前方へ向けている。発見当時、捻じた指の中に未開蓮華の茎が通されていたという。未開蓮華は銅板をまるめて蓮華や茎をつくっていて、茎には蓮葉をとりつけたと思われる鋲あともあり、鎚鏨（ついちょう）の繊細な技法も用いられていて、ここにも高度な技法がみられる。そして、その蓮茎を持する腕の自然な長さとしとやかな指づかいにも優秀な技倆がうかがわれ、地方作にありがちなよどみは見うけられない。

この仏手と未開蓮華からだけで、制作の時期を云々するのは早計だが、平安時代末から鎌倉時代半ばまでをその制作時期と考えて大過ないものと考えられる。

発見場所から考えて、いかにも上宮に祀られていたものが、宮屋の倒壊その他の事情で崖下に散乱したかのごとくである。このような組立式の仏像であるため、体部の他の部分や台座、光背なども、それほど遠くないところで今後に発見される可能性があり、発見を期待したいものである。

本体が立像であるのか、坐像であるのかはこの右肩のみでは判じ得ないが、肩から肘までの寸法約八センチから考えて、立像であれば、髪際下で八寸（二四センチ）ほどの像高が考えられる。立、坐像いずれにしても、天衣や持物から、菩薩像であることは間違いないが、推測を重ねれば、当山の本地仏である十一面観音像ではなかったかとも思われる。

先述したように、この肩部だけからみても、造作は、いわゆる地方作とはいいがたく、畿内から修験の山を通じて当山へもたらされたものなのか、それとも、仏師や鋳造工人の往来によって、当山で造立されたものなのか、今後の類品の発見と考察にまつほかはない。参考として、いま知られている蟻枘立ての構造をもつ銅造仏を、九州所在のものであげ

れば、当山と関係の深い英彦山に、やや大型の銅造不動明王坐像（像高四一・六センチ）があり、熊本県人吉市観蓮寺に金銅千手観音立像（像高二七・三センチ）が知られ、いずれも鎌倉時代の制作と考えられる。

この種の組立て式の銅造仏が造られるようになったのも、木彫の木寄せと矧付けの技法の影響があったと考えられるが、それがいつごろから始まったかは明確ではない。しかし、平等院鳳凰堂棟上の銅造鳳凰に、この構造がみられるので、一一世紀半ばまで遡ることができることが指摘されている。

ところで、金銅仏の全盛時代であった飛鳥、奈良時代の諸仏はよく知られているが、木彫の時代である平安時代のうち、九世紀から十一世紀ごろまでは金銅仏は影をひそめたかの感があり、遺るものも少ない。しかしながら、一二世紀にいたれば、かなり目覚しく、その姿をみせるようになるのである。その要因となったのは、修験道関係の造仏作善のわざと神仏習合の信仰による本地仏の造立であったことが言われている。即ち、金銅の蔵王権現など本地仏の造立、御正体、懸仏の考案などがあげられる。一方、鋳造技術については、金銅仏衰微のときも、密教法具やその他の仏具、荘厳具の制作を通じて持ちこたえられ、埋経が盛んになると、経筒やその関連品の制作も加えて、再び鋳造技術の盛行がみられるようになったといえる。そして、鎌倉時代に入ると、銅造仏像の普及は大きな拡がりをみせ、善光寺三尊像模鋳の全国的な流行など、その主な例である。

このような背景のなかに置かれる金銅仏として、右手だけとはいえ、優品のおもかげをつたえる銅造仏右肩部の発見は、当山の盛時に符合する時期の金銅仏として、意義の大きさも理解できよう。

（八尋）

金銅板切抜仏（第26図23～25）　宝満山上宮窟穴より出土したと伝える金銅板切抜の仏像である。23は、円形の光背と宝冠、裾が左右に流れて拡がる衣を切抜きであらわし、目・鼻・口を刻む観音像である。本来は下端部に切込を入れて前後に折り曲げ、24の方形台座にとりつけられて一体をなしたものであろう。光背の径六・八センチ、現存高一〇・八センチで、台座は四・〇センチ×三・五センチで高〇・五センチをはかる。25は光背部分の残欠品であり、同様な仏像がもう一体存在したことを示している。

室町期を前後する時期のものであろうか。

一九六五年六月一六日に小田が調査したが、現在は行方不明である。

（武末）

10、懸仏とその付属品（図版三二・三三、第26図）

懸仏の主体をなす尊像・鏡板のほかに、付属品の光背・華瓶・切金花などがみられる。

鏡板（図版三三の下、第26図25）　図版三三下の中央二枚はいずれも銅板を切抜いたもので周縁は珠文を打出している。尊像は失われているが一面には鋲留の鋲が残り、光背と華瓶を打出したのちに墨で描き、花は珠点打出されている。他の一面には花が墨と朱で描かれ獅噛は朱描され

ている。

26は尊像が鏡板にとりつけられたまま完形で残っている唯一の例である。菊武福美氏（太宰府市榎）の旧蔵品で現在は二日市の柳沢病院の所蔵に帰している。尊像は銅板にタガネで目・口と胴部をきっているが、著しく硬化していて像形は不明である。この尊像が鋲留された鏡板は直径七・五センチの銅板で、周囲には打出された珠点がめぐり、上方には懸錘用の小孔が二個所に穿れている。

これらの鏡板はいずれも室町時代のものであろう。

尊像（図版三二・三三の上、第26図5～20）　いずれも鏡板からは外れてしまっている。5～10は太宰府天満宮宝物館の所蔵品で、そのうちの6～10は大野城市釜蓋の岩瀬正雄氏が一九六二年三月三一日に奉納されている。11～20は小西信二氏の採集品で、「社殿東北崖下傾斜地表面」や「上宮社殿南東約三十メートルの地点」、「社殿南崖下約二十メートルの地点約五平方メートルのゆるやかな傾斜地」から出土している。

像形・造法・法量は一覧表に示す通りであるが、不動明王はまだ出土していない。半面鋳造品（6～11・14・15・17～20）は背面に一孔をもつ突起によって鏡板に装着するのに対して、厚肉の押出仏（5）は上下に直径1㎝内外の小孔を各一孔そなえており、薄手の銅板切抜仏（10～12）は腹部に一孔をもち、先割の鋲で装着する。なお13は珠点を打出した光背片が付着している。

5は全面に鍍金の痕跡があり、像容もととのって鎌倉時代に位置づけられよう。12・13・16は25などと共に最も新しく、室町時代のものであろう。

図版三三の下の右上は差込式の腕の部分である。

光背（図版三三の下）　切金細工で鋲留した光背の残片がみられる。点刻で文様が表現されているが、左下のものは鍍金されている。

華瓶・花（図版三三の下）　右下に示すように鋳造した華瓶と切金細工の花がみられる。

（武末）

上宮出土懸仏尊像の像容一覧表

	高(cm)	像形	造法	備考
5	5.05	十一面観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	押出	鍍金
6	3.4	十一面観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	半面鋳造	
7	3.55	観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	半面鋳造	
8	3.0	観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	半面鋳造	
9	(3.5)	十一面観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	半面鋳造	
10	3.5	観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	半面鋳造	
11	5.4	観音　右：与施無畏　左：願　蓮座	半面鋳造	口中に朱
12	3.4	不明	銅板	
13	3.3	不明	銅板	
14	(2.0)	不明　蓮座	半面鋳造	
15	3.7	如来　定印　蓮座	半面鋳造	
16	(2.3)	不明	銅板	
17	2.75	観音　右：与施無畏　左：願　蓮座	半面鋳造	
18	3.0	観音　右：与施無畏　左：願　蓮座	半面鋳造	
19	3.9	観音　右：施無畏与願　左：　蓮座	半面鋳造	
20	3.1	観音　右：与水　左：願瓶　蓮座	半面鋳造	
26	2.5	不明	銅板	

11、銅製付属品（図版三三の下・第26図）

風鐸のほかに鋲釘や小銅鐶が出土している。

風鐸（第26図4）　上部がややすぼまり裾が四花となった円筒形小形の鋳銅製品で、高さ二・七センチを測る。内部には断面四角形の心棒が、木心を貫いて、舞の上部までつきでており、懸垂の役割を果たしたものであろう。雛形塔の付属品かと思われる。懸仏とともに岩瀬正雄氏の奉納品である。

鋲釘は長さ三・三～二センチで、小銅鐶は直径〇・七センチを測るが、用途は不明である。

（武末）

12、銅製香炉蓋（図版三四の上）

鋳銅製長方形の蓋の上面に蔓草と草葉文を配した広い透孔がつくられている。草葉文は表面に毛彫されて単調さをカバーしている。一部破損があるものの、ほぼ完形品といえよう。近世頃の作品であろうか。一二・六×九・二センチ、高さ二・七センチ。

（小田）

13、銅製品残片・銅滓（図版三四の中・下）

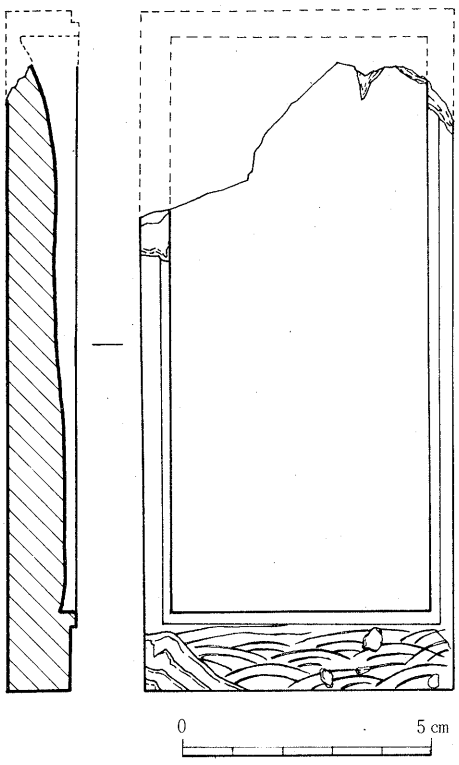
図版三四の中に示した残片はやや厚めの**鋳銅製容器**の破砕残片である。その一つ（上列右より二個目）には記号かと思われる墨書があり、またもう一つ（上列右端）には鋳出による亀甲文様の地文がみられる。いずれも中世以降の遺物であろう。

図版三四の下に示した**銅滓**は火災などによって小器物が再溶解したものも含まれていると思われる。

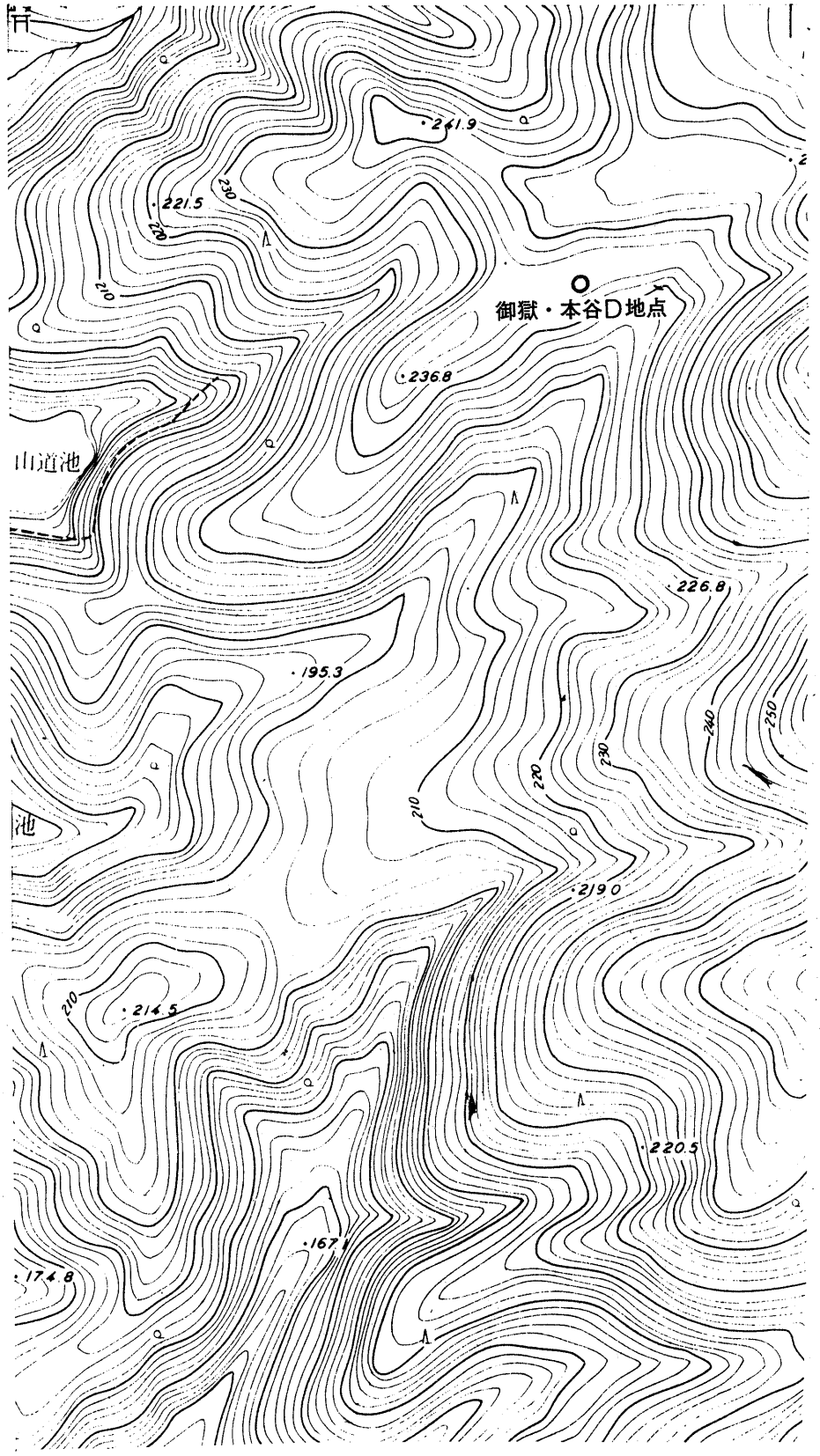
（小田）

14、石　硯（図版三五）

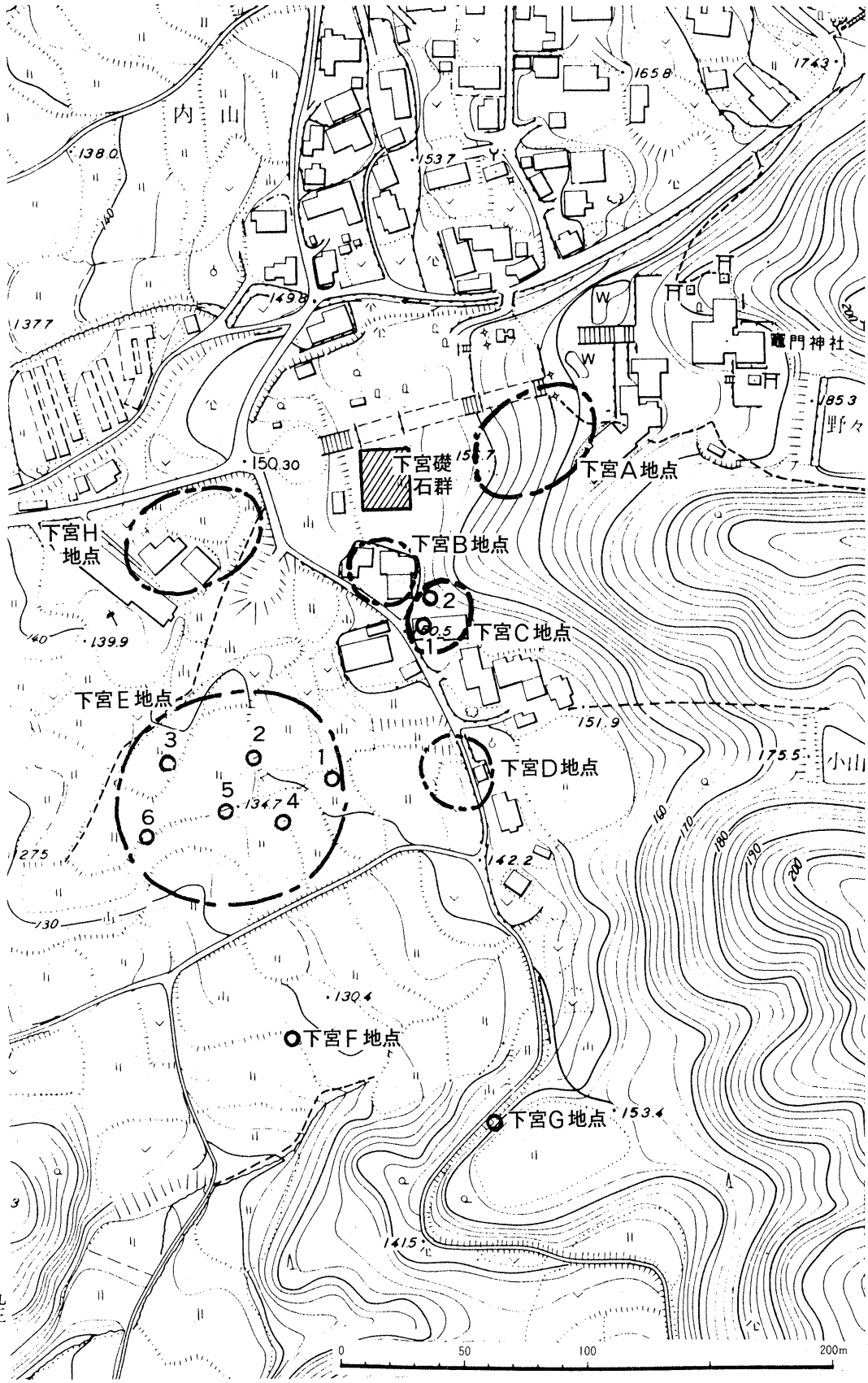
上宮の東側下方にあたる窟や坊跡から石硯が小西氏によって発見されている。いずれも褐色、黒色、灰色を呈する凝灰岩、粘板岩系の石材を使用した長方硯で近世以降の作品である。硯面の周囲は一段高く縁取りされ、上端を凹めて海を設ける。通じて六・五×一四センチ、厚さ一セ



第27図　上宮地区採集石硯実測図



第28図　下宮地区遺物採集地付近地形図


内山
138.0
140
1658
1743
1537
1498
1377
竈門神社
853
野々
150.30
下宮礎石群
下宮A地点
下宮B地点
下宮C地点
下宮D地点
下宮E地点
下宮F地点
下宮G地点
下宮H地点
139.9
151.9
175.5
小山
134.7
142.2
130.4
153.4
1415
275
130
110
180
190
200
0
50
100
200m

ンチほどになると思われるが、なかには四×六センチ程度の小形品(5)もあり、携帯用かと思われる。陸部の中央は使用されて凹みを生じており、かなり利用されたことがうかがわれる。1は背面にも低い凹面を設けている。また2は下端の縁をやや幅広くとり、岩と青海波の彫刻が施されている。

6～8は福城窟下採集（筑紫野市大字大石字水上七九八神地）。9～12は上宮の東南、東院谷道脇坊跡より採集（筑紫野市大字大石字水上八〇〇保安林）。1～5は座主跡下坊跡採集（筑紫野市大字本導寺字後田六六五境内地）。

（小田）

Ⅱ 下宮地区

下宮礎石群のある大字内山字御供屋、隣接する字山ノ内、さらにその西南側に一段低く接続している字大門、字地蔵原の地域を設定した。

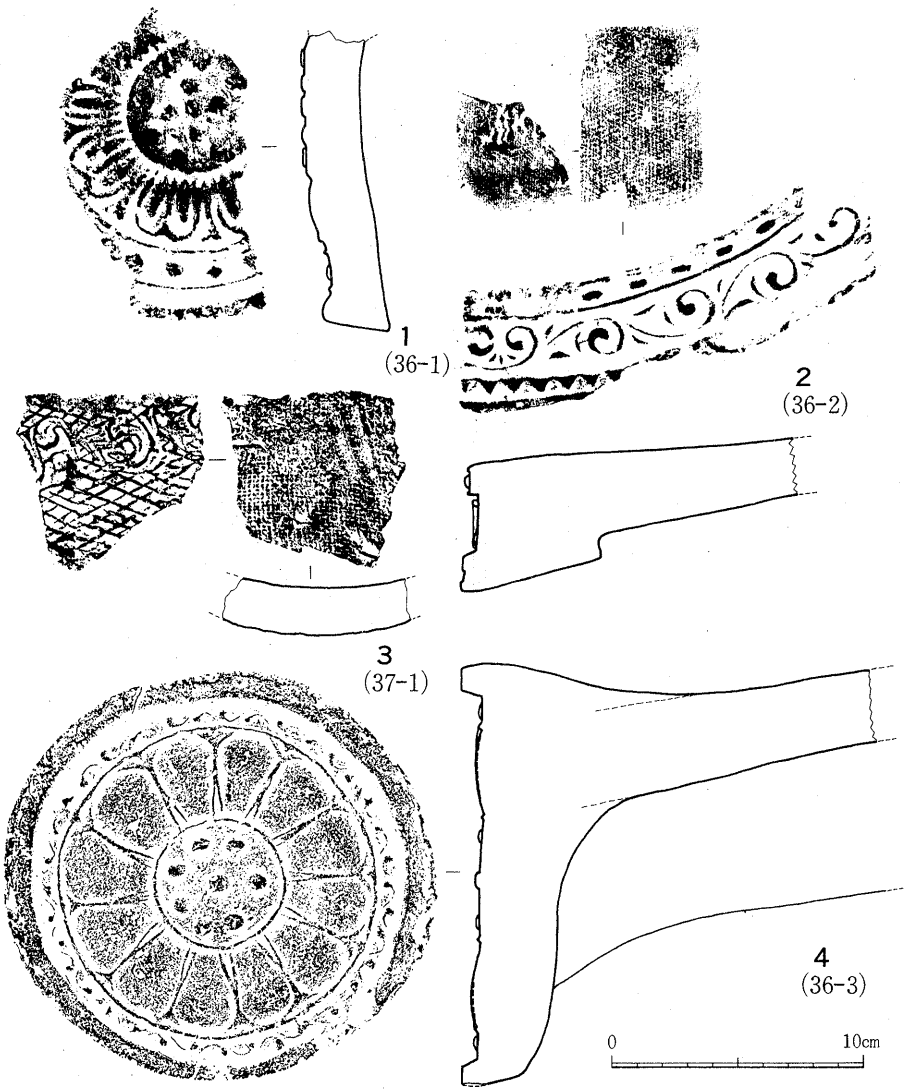
1、古瓦（図版三六・三七・四三）

奈良時代の古瓦（図版三六の1・2、第29図1・2）

下宮礎石群の南端南北列に沿って切通して村道を敷設したために崖面を生じ、山側（東側）からの出水が礎石群の南西隅にむけて流路を形成したために、この部分の崖面が浸蝕されて古瓦の包含がのぞいていた。ここに紹介する一組の軒先瓦はここから採集されたものである。一九六一年の発掘調査の際にはここに第4トレンチを設定した。

軒丸瓦は三分の一くらいの残欠であるが、淡黒褐色のやや軟質焼成で、瓦当面は若干磨滅している。瓦当面の復原径は一七センチ前後となるであろう。中央は最も高く（径五・五センチ）、蓮子は1＋4＋8の三重配置となり、その外に複弁八葉、さらに二重圏線をめぐらしてその間に珠文を配する。蓮弁帯との関係は楔形小葉の先端に珠文一個をおき、その間に二個ずつの珠文を配している。一九五三年八月一五日故原口信行氏採集。九州大学蔵。

軒丸瓦は表面黒色、断面灰褐色を呈する堅い焼成で、瓦当面の厚さ五センチである。中心飾とその右半分にあたる部分で、本来均正唐草文となる。双頭を巻込んだ中心飾から子葉を伴う渦状唐草を相互に反転させ、



第29図　下宮地区採集古瓦拓影・実測図(1)

凸出した上、下帯には上縁杏仁様珠文、下縁陽起鋸歯文を配している。一九五七年七月小田採集。九州大学蔵。

この二個の瓦当は大宰府系古瓦のうち鴻臚館式古瓦の一組をなすものである。太宰府地方に多く分布するもので、この一組の発見によって竈門山寺の出現が奈良時代後半にまでのぼせうる有力な支証を得ることとなった。

平安時代の古瓦（図版三六の3・三七・四三）

流雲文帯素弁一二葉軒丸瓦（図版三六の3、第29図4）

瓦当径一六・二センチ。鼠灰色の堅い焼成で、細石粒を含む胎土である。中房最も低く平板で、蓮弁帯を若干盛上らせ、幅せまい外縁を凸出させている。中房内蓮子は1＋7の二重配置となり、蓮弁は長卵形状に輪郭線で表現された素弁一二葉である。その周囲に唐草文から変化したと思われる珠点状頭部をもった雲文を交互に配した流雲文帯を設けている。これら各区は凸圏線で区画されている。この種瓦当文は太宰府地方のみにみられるもので、平安時代前期頃とみられる。故山内興隆氏が一九五三年五月に内山在住者から譲受けたもので、下宮地区のどの地点出土かは不詳である。

斜格子雲文平瓦（図版三七の1、第29図3）

細線によるやや細目の斜格子文上に旋回する雲文を並列したものである。灰白色の堅い焼成である。九世紀代から一〇世紀前半頃であろう。礎石群に隣接するC2地点（字山ノ内八五五・林）で小西氏によって採集された。下宮礎石群東竹林を削った際に発見されたもので、下宮礎石群に使用されていた公算が大きい。地表下約七〇センチの粘土層から発見されたという。

単弁一四葉軒丸瓦（図版四三の1、第30図3）

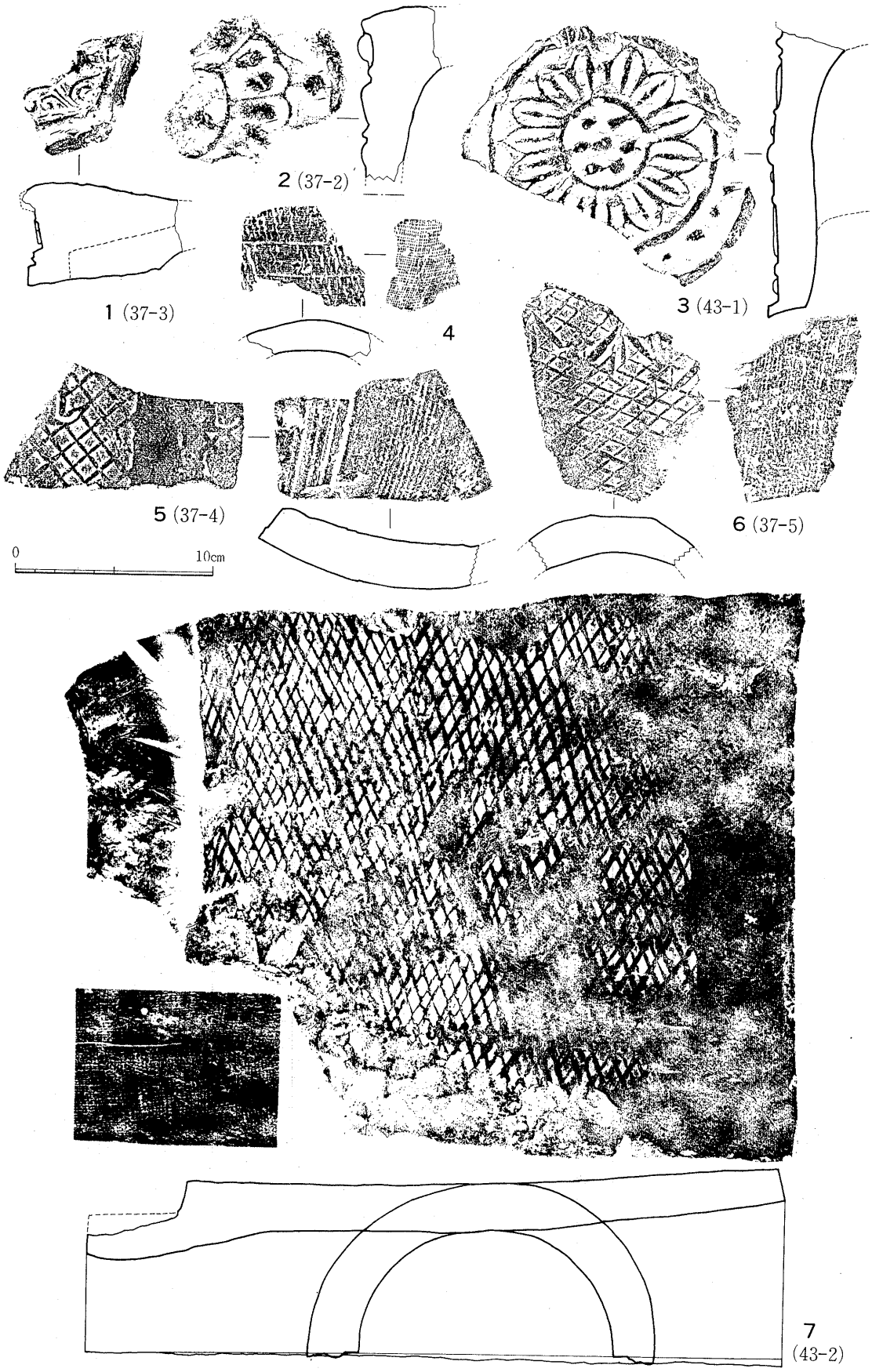
一部欠けているがほぼ全形を知ることができる。鼠色の堅い焼成で、瓦当径一五・五センチほどになろう。板材の笵型にヒビ割れを生じており、平板な瓦当面の中房には1＋6の蓮子配置がなされ、先端を尖らせた細弁式単弁一二葉をめぐらしているが、すでに規格性に乱れがみられる。一〇世紀代頃であろう。下宮礎石群より南二八〇メートルの傾斜地から小西氏が採集した。傾斜地上段の田（山ノ内八三二）に建物が存在したと思われる。G地点（字山ノ内八三一・原野）出土。

格子文丸瓦（図版四三の2、第30図7）

玉縁の一部を欠いたほぼ完形品である。鼠～灰白色を呈し、やや軟質焼成である。全長三五・五センチ、下端幅一八センチで上方にせまくなる。下端径一三センチの模骨に厚さ二・五センチ前後の粘土を巻き上下方向に二分割する製作法である。凸面には幅五センチほどの叩き板に細目の細線格子文を刻んだもので叩いている。九～一〇世紀前半代であろう。字山ノ内、通称「おおやまじ」（「大山寺」の訓読名称か）で大庭日佐彦氏採集。下宮礎石群の隣接地C1地点出土である。

複弁八葉軒丸瓦片（図版三七の2、第30図2）

瓦当面の小破片であるが復原径一八センチ前後の複弁八葉文となろう。弁間の楔形小葉を欠き、各弁が隣接している。複弁を構成する小弁は大きく造り出され、周縁の珠文も大きい点が特徴である。中房内は不明。



第30図　下宮地区採集古瓦拓影・実測図(2)

一〇世紀代よりは下らないであろう。

D地点（字大門九一八ノ一・畑）より小西氏採集。畑の路肩傾斜地にあたり、道路改良工事と雨により露出したもの。

扁行唐草文軒平瓦片（図版三七の3、第30図1）

瓦当幅五センチ。黒鼠色の堅い焼成で、瓦当の右端部にあたる。瓦当文は二個単位の唐草文様を連続して並列するもので、一段高くした小珠文縁をめぐらし、周縁はさらに高くして素文である。九～一〇世紀前半頃であろう。前記複弁八葉軒丸瓦片とともにD地点より小西氏採集。

「瓦」銘平瓦片（図版三七の4、第30図5）

やや太線による正格子文の上に双鉤体印文風の書体で「瓦」銘を彫刻したもの。これまでの太宰府地方出土例によってこの上に「平井」の二字があったと思われる。一〇世紀前半より下らないであろう。D地点（字大門九一八の一・畑）より小西氏採集。下宮礎石群の南約一〇〇メートルの畑路肩部発見。

「介」銘丸瓦片（図版三七の5、第30図6）

やや細線による斜格子文の上に「介」銘を刻んだもの。斜格子の一部に対角線を加えるのはこの銘を入れた斜格子文に見られる特色である。前記「（平井）瓦」銘平瓦片と同所で小西氏により採集された。同時期に比定されよう。

縄目文丸瓦片（第30図4）

E1地点で小西氏によって採集された縄目文叩きある資料で、格子文が多いなかで珍らしい存在である。

（小田）

〔**追補**〕下宮地区の古瓦をまとめた直後さらに小西氏によって新資料が一括してもたらされたので追補しておく。

(1) 字御供屋、字山の内採集の古瓦（第31・32図）

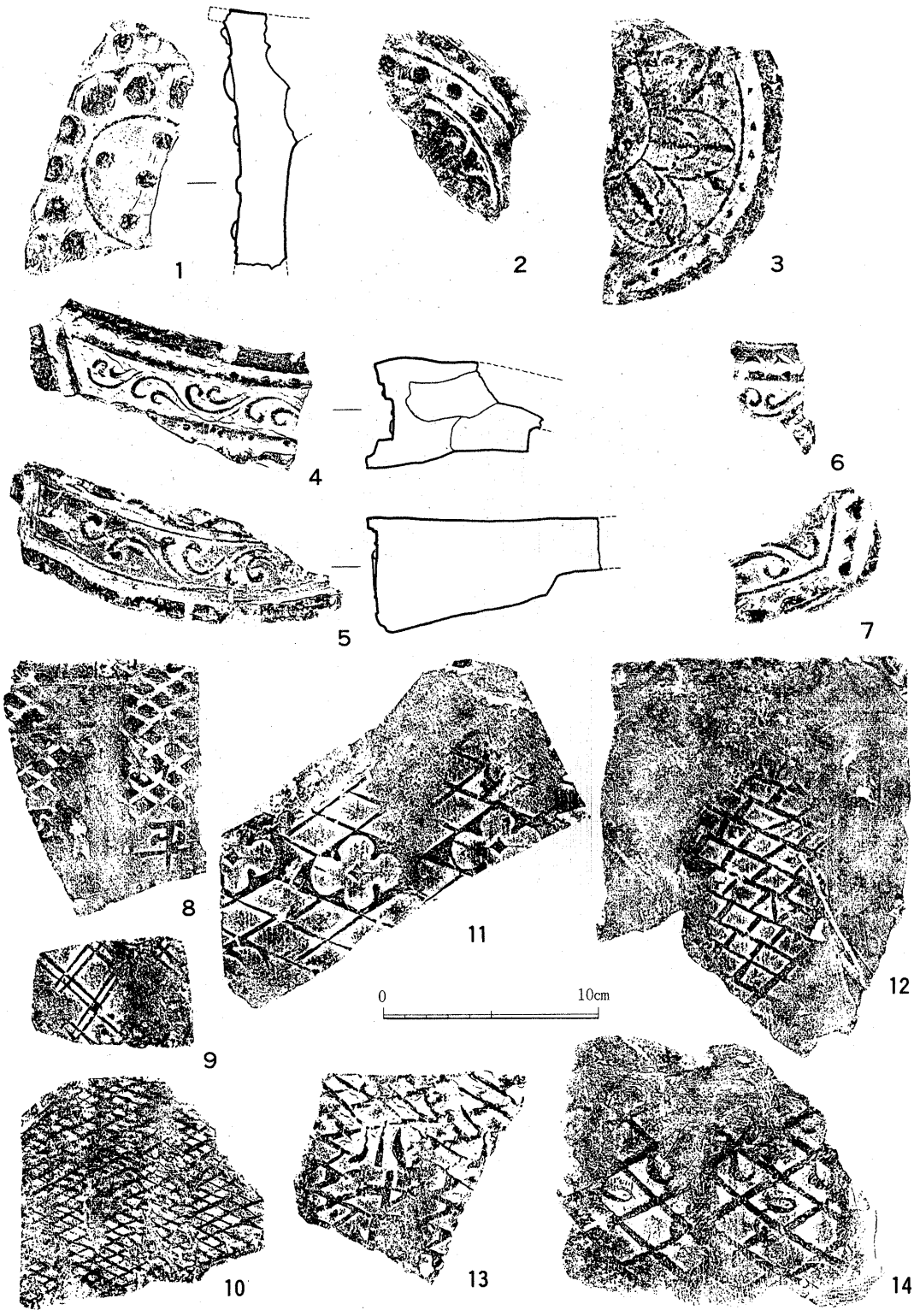
単弁一四葉？軒丸瓦片（第31図1） 瓦当復原径一六センチ前後と思われる。中房蓮子は1＋4の配置、蓮弁は円形珠文状の単弁で弁間の境界線はない。その外周に珠文がめぐっている。鼠色の堅い焼成である。この瓦当の特徴は瓦当面が凹面になる点である。一〇世紀後半以降であろう。B地点（字下御供屋九一三の一、九一〇地点）採集。

鴻臚館式軒丸瓦片（第31図2） 複弁八葉蓮花文で周囲に珠文がめぐるもので、さきに下宮礎石群の奈良時代古瓦中に掲げた軒丸瓦（第29図1）と同類である。B地点採集。

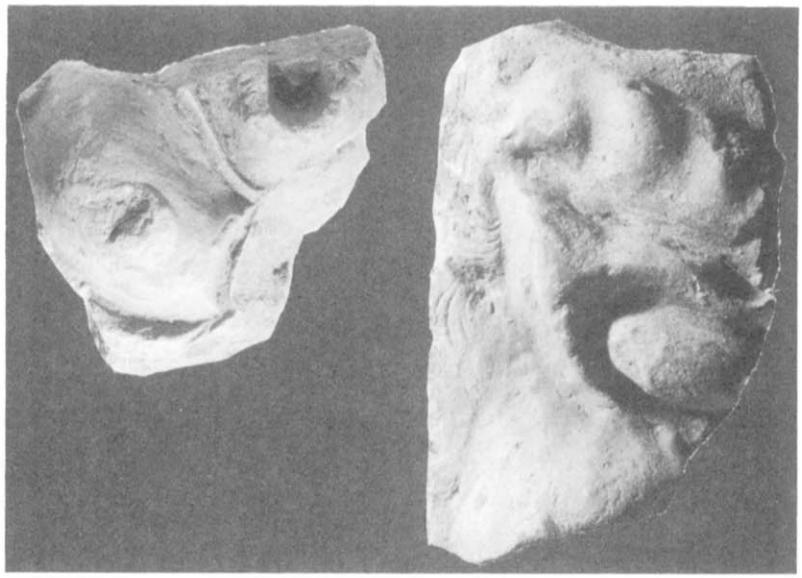
単弁有文八葉軒丸瓦片（第31図3） 瓦当復原径一八センチのやや軟質焼成である。瓦当面は平坦で幅せまい外縁はわずかに高い。文様、区画は凸線でつくられ、中房蓮子は1＋6配置、蓮弁は楕円形の輪郭内に三山連孤文を配し中央に一線を設けて対称軸とする。周縁には珠文を比較的密にめぐらしている。このような単弁有文形式は新羅一統期瓦当に源流を求めることができよう。九～一〇世紀前半代。B地点採集。

扁行唐草文軒平瓦片（第31図4～7） 鼠～灰色の堅い焼成である。4は二個単位の唐草文様を連続させ、それを囲む小珠文縁は一段高く、その外にめぐる素文周縁はさらに高い。

第30図1に示した字大門採集品と同類である。断面有顎式である。5



第31図　下宮地区(字御供屋、字山の内)採集古瓦拓影・実測図



第32図　下宮地区(字御供屋)採集鬼瓦

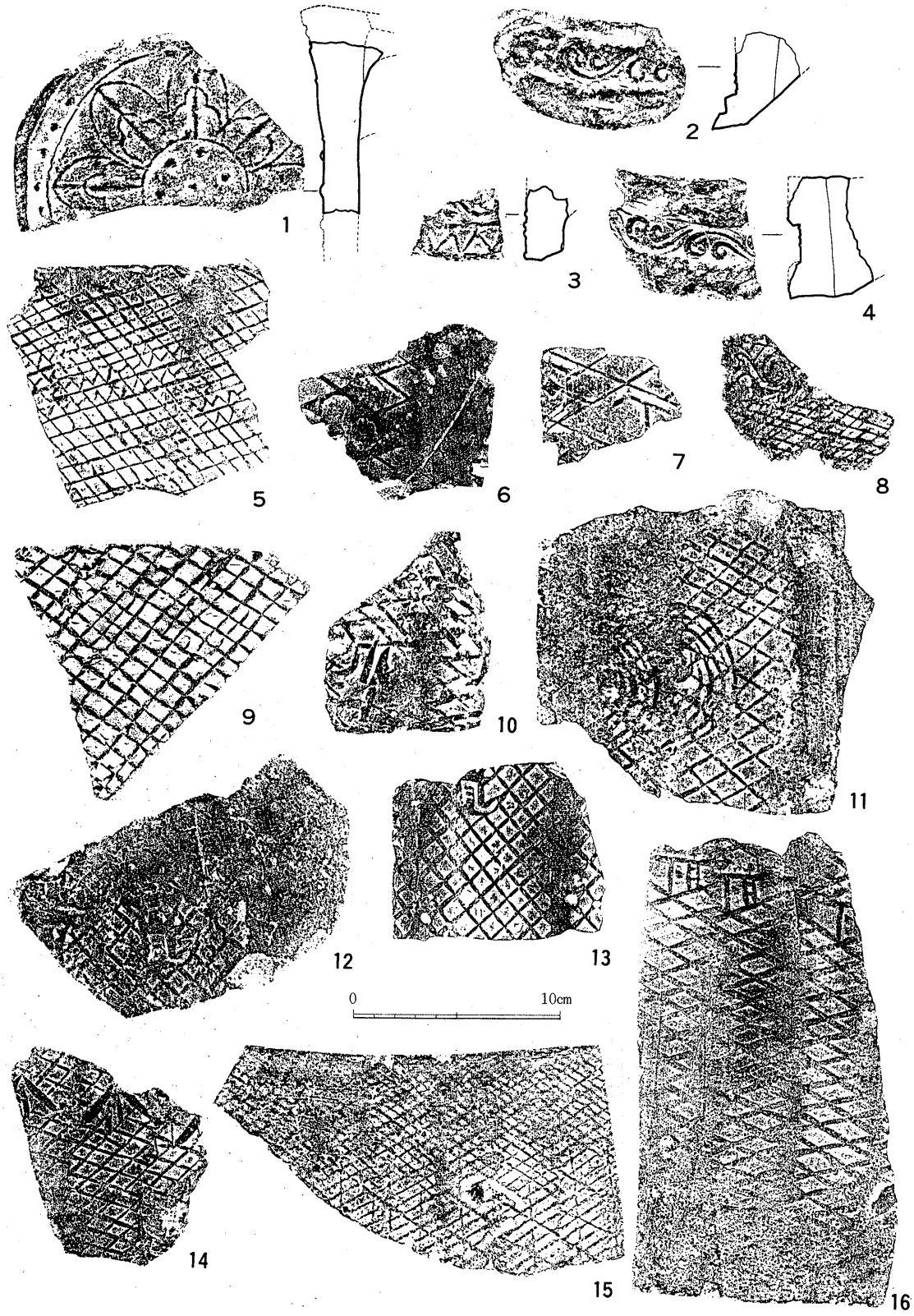
は類似した瓦当文であるが周縁以外は同一平面にあり、珠文も省略されて唐草文帯の幅が広がったのに対応してか、唐草の巻込みが大きくなる。深顎形式。前記地点採集。6・7は周縁に陽起鋸歯文をめぐらした扁行唐草文で太宰府系古瓦のうち老司式の衰退形式である。とくに7は唐草波長の表現が単調で鋸歯文も内行式である。一〇世紀後半以降である。B地点採集。

丸瓦・平瓦（第31図8～14）　8は「平井」銘瓦で斜格子の凹凸表現が普通の同類瓦とは逆である。9は細い複線による正格子文で「賀茂」銘のあるものに同類がある。10は細線斜格子文。11は大きい斜格子文中に印文風四葉文を配したものである。12はやや太目の斜格子文。13はやや太目の格子文上に「小ト」かと思われる文字がみえる。14は太目の斜格子内の一部に鉤針状の文様を加えている。11、14は一〇世紀後半から一一世紀代に及ぶであろうが、その他は一〇世紀前半よりは下らないであろう。8～12はB地点（字御供屋谷九一三の一、九一〇採集）。13はA地点（字御供屋谷八八三）採集、14はC地点（字山の内八五五）採集。8～10・14は丸瓦、11～13は平瓦である。

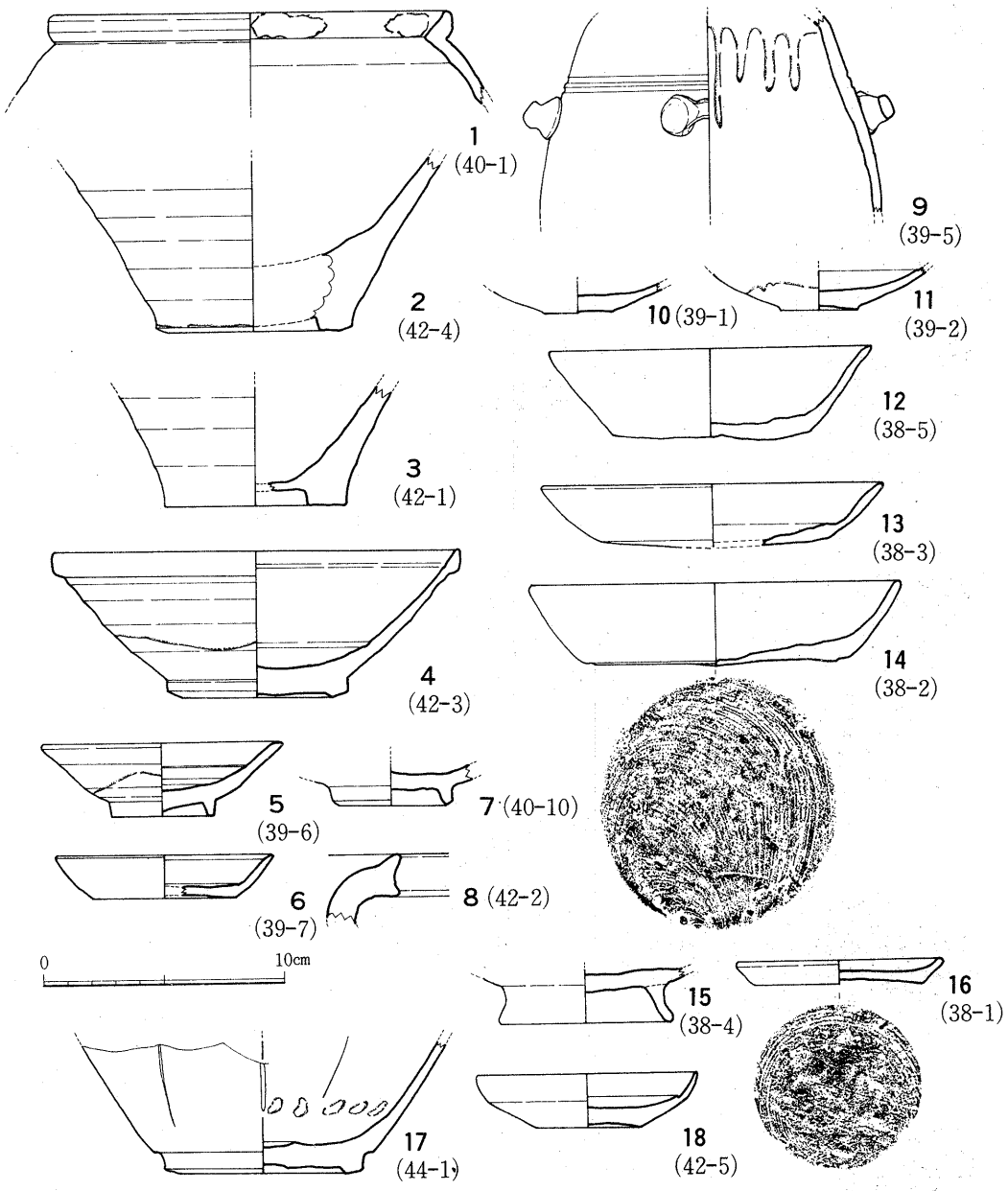
鬼瓦片（第32図）　都府楼系鬼瓦の右目部分の破片大小二個がある。小破片は製作もすぐれ、眉間につづく反転する眉の表現と、欠けてはいるが眼中に瞳孔が一段高くつくられている手法など奈良時代に流行した鬼瓦の特徴を備えている。これにくらべて大破片は凹凸を交互につづける眉毛、吊上った右目とその下につづく頬の肉盛りなどに古式の鬼面の面影をまだのこしてはいるが、前者ほどの迫力はすでに失われている。平安時代まで下るであろう。B地点（字御供屋谷九一三の一、九一〇）採集。

(2)　D地点（字大門九一八）採集の古瓦（第33図）

これまで紹介してきた下宮地区発見古瓦と重複するものが多いのでそ



第33図　下宮地区(字大門918番地)採集古瓦拓影・実測図



第34図　下宮地区採集土師器・須恵器・陶器・中国陶磁実測図

（ただし17は御獄・本谷地区、18は南谷地区）

れらについては説明は省略する。

1、単弁有文八葉軒丸瓦片　復原径一八センチ。第31図3と同類。

2～4、扁行唐草文軒平瓦片　2、4は第31図5と同類。3は下縁を波線文帯とする珍らしい例であるが小破片のため不詳である。

5～16、丸瓦・平瓦　5～13は平瓦、14～16は丸瓦である。すべて格子文を地文としている平安時代古瓦であるが、まず銘文のあるものをあげれば、10は「小ト」で第31図13と同類。12・13は印文風「平井瓦」で第30図5と同類。14は「介」で第30図6と同類、16は左字「前」である。

つぎに図文あるものでは、6は印文風四葉花文で第31図11と同類。8は雲文を配したもので第29図3と同類。11は同心円文である。7は大形斜格子内に菱形文その他を描いたもの。5は斜格子文の一部に対角線を加えたもの。6・7は一一世紀代まで下るであろうが、そのほかは九～一〇世紀代に比定してよいものである。

（小田）

2、土師器（図版三八、第34図13～16）

いずれも小西信二氏の採集品でE5地点（字大門九三四―一）から中国陶磁などと共に出土した。坏・皿・埦がみられる。

坏（13・14）　13はヘラ切り、14は糸切りである。13は口径一四・二センチ、器高二・六センチ、底径九・四センチをはかり、14は口径一五・五センチ、器高三・四センチ、底径一〇・〇センチである。

皿（16）　口径八・六センチ、器高一・〇センチ、底径六・九センチをはかる。糸切り後の板状圧痕が明瞭に観察される。

埦（15）　高台部分の破片で器面の荒れが著しい。高台は細く高く、外方へふんばる。この特徴から体部は丸味をもち、口縁部は外反するタイプに属しよう。

以上の土師器のうち、13は一二世紀前後、14は一二～一三世紀、15は一〇～一一世紀、16は一三世紀前後に位置づけられる。

（武末）

3、須恵器（図版三八の5、第34図12）

小西信二氏の採集品でA地点（字御供屋八八四）から出土している。口径一三・四センチ、器高三・六センチをはかる坏で、底部はヘラ切りである。九世紀代に位置づけられよう。

（武末）

4、陶　器（図版四二の2、第34図8）

甕（8）　口縁端中央を凹ませ、上・下端部を若干引き出した口縁部を有する小破片である。焼成は堅緻で、暗赤褐色を呈する。中世陶器のなかでは古期に属するものであろう。E2地点（字地蔵原六一〇・田）出土。

（森田）

5、中国陶磁（図版三九・四〇・四二、第34図）

白磁（図版三九の1・2・6・7、四〇の2～5、四二の1・3、第34図4～5・6・11）

皿（5・6・10・11）　10・11は体部上位に段を有し、底部が平底になる。釉は淡黄色を呈し、細い貫入を多数伴う。胎土は灰色で若干粗い。両者とも一一世紀終り頃から一二世紀中頃までに多く出土する。5は口径一〇・一センチ、器高三・〇センチを測り、内底見込み部分を環状に釉をカキ取り重ね焼きをしている。一二世紀中頃から後半にかけてのものである。類似した形態を有する図版四〇の4は見込み部分に環状のカキ取りはない。10・11と共伴して出土する例が非常に多く、椀（4）とセットになる。6はいわゆる「口禿げを有する」皿で、口径九・一センチ、器高二・〇センチである。胎土は灰白色を呈し、貫入を伴わない灰白色の釉が底部までかかる。一三世紀から一四世紀前半代までの代表的な白磁である。

椀（4）　口縁部を断面三角形に仕上げ、低い高台を有するタイプで、口径一七・〇センチ、器高六・〇センチを測る。口縁部内面に浅い沈線状の凹みが観察できるが、器面を一周するかどうか明らかでない。白灰色の胎土に、淡灰白色の釉がかけられている。図版四〇の2・3は体部上半の小破片である。2は口縁部を丸く仕上げ、体部に若干のふくらみを有していることから、高台を細く高く削り出すタイプに想定できる。3は一瞥すると2と良く似たタイプであるが、内底見込み部分の釉を環状にかき取るタイプになるのかも知れない。

壺　四耳壺の口頸部片（図版四〇の5）が出土している。釉は灰白色を呈し貫入を伴う。

青磁（図版三九の4、四〇の6～11、第34図7・17）

皿　櫛目と片切り彫り文様を内底に描いた同安窯系の皿（図版四〇の8）がある。体部外面は回転ヘラ削調整が顕著である。体部中位の屈曲部以下は露胎である。

椀（7）　7は小形のもので、杯になるかも知れない。高台端外側をヘラ削りし、尖り底風に仕上げている。釉は外底見込み部分の中央部付近を除き全面にかけられている。この露胎部分に径約二・〇センチほどの焼台痕が残っている。高台の削り方、施釉の範囲および淡黄緑色を呈する釉から一四世紀中頃以降の龍泉窯系のものと考えられる。図版四〇の6・9は断面四角形の高台を有し、鎬蓮弁文を有する一三世紀代に代表的な龍泉系青磁である。図版四〇の11は細く尖りぎみの高台と高台先端部を除いた部分に厚く釉がかけられるのを特徴とする。外面に鎬蓮弁文を有するが厚い釉のため鈍い。淡緑青色を呈する釉は比較的大きな貫入を伴う。一三世紀中頃から一四世紀前半代にかけての遺構から出土するが、一三世紀後半代に出土の中心があるタイプである。龍泉窯系青磁。

陶器（図版三九の5、四〇の1、四二の1・4、第34図1～3・9）

壺（1～3・9）　1～3は淡緑色か暗緑色の釉が、薄くかけられている。1は口縁部に重ね焼きの目跡が残っている。いずれも四耳壺片の可能性がある。9は褐釉の四耳壺片で、耳直上に二条の沈線が巡る。

これらの中国陶磁はいずれもE・F地点から小西氏が採集されたもので、1はE1地点（字大門九二八―一・田）、2・3はE3地点（字地蔵

原六一〇・田)、7・9～11はE5地点(字大門九三四―一・田)、4はE6地点(字大門九三四―一・田)、5・6はF地点(字ジル谷一〇一八)から出土している。

(森田)

6、中園出土の中国陶磁・滑石製品

(図版四一、第35図1～6)

現在西正寺に所蔵されている資料中に昭和三五年一月と記された青磁埦・皿、滑石製杓子・石鍋片がある。先代住職の故山内興隆氏がH地点から採集されたもので、滑石製石鍋は行方不明となっている。

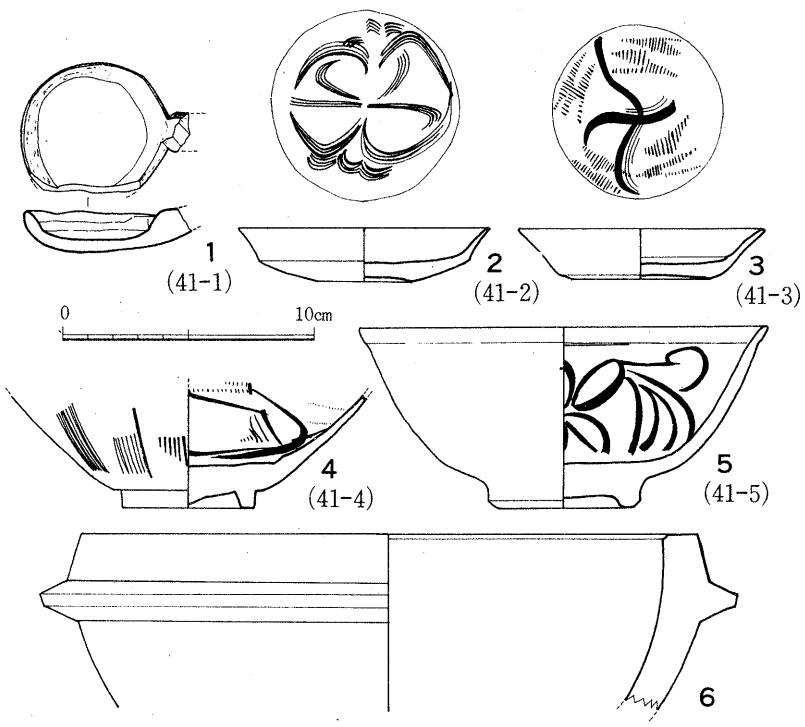
青磁皿(2・3)　2は見込に片切彫の花文をあしらった黄緑色釉の段皿で、外底面は無釉である。口径一〇・〇センチ、器高二・一センチをはかる。3は灰緑色の釉がかかり、見込には櫛描の雷光文があらわされた同安窯系の皿である。口径九・八センチ、器高二・〇センチをはかり、もとは完形品であったが、現在では大部分を欠失している。

青磁埦(4・5)　4は外面に縦方向の櫛描文がみられ、内面は櫛描と片切彫の文様で飾られた同安窯系の埦の下半部である。5は内面に片切彫で花文が表現された龍泉窯系の埦で、口径一六・三センチ、器高七・一センチをはかる。

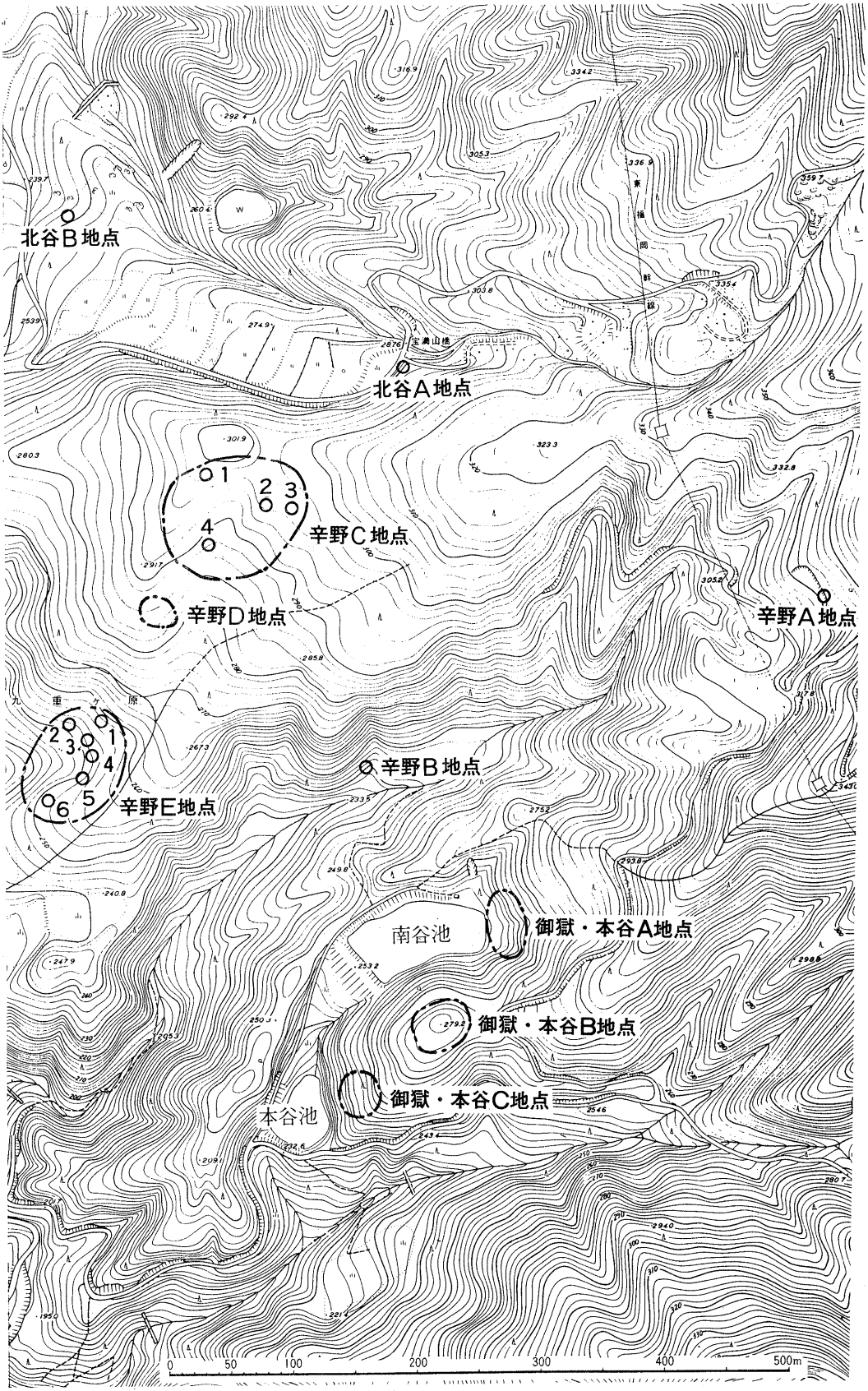
滑石製杓子(1)　本体は略完形だが、柄部は斜めに立ち上るつけね部分から失われている。本体の内面長径五・九センチ、深さ一・一センチをはかる浅いつくりで縁も薄く、底部の厚さは〇・五センチである。

滑石製石鍋(6)　口縁部の破片で、復元口径は二四・六センチとなる。鍔状部が口縁直下にめぐる通有のつくりである。

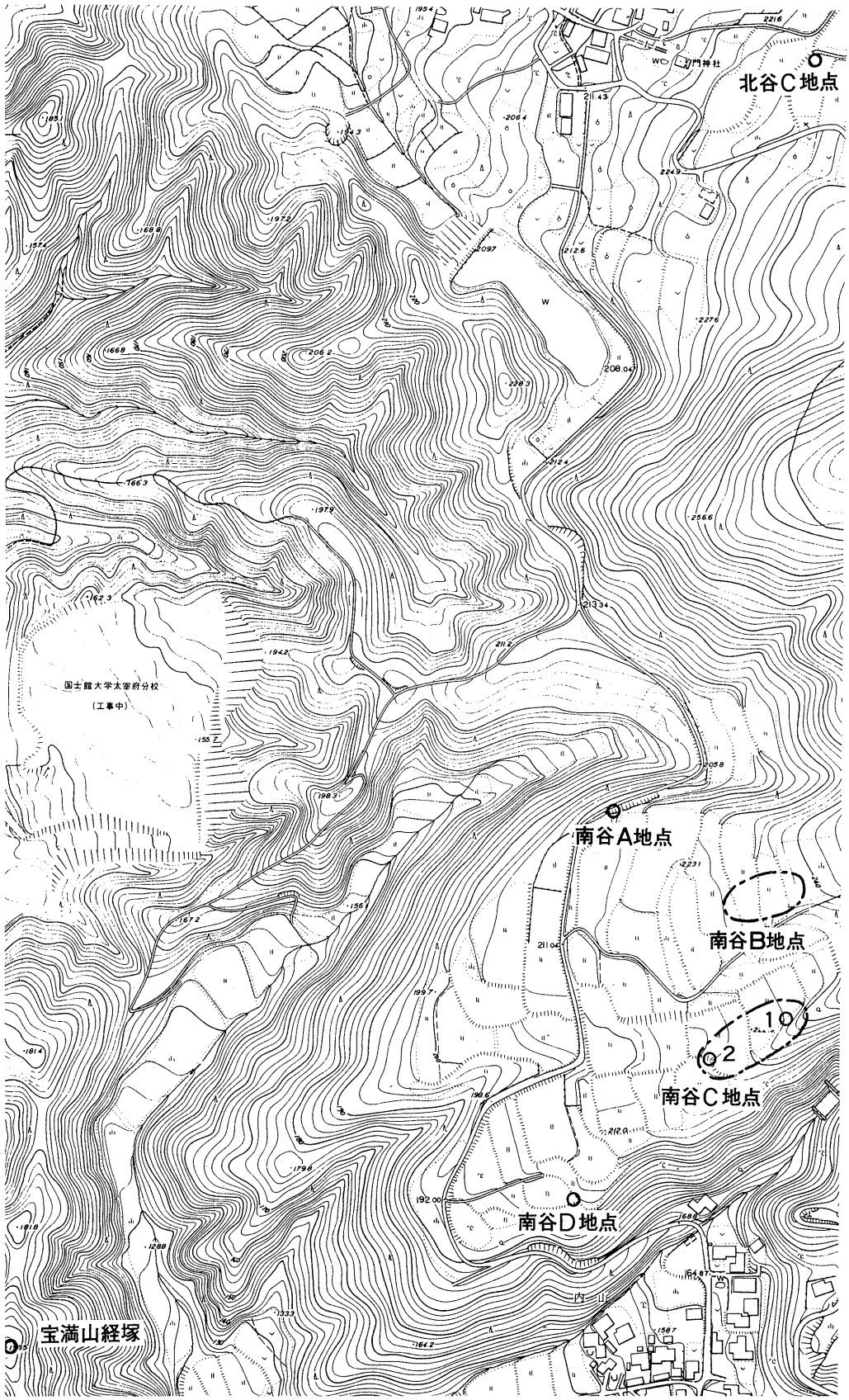
これらの陶磁器は一三世紀前半代に位置づけられ、同時出土の滑石製品とも矛盾はなく、遺構は不明だが一括出土した可能性が高い。(武末)



第35図　下宮地区(内山・中園)採集中国陶磁・滑石製品実測図



第36図　御嶽・本谷地区、辛野（九重ヶ原）地区、南谷地区、北谷地区遺物採集地付近地形図


北谷C地点
南谷A地点
南谷B地点
南谷C地点
南谷D地点
宝満山経塚
国士館大学太宰府分校
(工事中)
WC
刀門神社
10
2

Ⅲ　御獄・本谷地区

本地区ではA～D地点の遺物を収録したが、いずれも小西信二氏の採集品である。B地点（大字内山字本谷七八〇の一）では礎石群が確認され、古瓦・土師器・断面方形の鉄釘片が採集されている。この礎石群を妙見祠礎石群とする。

C地点（大字内山字本谷七八〇の九）は妙見祠礎石群の位置する丘の南西斜面にあたり、古瓦・土師器・須恵器片が採集されている。おそらく妙見祠礎石群の遺物が流れ落ちたものであろう。

A地点（内山字本谷七八〇の三）は江戸時代に妙見原と呼ばれたところで、B地点の妙見祠はもとはここに鎮座していたが、溜池築造時にB地点に移転したという。遺物は古瓦・須恵器・土師器・製塩土器が採集されている。立地からみてB地点の遺物が流れたとは考えられず、別の遺構の存在を示す資料である。

D地点（大字内山字御獄八〇一）からは青磁埦が採集されている。

（武末）

妙見祠礎石群（B地点）

過去の分布状況踏査によって礎石群の傾斜地に瓦片や土師器片を確認しており重要遺物散布地として注意していた。

一九八一年九月中旬、遺跡物分布地域の再確認調査により約二七〇平方メートルの平坦部に基壇側面の積石が部分的に露出しているのを認めた。平坦部には礎石の抜き跡と思える掘り穴が残っており瓦片及び小石が認められる。平坦部分に礎石及び他の遺構の存在が推測されるため、山林所者である高田竹雄氏（福岡市南区桧原在住）に立入調査の許可を得て礎石の確認及び平坦部分の計測を二日間で終えた。

礎石及び基壇遺構（第37・38図）　現存する礎石九ヶ所、礎石が失われ根石が認められるのが五ヶ所、礎石根石共に不明の掘穴が二ヶ所、心礎は地表に石祠があり確認できなかった。

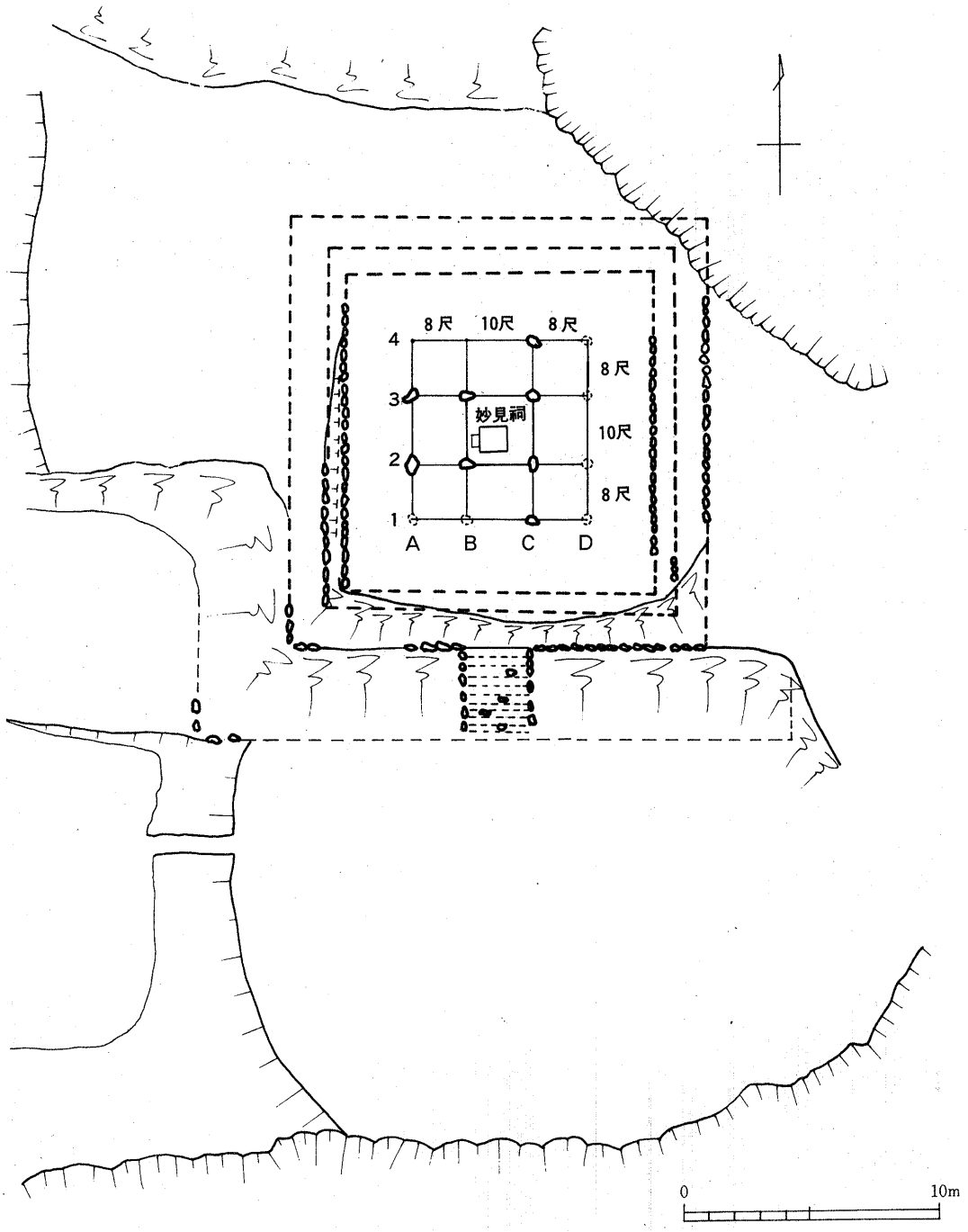
礎石及び根石は東西南北線上に配置されており、内柱礎石心々三〇〇センチ、外柱礎石及び根石心々それぞれ二四〇センチ、三〇〇センチ、二四〇センチを計測できた。

基壇側面に部分的ではあるが三列の積石が露出している。外柱礎石心心よりそれぞれ三〇〇センチ、三九〇センチ、五四〇センチを計測した。基壇の南には、階段の遺構が残っており、幅三〇〇センチとなっている。基壇上に確認した礎石以外に他の礎石の存在を考えてみたが、基壇側面の積石状況及び計測により作成した平面図から見ても基壇上には、他の礎石は存在しないと推定しうる。

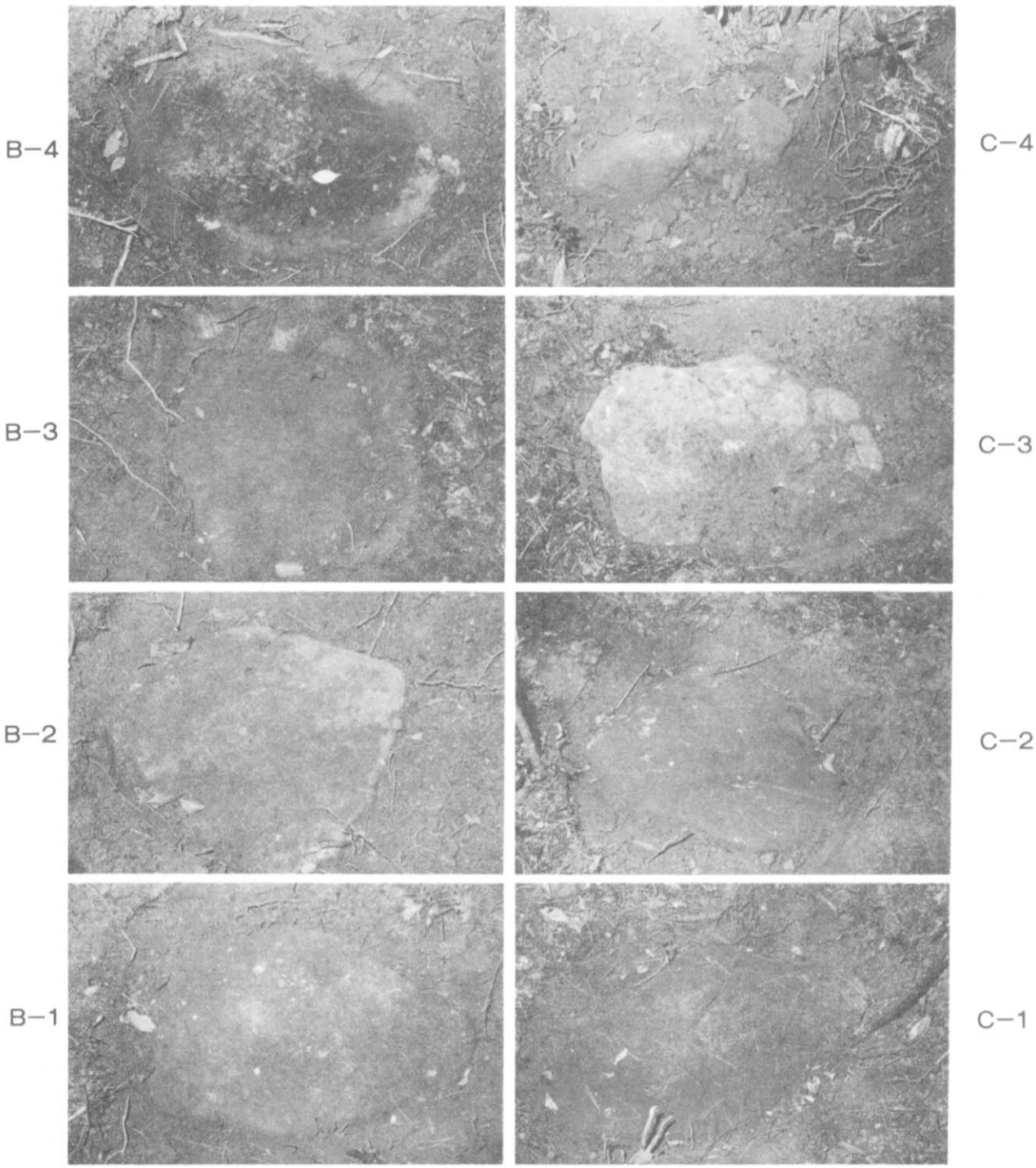
基壇外の南及び西には、平坦部五ヶ所があり、瓦片の分布状況から見て、この平坦部に遺構が残っていると思われる。

高田竹雄氏に調査報告及び遺構の概略を説明すると共に、文化庁への遺跡発見届提出をお願いしたところ、快く承諾された。一九八一年一〇月一二日、太宰府市教育委員会へ提出した。

（小西）



第37図　本谷地区妙見祠礎石群略測図



第38図　本谷地区妙見祠礎石群写真　（番号は第37図の礎石番号に対応する）

1、古　瓦（図版四四・四五、第39・40図）

第39図1～5はB地点（妙見祠礎石群）の採集品である。いずれも平安時代に属するもので、正方形格子目叩きの平瓦のほかに、「安」・「佐」銘の丸瓦・平瓦が出土している。

「安」銘瓦（1・2・4）　1・2は平瓦、4は丸瓦である。1は端整な細線の斜格子目に左字の「安」が刻されている。2は二重細線の斜格子目にやはり左字の「安」が刻されている。4は2と同じ叩目と文字をもち、2とセットをなす。

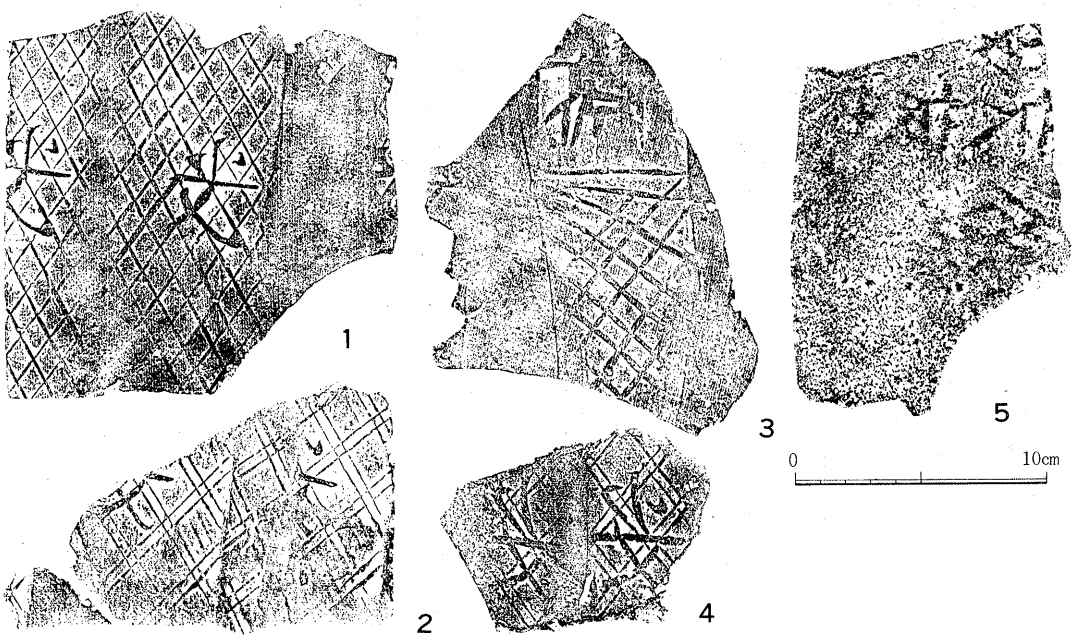
「佐」銘瓦（3・5）　3は不規則な斜格子目に上下を平行線で区画して、最後の一画を省略した正字の「佐」字を入れた平瓦である。5は粗い斜格子目に正字で「佐」の異体字と思われる文字を入れた丸瓦である。

これらの文字瓦は一〇～一一世紀代に比定されるが、正方形格子目叩きの平瓦はやや先行し、九～一〇世紀代に置かれる。

第40図1～6はC地点採集品である。2は故山内興隆氏の蒐集品で、1・3～6は小西信二氏によって現地で採集された。

2については「内山御供屋谷」出土と伝えられてきたが、実際は内山部落の所蔵者から譲り受けたもので、正確な出土地点は不明のため、これまで同じ瓦が出土している本地点の出土品として取扱っておく。

単弁十三葉軒丸瓦（1～3）　周縁のつくりによって1と2・3に細分できる。いずれも一―六の蓮子を配する中房は弁区からやや盛り上が



第39図　本谷地区妙見祠礎石群採集古瓦拓影

っており、蓮弁は中央にかすかに一線が走って割れているが端部は尖った区画線で囲まれている。2・3は弁と周縁のあいだに珠文がめぐるが、1は珠文が省略されて周縁の幅がやや寛い。

「大国」銘平瓦（4）　小破片であるが、細かい正方形格子目叩きの中を方形に区画しており、「大国」銘平瓦と判断される。

「平井瓦屋」銘平瓦（5）　細かい斜格子目叩きの中を方形に区画し、「平井瓦屋」の四字を左字で陰刻している。

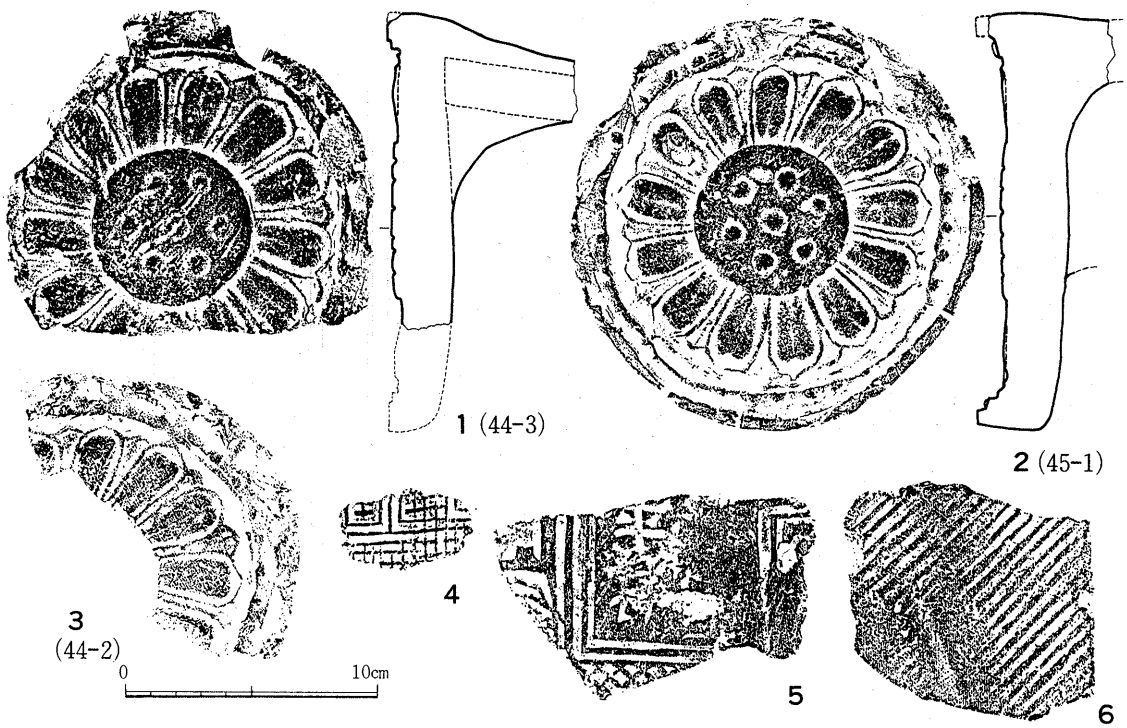
平行叩目平瓦（6）　斜行する粗い平行条線の叩目がほどこされた平瓦である。

これらのうち2・3の軒丸瓦は大宰府史跡の第6次調査で西面回廊から4の「大国」銘をもつ均整唐草文軒平瓦とともに出土しており[註]、九世紀～一〇世紀前半代に比定される。1もほぼ同時期に位置づけられる。6も同様に九～一〇世紀代に置かれよう。5はこれらよりややおくれて一〇世紀前半代のものであろう。

図示しなかったが、このほかにC地点では九～一〇世紀代に属する正方形格子叩目や細線二重格子叩目の瓦が出土している。A地点においても正方形格子叩目や細かい斜格子叩目の平瓦が採集されており、九～一〇世紀初頭に位置づけられる。

（武末）

（註）　福岡県教育委員会『大宰府史跡』福岡県文化財調査報告書第47集　一九七一年



第40図　本谷地区採集古瓦拓影・実測図

2、土師器

（第41・42図）

第41図1・2はB地点、第42図7はA地点の採集品である。

坏（第41図1・2）　丸底の坏が六個体分採集されており、略完形の二点を図示した。

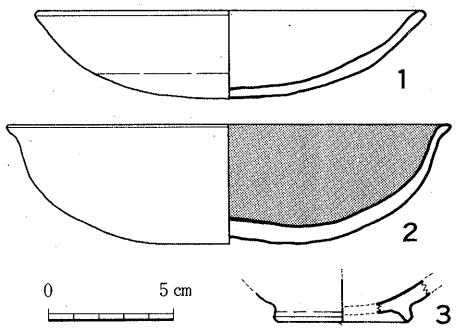
1は口縁部が単純にひろがる偏平な坏で、口径一五・四センチ、器高三・五センチをはかる。底部はヘラ切後の板状圧痕をナデケシており、内面は研磨されている。

2は口縁部がわずかに外反した坏で、口径一七・七センチ、器高四・七センチをはかる。底部はヘラ切後にナデケシされており、内面は丹塗研磨された特殊な土器である。

これらの坏は一〇～一一世紀代に比定される。（武末）

甕（第42図7）　体部内面上位はヨコ方向のヘラ削り、外面は刷毛目調整である。

図示しなかったが、このほかにA地点からは甑の把手も出土しており、C地点でも九世紀代の土師器が採集されている。（森田）



第41図　本谷地区妙見祠礎石群採集
土師器・瓦器実測図

3、須恵器（第42図1～6）

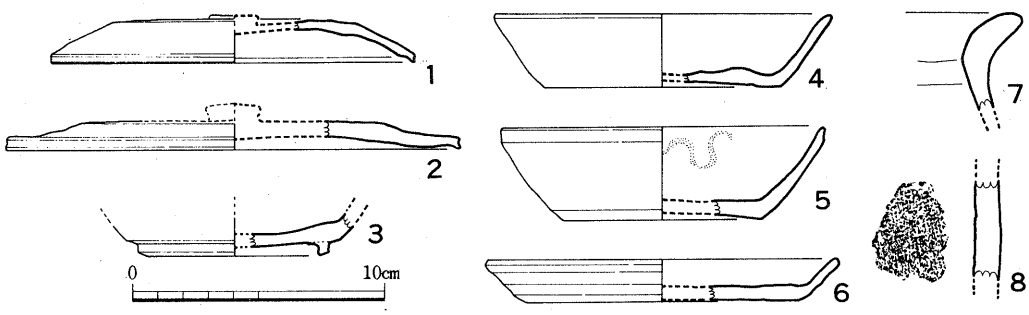
いずれもA地点での採集品である。

杯蓋（1・2）　1・2の口径は一四・四センチ、一八・〇センチである。両者とも天井部はヘラ切りのままで未調整である。

杯（3～5）　3は断面四角形に近い高台を有し、その高台貼付位置は底部端よりやや内側である。4・5は無高台の杯で、口径、器高はそれぞれ一三・五センチ・一二・八センチ、二・八センチ・三・六センチである。5の内面には油煙が付着していることから灯火器として使用されたと考えられる。

皿（6）　口径一四・〇センチ、器高一・七センチである。外底はヘラ切りの後不定方向のナデによって調整されている。

以上の須恵器は、土師器、製塩



第42図　本谷地区採集土師器・須恵器・製塩土器実測図

土器と共に八世紀中頃から後半頃のものと考えられる。

この他に図示しなかったが、C地点からは九世紀代に位置づけられる須恵器片が採集されている。（森田）

4、製塩土器

焼塩壺（第42図8）　小破片が三個出土している。内面には粗い布目痕、外面には指頭痕が乱雑に残っている。胎土中には小砂粒を多く含む。他の例から口径一〇センチ前後、器高二五センチ前後になるものと思われる。近年、主として官衙や寺院関係から出土する例が増加しており、今後注目される資料である。A地点出土。（森田）

5、瓦　器

埦（第41図3）　底部の小破片がB地点から採集されている。内外面・胎土ともに黒色を呈している。十一世紀前後のものであろう。（武末）

6、中国陶磁

青磁埦（図版四四―1、第34図17）　暗黄緑色の釉調を帯びた越州窯系六花埦の下半部である。底部は輪状高台となり釉は全面にかかるが畳付の部分だけが露胎である。重ね焼の目痕が内面と畳付の二個所にみられる。九～一〇世紀代に位置づけられよう。下宮から東へ約三〇〇メートル離れた杉林の平坦地であるD地点から採集されている。（武末）

Ⅳ　辛野（九重ヶ原）地区

1、古　瓦（図版四八の9、五〇の4）

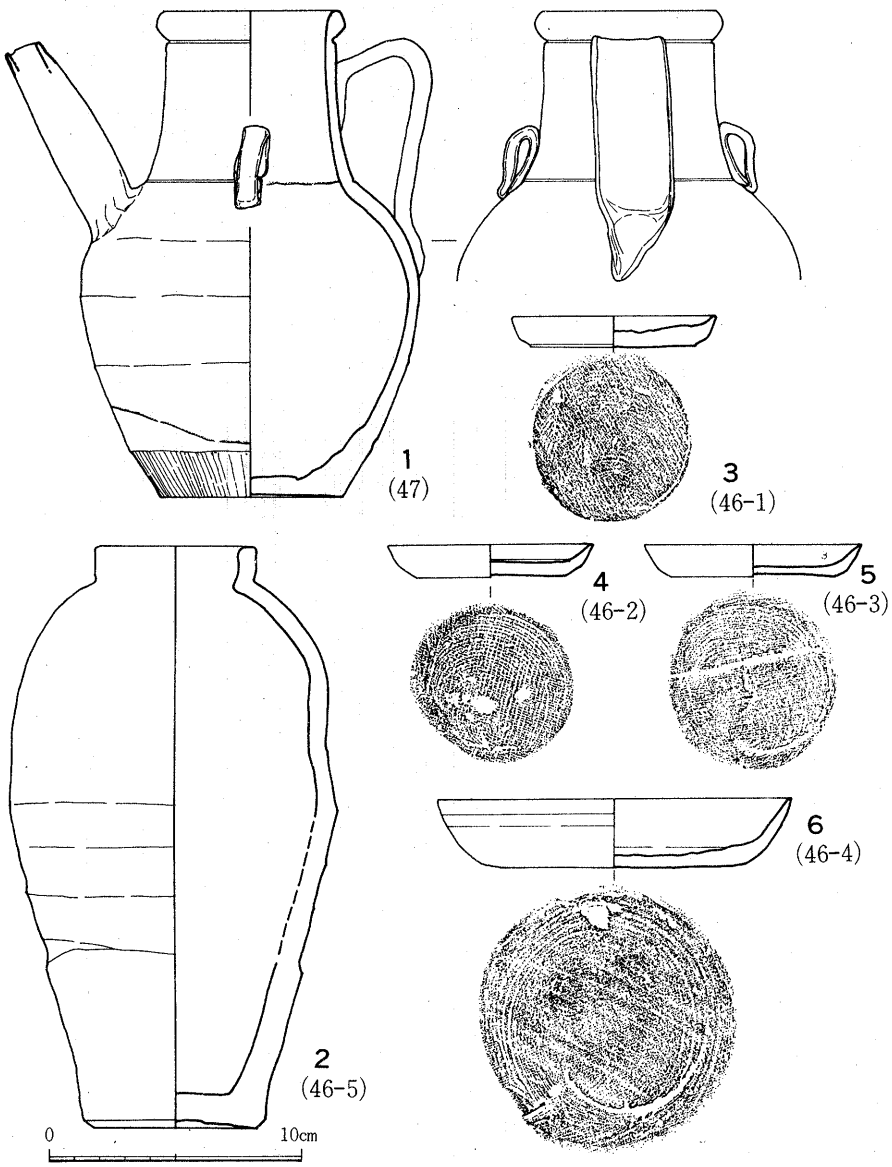
図版四八の9はC2地点（字辛野六ノ十七・林）採集の平瓦である。凸面に粗い斜格子文様の叩き目があり、更に斜格子文様内に幾つかの文様を加えている。十一世紀後半から十二世紀にかけてのものであろう。図版五〇の4はD5地点（字辛野七ノ六・林）採集の平瓦である。凸面に斜格子文の叩き目を有する。平安時代中期のものと考えられる。いずれも小西氏採集。（森田）

2、土師器（図版四六の1～4、第43図3～6）

(1)　B地点出土品

小皿（第43図3～5）　いずれも糸切底で口縁端部が尖っている。口縁部はヨコナデ、内底面は指ナデで仕上げ、4の内面にはヘラ描の圏線がみられ、3・4の外底面に板状圧痕がみられる。3は口径八・〇センチ、器高一・二センチ、底径六・五センチ、4は口径八・一センチ、器高一・三センチ、底径五・八センチ、5は口径八・五センチ、器高一・三センチ、底径六・四センチをはかる。

大皿（第43図6）　糸切底に板状圧痕がみられ、やはり口縁端が尖って、口縁部は内外ともに回転ナデ、底部内面は左右方向のナデで仕上げ



第43図　辛野(九重ヶ原)地区採集土師器・中国陶磁実測図

られている。

これらの土師器は一二～一三世紀代のものであろう。大庭日佐彦氏採集。

（武末）

(2) E地点出土品（図版五〇の1～3・5）

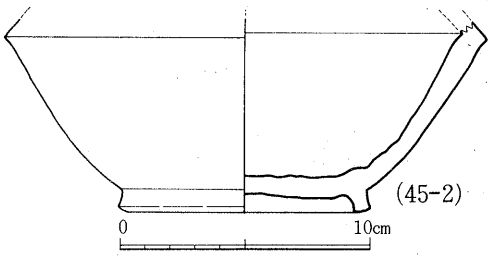
Ⅲ 図版五〇の1はヘラ切り、2・3・5は糸切りである。1は口径九・五センチ、器高一・四センチ、2は口径八・七センチ、器高一・四センチ、3は口径九・四センチ、器高一・四センチ、5は口径一一・四センチ、器高二・三センチ、高台径六・九センチである。2・3の外底にはナデ仕上げに伴う板状圧痕がある。1は他に比して若干古期に属し平安時代末頃に、2・3・5は平安時代末から鎌倉時代初頭頃である。E5地点（字辛野七ノ六・林）より小西氏採集。

（森田）

3、須恵器

（図版四五の下、第44図4）

台付長頸壺の胴下半部で、口頸部と肩部は失われている。A地点（辛野三ノ五・林）から小西信二氏が採集しており、「一ノ鳥居西二〇〇米内山林道脇、有智山城跡へ通じる小道の左右に平坦地あり、庭石採集のため地山掘りかえしている所の小径脇地表下四〇センチ灰褐色の土層より採集、近辺には土師器片も確認できる」という。



第44図 辛野（九重ヶ原）地区採集須恵器実測図

胴は屈曲部で稜をもち、最大径一八・四センチ、高台径八・八センチをはかる。内外とも回転ナデで仕上げ、外底面にはヘラ描の直線を中央に入れている。奈良時代に位置づけられよう。

（武末）

4、中国陶磁・高麗陶磁

(1) B地点出土品

褐釉陶双耳付水注（巻首図版Ⅲ、図版四七、第43図1） 把手の根元付近に鍬先による小裂口があるほかは完形である。平底長胴に直口の長頸を付し、口縁は玉縁状をなす。頸部から肩部にかけて幅三センチに及ぶ扁平な把手と、その対向する肩部に斜立する長い注口を付す。さらにこれらと九〇度まわした頸と肩の移行部に紐状の双耳をとりつけている。轆轤整形による丁寧な仕上げの陶製胎土で淡黒鼠色を呈する。表面には底部ちかくまで明褐色釉をかけ、内部はやや黄色気味の発色をしながら頸部末端にまで及んでいる。表面は施釉前によこなでされているが、露胎している底部付近は回転削りのままで、底面は若干上がり気味となる。表面の釉は肩部のあたりに釉溜りを生じて黒色気味となるが、表面の所所に素地となじみが悪いために釉の剝落がみられる。この種の褐釉水注は中国華南方面から日宋貿易によって搬入されたものであり、実用的な粗陶である。これまでにも九州地方ではいくつかの類品が知られている。たとえば福岡市聖福寺境内出土品（一一～一二世紀）、北九州市椎木山遺



「莊綱」墨書銘陶製経筒
四王寺山出土（総高35.7センチ）

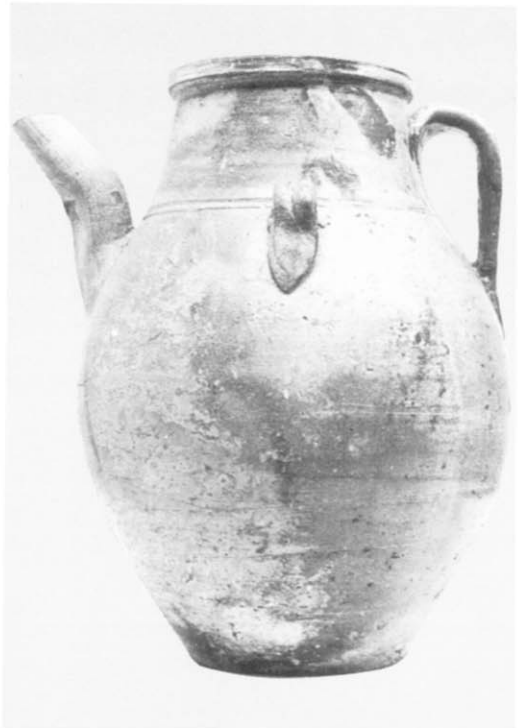


陶製蔵骨器



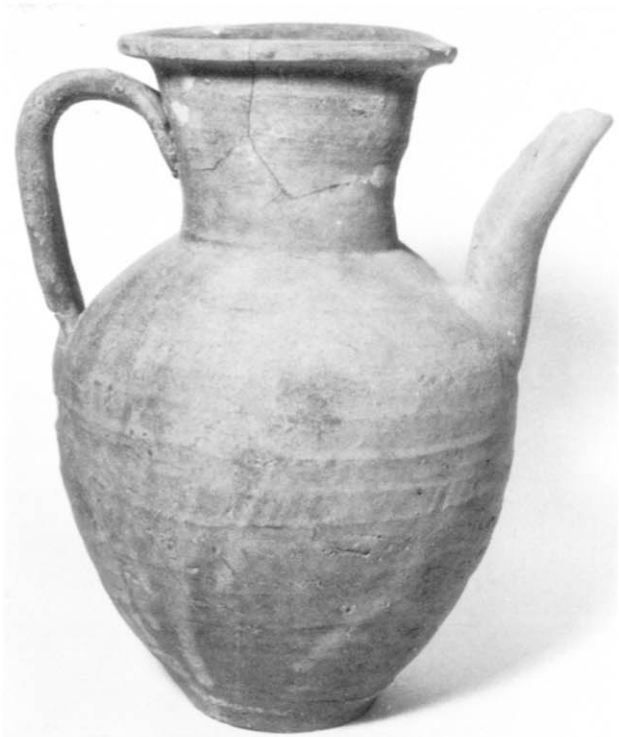
天満宮東神苑牛臥山出土

第45図　中国産長胴陶製壺参考品（太宰府天満宮宝物館蔵）



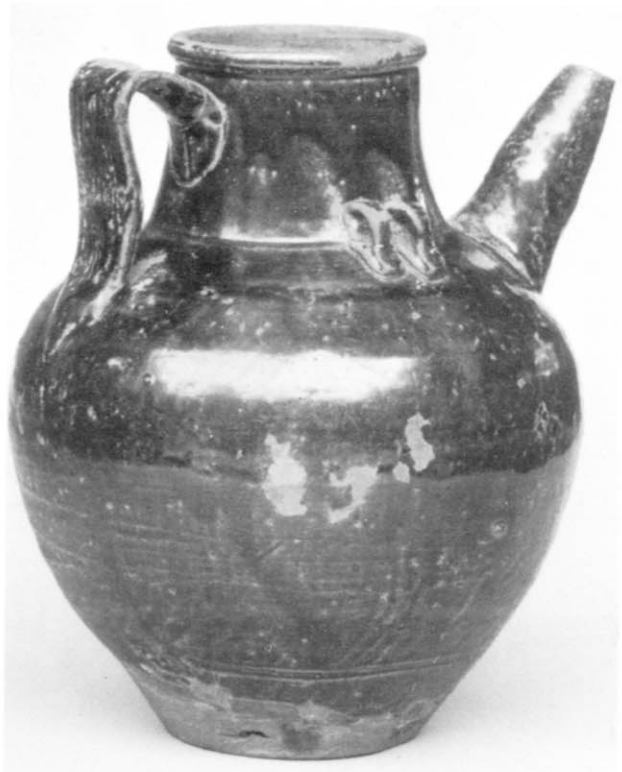
福岡市博多区
御供所町聖福
寺境内
（高20.1センチ）





北九州市若松区蟹住椎木山遺跡
（高21.9センチ）





伝熊本県上益城郡益城町福田寺廃寺
（高28.8センチ）　（桑野陽吉氏提供）

第46図　中国産褐釉陶水注参考品

跡の火葬墓出土品、伝熊本県福田寺廃寺出土品（一二～一三世紀）などは近似した例であろう（第46図参照）。本例も一二～一三世紀に比定してよいであろう。高さ一九・一センチ、口径七センチ、胴径一三・四センチ、底径七・二センチ。B地点（南谷池の北方高所）で大庭日佐彦氏発見。（小田）

陶製長胴壺（図版四六の5、第43図2）　短く直立する口縁部をもつ暗褐色素焼の陶製長胴壺である。上半部はヨコナデで仕上げ、下半部は回転ケズリのままである。中国製品で一三世紀代に位置づけられよう。口径六・〇センチ、器高一二・八センチをはかる。B地点で大庭氏採集。（武末）

(2)　C地点出土品（図版四八・四九、第47図）

白磁（図版四八の3～5、四九の1～3、第47図8）

椀（8）　細く高い高台を特徴とする。灰白色の胎土に淡黄灰白色の釉がかかる。図版四九の2は、この8と同種のタイプの口縁部片である。図版四九の3は8と同様の高台を有するが、口縁部は外反することなく、丸く収まる。図版四八の3・4は玉縁状の口縁部と低く幅広の高台を有する。

香炉　型造りにより成形され、外面に鎬蓮弁文が浮き出されている。白色緻密な胎土を用い、器肉は〇・三センチと薄い。外面は失透性の白色釉をかけているが、口縁端および内面は露胎である（図版四九の1）。（森田）

青磁（図版四八の1・6・7、四九の5、第47図1）

皿　見込み部分にジグザグ文様を入れ、淡緑色を呈する釉がかけられた同安窯系の皿である（図版四八の6）。

椀　片切り彫りにより内面に花文を描くものが出土している（図版四八の7、四九の5）。龍泉窯系。

鉢（1）　口径一八・六センチに復原できる。半球状の体部に対して、口縁部は直角近くに折り曲げられる。外面には丸刃彫り風の重弁風の文様が描かれている。胎土は暗灰色緻密、釉は黄色味をおびた暗緑色を呈する。釉・胎から越州窯系のものと考えられる。文様を有する越州窯系青磁の出土例は我国では十の単位で数える程しかない。さらに、管見の範囲では外面にこのような文様を描く例はない。五代から北宋初頭頃のものと思われる。

その他に水注片かと考えられる破片が出土している（図版四八の2）。（森田）

陶器（図版四八の2・8、四九の4）

壺　図版四八の2は黒釉陶器の口頸部の小片である。図版四八の8は無釉の胴部片である。内面に青海波状のあて具痕（？）がみられる。図版四九の4は二本の角と目を見開き、口を大きく開けた龍の文様を貼付し、その周囲に沈線による文様を描く。釉は大部分剝落しているが部分的に残り、褐釉がかけられていたことが知れる。胎土は灰色を呈し、粗い。東南アジア地方で多く発見されるが、我国では極めて稀な例で、注目される。1はC1地点（字辛野六ノ一九・林）、図版四八の2はC2地点（字辛野六ノ一八・林）、図版四九の1～5はC3地点（字辛野六ノ一

七・林）、図版四八の3～7はC4地点（字辛野六ノ一九・林）から小西氏が採集している。

(3) D・E地点出土品（図版四二・四九～五一、第34・47図）

2と15・18を除きいずれも小西氏の採集品である。

第34図18はE地点出土。9～14はE2地点（字辛野一三・林）、3・16はE3地点（字辛野七ノ六・林）、6はE4地点（字辛野七ノ六・林）、5はE6地点（字辛野七ノ六・林）出土。図版四九の6～12はD地点（字辛野六ノ二五・林）出土。

白磁（図版四二の5、四九の6～9・11、五〇の6、五一の4～6・8、第34図18、第47図7・9～11）

皿（18） 口径九・二センチ、器高二・二センチである。淡灰色緻密な胎土に失透性のある灰白色の釉がかかり、貫入を伴う。図版四九の7は断面三角形の口縁部を有する椀とセットになる高台付皿の小破片である。故山内興隆氏採集。詳細な出土地点は不明である。

椀（7・9・10） 7は口径一六センチを測る。口縁端部を折り曲げ、端部は面を成す。高台部を欠失しているが、細く高い高台を伴うものと考えられる。9・10は小破片のため口径は不確であるが、9は一七センチ、10は一八・三センチに復原できる。図版四九の9は重ね焼きのため、内面見込み部分の釉を環状にカキ取っている。7よりも高台は低いのを特徴とする。図版四九の11は櫛状工具で、外面に縦沈線を入れ、内面に花文を描いている。

その他に、椀か皿か不明であるが、枢府系の白磁が出土している(11)。枢府磁の特徴である失透性の白濁色の釉が高台外面部までかかる。また、焼成時に付着した砂粒が高台内側面に焦げ付いている。近年、大宰府史跡を中心として少なからず出土するようになったが、全国的にはまだ資料の少ない景徳鎮の優品である。（森田）

青磁（図版四九の10、五一の1・7・9・10、第47図3・12～14）

椀（13） 輪花のある口径九・八センチの小椀である。暗灰色の胎土に淡青色の釉がかかる。龍泉窯系。図版四九の10は外面に櫛目文、内面に櫛目文と沈線により花文を描く。高台内側面を斜めに切り出しているため、高台見込み部分は中央に向って高くなる。同安窯系。

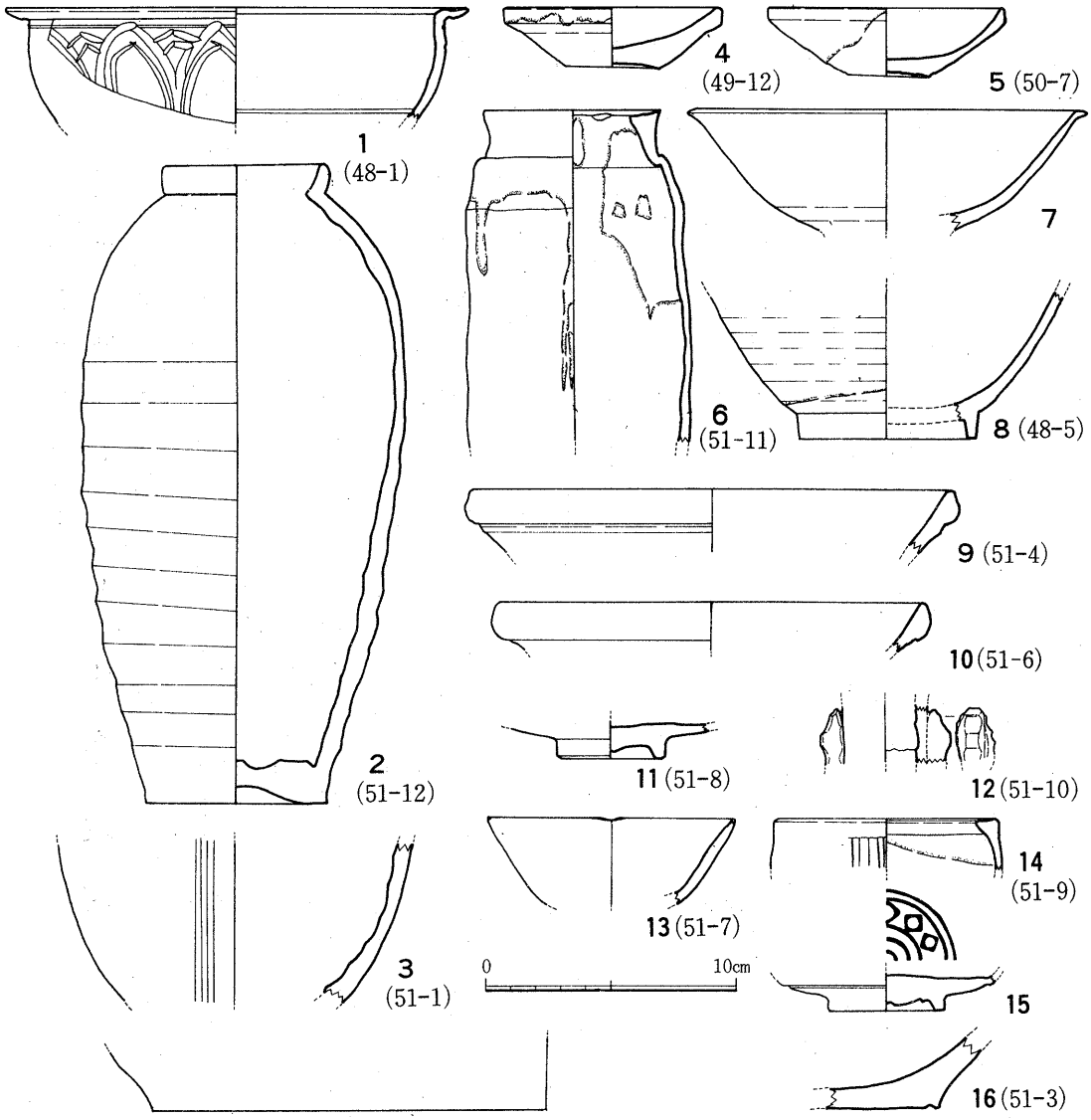
壺（3） 暗黄緑色の釉がかかっている。体部に縦沈線を三本入れることによって、隆線が二本走るように仕上げている。越州窯系。

瓶（12） 頸部に双耳を貼付している。胎土は白色緻密で、釉は比較的厚くかかり、淡黄緑色を呈する。龍泉窯系。

香炉（14） 外面に片切り彫り風の縦沈線文様がある。口縁端部は幅約一・〇センチの面を成し、中央部は若干凹む。胎土は白色緻密で、釉は淡青色を呈する。（森田）

陶器（図版四九～五一、第47図2・4～6・16）

皿（4・5） 断面三角形の口縁部と若干上げ底風の小さな底部からなる。胎土は暗灰色もしくは暗赤褐色を呈し、堅く焼き締められている。釉は黄色味をおびるが透明に近い。4は口径八・八センチ、器高二・四センチ、5は口径九・五センチ、器高二・七センチである。



第47図　辛野(九重ヶ原)地区採集中国陶磁・高麗陶磁実測図

陶製長胴壺（2・6）　2は一九六〇年九月、松田広美氏によってE1地点から発見されたもので、三尺四方の石室内に土師器皿を蓋とし、蔵骨器として埋納されていた。口径六・六センチ、器高一三・〇センチ、胴部最大径一三・〇センチである。焼成は堅緻で、器面は黒褐色を呈する。6は口径七・二センチを測り、口縁端には白色の目跡が三個所ある。胎土は精良であり、砂粒をほとんど含まない。釉は淡黄緑色を呈する。

盤（16）　図版五一の2と同種の黄釉鉄絵盤である。胎土は粗く、灰色を呈する。（森田）

高麗陶磁（第47図15）

杯（15）　いわゆる腰折れの椀といわれているものである。釉は暗緑色を呈し、全面にかけられている。内面には円文、円文と方形文の組み合わせスタンプ文様とそれらを画する圏線に白象嵌されている。器形および印文から高麗末期頃のものと考えられる。古い採集品なので正確な出土地点は明らかでない。故山内興隆氏採集。（森田）

V 南谷地区

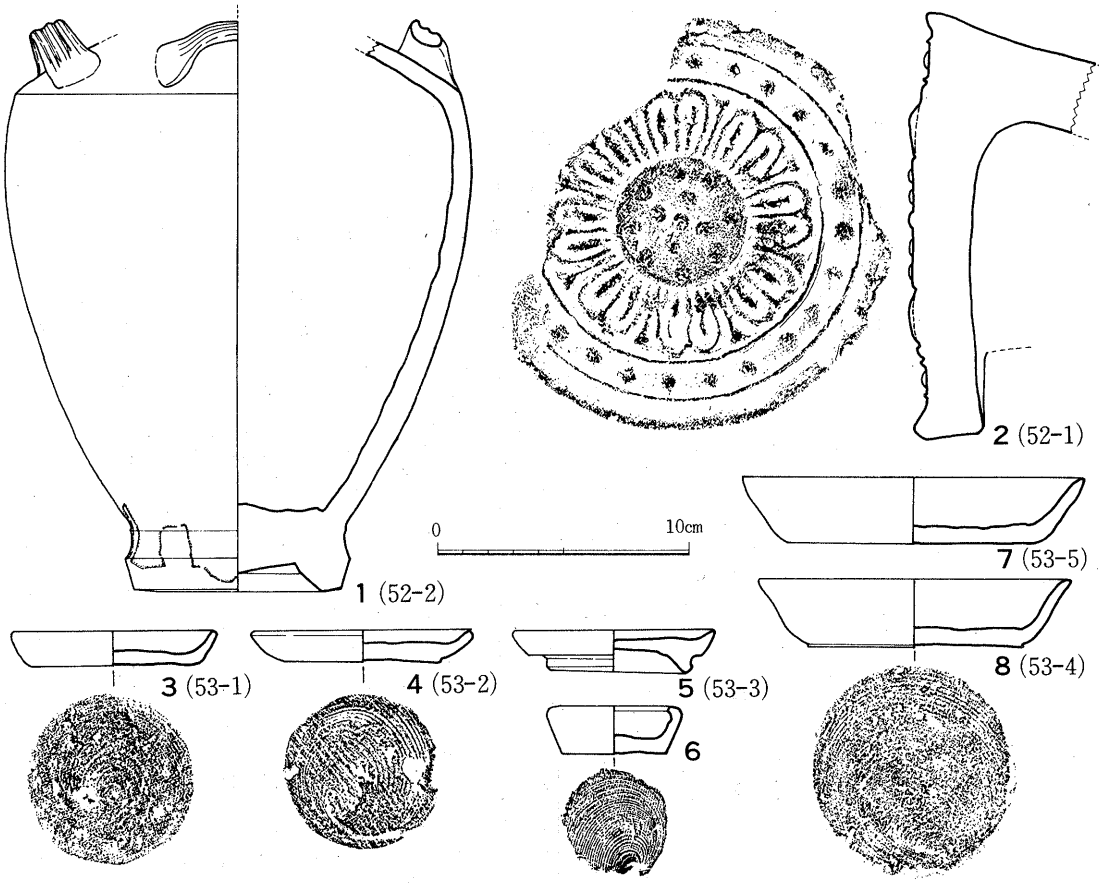
1、古　瓦（図版五二の上、第48図2）

故山内興隆氏収蔵の軒丸瓦である。瓦当径一六・八センチの黄白色、軟質焼成である。「昭和三十六年十月内山南谷出土大庭源次郎寄進」と墨書されている。中房最も高く径も五・二センチと大きい。1＋4＋8の蓮子配置を示し、複弁八葉蓮花文、さらに珠文縁をめぐらしている。大宰府系鴻臚館式古瓦の特色を備えたもので奈良時代に比定される。（小田）

2、土師器（図版五三、第48図3～8）

いずれも小西信二氏の採集品で、3～5はC2地点（字南谷二三五の畦道）の傾斜地に露出していたもので、7・8はD地点（字南谷一六九ノ一）で田の畦道が雨によって崩れた土中から出土したという。

小皿（3～6）　すべて糸切底で5は高台がつく。3は口径七・九センチ、器高一・四センチ、底径六・八センチをはかり、底部に板状圧痕がみられる。4は口径八・六センチ、器高一・三センチ、底径六・一センチをはかり、やはり底部に板状圧痕が残る。5は口径八・九センチ、器高一・三センチ、高台径五・四センチで腰があまり張らない。6は口縁部が内屈する厚手小形品で口径四・四センチ、器高一・九センチ、底



第48図　南谷地区採集古瓦・土師器・中国陶磁拓影・実測図

径二・二センチをはかる。

大皿（7・8）　いずれも糸切底で尖り気味の口縁部をもつ。7は口径一三・六センチ、器高二・四センチ、底径九・九センチをはかり、8は口径一二・四センチ、器高二・七センチ、底径八・六センチをはかる。3～5はほぼ同時期で一二～一三世紀に位置づけられ、7・8も同様である。

（武末）

3、中国陶磁

白磁（図版五二の下・五四）

四耳壺（図版五二の下、第48図1）　口～頸部は欠損しているが、四耳をとりつけた肩部が張り出して最大径となり、胴部は長胴で底部にしぼられてゆく。鋭く削り出された高台は厚く安定がよい。青白色に発色した釉が内外にかけられ、高台部は露胎である。白色の堅緻な胎土がうかがわれる。現高二二・四センチであるが、完形であれば三〇センチ弱となろう。肩部最大径一八・六センチ、台径八・三センチである。太宰府地方で多く発見される種類のもので、中国華南地方（福建省方面）の製品で、南宋代に日宋貿易品として輸入された。本例のように口～頸部を削って火葬骨蔵器に使用される場合もある。一三世紀代に比定される。C1地点（字南谷二四八の一・原野）を田に改良するために削土した際に地表下二〇センチで発見されたという。小西氏採集品。

（小田）

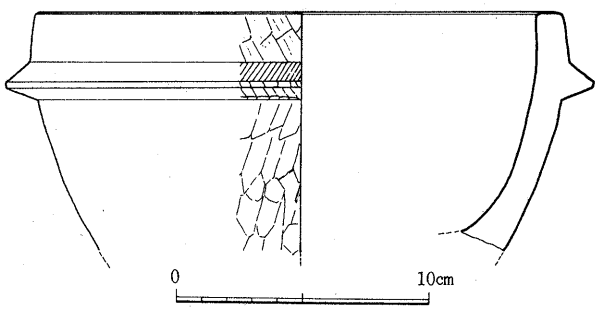
皿（図版五四の1～3）　小さな平底の底部を有する。白灰色を呈し、若干粗い胎土を有する。淡黄灰白色の釉には細い貫入を多数伴う。一一

世紀後半頃から一二世紀前半代にかけて多く出土する。B地点、小西氏採集。

椀（図版五四の4～8）　4・5は玉縁状の口縁部片である。7・8は口縁部を丸く収めるか、若干外反させるタイプである。4～7の胎土は灰白色、釉は乳灰白色を呈する。8の釉は若干黄緑色をおびる。皿（1～3）と同様に一一世紀後半から一二世紀前半代にかけて多く出土するタイプである。B地点、小西氏採集。（森田）

青磁（図版五五の1～8）

椀　無文のもの（4・8）、外面に蓮弁文を有するもの（1・6）、内面に花文を有するもの（5・7）および外面に花文を有するものとがある。いずれも龍泉窯系である。5・7の高台は断面四角形を呈する。5は内底と高台畳付に目跡を残す。椀にかぎってみると目跡が残る場合は必ず4足であるが、皿の場合は稀に3足もみられる。7は高台内に円形の焼台を置いて焼成している。5・7は4と共に一二世紀後半から一三世紀前半代に多く出土する。1は鎬を有する蓮弁文椀で一三世紀代に多い。6は内底に花文をスタンプした例で、このようなスタンプ文様は一三世紀後半代以降に多い。3の口縁部は丸くまた外反する。この特徴は一四世紀中頃以降に多い。2は体部外面に文様を描く例で、明代に属する。B地点、小西氏採集。（森田）



第49図　南谷地区採集滑石製石鍋実測図

4、滑石製石鍋（図版四二の6、第49図）

滑石製の小破片で、復原すると口径約二六・〇センチになる。口縁端から約二・〇センチ下方に鍔を巡らす。外面は荒い削り痕を残す。石鍋は九世紀後半頃から縦耳のものが出現し、一〇世紀段階になり鍔を巡らす例が若干みられるようになるが、石鍋の最盛期は平安時代終わり頃から鎌倉時代初期にかけてである。しかし、この段階で消滅することなく一部室町時代にまで残るようである。本例は平安時代終わり頃から鎌倉時代のものと推定される。A地点（字中堂四四・林）小西氏採集。（森田）

Ⅵ 北谷地区（図版五六・五七の下）

1、瓦器

鉢（図版五七の下）　北谷在住斉藤徳之助氏がその所有地（字冷林）で、一九五九年頃植林中に発見されたものである。内山から北谷に通ずる道の傍にあたり、地下約一尺くらいのところで発掘されたという。外反する口縁部の大部分を欠失しているが、復原口径二三センチ、高さ二三・五センチ、厚さ一センチの丸底半球形鉢である。土師器系瓦質で、表面には上下方向の篦削りが加えられ、上半部はさらに回転ナデ整形されている。胎土には砂利を多く混えており、平安時代後期ごろであろうか。蔵骨器などの可能性が大きいように思われる。（小田）

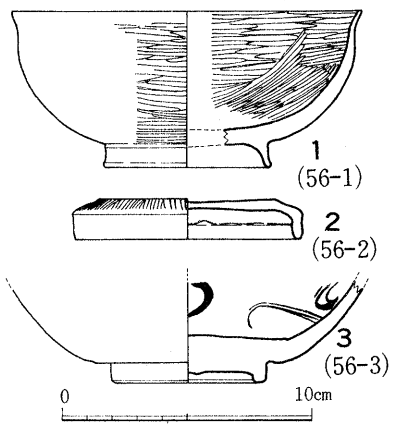
椀（図版五六の1、第50図1）　口径一四・〇センチ、器高六・二センチに復原できる。高台および外底面を除く他の部分は非常に丁寧なヘラミガキがなされている。丸味を有する体部および若干外反する口縁の特徴から瓦器椀のなかでももっとも古期に属するものである。このような形態は通例黒色土器にみられるもので、瓦器の段階にまで残る例はきわめて少ない。A地点（字熊崎九〇五の一一九・原野）で小西氏によって採集された。（森田）

2、中国陶磁

青磁（図版五六の2・3、第50図2・3）

合子（2）　約四分の一程残存しており、口径九・〇センチ、器高一・六センチに復原できる。天井部は二段になり、下段は放射状の沈線、上段は花文が描かれている。白色緻密な胎土に淡青緑色の釉がかけられている。C地点（字イヤノ浦五七六・田）より小西氏採集。

椀（3）　上半部を欠失している龍泉窯系の青磁である。体部内面に三つの単位からなる花文を片切彫りにより描いている。胎土は暗灰色、釉は暗緑色を呈し、焼成はあまり良くはない。一二世紀後半代。B地点（字小野三九・林）より小西氏採集。（森田）



第50図　北谷地区採集瓦器・中国陶磁実測図

Ⅶ　花見ヶ丘火葬墓（図版五七の上、第51図）

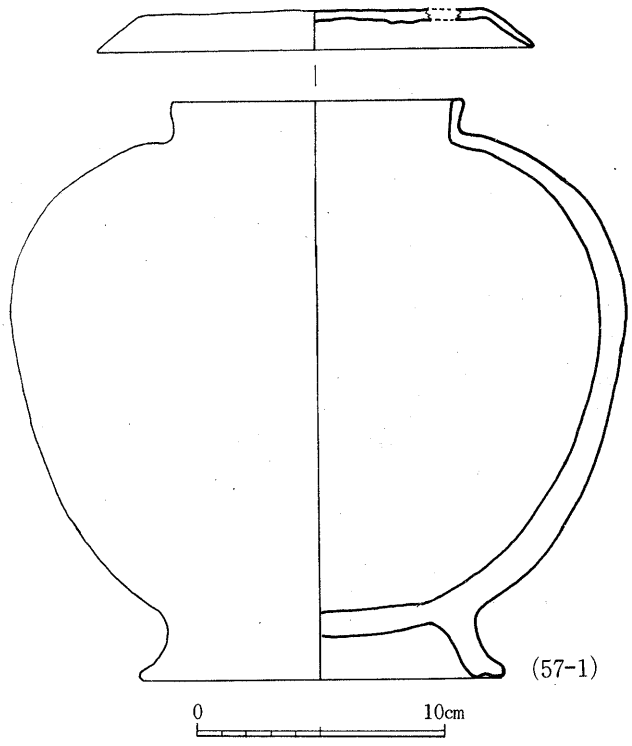
天満宮から竈門神社に通ずる道路の東丘陵で俗称花見ヶ丘の地を開墾中に地下二尺余のところから蔵骨器一個が発見された。容器の周囲には木炭が填められていたという。この蔵骨器は故山内興隆氏（西正寺住職）が保管されていたもので、一九五九年五月に拝見して上述のような話をうかがい、実測・撮影をしておいたが、現在では行方不明となっている。その後遺跡周辺の開発がすすみ、山内氏も逝去されたので正確な地点を確かめえないが、小西氏に質したところ現在の菅谷団地のなかに当るであろうということであった（第1図参照）。

蔵骨器はいわゆる寄集形式で、須恵器の壺と皿の組合せである。

蓋　径一七・七センチ、高さ一・六センチ、底径一四センチの扁平な形態である。鼠灰色の堅い焼成で、底面は篦切りのあとがのこされている。内面、側面にはナデ整形がなされている。

蔵骨器　台付の短頚球形壺の形態である。褐色の堅い焼成で、口径一一・八センチ、高さ二三・二センチ、底径一四・八センチ、胴部最大径はやや上位にあり二四・八センチとなる。高台はやや高く外反している。表面には格子目叩きを加え、肩部をのこして粗い回転カキ目整形されている。発見された際には蓋は破れて内部に落ちこんでいたという。

両者の示す特徴から奈良時代に比定されるであろう。（小田）



第51図　花見ヶ丘出土蔵骨器実測図

Ⅷ　経塚遺物（宝満山経塚）（図版五八～六〇）

本経筒および金銅仏はかつて故石田茂作氏が一九五六年六月の「ミューゼアム」誌上で紹介された。[1] 太宰府市に在住された故河内卯兵衛氏の所蔵品である。石田氏の報文では昭和一六～一七年頃にこの仏像を実見されているので、それ以前に出土したことになる。最近小西信二氏の踏査報告によると内山集落西方にあたり中堂谷の西を画して南に延びる丘陵尾根上が出土地であろうと推定される。この尾根上にはいくつかの高所があるが、最も有望な推定地は最南端にあたる標高一九三・五メートルの高所である。ここに古く発掘された跡がみられる。字南谷九九番地と字冷林三五〇番地の境にあたる（第36図参照）。

1、銅製経筒（図版五八）

経筒はいわゆる鋳造有節円筒式経筒に属し、六角傘形蓋を被せている。蓋を被せた通高二六・六センチのこの経筒は黒色を呈し緑錆が斑状にみられる。

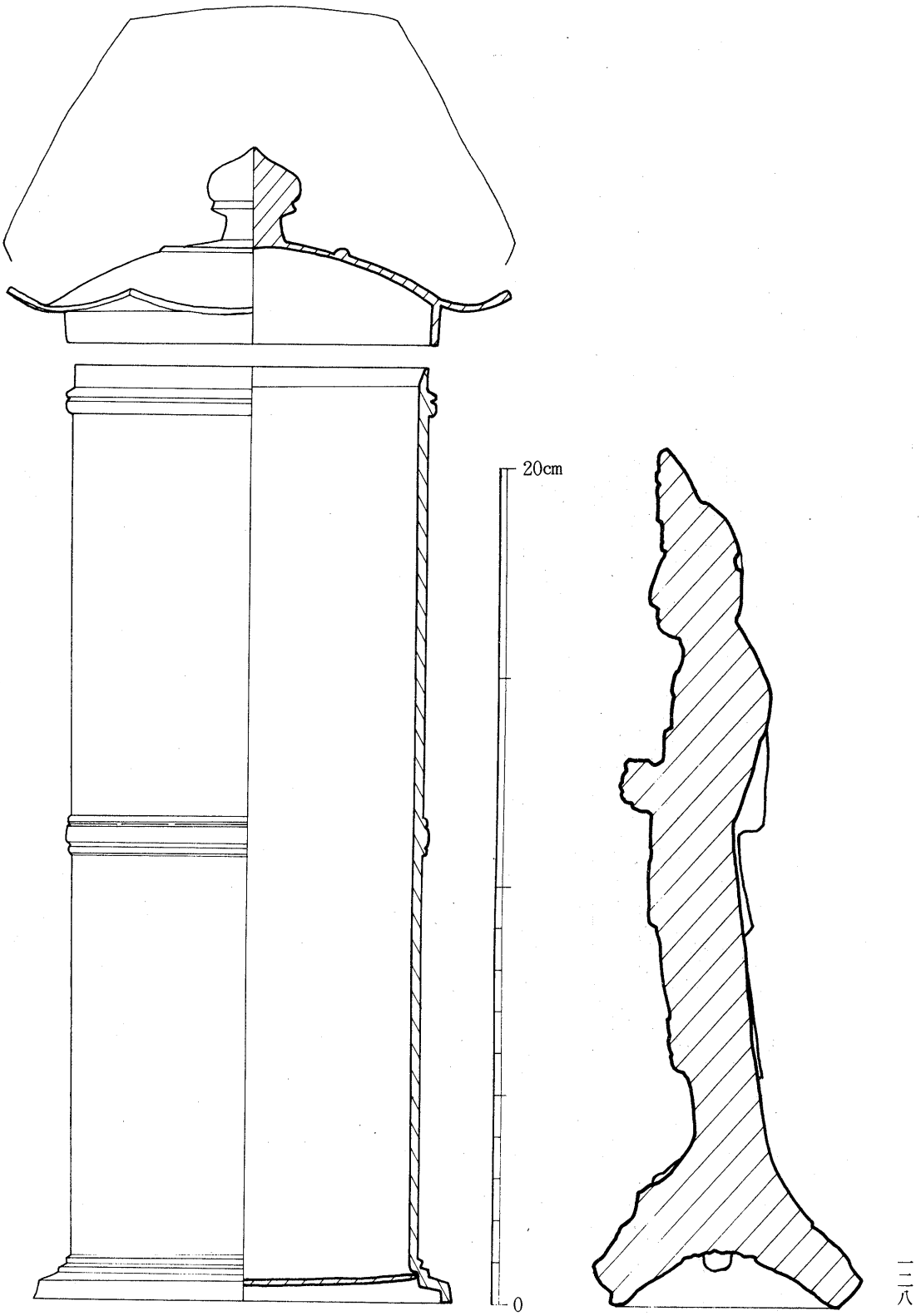
筒身は高さ二二・四センチ、口径八・六センチ、底部は三段造出台座となり底径一〇・二センチとなる。厚さ二ミリで、底板は鋳銅板を外から嵌入している。口縁下と中央部にそれぞれ分節した造出節をめぐらしている（第53図）。

蓋は高さ四・七センチ、口径九センチの鋳銅製である。低い傘形で上面観は六角形につくられ、中心部からゆるやかに下り端部近くで再び反転する。径一二・四センチとなる。中心部には宝珠形摘みをつけ、これをとりまく隆起帯を傘部にめぐらしている。

以上のような経筒の特徴からみて平安時代末期の経筒諸例と共通するところが多い。本例とよく似た例として現在太宰府天満宮宝物館の蔵品中に太宰府市坂本善正寺跡出土と伝える長治三年（一一〇六）在銘の六角形傘蓋有節円筒式経筒がある[2]（第52図参照）。かつて九州発見の紀年銘



第52図　参考資料・長治三年銘銅製経筒　（太宰府天満宮宝物館蔵）



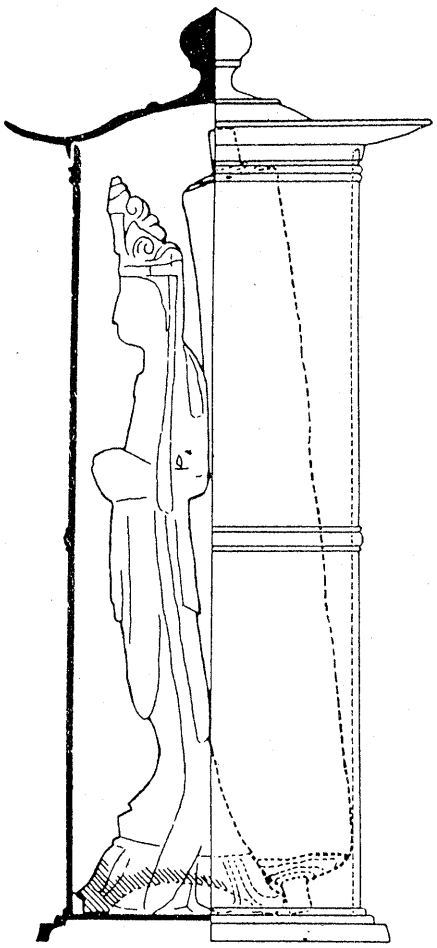
第53図　宝満山経塚出土銅製経筒・金銅仏実測図

ある経塚を集成した際に一一一～一一三〇年の二〇年間に集中的にみられることを指摘しておいたが[3]、本例もおそらくその頃か、一二世紀の初頭あたりまでのぼせることができるであろう。

また石田氏の報文ではこのほかに写経一巻と金銅佛一軀がある。経筒内に収められていたといわれ開くことはできないが、「総長七寸五分となるが上下におのおの四分ほど軸木が出ているから、經は六寸七分幅の料紙であったことが窺われる。（中略）長い間の水浸しのためか軸木を心にして經紙は乾漆のように固く、その上銅錆に染って暗緑色となり、墨書か血書かの見当もつかない。經巻の徑は細いところで九分太いところでは一寸二三分もあろう」[1]と述べられており、さらにこの経巻が法華経八巻のなかの一巻であれば、八巻を納入するには経筒が小さすぎるところから八巻一軸にした場合も稀にあるのでそれではないかと想像されている。

つぎにこの経巻と金銅仏がどのように経筒内に収められていたかを復原されている。

「經巻が八軸あったなら八軸の痕、一軸だったら一軸の痕があるはずであるが、それはどうかと考えながら経筒底を電燈（ママ）に照した。筒内の錆は筒外に比べて淡く、やや黄褐色を呈しているが、底の一方に片寄って、割合に大きい圓形の痕があるのを見た。そこで、わくわくした気持で早速推古佛をとって筒内に入れたところ、推古佛の蓮台が圓形の痕の上にピッタリはまるではないか。思わず膝を打ってこれだと叫んだ。しかし筒内に片寄ってあるのは解せない。（中略）蠟燭状の經巻は一方が太く一方が細くなっていて、しかもそのところどころに何か堅いもので押しつけたような痕のあるのに気がついた。（中略）そこで佛像を筒より取り出して、彫刻の凹凸と蠟燭経の太いところを下にして推古佛の背面に当てたら両方の凹凸の痕はピッタリ合った。そこで両者を合わせたまま経筒内に入れてみたところ、一分の隙もなく納まり、われながら一種の奇跡とさえ思った」[1]と述べられている。しかしその後、鏡山猛氏は別に発見事情を追跡して、仏像は経筒の外にあったという聞き取りを得ている（次頁参照）。（小田）



第54図 経筒内容復原図（石田茂作氏による）

2、金銅菩薩形立像（図版五九・六〇）

鋳銅製の経筒とともに出土したといわれるこの金銅菩薩形立像は、その埋納状況と制作時代の判定とについて、いくつかの判断が示されてきた。その経緯をたどりながら、あらためて当像の経塚埋納についてと、造像の時代的な位置づけとについて考えてみたいと思う。

まず、この金銅仏と経筒及び固化した経巻をあわせて、その埋納状況を推理された石田茂作氏はこの仏像と経巻が共に経筒内に納入されていたことを推測された。

その制作の時代判定についても、地方作ということを考慮して、厳密な飛鳥時代より幾分さがるかも知れぬとの判断を示されながら次のような像様の特徴を語られていて、形状等についての観察がつくされているので、ここに引用させていただこう。

「全面緑青錆が深いが、その間から鍍金の光がほの見え、そのウブな感じがまず心を打つ。像は両手を胸に挙げ、玉を撫する救世観音の姿勢をするもので、頭には前立式の宝冠をつけ、冠帯は長く両肩にまで垂れており、頸には三道が無く、瓔珞は法隆寺金銅釈迦の脇侍や、夢殿救世観音また百済観音に見るような板金式のものをつけている。そうして胸には掩掖衣を着、天衣は膝の正面で正叉し、蓮座は、中房の高い素弁逆蓮のものになっている。全体的には素朴な田舎作風にも見えるが、前立式宝冠、三道のない頸、板金式の頸飾、掩掖衣、天衣の正叉、垂敷素弁の蓮座等、推古仏の軌にはなはだよく合う。」(1)

この埋納状況についての推理と時代判定については、その後も受けつがれ、『経塚遺宝』(4)では、

「像は経巻とともに経筒内に納入され、同筒底の痕跡のみならず、像の凸凹と経巻の凹凸が一致することから明らかに経筒内納入が確かめられ経塚の仏像納入形制上一つの傾向を示すものとして貴重である。」

（〈経塚の伴出品〉の項）

と述べて、前掲石田氏の論考を肯定し、制作時代も白鳳時代としている。そして、埋納の時期を、当地方の経筒の在銘類品、即ち、近辺の四王子山経塚から出土した長治三年（一一〇六）の在銘経筒と同形であることを指摘して、造営年代をほぼこの頃と推定しているので、金銅仏の最下限を示していることにもなる。

ところがこの金銅仏の出土状況について、鏡山猛氏は「太宰府地域の経筒について」(5)の末尾に《経塚発見事情雑件》の項を設けて、宝満山経筒について次のように、その発見時の状況を伝えている。

〈宝満山経筒について〉

（前略）出土地及び出土状態は最近までよくわからなかったが、発見当初に現場を見た人物にあって聞書きを得たので、備忘のため記録しておこう。

発見場所は天満宮より竈門宮に至る参道に沿った小山の頂である。指示された山は標高一九〇メートルで、字図でみると太宰府町大字内山小字南谷九五番地と、同町大字太宰府小字冷林三五〇番地との境目にあたることがわかった。山の麓には吉田屋敷といわれる屋敷跡がある。

山頂には軟かい岩盤を井戸状に掘り下げた大型竪穴の底に経筒があり、その側に平瓦三枚で囲ったなかに件の奈良様式の金銅像があったということである。」

この場所は、小字南谷の区域の西の端であり、浄水場や国士館大学太宰府分校からみると、南西方向にみえる裏山といえば位置がわかりやすいかも知れない。

石田氏が旧所蔵者である故河内卯兵衛氏を最初に訪ねられたのは、戦前のことであり、その時は仏像のみが河内氏の手もとにあり、のちに経筒も入手されたようである。石田氏は初見のときから十四、五年後の昭和二十九年六月に来福の折、この経筒と仏像、経巻とを合せて調査されたときの論考が冒頭に紹介したものである。

経巻と仏像が石田氏の示される状況で筒内に入れられていたとすれば、仏像との接触面は雌型状になるはずであるが、そのようにあうところはないこと、仏像と経巻納入の旧状を再現するとしても、全く窮屈な状態で、経巻の庾せと固化のプロセスを考えると、同時納入は考えられないなど、その他にも疑点は多い。しかしながら、先に引用した鏡山氏の聞き書きによって、埋納状況が証言者の言うような安置であれば、仏像の底部と経筒の底部とに同繊維質の和紙が付着していることが理解できる。即ち、埋納穴の底面に紙が敷かれたか、あるいは両者とも紙に包まれたかが推測される。なお、附属物とされている敷石は、この経塚のものではないことも証言されていて、紙片の痕跡がないこともうなづける。

(敷石は四王寺山南麓の坂本、善正寺あと出土のものをいう。)

さて、この宝満山山麓出土の仏像については、田辺三郎助氏によって、新しい見解が提示されているので、その論考のなかから引用させていただこう。田辺氏は『小金銅仏』[6]のなかで、

「飛鳥・白鳳期はともかく、いろいろな材質の各種の大小の像が相次いで造られた天平盛時以降は、小金銅仏の需要は自らせばまってくるであろう。それは念持仏的な、いわば私的な性格が強い。だからその作者も、東大寺造仏所のような公的で、しかも大規模な作家群とは自ら異なるであろう。彼等は勢い時代の先端からおくれ、形式においても技術においても、過去の―飛鳥・白鳳或いは天平前期の―のもを真似て、そこに若干の当世風を加味して製作することになろう。技術的にはむしろ退歩を示すかも知れない。やがて平安初期、いわゆる弘仁・貞観時代の、反古典的な、言葉を変えればバロック的な一木彫像の風がこの世界にも及ぶが、それが顕著になるまでのものは、一応天平時代の範疇に入れておく方が穏当であろう。ただそこには当然、様式のいわばあいまいさがある。だからここでとりあげる小金銅仏は、いろいろと議論あるものが多いのである。」

と前置きしながら、当像について、一見古式ながら簡略化の著しいものの例としてあげ、時代判定は今後の課題であることを指摘している。そしてまた、経塚関係の出土仏像を列記するなかでも当像を冒頭にあげ、

「宝満山出土の像の顎が張り、肉付きのよい面貌が時代の下降を示し、全体の形制に写し崩れ的要素が強くても、やはり平安後期まで製作の時期を下げて考えられるかどうか。」

と、天平末―平安初期の模作、模倣、地方化の両面で考えることを示唆しているようにうけとられる。

以上、当像に対する今日までの判断を紹介してきたが、最後に筆者の観察と時代判定とについて略記して結びとしたい。

頭上の冠は前立式で、やや額に沿って湾曲するくらいである。中央上部に日月をあしらい、左右に唐草を配し、冠帯は冠の左右で結び目をつくって両肩前に垂れ、両肘にかかって消える。

面部の輪郭は四角で、面巾も広く、目鼻や口唇にタガネを入れてはいるが、表現が明らかではないのがこの像で一番気にかかるところである。首の三道は刻まず、首下胸部にみえる左右によこぎる板状のものは胸飾と思われる。垂髪は両肩上に垂れ、肩から上膊にいたるところで止まる。

胸部を斜めに横切る僧伎支（掩腋衣・覆膊衣）がみえ、両手は肘を折って、腹前に玉をかきいだくようなしぐさで、左掌を中にして、右手でそれを覆っている。

天衣は両肩にかかり、垂髪や冠帯の垂紐の下を通って両肘内側に流れ膝前で正叉し、その末端は両側に垂れている。そして腰やひざの左右にその先端をみせ、台座逆蓮の前部三枚をはさんで、前側に垂れ、地付に至る。

裙の結び紐は、玉をいだくかのような両手の下にかくれ、二条の垂れ紐となって、両脚間を流れ、その一条は膝前で正叉する天衣の下をくぐって両足間、蓮肉上、そして台座蓮弁に重なるところまでのびている。

背部の省略は著しく、両肩をクロスする天衣の巾が認めうるほかは裳の区切りもみえず、裳裾は蓮肉部を覆いかくし、垂蓮の付根まで被っている。

後頭部に方三ミリほどの角枘穴があり、その穴のまわりに頭光の頭部への枘をかしめた打傷がみられる。

ムクの鋳造でずしりとした重みがあり、底部中央には鋳造時の鉄心の先端かと思われるものがあるが、磁石の小片を近づけても顕著な反応を示さない。底部に附着した紙は、埋納時に敷かれたか包まれたかしたものの痕であろう。

側面からみる姿の体奥の薄さは特徴的で、しかも腹部を少しつき出して反りぎみに立つ姿は、飛鳥様式の仏像そのままで、総じて飛鳥仏の形制に違うところはない。

しかしながら、面部の輪廓や目鼻だち、その他のタガネ仕上げに難点があり、天衣の端の鰭状の省略をはじめ各所の写しくずれが、時代判定を迷わせる原因となっている。

当像については、少なくとも経塚造営の時期と考えられる一二世紀初頭を下限としていることだけは、一応、何人にも容認されると思われるが、もう一度、飛鳥時代から埋納時期までのどの時期に属するものか、あらためて、考えなおしてみる必要があろう。

くりかえしになるが、今までの時代判定は飛鳥様式の地方作として白鳳時代をあてる説と、天平様式から平安初期様式への転換期における旧様式模造と地方化として、平安前期までを含んでの時代判定とが提示されてきたといえる。たしかに、平安後期まで下げるには躊躇するが、同出土の経筒との銅その他の金属成分含有率についての検査も点検の要素

として必要であろうし、仏像の金属成分による各時代小金銅仏像との比較やガンマー線透過撮影による調査など、今後にのこされている検討項目でもあろう。

以上のように時代判定について、非常に困難な要素を含む当像について、積極的に時代判定を主張する論拠をもち合わせないが、次のことを提示しておきたい。

一般的に、畿内を遠く離れた九州においては、畿内の造仏様式が伝播してくるまでの時期的な下降を勘案するのが通常となっていたといえる。それは時代により異なるが、当像のような飛鳥様式の仏像については、石田氏の論考にあるように、一時代下げて鑑るのが地方所在としては順当とされていたといえる。

しかしながら　もう一度、すなおに飛鳥時代での地方様式という見方を思いなおしてみる必要はないかと考えるのである。飛鳥時代で美術様式での年代的下限については大化の改新（六四五）を旧来のものとすれば、天智天皇歿後の壬申の乱（六七二）までとする考え方や、その半ばの白村江での敗退（六六三）をとるものもある。

いずれにしても、九州では仏寺建立について、飛鳥時代にまで遡る考えは今までなかったし、旧来からの九州所在の仏像としても、飛鳥時代と判ずることは、歴史の常識を無視することであったといえる。昔からいわれてきた地方への文化伝播の時間的な差については、肯定できる面も多いが、この九州の北部、とくに太宰府あたりの情勢は、九州の他地域とは別に考えてもいいように思われる。

近年の土地開発に伴う発掘調査による、考古学分野での新事実の発見とその新見解にはめざましいものがあるが、そのうち、水城の南西の大浦や神ノ前、あるいは牛頸などの須恵器窯跡関係からの瓦当文のある軒丸瓦や鴟尾の残片が発見されている。そして、これらの時代が須恵器の編年から七世紀前半を降ることはないといい、六〇〇年前後の時期が示されてもいる。それが窯跡からの発掘で、仏像を安置する仏殿への使用のことなどは不明であり、今後にのこされた問題は大きいが、いまそれに似合う仏像をといわれれば、当像が思いうかぶことになろう。窯跡での瓦の発見と当像を結びつけるのは早計に過ぎるようにみえるが、いままでの常識になかった太宰府あたりの仏教文化の背景が徐々に輪廓をあらわしてくるように感じられるのである。

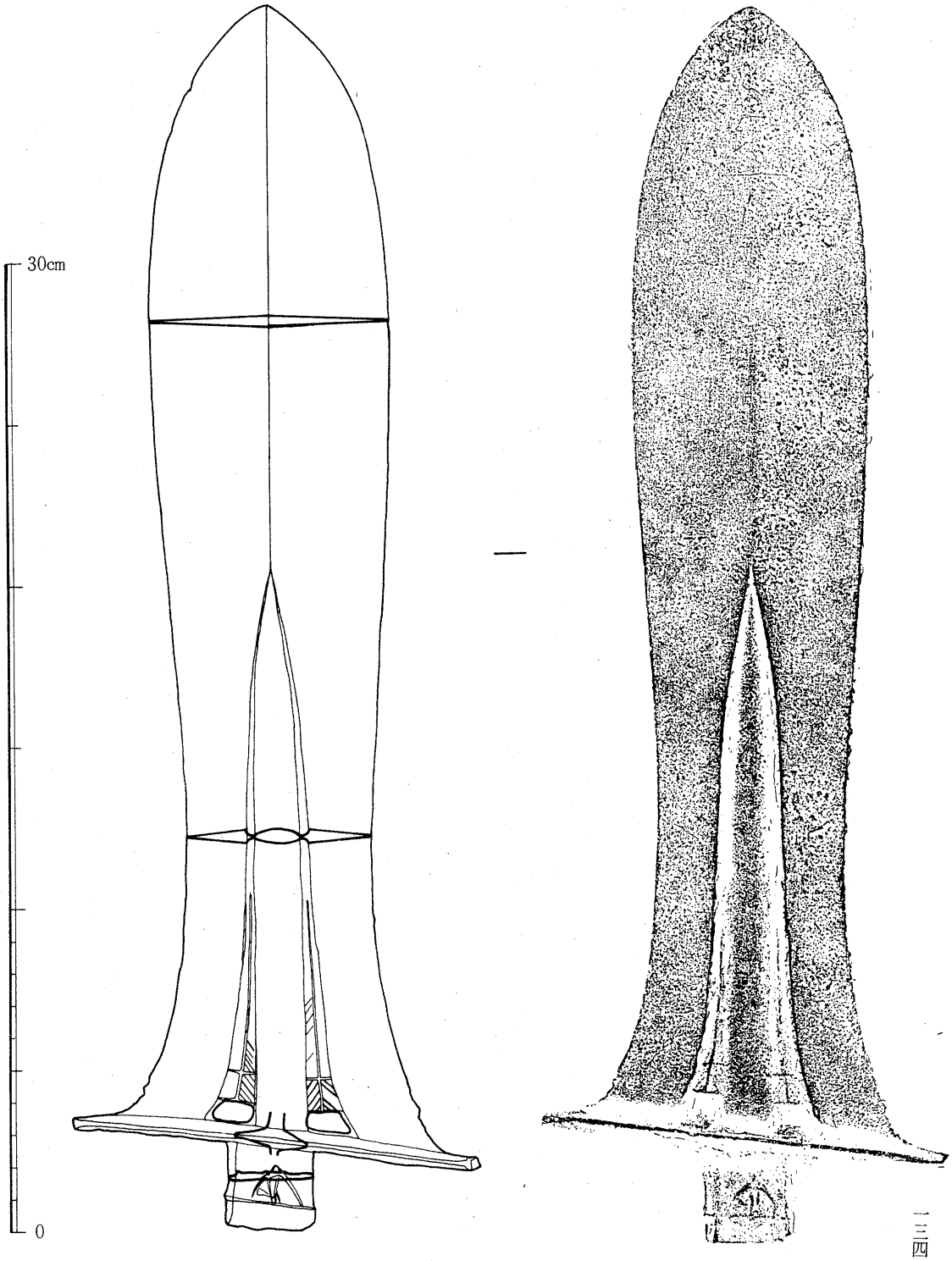
法量（単位　センチメートル）

全高二〇・六、像高一七・六、髪際下一五・二、冠の高さ二・二五、冠の幅（左右冠帯結びまで）三・六、面長二・〇五、面巾二・一、面奥二・二五、胸厚二・二、腹厚二・三、肘張四・六五、組み手上下巾一・三、組み手の出一・〇、足開（内）〇・八五、足開（外）三・一、台座高さ三・〇、蓮肉の出〇・五～〇・六、蓮肉左右幅四・二五、底部地付巾七・一、底部前後六・五、全重量一三七〇グラム

なお本経塚遺物は宝満山経塚出土品として一九五六年に国指定重要文化財となった。

（八尋）

註(1)石田茂作「推古仏を納入させる筒」（ミュージアム63号）一九五六、のち『佛教考古学論攷三・経典編』（一九七七）に収録



第55図　下宮宝物・中広形銅戈拓影実測図

(2)太宰府天満宮編『図録太宰府天満宮』一九七六
(3)小田富士雄「九州の経塚」(『九州考古学研究・歴史時代篇』)一九七七
(4)奈良国立博物館編『経塚遺宝』一九七七
(5)鏡山猛「太宰府地域の経筒について」(『菅原道真と太宰府天満宮』下巻)一九七五
(6)松原三郎・田辺三郎助『小金銅仏』一九七九

Ⅸ 下宮宝物

1、銅　戈（図版六一、第55図）

中広銅戈の完形品である。竈門神社寶物古器古文書類には明治一五年（一八八二）一一月二六日改として

「一、神軍鉾　長　一尺二寸五分
　　巾　　二寸五分
　　原因不明　　」

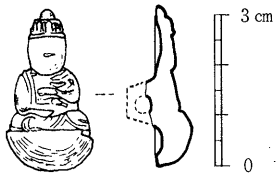
とあり、出土地点は不明である。

全長三八・〇センチで、刃部最大幅七・五センチ、厚〇・三五センチ、関部幅一二・八センチをはかる。脊幅は一・五センチ、厚〇・五センチで樋は尖端部が合し、綾杉文が陽鋳されている。茎は幅二・七センチ、厚〇・三センチで断面形でみるように鋳型のズレ痕がみられ、表面には横一線と線描の図形を陽鋳する。重量は五五二グラムである。（武末）

2、懸　仏（第56図）

唐櫃内から発見された半面鋳造の観音像である。高さ三・二センチをはかり、右手は与願印、左手は水瓶を持つと思われる。故鈴木元親氏が上宮で採集し、奉納した品かとも思われる。

（武末）



第56図　下宮宝物・懸仏実測図

3、唐獅子（菊目石製）一軀（図版六二）

いまは痛々しい姿で、前足と台座部を失っているが、完形であったころの写真（小田富士雄氏撮影・図版六二）によると、楕円状の共彫りされた台座の上に蹲居し、左前足を台座にふんばって、右前足で紐のついた毬をおさえている。いわゆる毬とり獅子で、その毬に結んだ紐が円盤状の台座の縁に垂れるリアルな彫出もうかがえる。

目をむいて何ものかを凝視する鋭い視線と長めの体を伏せるような姿勢は、躍動に移る瞬時の活写であり、力のこもった彫出である。単なる工芸品以上のできばえのものといえよう。

軽い特殊な材質は菊目石（菊銘石・海花石）といわれ、造礁サンゴ類の一種で、腔腸動物であり、表面に菊の花に似た模様をみせるのでこの名があり、暖海の産という。



第57図　下宮宝物・唐獅子の現況

以前は不明で、『竈門山旧記』の寛永十八年（一六四一）の火災後の記事に、「石之獅子珍奇之宝物也」とあり「珍奇」の表現が当像との関連で気にかかるが、いまは探査するすべもない。

法量（完形のときの小田富士雄氏の計測）

全高二三センチ、台座長径二五センチ

註　小田氏の撮影は一九六〇年一〇月七日

（八尋）

4、木造狛犬　一対（図版六三～六五）

この木造狛犬一対は、昭和五十四年の春、竈門神社拝殿床下に、矧ぎ目などすべて離れて解体の状況で納置されていたところを、その作柄と作者墨書銘に注目された小西信二氏によって見出されたものである。その面貌の迫力と体部の力感に富む彫技はみごとで、作者の出自や制作時期など、同社の他の記録から判明する貴重な作例である。

樟材を用いて彫出されたこの狛犬一対は、まず、頭体部を一木から彫出し、それを内刳りするために、頭部から背部中央に沿って鋸をいれ、左右に二分している。内刳りは平ノミだけが用いられていて、前代までに多用されてきた丸ノミの痕をみないのも、室町時代の一つの特徴として記憶にのこる。桧材などで行なう割矧ぎの技法を、樟材の性質から割り裂くことができないため、鋸を用いて割るという方法を用いているのは珍らしい手法である。

体部の接合口は通い枘などを使用し、両前足は体部へ枘差しとし、体

阿形の子持ち獅子と一対であったかどうかはわからないが、福岡県大川市風浪宮の二頭一組で毬をとる獅子の形式もあり、毬とり獅子だけ単独でもつくられたことがあったのかも知れない。

いずれにしても、宋風狛犬の系譜をひき、和風化の展開のなかで、自由な姿態が考察されていく過程での作品と考えられ、室町時代の作と考えていいように思われる。

伝来についても、明治三十五年（一九〇二）の記録にみえるが、それ



第58図　下宮宝物・吽形狛犬の面貌

内で固定している。保存状況はいいとはいえず、足先や体部の所々に朽損があり、ことに阿形の面部の損傷はおしまれるが、面部の迫力に富む彫出、そしてたてがみや体軀の抑揚とねばりのある刀法は、損傷のなかにも充分くみとることができる。

吽形の頭部には角枘穴がのこり、一角をつけていたと考えられ、いわゆる中世にも呼びならわされた「獅子狛犬」という呼び名どうりの一対であることがわかる。即ち、阿形を獅子とし、吽形の有角のものを狛犬とするものである。

吽形体内の胸部に「永禅作者」の墨書銘があり（図版六五の1・2）、作者永禅は当社にのこる獅子頭の眉裏墨書銘にあらわれる「江州永禅」と同一人であることがわかり、出自さえ知りうる。その獅子頭は今はなく、左右の眉だけが残されていて、眉の大きさから相当大きな獅子頭と思われ、『福岡県地理全誌』に「高横共ニ四尺」とあり、その大きさに驚く。その眉裏の墨書銘は左の通りである（図版六五の3）。

（その一、左眉裏）

「　　江州　永禅作
寶満下宮大幸少貳殿御（供候カ）」

（その二、右眉裏）

「　　歳五十二度
文明三年辛卯六月七日永禅作

作者「永禅」は「江州」、即ち今の滋賀県の人で、造仏修理などもあって招かれたのであろう。使用材が樟であることから考えて、当地での制

作であると考えられ、当社の木造什物の制作修理に従事しながら、また、近隣寺社の注文にも応じていたことであろう。このような畿内の仏師の往来が、いつごろから、どのような関係によってはじまり、その頻度、滞在の期間、そして当地での技術の伝達などがどのようであったのか、知りたいことは多い。しかし、このように往来の工人で把握できるものは少なく、叡山関係仏師で知りうるものは、福岡市博多区堅粕、東光院の仁王像(いま福岡市美術館蔵)に「山門之流金剛大仏師、加賀法眼宗栄」「正平廿二年(一三六七)」の墨書銘がある。山門之流、即ち叡山関係の仏師であることを記していて、制作のための西下がうかがえる貴重な例でもある。永禅、宗栄など叡山近辺の仏師の九州への往来は、同時代或いは平安後期にも遡って考えられる。そして、それらの仏師の往来と定着の歴史が、九州の仏像と仏師の歴史を理解する上で、主要な部分を占めているとさえいえるのである。

九州天台寺院のなかでも竈門神社の神宮寺は、ことに伝教大師最澄以来、天台、叡山との関係は緊密であったと思われ、それは大山寺、有智山寺の時代を通じていえることである。

当狛犬の作者が、その出自を叡山東麓の近江と記していることは、宗教的には天台系譜での関連を思いおこさせる。そして、この時代には、畿内との人的交流はそれ以前に比べて盛んであった。獅子頭の奉納者大宰少貳は少貳政資で、文明二年には大内政弘の代将陶尾張守弘護の率いる三万余騎と対峙していたという。しかし年末に和睦、獅子頭が翌三年半ばの奉納であり、戦乱の世に、束の間の和平のときであったろうか。

この狛犬のできばえのすばらしさや、準在銘作品としての貴重さばかりでなく、九州文化の系譜を示唆してくれる一つの好例であることも注目しておきたい。

法量(単位　センチメートル)

阿形　高さ九〇・〇、体長一一四

吽形　高さ八五・〇、体長一一五

昭和五七年福岡県指定文化財となった。

(八尋)

5、水鏡　一面(図版六六の上)

宝満宮で「水鏡」と呼ばれて、伝承されているこの銅製の鏡は、径三六・五センチの大きなものである。鏡背文様は無紋で、外縁から三・〇センチのところを、隆起圏線が一条まわっている。径五センチを測る鈕は分銅型で、別鋳して鏡背中央に鑞づけされている。一見して、外来品の印象をうける大あじなもので、天竺あるいは中華からのものである伝承がうなづける。

当鏡の伝来について、元禄一五年(一七〇二)に新造された筥の蓋板がのこっていて、表には金字で「水鏡」の文字を大きく書し、和歌を添え、裏に銀字で銘文など記されているので転記しておこう。

(桐材　筥蓋天板　表　金泥字)

「水鏡

新續古今集

筑前守にて國に
侍けるに日いたくてり
けれは雨の祈に竈門の
明神に鏡を奉る
とてそへたり

藤原經衡

雨ふれといのる
志るしの
見へたらは
水鏡
とも
おもふ
へきかな」

（筥蓋裏、銀泥字）

「竈門山神祠水鏡匳銘并序

竈門山又日御笠山為筑紫諸州之鎮是以有炎旱則國人必祈請于山神而求降雨蓋因名山能出雨也古昔本州刺史藤經衡在太宰府之日憂久旱之害禾稼故禱祠茲　神而請雨因獻之以大鏡一匳添之以倭歌一首載在于新續古今集今其鏡猶存焉因歌辭號曰水鏡徑一尺二寸二分此自中華所來也夫鏡者寶器也以其虚明惟神之所寓也況經衡之所獻其志欲禱雨必有應驗如此然則可謂希世之重器也今也其匳歷世之久而垢穢舊矣祠官楞伽院俊山請予之改作繇予為本郡之大吏也予於此命工新製以換舊匳奉納　廣前一為之記歳月云銘曰

於穆清廟　神鏡永熒　降雨降祥　以赫厥靈

又

我もおもふ御笠の山の陰にすめは雨も降りつつ民安しとそ

元祿壬午季夏二十四日

立花吉右衛門尉丹治増能再拜書　」

とあり、『竈門山旧記』にも左の記事がある。

同（宇多院）御宇当国ノ地頭ヲ筑前ノ守藤原ノ朝臣経衡受領ノ時旱甚雨ヲ尊神ニ祈り経衡家ニ伝へシ。天竺鏡ヲ納テ一首ノ歌ヲモ納玉フ。雨フレト、祈ルシルシノ有ナラハ水鏡トモ思フヘキカナ。其時順雨五穀ヲ熟シ国民普ク豊饒也。誠ニタケキ鬼神ノ心モ和クルハ歌ノ道ナリ。旱魃忽ニ順雨降下事神便ノ明也。鏡ニ向ウカケノ如シ。今水鏡ノ御祈禱之本尊ニ崇メ奉ル。歌ハ新続古今集ニ出タリ。」

『新續古今和歌集』は『新古今集』（元久二年―一二〇五）以後の歌人を広く収めたもので、永享五年（一四三三）、後花園天皇の勅命により、同十一年撰進された。経衡その人については明確にはわからないが、その家に伝わった鏡を奉納したという。

この水鏡といわれる銅鏡の制作時期は、中国元時代末期ごろと思われるが、中国の同類の鏡に対する編年の基準的なものがないので推測にすぎない。しかし、その傍証ともなるものがあり、木崎愛吉氏編の『大日

本金石史㈣』に、大阪市北区上福島の中天神社鏡が拓影を附してあげられている。そして、その銘に「奉寄進　天満宮御寶前　于時永和第五己未二月日　願主左近将監仲原沙彌性久」と刻しているという。永和五年（一三七九）は、中国では明初になり、それまでに舶載されていたものと思われる。

「水鏡」を用いる請雨の行事は、黒田藩の祈禱においても、古くから信仰厚く、もちろん当社においても特に重要な祈禱であった。雨請祈禱で満願の十四日の朝までに雨が降らぬと、座主が「水鏡」を抱いて仏頂山の獅子瀧に沈み、祈禱するというきびしいものであったと伝える。

法量（単位　センチメートル）

径三六・五、外縁高さ一・五～一・七、鏡厚〇・三、分銅鈕径五・〇

（註）〈竈門神社の祭礼と「水鏡」神事〉については森弘子女史の論考が『筑紫国宝満山信仰史の研究』（中野幡能氏編）に納められている。

（八尋）

6、銅鏡　三面（図版六六の下、六七）

宝満宮の『寶物古器古文書類』（明治三十五年十一月廿六日改）という宝物帳には、水鏡と呼ばれている銅鏡のほかには、鏡は左記のものがあげられている。

一鏡　　壱面神前備付……①

径　壱尺八寸　重量弐貫百六拾目
厚五分

嘉永六年炎丑筑前少将源齊溥再造

一鏡　　貳面神前備付……②

径　壱尺五寸　重量壱貫三百八拾目宛
厚五分
（「十」字脱ヵ）

寛永八年辛巳三月吉日筑前大守源忠之寄附

一鏡　　参面神前備付……③

径　壱尺五分　重量九百四拾目宛
厚五分
（「光」の誤記）

寛文十二年壬子十一月吉日筑前大守源忠之寄附」

いまは黒田齊溥再造①の大鏡が神殿に祀られていて、寛永十八年忠之公寄進の二面②が福岡県指定の文化財となり、天満宮に寄託されている。そして、寛文一二年光之公寄進の三面③のうち、八幡宮本地仏梵字キリーク（阿弥陀）の陽鋳のある鏡だけがのこっている。

現在神殿に祀られている「宝満宮」鏡①と寛永十八年忠之公寄進の二面②は三面で一具となるものであるが、「宝満宮」鏡が、嘉永六年に火災に遭ったため再造し、その旨の銘を附している。当社神鏡の近世史ともいえるもので、鏡背全銘文を転記しておこう。

「寶満宮」鏡　鏡背陽鋳銘文（隷書体）―径五四・七センチメートル―

「寛永十八年辛巳三月吉日」

大壇主筑前太守源忠之

寶満宮　坐主平石坊幸重

昔者寛永之灾神鏡爰燬我祖忠之
改鋳以獻延及光之又別獻三鏡今
茲嘉永六季有災及神鏡乃恭製六
鏡一隨舊型獻之於戲　有神尚饗

筑前少將源齊溥再造　」

右の銘文にある寛永の災とは、寛永十八年二月講堂ほか諸堂が焼失したときのことであろう。焼失後、時を移さず三月には改鋳されたということになる。この後、また黒田光之公が別に三面を獻じ、都合六面が寄進されて祀られていたことがわかる。しかし、嘉永六年の火災に、忠之公寄進の「宝満宮」鏡が火中し毀損したので、再造した旨を伝えている。この六面がどのように安置されていたのかわからないが、嘉永六年は上宮の火災のようであり、「恭製六鏡一隨舊型獻之」とあり、この宝満宮鏡だけの被災、そして再造と読むことができよう。それ故、「聖母宮」鏡や「八幡宮」鏡は今日に遺り、その二面が県指定文化財となっているものである。

その二面の鏡背銘文を次に記しておこう。

「聖母宮」鏡　鏡背陽鋳銘（図版六七の上）

「　寛永十八年辛巳三月吉日

聖母宮　座主平石坊幸重

大壇主筑前太守源忠之　」

「八幡宮」鏡　鏡背陽鋳銘文（図版六七の下）

「　寛永十八年辛巳三月吉日

八幡宮　座主平石坊幸重

大壇主筑前太守源忠之　」

主神「宝満宮」鏡の左右相殿に「聖母宮」「八幡宮」の両鏡が祀られるのであるが、それぞれの梵字は本地仏を示し、宝満宮は十一面観音であるが、聖母宮は釈迦如来、八幡宮は阿弥陀如来で、その種子が鋳出されている。

座主平石坊幸重は、正保二年（一六四五）七月、幸吟の死去により座主に選ばれた。寛永十八年の諸堂焼失後のことであり、また再建にとりかかられてはいなかった。造営は慶安元年（一六四八）に着工、同三年に竣工するのであるが、座主幸重は藩主黒田忠之に陳情して藩主を動かした。当社復興のため、いろいろな事業を行ない、明暦三年（一六五七）秋、峰入復興には「伝燈正大先達四十四世座主平石坊法印幸重大和尚」として、最後の入峰を達し、翌年万治元年（一六五八）弘有が座主職を嗣いだ。そして、延宝元年（一六七五）八十一歳で逝去したと伝えている。両鏡ともほぼ同形同様式のもので、梵字の下辺左右に二つの紐があり、鏡下部に短い柄状のものがつけられている。これは鏡台への枘の役

目をするものであろう。

法量（単位　センチメートル）

「聖母宮」鏡　径四五・七、縁厚〇・八、鏡面厚〇・四
柄長さ四・二、柄巾四・九五、柄厚〇・七

「八幡宮」鏡　径四四・九、縁厚〇・八五、鏡面厚〇・四五
柄長さ三・八五、柄幅四・八五、柄厚〇・六

さて、寛文十二年、光之公寄進の三面のうち、「キリーク」鏡だけがのこっているが、おそらく、他にも 𑖀𑖪 (キャ) (宝満宮本地十一面観音)と、𑖀𑖨 (バク) (聖母宮本地釈迦如来)を鋳出した二面の鏡があったことはたしかである。

「キリーク」鏡　鏡背陽鋳銘（図版六六の下）

「寛文十二年壬子十一月吉日
𑖀𑖪 座主　平石坊弘有法印
大壇主筑前太守源光之　」

光之公寄進の鏡は、前忠之公寄進のものより小型で、径三六・二センチである。梵字左右に簡素な紐が二個あり、柄はついていない。

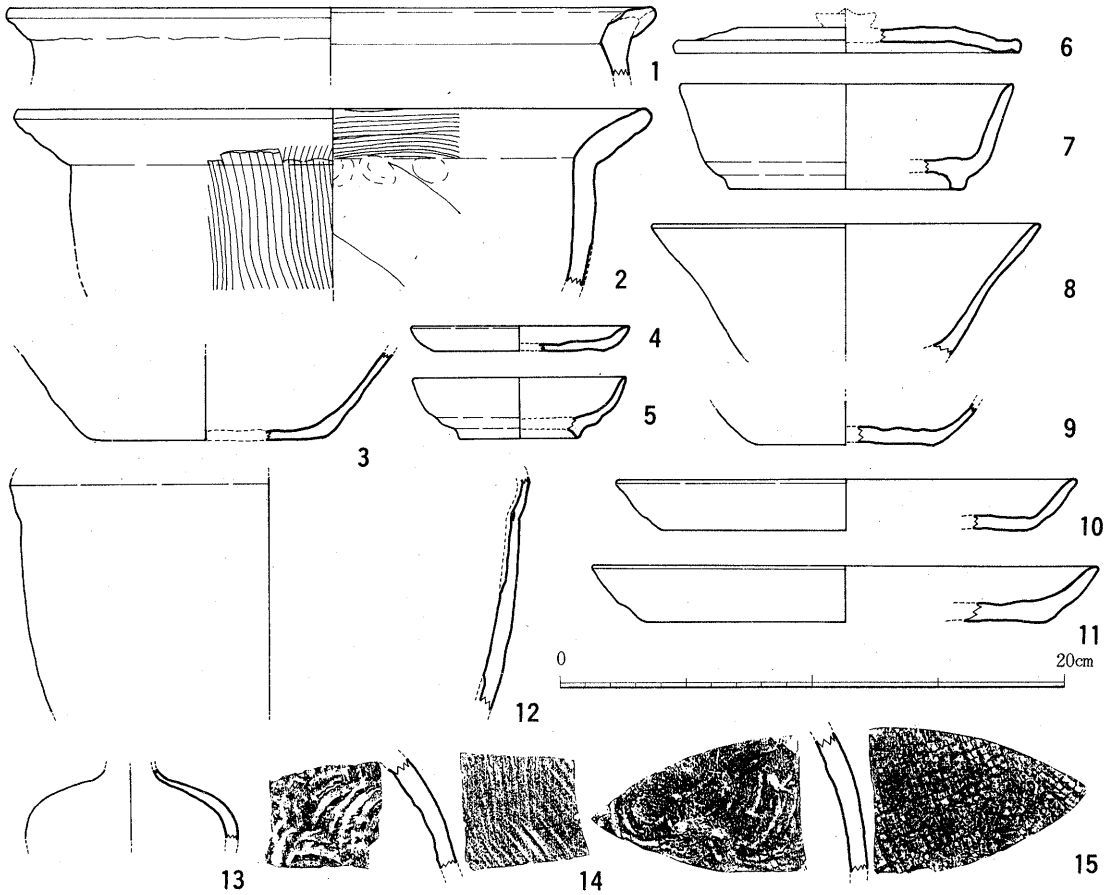
座主平石坊弘有は、幸重を嗣いで、万治元年（一六五八）、十九歳か二十歳ほどであったが座主職を継ぎ、修験教団当山派と本山派の勢力争いの処置をてはじめに、小石原深仙の復興、梵鐘鋳造その他多くの事業を行なって近世の宝満では最大の偉業をなした。しかし、詳しい理由は明らかではないが、弘有が聖護院末につらなり、彦山支配から離れようとしたことが、彦山派の反発をかい、藩主を動かし、とうとう弘有は禁錮に処せられ、平石坊は断絶した。それは貞享五年（一六八八）ごろのことである。弘有三十年の座主職在位のほぼ半ばごろの事業としての神鏡献納であるが、くしくも同じく名を鏡背面に記す光之公の命によって離山の憂目にあうことになるのである。

法量（単位　センチメートル）

径三六・二、縁高〇・九、縁巾〇・八、鏡面厚〇・三
鈕径(右)長径一・一、短径〇・九
(左)長径一・〇、短径〇・八

（註）「幸重」「弘有」については中野幡能編著『筑前国宝満山信仰史の研究』によった。

（八尋）



第59図　大南窟出土土器実測図

付・大南窟出土遺物

窟外の下方（筑紫野市大字大石字水上七九五）から小西氏によって採集された資料で、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器がみられる。窟への供献品が流出、堆積したものであろう。

1、土師器（第59図1～4）

甕（1・2）　1は口縁部調整の仕上げを省略したために粘土の継目が顕著に残り、擬口縁をつくって更に粘土をかぶせた様子がよくわかる資料である。内面頸部以下はヘラケズリで仕上げる。2は外面タテハケ、内面は斜方向のヘラケズリ仕上げである。

坏（3）　下半部の破片で内外面ともヨコナデ仕上げである。

皿（4）　糸切底の小破片で、器高一・五センチ、口径八・六センチをはかる。

2、須恵器（第59図6～15）

埦・坏（7～9）　7は口径一三・二センチ、器高四・二センチをはかる埦で腰の張りはない。8は体部から口縁部にかけて大きく開き、口径一五・三センチをはかる。9は坏の底部でヘラ切り後にナデ仕上げされている。

蓋（6）　口径一三・七センチをはかる扁平な蓋である。

皿（10・11）　いずれも底部をヘラ切り後にナデ仕上げされた皿で、10は口径一八・二センチ、器高二・〇センチ、11は口径二〇・一センチ、器高二・二センチをはかる。

壺（12・13）　12は長胴壺の肩から胴部にかけての破片で、胴下半部はヨコ方向の回転ヘラケズリで仕上げられている。頸部つけねでしまり、口頸部は短く直立するタイプである。13は高台がつき、やや細長く直立する口頸部をもつ小壺の頸部つけねから胴上半部にかけての破片である。

甕（14・15）　いずれも胴部の小破片で、14は平行条線、15は木目格子の叩き目が施されている。

3、瓦　器（第59図5）

高台付皿の破片で、口径八・三センチ、器高二・四センチをはかる。図示しなかったが小皿の小破片もみられる。

4、中国陶磁

図示しなかったが、細く高いつくりの白磁埦高台部分の破片がみられる。

以上の資料は大きく1・2・6～15と3～5・中国陶磁の二時期にわかれる。前者は大半が八世紀末から九世紀前半代に位置づけられるが、8だけは九世紀後半代まで下降する。後者は一二世紀後半から一三世紀前半代のものである。

（武末）

第四部　結　語

小田富士雄

これまで一九六〇、六一両年度に実施した宝満山遺跡の考古学調査に始まり、関連する周辺の収集資料を探索してまとめてきた。当初における考古学調査の目的は古代における宝満山の遺跡や信仰の実態を明らかにすることであった。しかし、探索をすすめるにつれて遺跡の範囲も広範に及び、収集された資料も古代から近世に至る多量なものであった。そこで三部に大別してこれをまとめることにした。

第一部では文献資料を中心として、古代の竈門山信仰の起源と歴史的変遷をたどり、中世以降は歴史年表によってその豊富な内容をたどって現代まで到達した。

第二部では大別して上宮地区と下宮地区における発掘調査の結果をまとめた。上宮祭祀遺跡は八世紀代から一〇世紀代にわたる竈門神社にかかわる祭祀を物語るものであり、下宮礎石群は奈良時代に神宮寺として発足した竈門山寺が、平安時代以降大山寺に発展し、中世には有智山寺（内山寺）を称して勢威を振った堂舎の一つである。いずれの調査も試掘程度の基礎的調査にとどまったが、この方面の研究に有力な手がかりを得ることとなった。

第三部では宝満山の山中から山麓にわたって多くの遺物が各方面に収集されているところから、それらの資料を整理記録することとした。地域も広範にわたるため、便宜的に地勢にしたがった地域区分を設けて資料解説を加えた。しかしながら、その量の多いために、一点一点にいたるまですべてを網羅することは不可能であったから、歴史考古学上、また美術史上重要と思われるものを収録するにとどめざるを得なかった。とくに近世修験にかかわる坊遺跡などから収集されている国産陶磁の類は、すべて省略するにいたった。これらについては近世山伏たちの修験生活を物語る資料の一環として、将来修験民俗の立場からまとめられる機会があることを望みたい。

上宮祭祀遺跡では八世紀後半にまでさかのぼる頃から一〇世紀にいたる祭祀が行われていたことが知られていたがその背景には竈門神社が朝廷からも次第に重視されて叙位昇格を重ね、一〇世紀前半には式内社に列せられるに至った歴史がある。元来、竈門山信仰は日本各地の霊山にみられるような原始的な山岳信仰に由来するところであったが、

家門ひいては国家の繁栄にもつながる大陸系の竈門神信仰が導入され、大宰府の設置とともにその鎮護神となって律令国家の祭祀にかかわる道がひらかれた。上宮地区の収集資料のなかに奈良三彩小壺や多くの皇朝銭がみられることは、宗像郡沖ノ島や岡山県大飛島などの祭祀遺跡とも共通するものであり、おそらく遣唐使派遣や大宰府管内の重大な政務にかかわるような内外の国家的祭祀が行われたであろうと推察される。このことは九世紀代に降ってはじめて史料に記載された最澄入唐に際しての竈門山寺への参籠の事実も、このような伝統にもとずくものであったと考えることによって容易に理解されるであろう。実態が不明であった八～一〇世紀代の竈門山祭祀の性格を示すものとして重要であろう。

下宮礎石群の調査は古瓦その他の遺物から、この地域に奈良時代に創設された竈門山寺が存在したことを知ることができ、現存する礎石群は火災に遭ってのちに、旧礎を転用して一一世紀代以降に再建された大規模な堂舎であることが明らかになった。これが史料に伝える大山寺の一部であることは疑いないであろう。元来、大山寺は竈門神の神宮寺として出発したものであったが、竈門神の昇格とともにその地位も向上し、とくに最澄の参籠以降は叡山との関係を生じ、その遺言による六所宝塔造立の一つにあげられた。かくして一〇世紀までには大山寺の寺号を称するほどの独立的傾向を示すほどの台頭を示したが、一二世紀代には朝廷と叡山の強い支持のもとに僧兵をも擁し、また日宋貿易にも関与して、政治的、経済的に大きな地位を築き、大宰府官人の進退をも左右するほどの勢威を示して中世まで持続するにいたった。竈門山寺は山中に営まれた各所に在る堂舎を総称するものであったようである。このことは収集された古瓦資料には奈良時代から平安時代に及ぶものが点在するところからうかがわれるが、やがて大山寺を称するようになってからさらにこの現象は拡大していったかに思われる。一一世紀以降の大山寺は、わが国の一般的傾向として認められる修験思想の揺籃期でもあった。これまで上宮遺跡でみられた神道的祭祀は影をひそめ、かわって登場するのは一二世紀代以降にあらわれる懸仏や陶製経筒などに象徴される仏教的色彩の強い祭祀である。一一～一二世紀代を転機としてみられるそれ以前の神道的祭祀と、それ以後の仏教的祭祀の在り方は、この空白期間が宝満山に

とって、大きな転換期であったことを物語っているであろう。下宮礎石群の調査成果と史料にあらわれる大山寺の活動はこの転換に呼応するものであり、初期修験活動もこの趨勢のなかで譲成されつつあったと思われる。宝満山修験の編成と全盛は中世後半期以降であろうが、法城窟調査の成果などもその一傍証となるであろう。宝満山中は修験の霊場となり、山中の所々に堂舎や坊が整備されるようになった。『竈門山旧記』にも、

「今内山ノ里在家ハ昔シ南谷ト云。衆徒の居所也。内山ノ里ヨリ五町上ッテ地蔵堂惣門ノ入口也。今地蔵ノ原ト云ウ所也。上宮ニ対シテ下宮ト号ス。大塔、金堂、鐘楼、大講堂、僧房、食堂、文庫、経蔵、神社伽藍所々其跡猶存セリ。」

と記されていて、中世末から近世に及ぶころの宝満山の盛況がしのばれる。『筑前国續風土記』にも古来三七〇坊があったと伝えられ、近世の宝満山は修験の山と化している。

山中の随所から発見される中世以降の遺物はおびただしい量にのぼっており、これらは上述のような歴史的背景のもとに、大山寺やがては有智山寺（内山寺）を称して活動した衆徒たちのかかわる遺跡からの収集資料であると思われる。しかし、それのみではない。九重ヶ原上方にはいまも土塁や堀をのこす少貳氏の居館跡と伝えられる有智山城跡がある。武藤資頼が大宰少貳に任じられてより、この地に居館を構えたといわれ、以来南北朝動乱期には有智山寺の衆徒もかかわることとなった。山内の収集品には、彼等の日常生活に使用されたと思われる土師器、陶器、瓦器などのほか、多くの中国陶磁が注意される。大宰府や大山寺が対宋・元・明貿易によって入手した浙江、福建方面からの製品が流入しており、この分野の研究にとっても重要な資料が含まれている。

宝満山調査は二〇年前にようやく手をつけたものの、その後の進展はないままに今日に至っている。近年修験研究のブームによって再び宝満山も諸方面からの注目を集めはじめている。まだ数多く眠っている宝満山遺跡の究明はこれからである。本書は、これから将来に実現する日が来るであろう宝満山の本格的調査のための予察的段階の成果であるが、これによって、宝満山研究の基礎的資料が提示できるならば、本書を発刊した意義も果されたというべきであろう。あわせて、山中遺跡の保護に努められんことを関係各位に望みたい。

編集後記

太宰府天満宮が主催する宝満山総合文化調査が企画されたのは一九六〇（昭和三五）年のことであった。当時の学術調査班の陣容については本書中の調査経過の概要に記したとおりである。当時私は九州大学文学部考古学研究室の助手を勤めていた関係上、鏡山猛先生らとともに考古学関係部門の調査を担当したのであった。昭和三五・三六両年にわたっていずれも短期間ではあったが前後三次にわたる調査を実施した。宝満山にはじめて学術調査が導入されたわけで当時の報道関係も多大の関心を示してくれたのであった。発掘資料についてもその直後に大体の整理を終えていたのであったが、まもなく調査会が解散したためにその後考古学調査の記録類一切が私の手元に保管されたまま今日にいたってしまった。その間折にふれて福岡周辺で宝満山関係の資料所蔵者に会うごとに記録を作成していたところ、こちらの方もかなりの量に達してきた。また一九六〇年の第二次調査の概要については、昭和三六年度西日本史学会春季大会で「太宰府宝満山の考古学調査」と題して紹介したが、さらに、

「古代に於ける筑前竈門山寺の活動」　史跡と美術　31―10・一九六一

「筑前『竈門山旧記』校本」　神道史研究　17―5・6・一九六九

（以上ともに『九州考古学研究・歴史時代篇』一九七七収録）

として関係論文と史料校本を公表してきた。

ところで、一九七九年になって中野幡能氏が、天満宮文化研究所の依頼をうけて編纂中の宝満山の歴史のなかに発掘調査の成果を執筆するようにとの依頼をうけた。同研究所の森弘子氏が私のもとに来られたので集積していた資料をお目にかけ、短時間の間では調査の概要を紹介する程度にとどめざるをえないことで御了承願ったのであった。かくして三次にわたる考古学調査の概要をまとめて「宝満山遺跡発掘調査概要」と題し、中野幡能氏編著『筑前国宝満

山信仰史の研究』（一九八〇年太宰府天満宮文化研究所刊）に収録された。

この概報を契機としてにわかに宝満山遺跡調査の正式報告書を発刊しようという話が具体化してきた。しかしながら調査以来すでに二〇年近く経過しているので、当時の日誌と記録だけでは記憶を呼び戻しにくいところも少なくない情況であったから、天満宮に保管されている発掘資料を再点検して不備なものについては再実測、再撮影を行なう必要が生じてきた。またその後に周辺の方々が採集保管されている新資料も少なくないところから、それらの追加調査も必要であった。なかでも天満宮に勤務されている小西信二氏の収集資料は量的にも内容的にも豊富なものであった。一九八〇年から八一年にかけて改めて資料整理を企画し、天満宮文化研究所の一室を借りて関係資料をあつめ、前後二回にわたり整理を行った。これには武末純一（北九州市立歴史博物館）、森田勉（九州歴史資料館太宰府遺跡調査部）氏らの協力を受け、天満宮からは井上正彦、森弘子、小西信二氏らの御世話をうけた。また九州歴史資料館出陳中の資料調査には同館の亀井明徳氏の御世話をいただき、墨書土師器の撮影には同館の石丸洋氏をわずらわした。これらの資料調査を通じて内容が彫刻、墨書土器などをも含むところから執筆段階でさらに九州歴史資料館の八尋和泉、倉住靖彦氏らの協力をも依頼して本書のような体をなすにいたった。この間、森、小西両氏には関係資料の収集や渉外関係の雑務にあたっていただき、また執筆まで参加していただいたこともあわせて感謝申し上げる次第である。

当初の調査以来二〇年の歳月が過ぎてしまったが、その間に関係者のなかで長沼賢海先生をはじめすでに鬼籍に入られた方々もある。調査をともにした鏡山猛先生も古稀をすぎ、渡辺正気氏も還暦を迎えるにいたった。思えばついこ近年のように感じながら遠い歳月を重ねているのであった。調査当時顧問であった干潟龍祥先生、調査会代表を務められた西高辻宮司が本書の刊行に至るまでひきつづき御健在で、私どもの仕事の完了のために御理解を示され、本書のために序文をいただいたことは感慨をとくに深くしたところである。

この二〇年の間にわが国の歴史考古学の進展はめざましいものがある。すでに遠くなった過去の記憶を呼びおこしながらまとめた本報告が現在の研究段階に資するに足り、また将来の調査研究に継承されてゆくことを念ずるのみで

あるが、幸いにも関係資料の執筆にはそれぞれの専門分野で活躍されている方々の協力が得られたことは本書の価値を高からしめるものであろう。かくして二〇年来気がかりであった宝満山調査の結末をつける機会をつくっていただき、永年にわたる肩の荷物をおろさせていただいたことにあつく感謝申し上げる次第である。

なお、宝満山の歴史をまとめた学術書に中野幡能編著『筑前国宝満山信仰史の研究』（一九八〇年刊）があり、また現地案内書に森弘子著『宝満山歴史散歩』（一九七五年刊、葦書房）がある。あわせて参照されたい。

一九八二年七月

北九州市立歴史博物館にて

小田富士雄

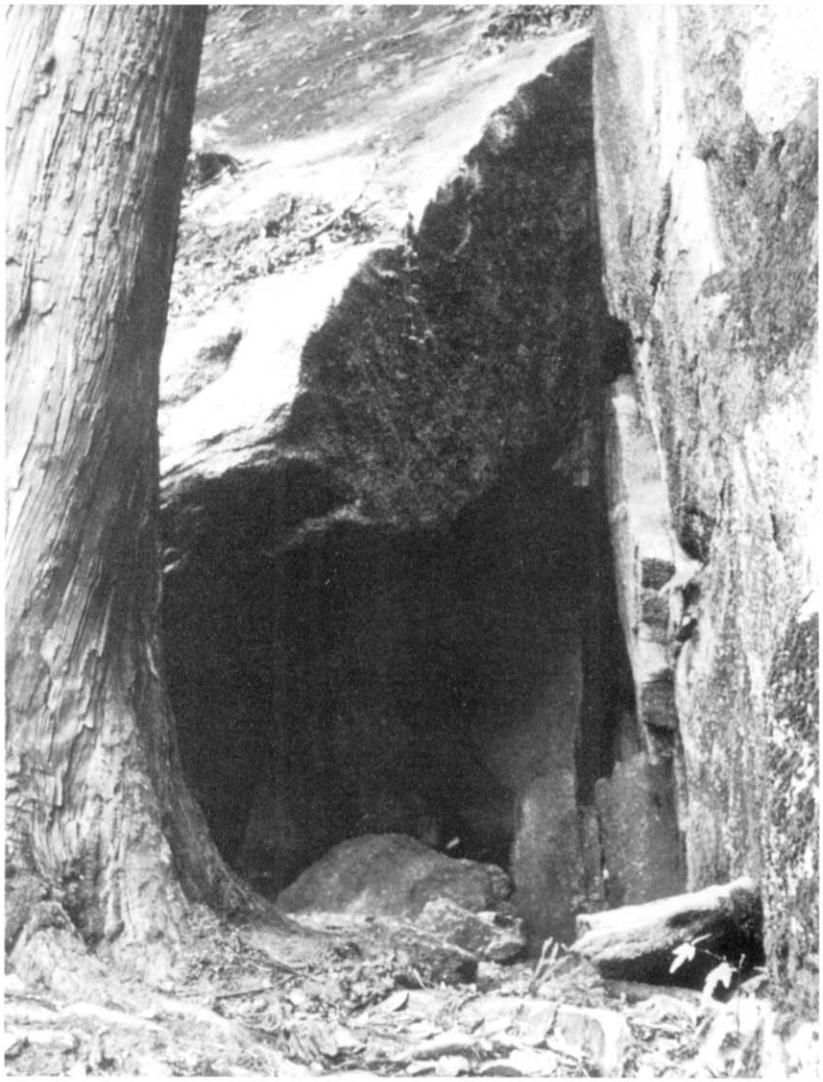
宝満山遺跡の調査　図版

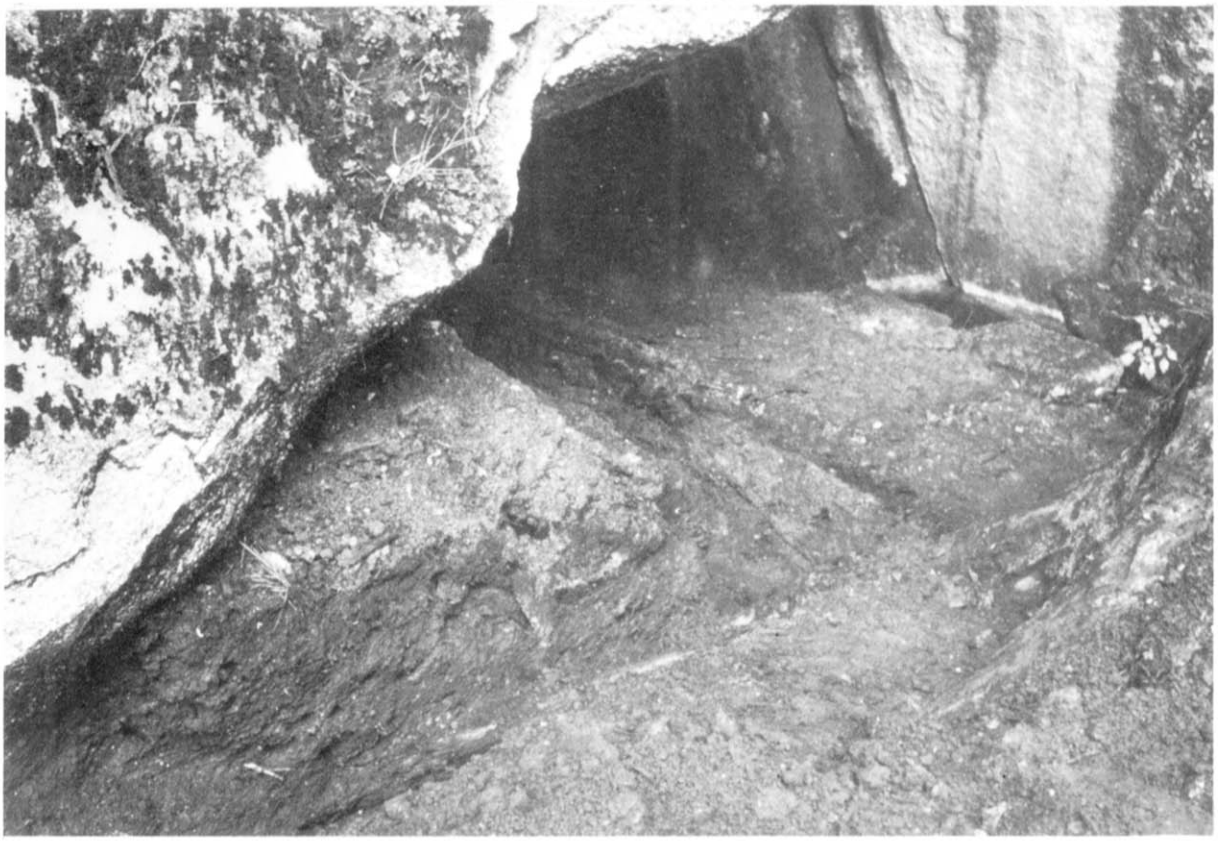


外観（右からA，B，Cトレンチ）　南より望む

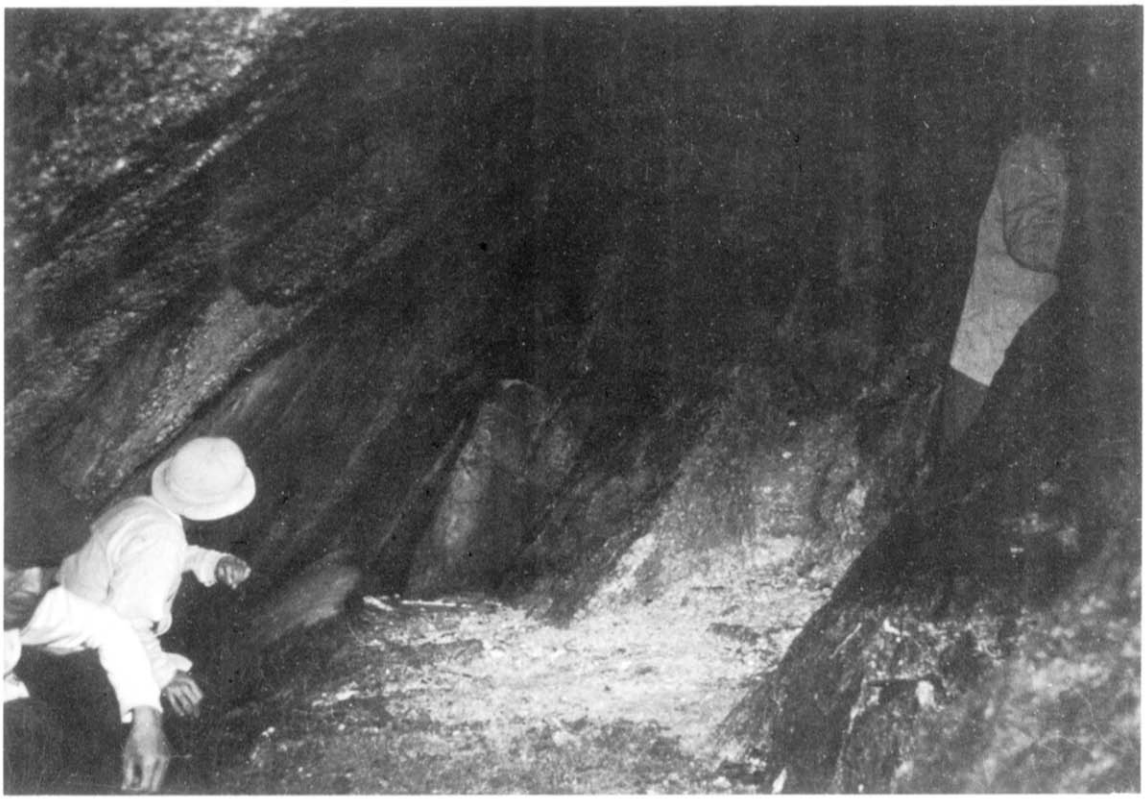


外観　東より望む

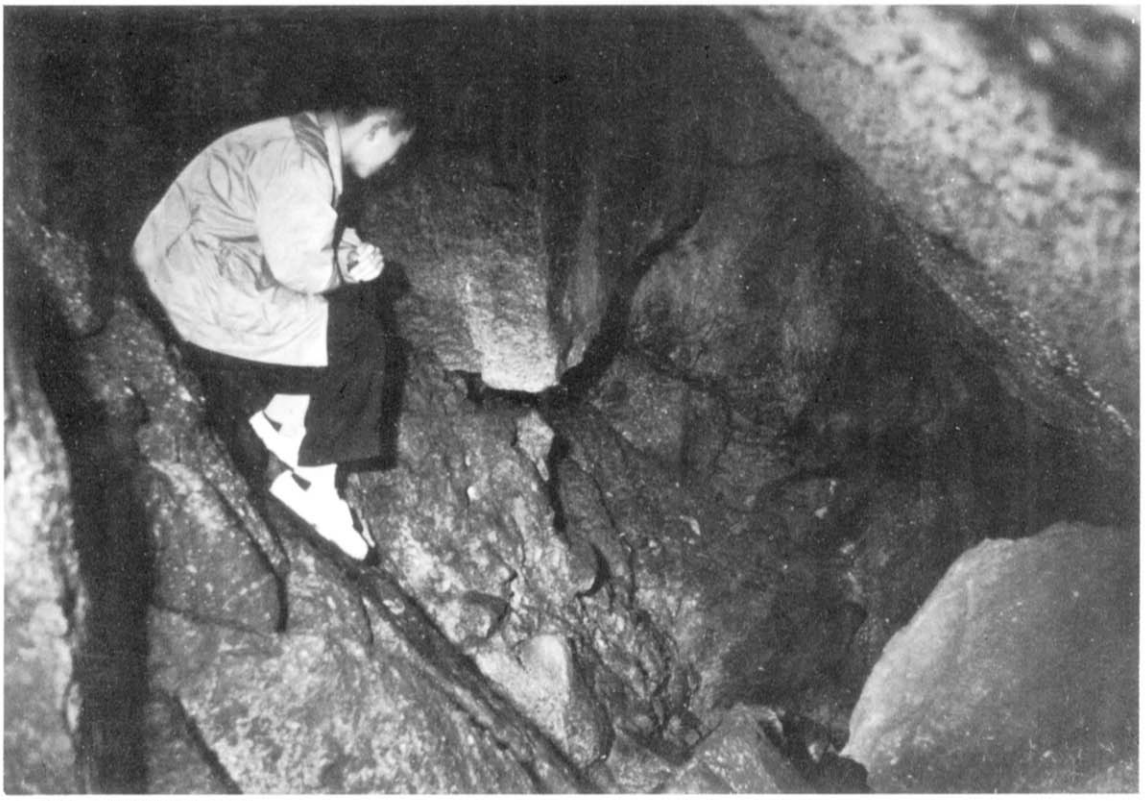




上・入口より内部を望む
下・入口付近の発掘（A、Dトレンチ）



内観



内部奥の岩石累積状況





上・遺物遠望（頂上は上宮社殿）
下・発掘地区全景



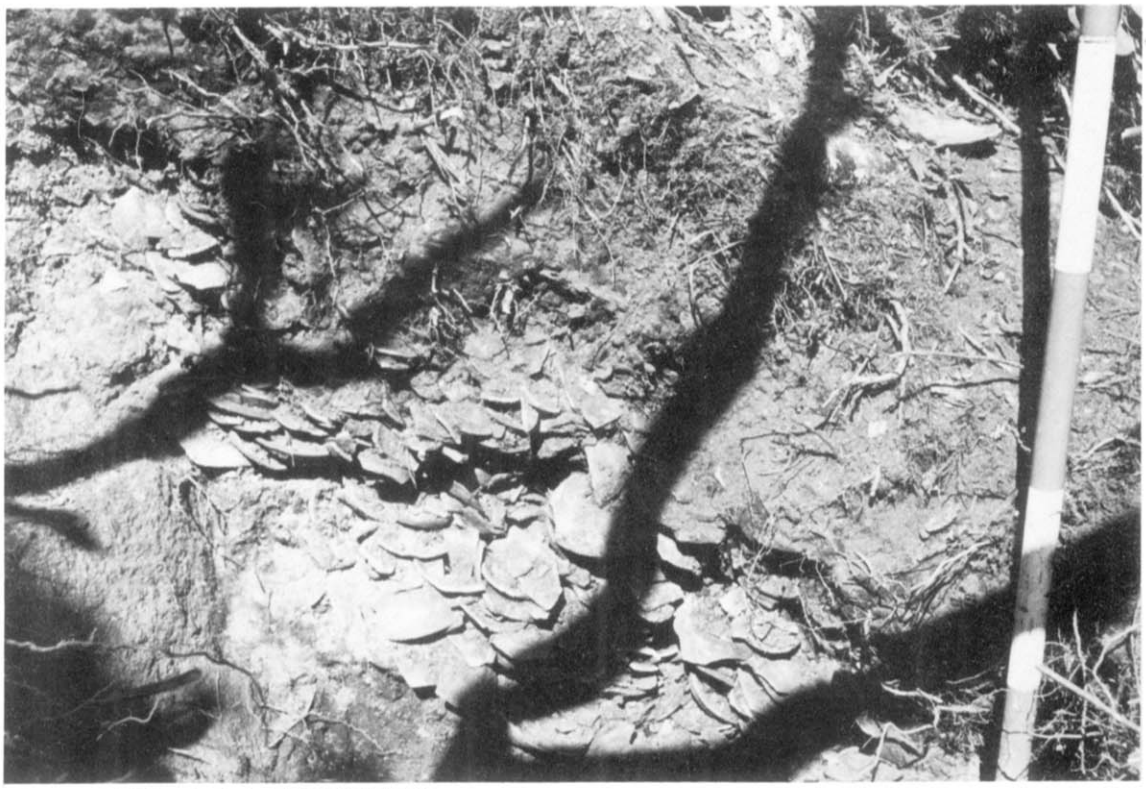
発掘トレンチと調査状況



トレンチ壁面と遺物出土状況



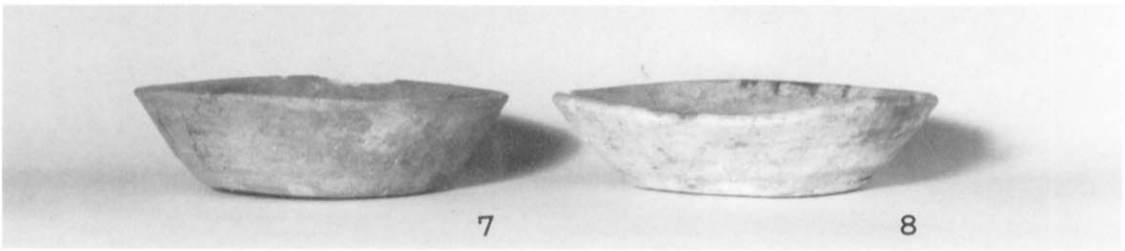
調査終了状況

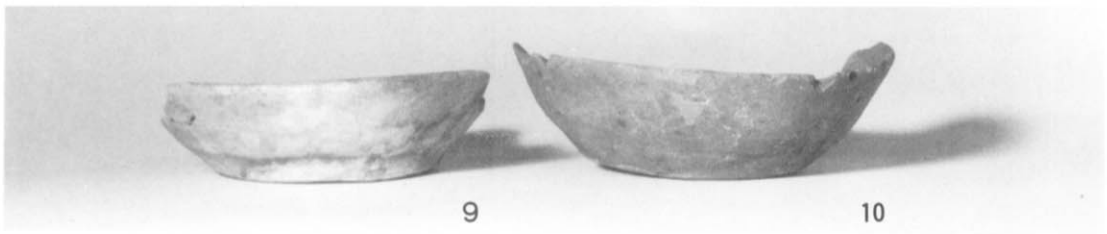


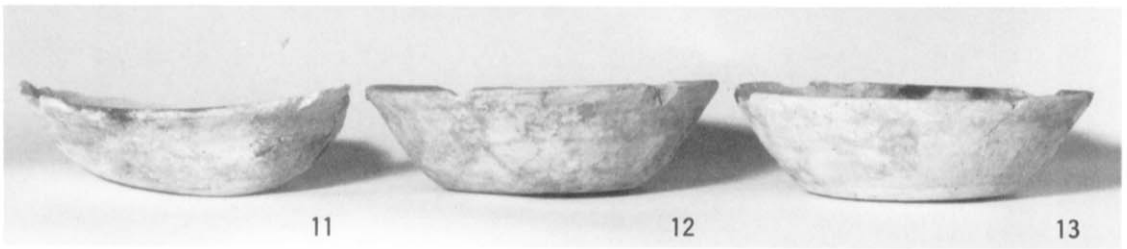
トレンチ壁面における土師器集積状況

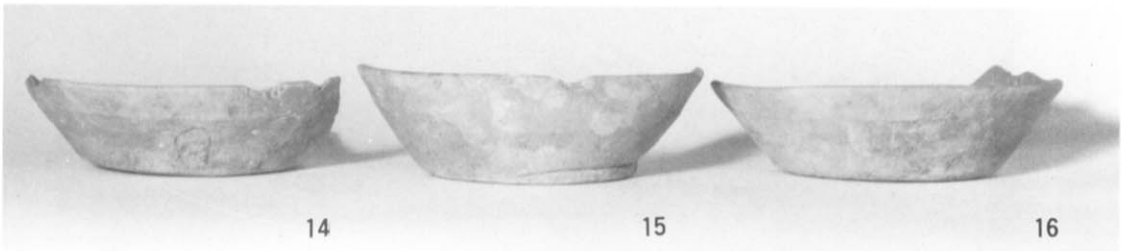

1
2
3

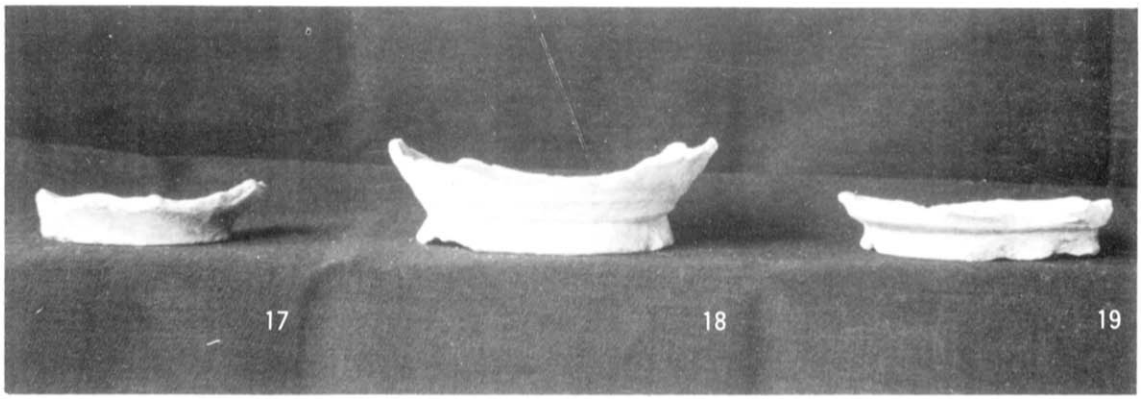

4
5
6


7
8

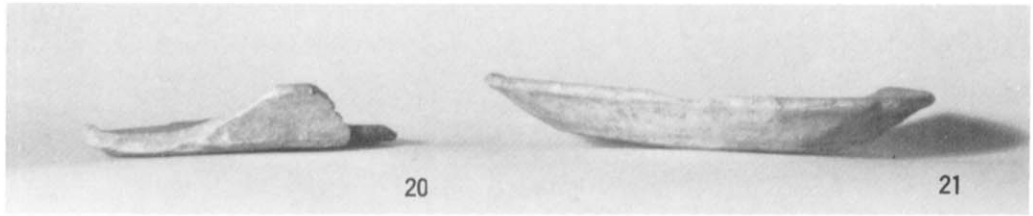

9
10

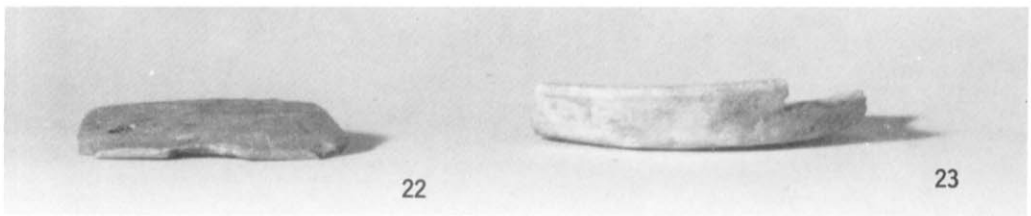

11
12
13


14
15
16



椀

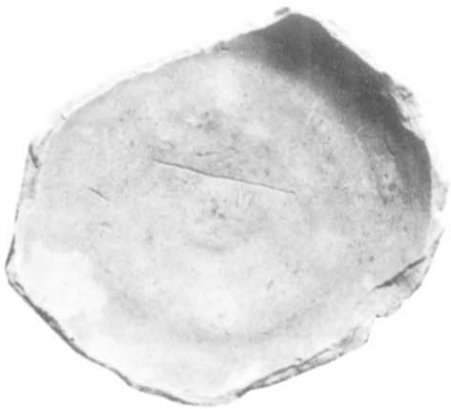




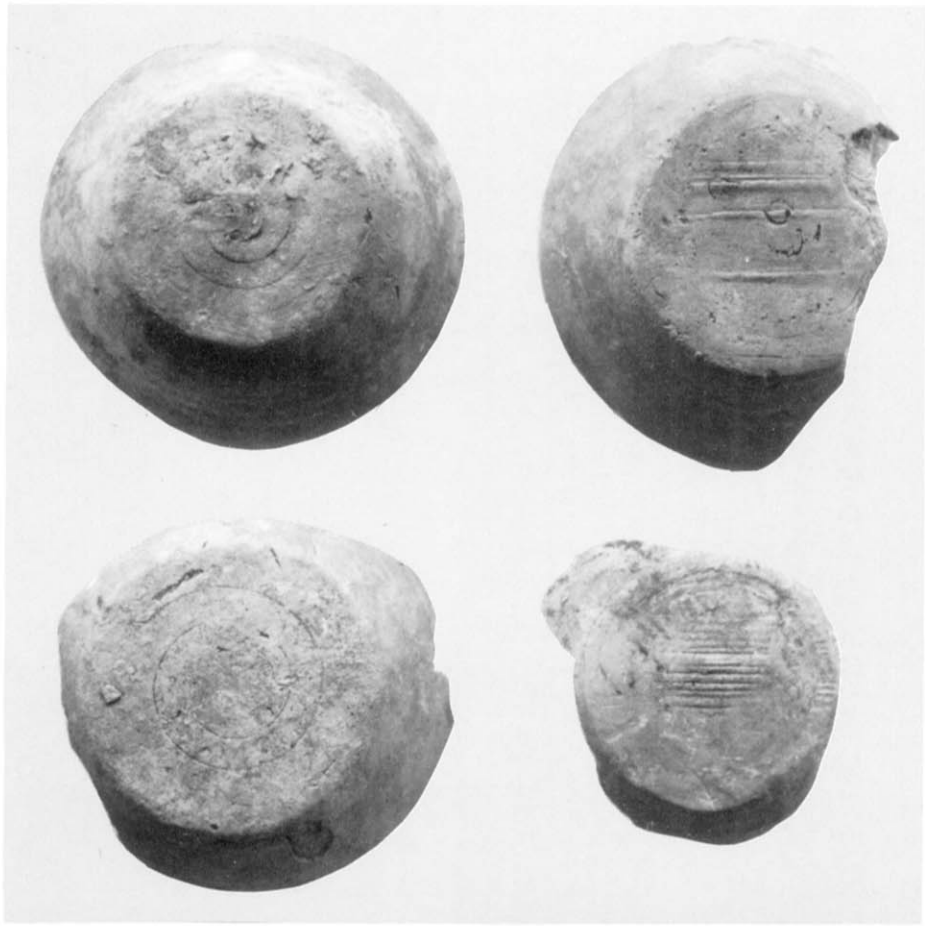
皿（20・21・23）・蓋（22）

坏内面の篦記号

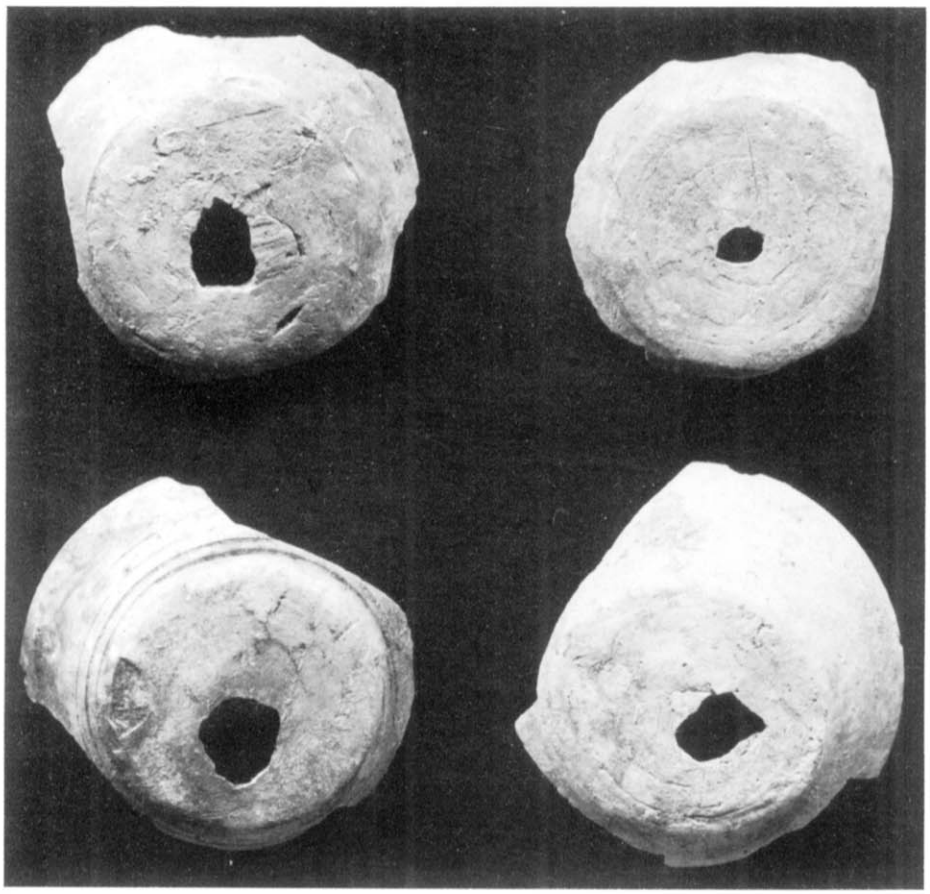




坏底部の篦切手法・板目痕



坏底部に穿孔あるもの




1
4 5 6 7 8 9 10


2


3


上宮上


4


5


7


9


10


6


8


11



図版一一　下宮礎石群1　空から見た下宮付近の景観1　西より

図版一二　下宮礎石群2

空から見た下宮付近の景観2



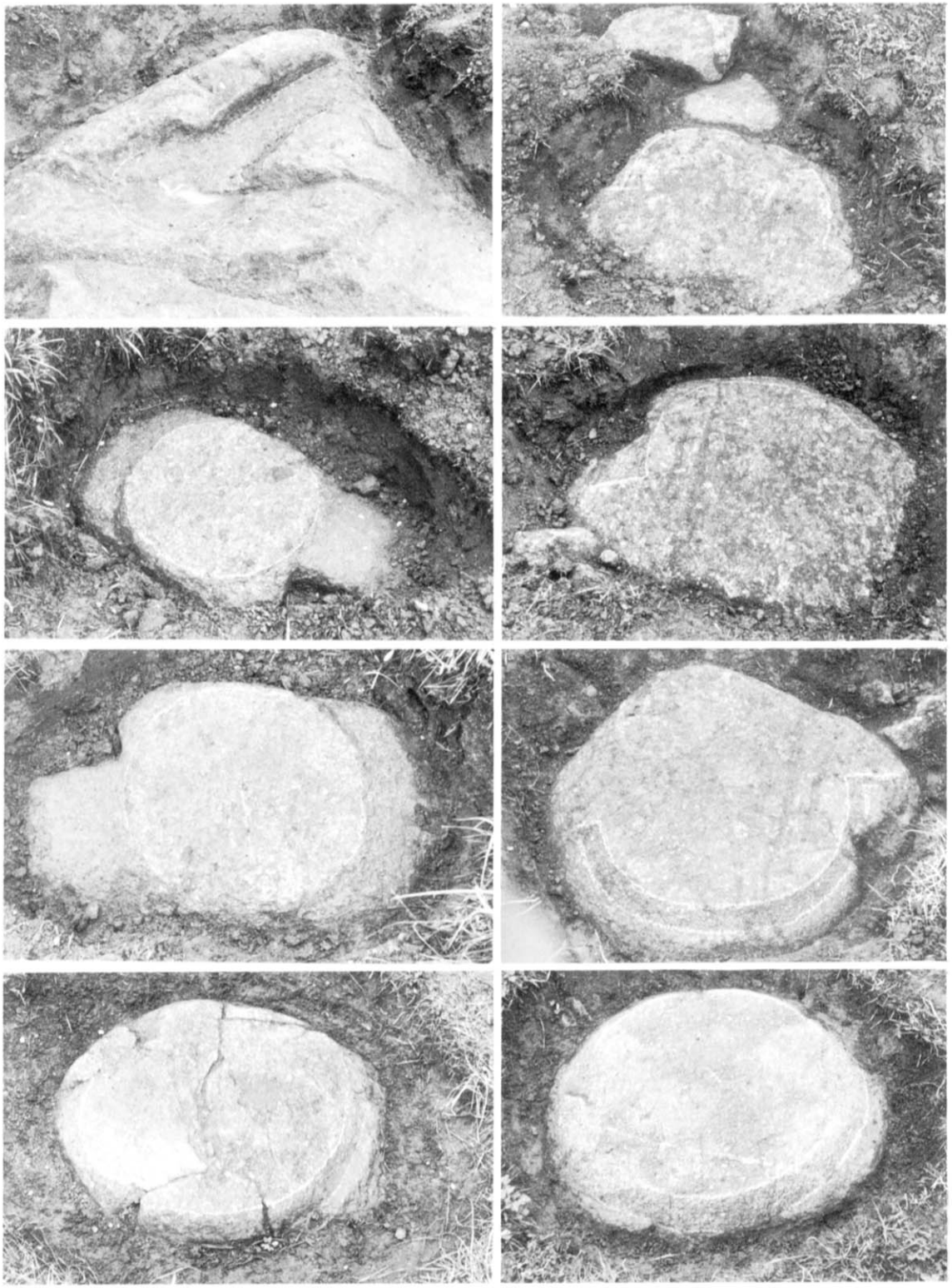
南西より



南より

図版一三　下宮礎石群3

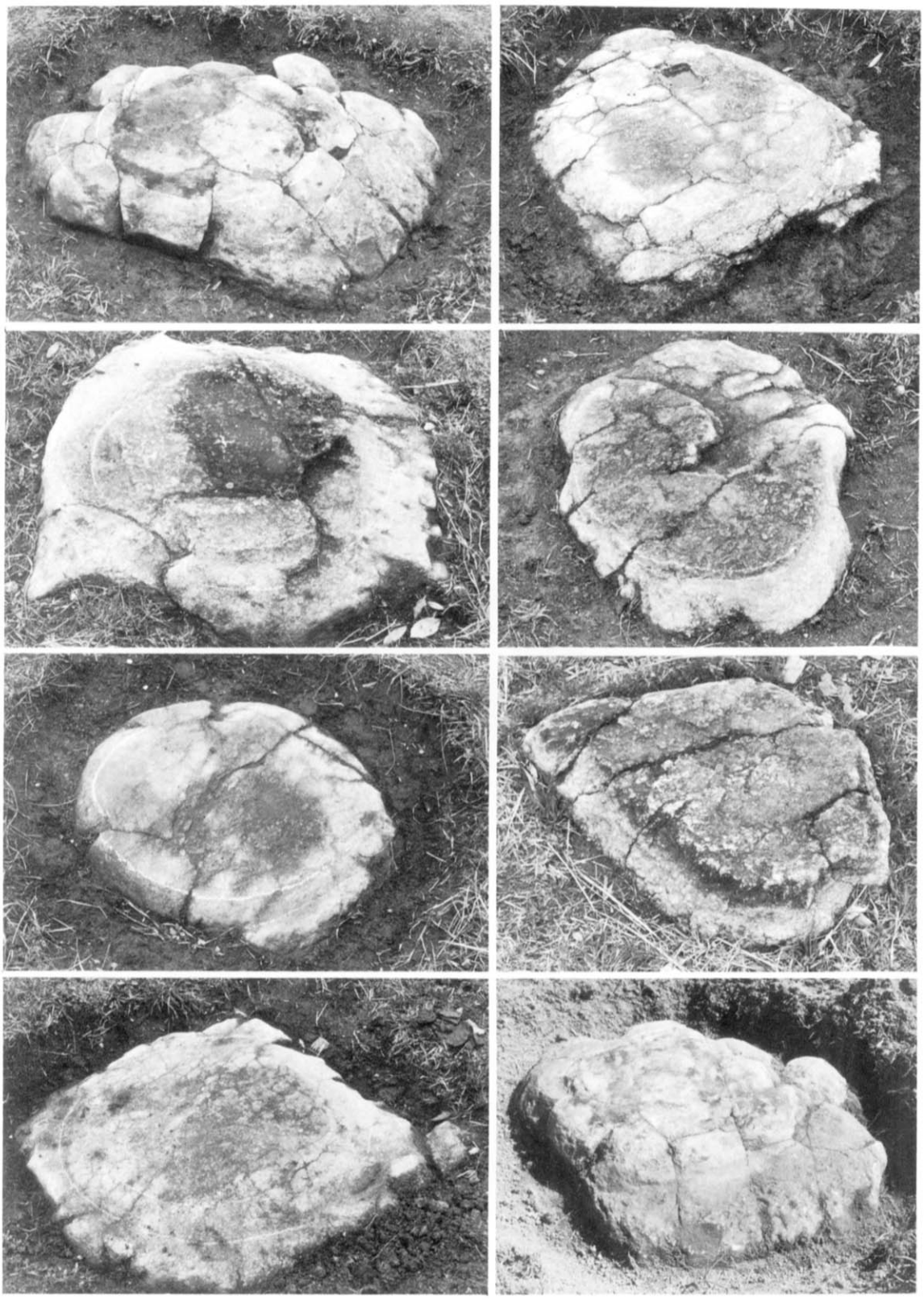
礎石群発掘状況全景



各礎石発掘状況1

図版一五　下宮礎石群5

各礎石発掘状況2



図版一六　下宮礎石群6

各礎石発掘状況3





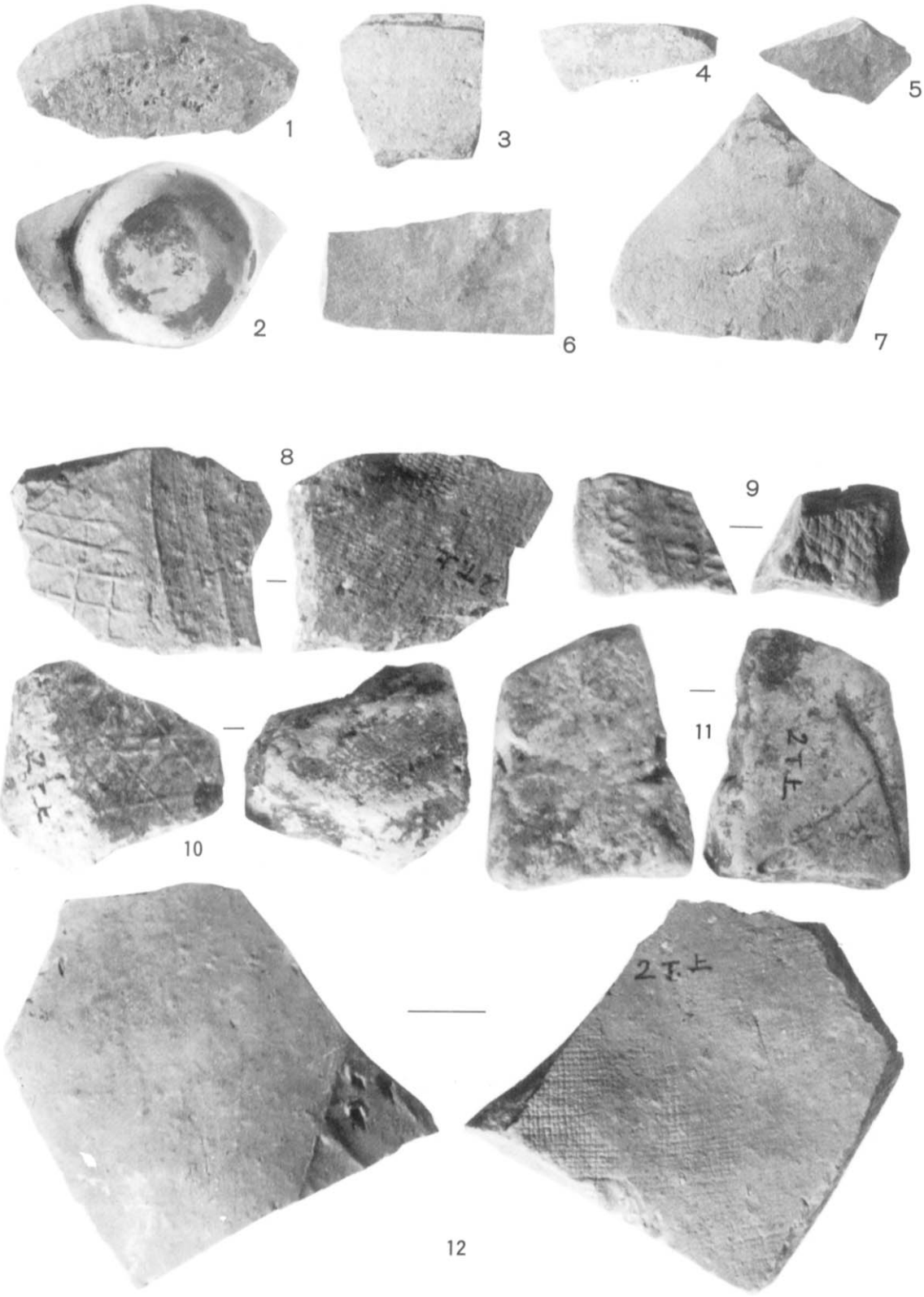


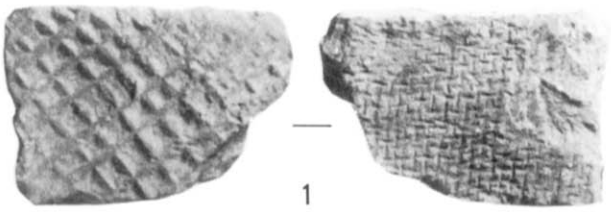




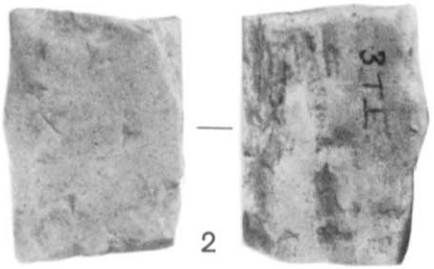


図版一七　下宮礎石群7　第2トレンチ上層遺物—石鍋(1)、土師器(2)、瓦器(3)、陶器(4～7)、瓦(8～12)





1



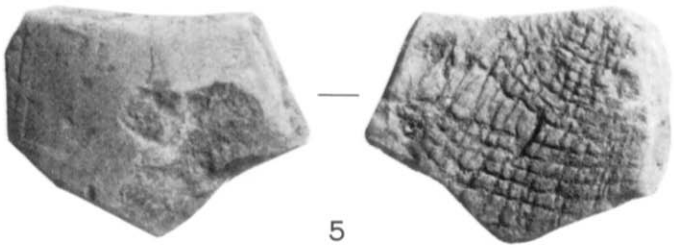
2



3



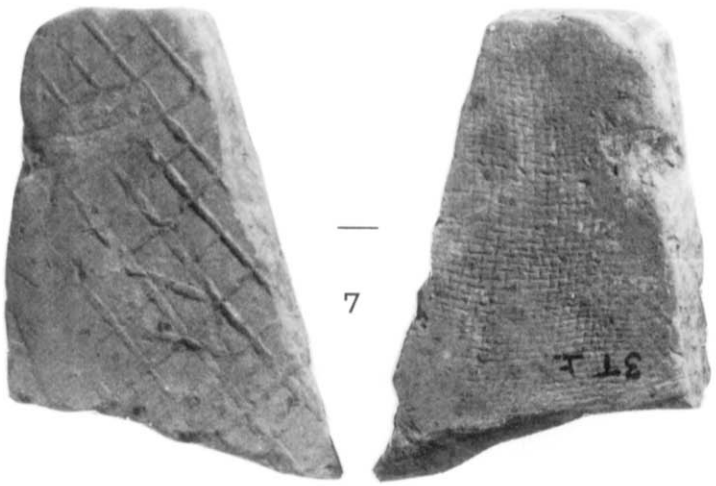
4



5

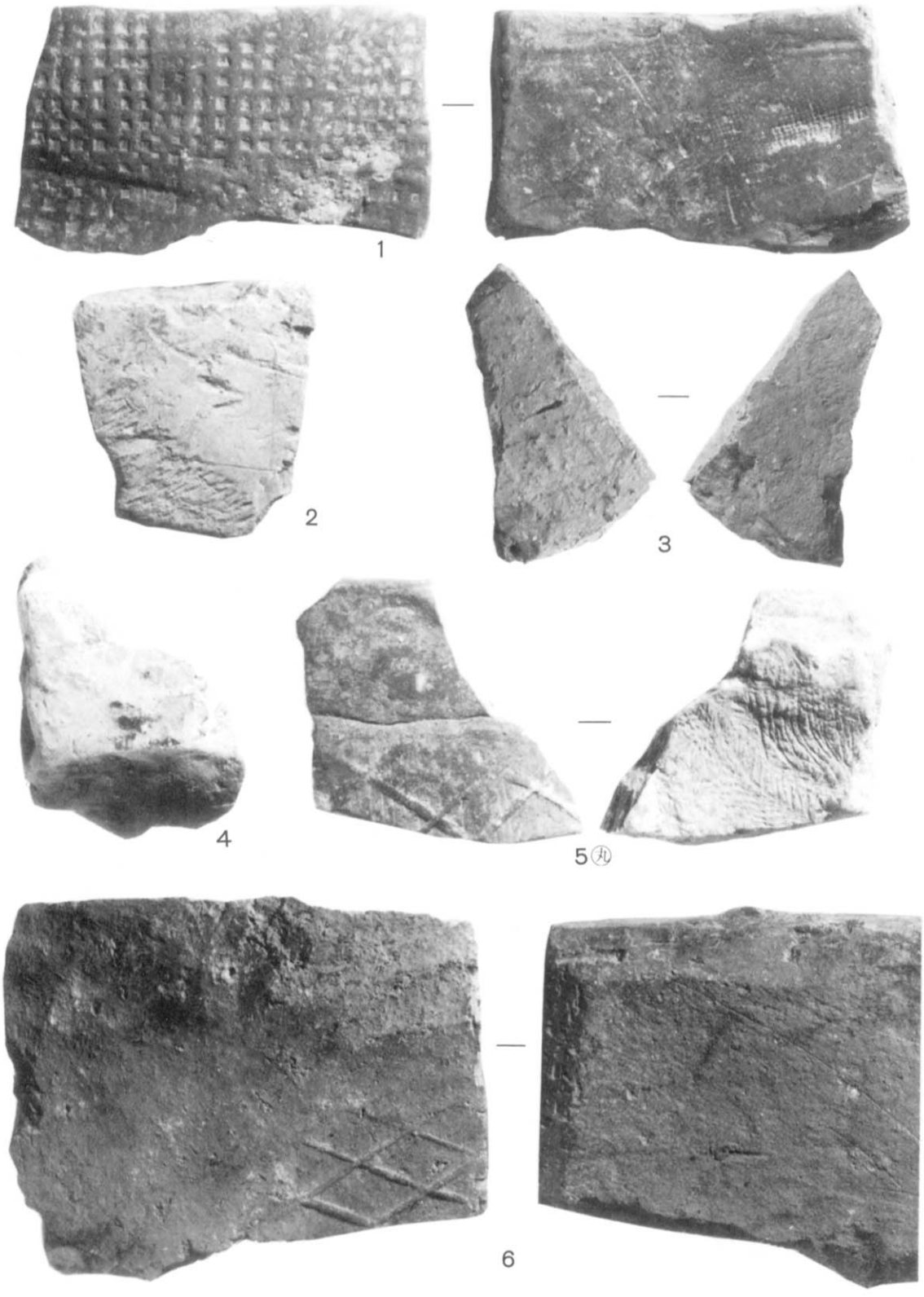


6

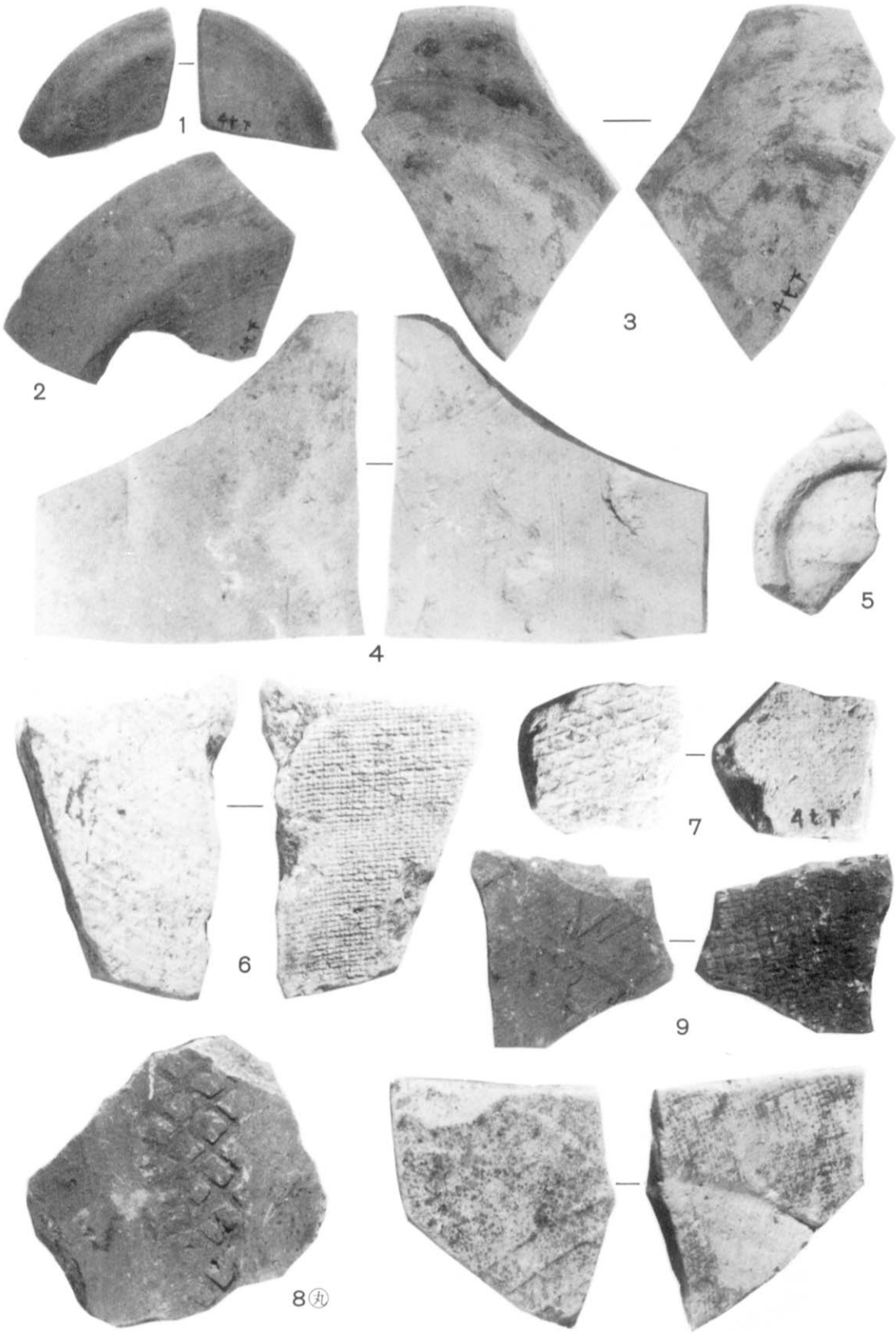


7

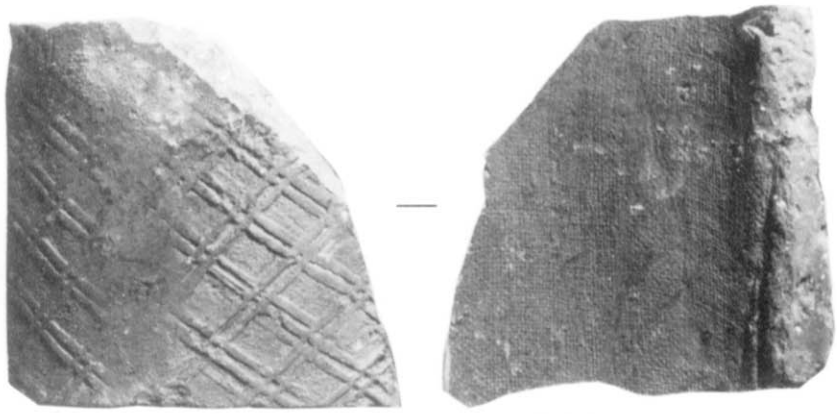
図版一九　下宮礎石群9　第4トレンチ上層遺物―瓦



図版二〇　下宮礎石群10　第4トレンチ下層遺物―土師器（1～3・5）、陶器（4）、瓦（6～10）



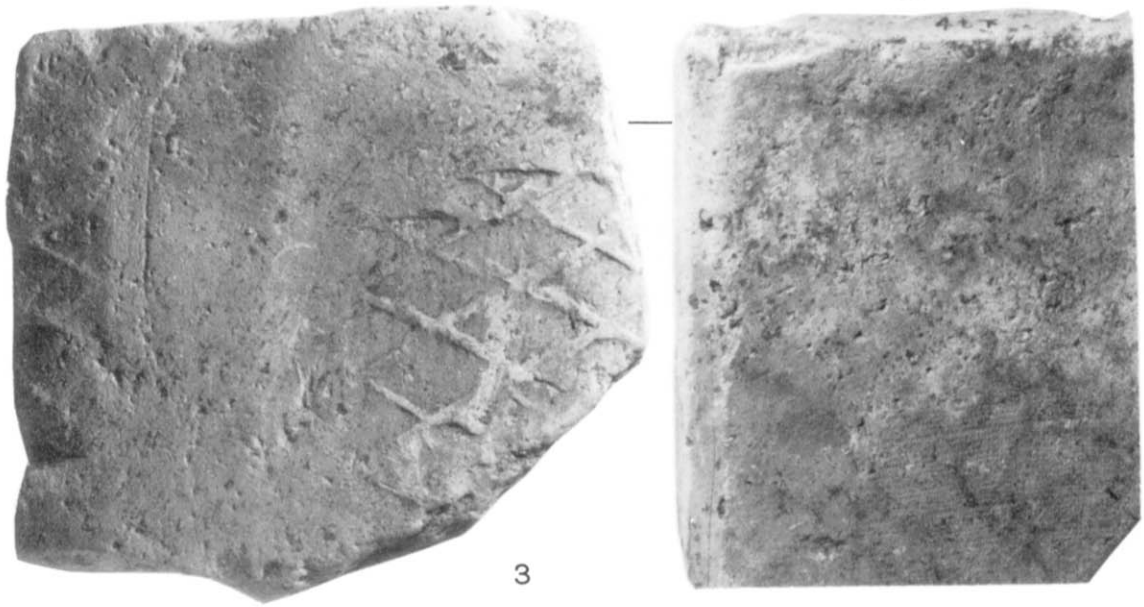
図版二一　下宮礎石群11　第4トレンチ下層遺物―瓦



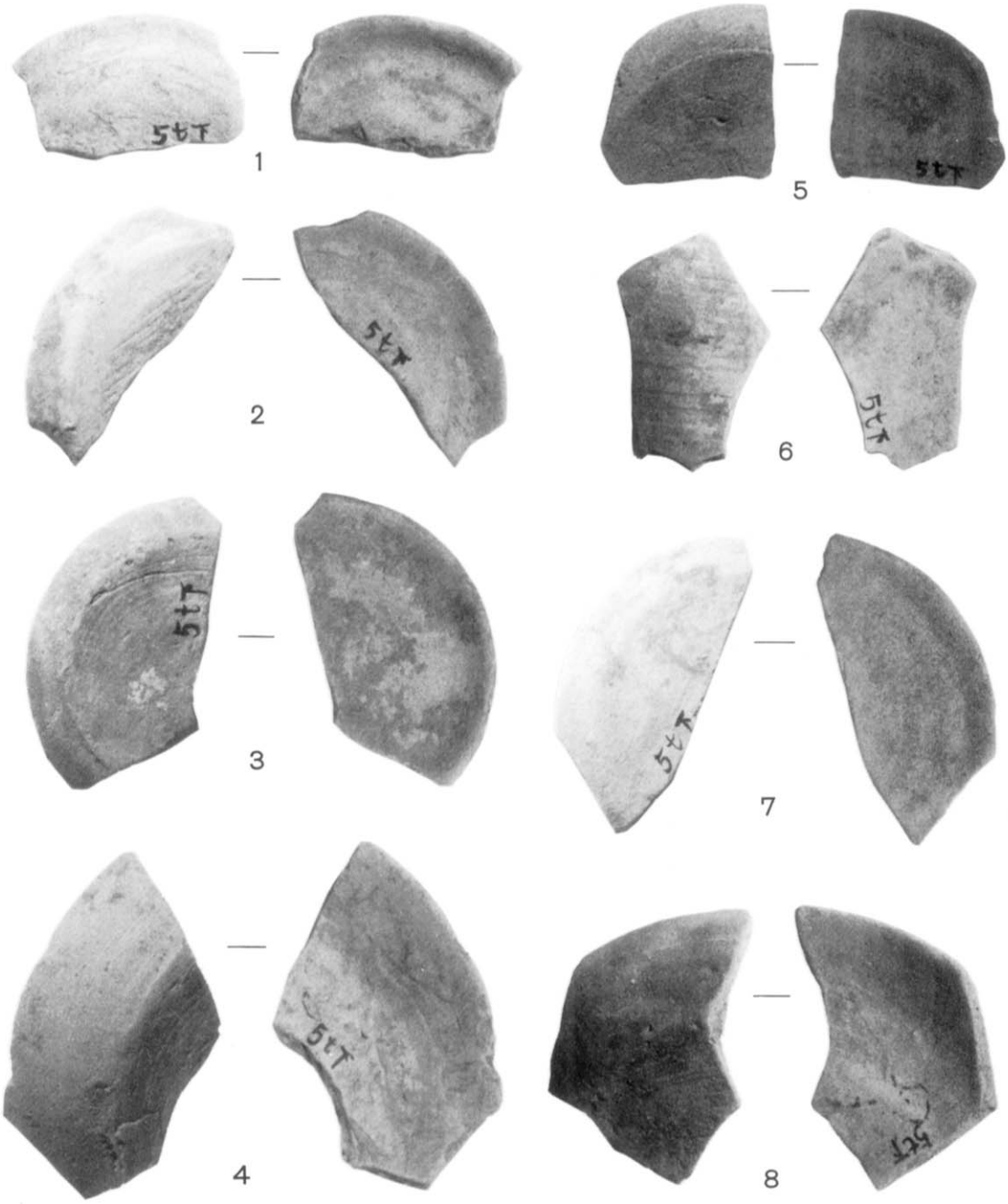
1 ㊭



2

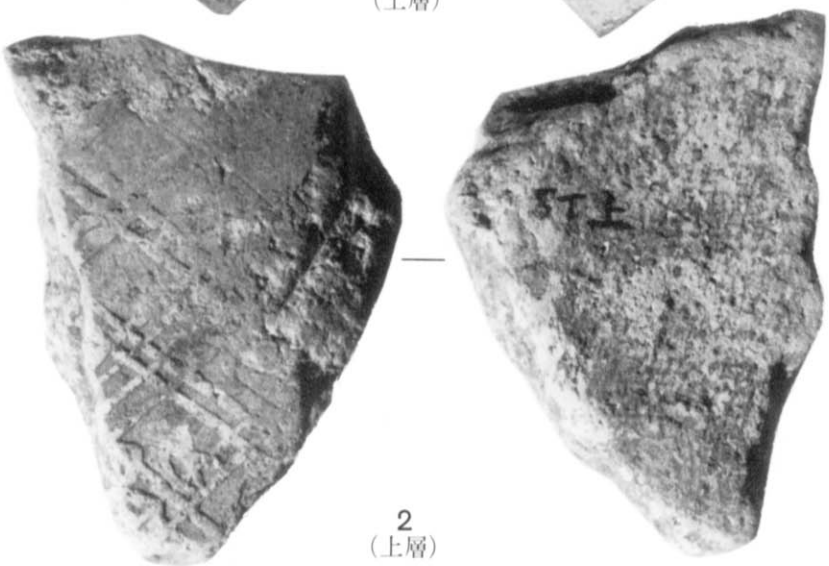


3

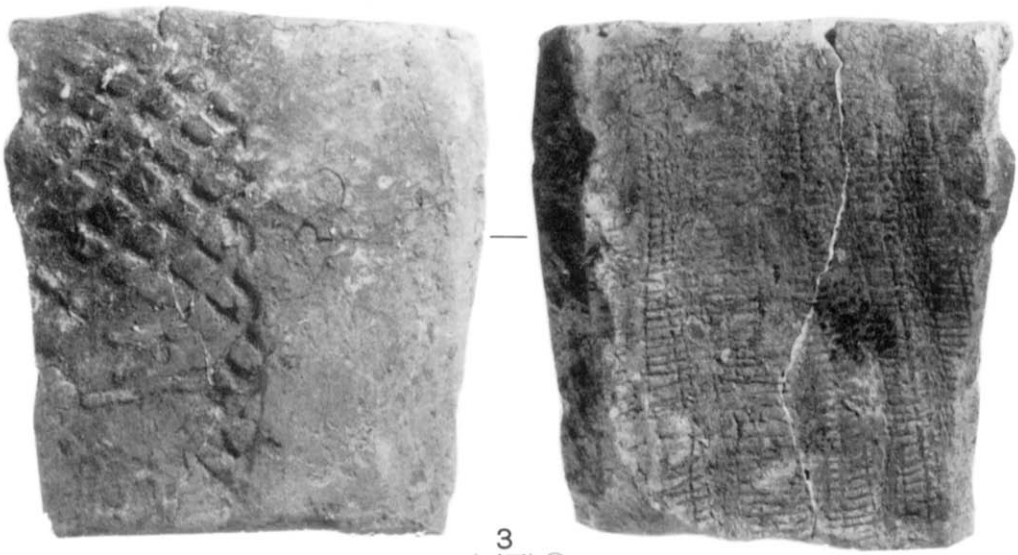

1
2
3
4
5
6
7
8



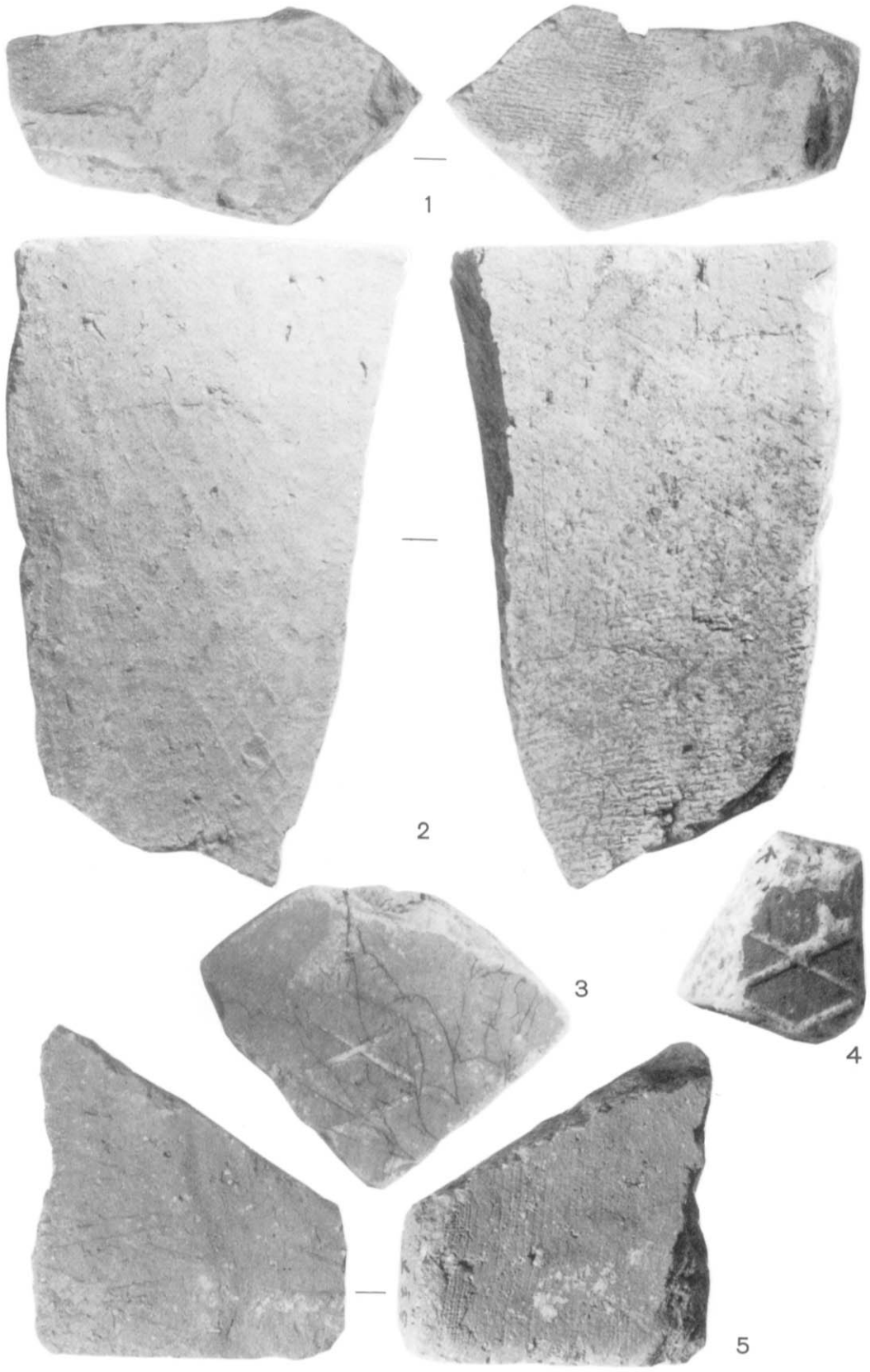
1
（上層）



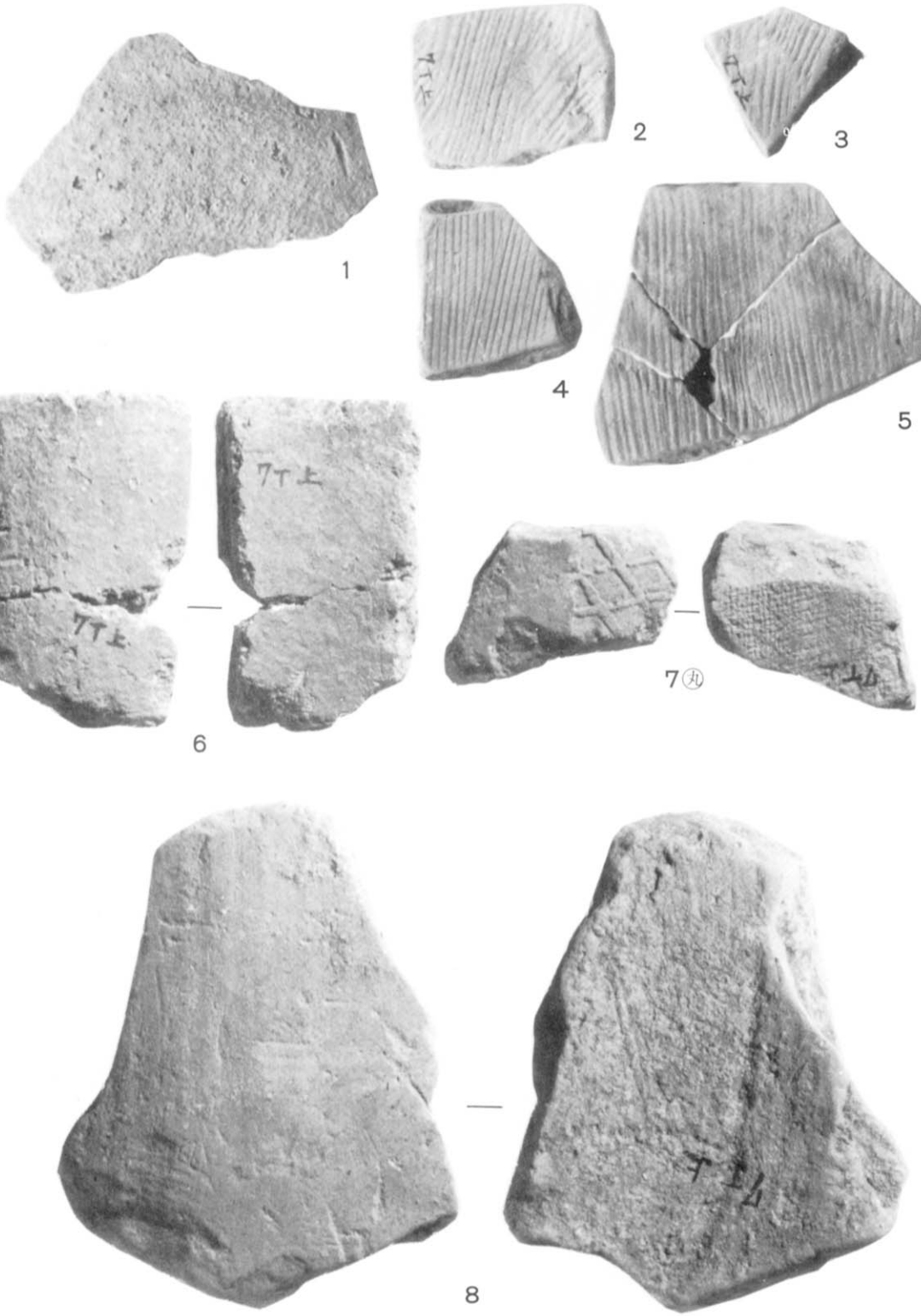
2
（上層）



3
（下層）㊭

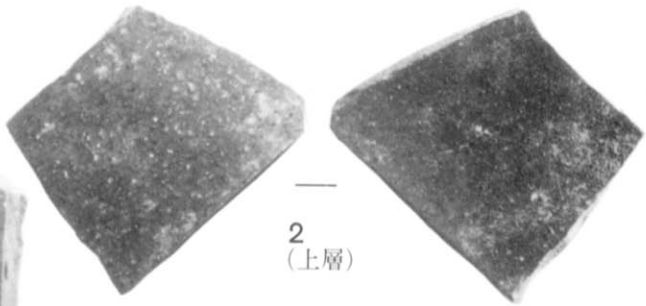

1
2
3
4
5

図版二五　下宮礎石群15　第7トレンチ上層遺物―陶器(1)、瓦器(2～5)、瓦(6～8)





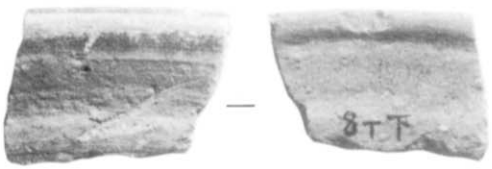
1
（上層）



2
（上層）



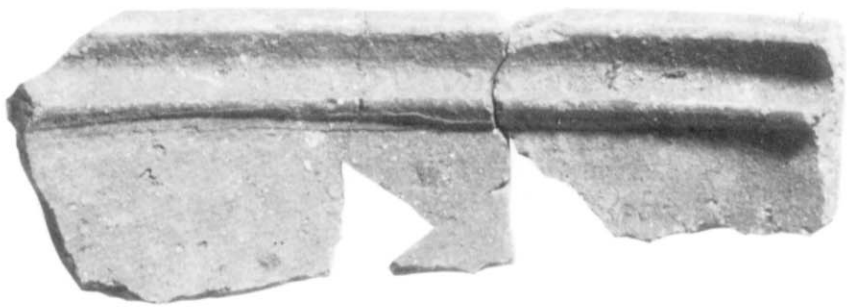
3
（上層）



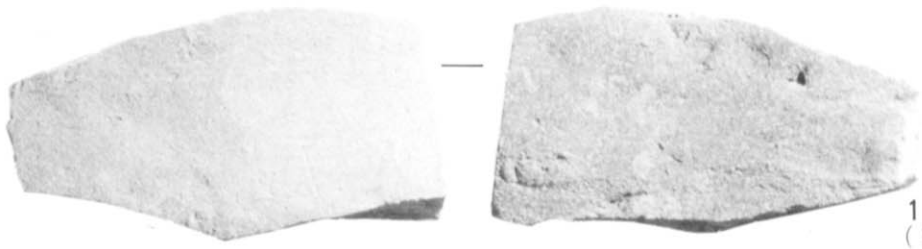
4
（下層）



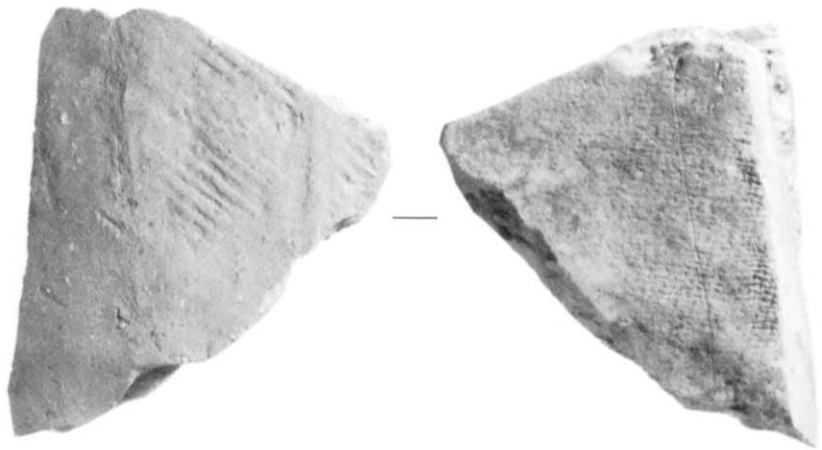
5
（下層）



図版二七　下宮礎石群17　遺物—陶器(1)、瓦(2～6)



1
(1—D～E)



2
(1—D～E)



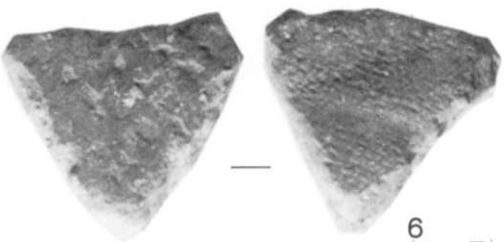
3
(1—D～E)



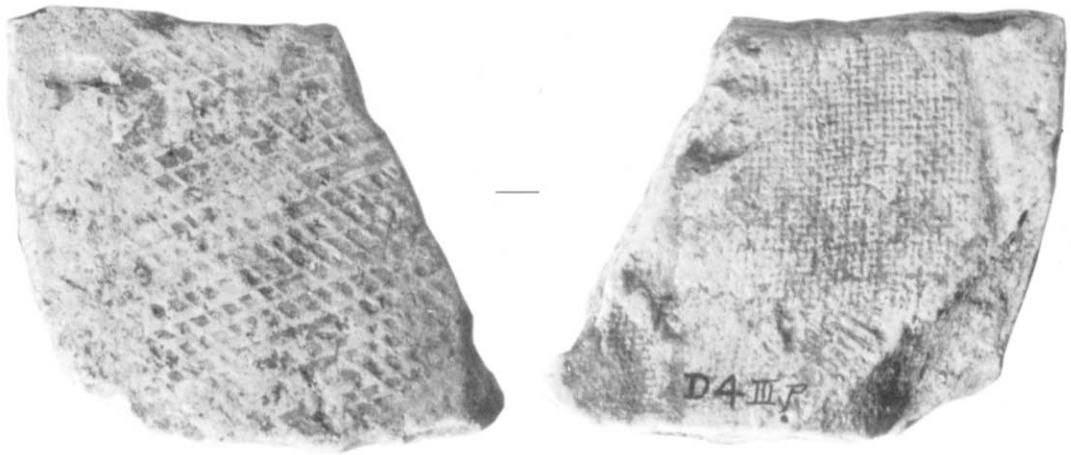
4
(1T・6—E～F)



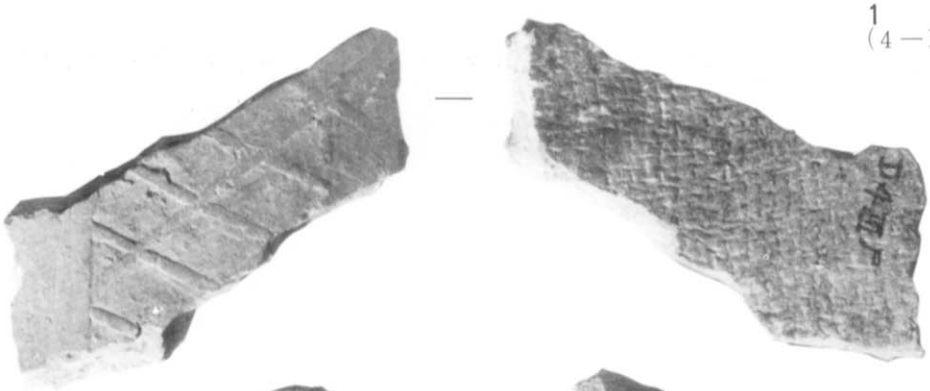
5㊭
(5—D)



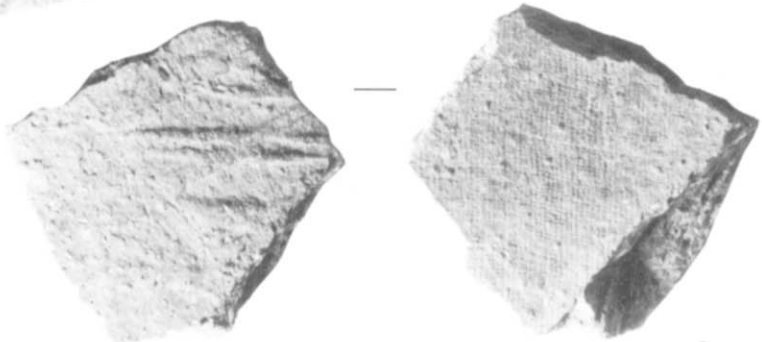
6
(2—E)



1
(4—D III層)



2
(4—D III層)



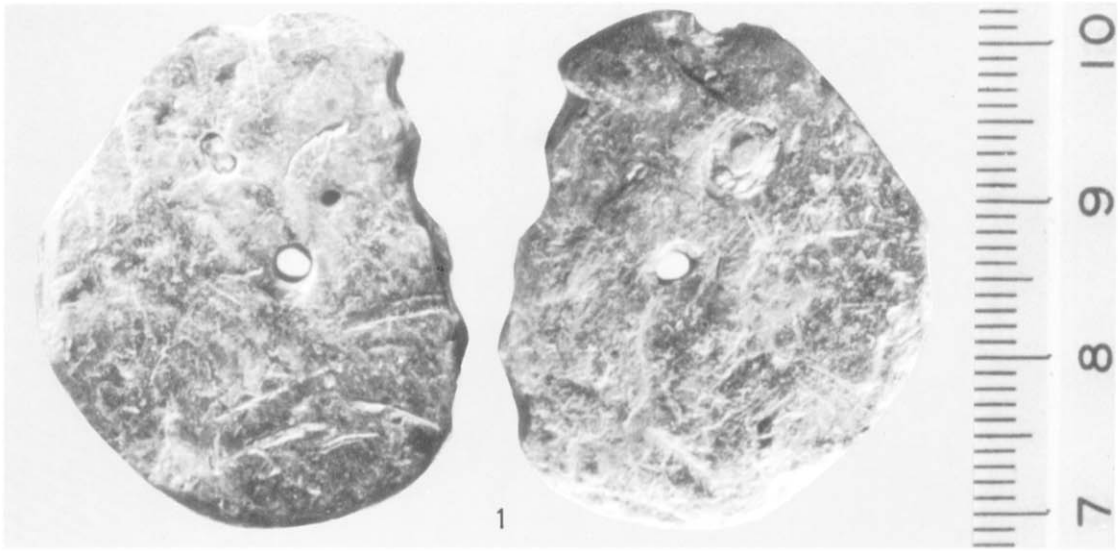
3
(4—D III層)



4(5—E)

宝満山関連遺物の調査　図版

図版二九　上宮地区1　滑石製品・陶製品・瓦製品・瓦塔

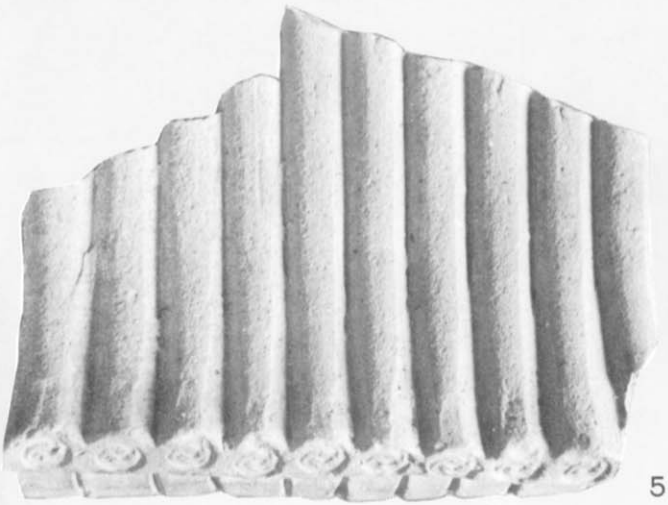










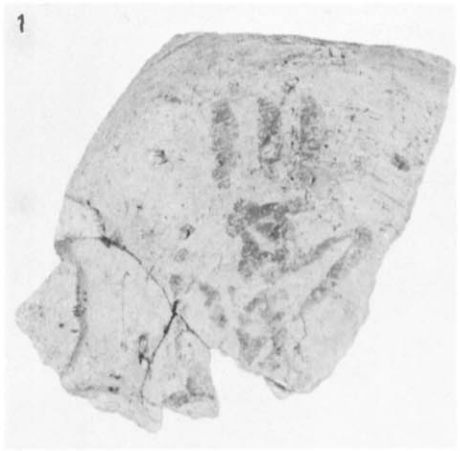


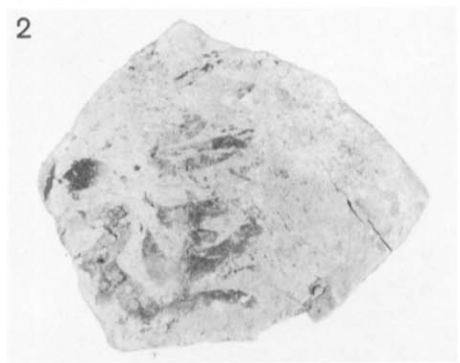




（小西・宮小路資料）

図版三〇　上宮地区2　墨書土師器


1


2


3


4


5


6


7

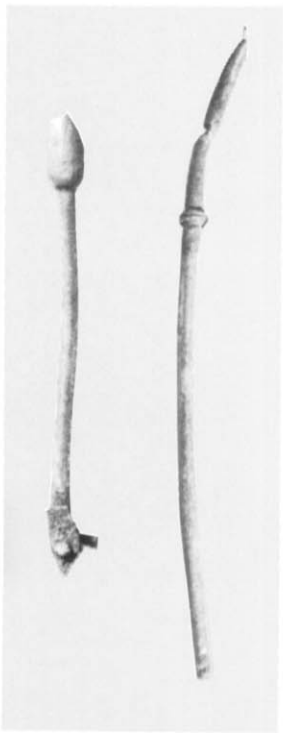
（本写真は九州歴史資料館提供）

（小西資料）

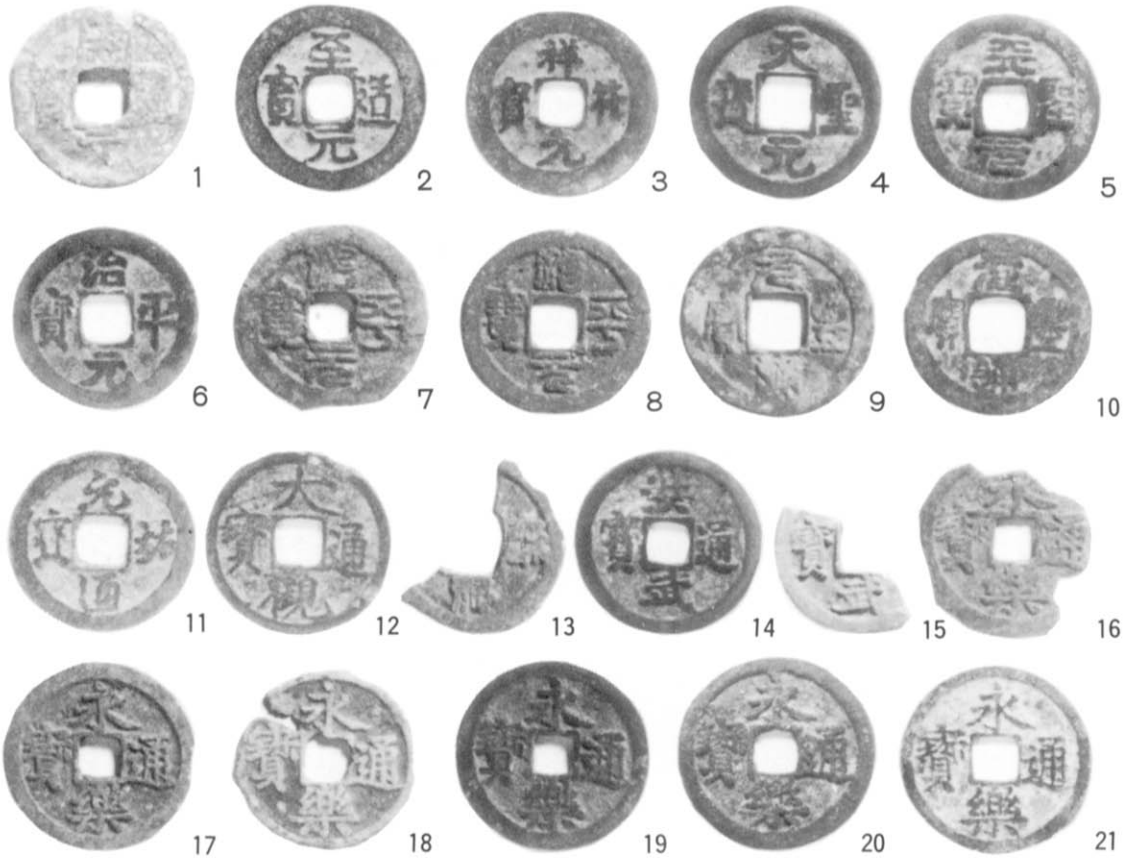
図版三一　上宮地区3　金銅製仏手・未開蓮華・中国貨幣



金銅製仏手　―側面観(左)と正面観(右)―
(本写真は八尋和泉提供)



未開蓮華



1　2　3　4　5
6　7　8　9　10
11　12　13　14　15　16
17　18　19　20　21

中国貨幣

(天満宮蔵品・小西資料)

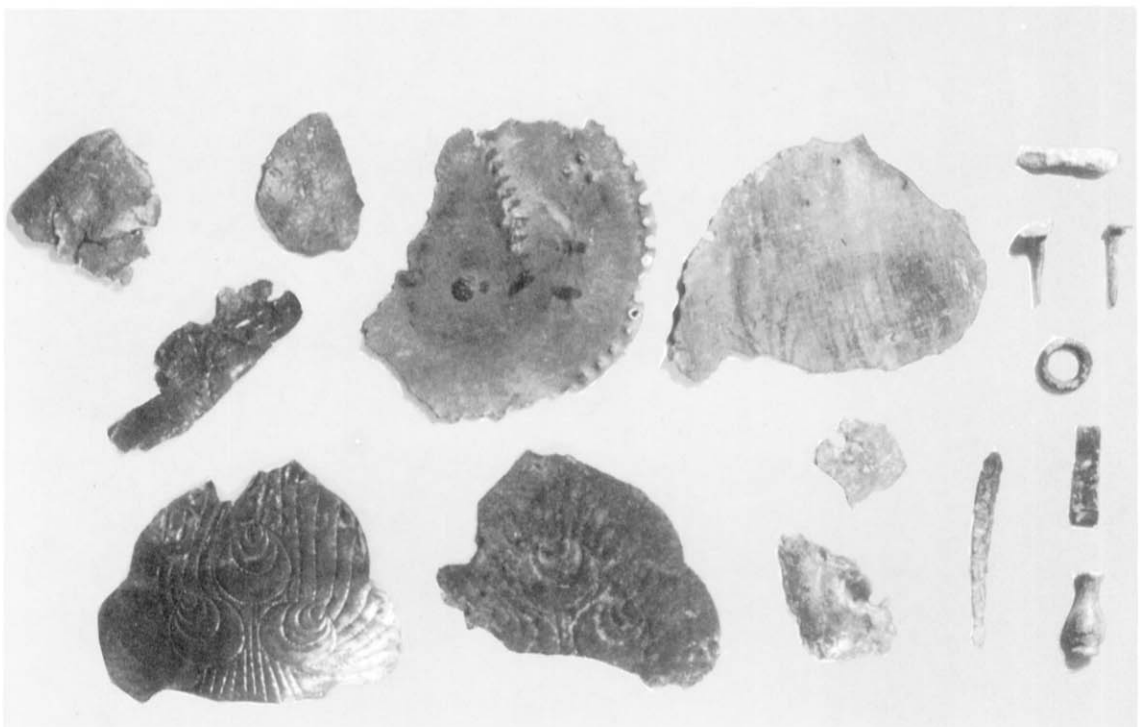


図版三二　上宮地区4　懸仏1

（1～6・天満宮蔵品、7～13・小西資料）

図版三三　上宮地区5　懸仏2・付属品





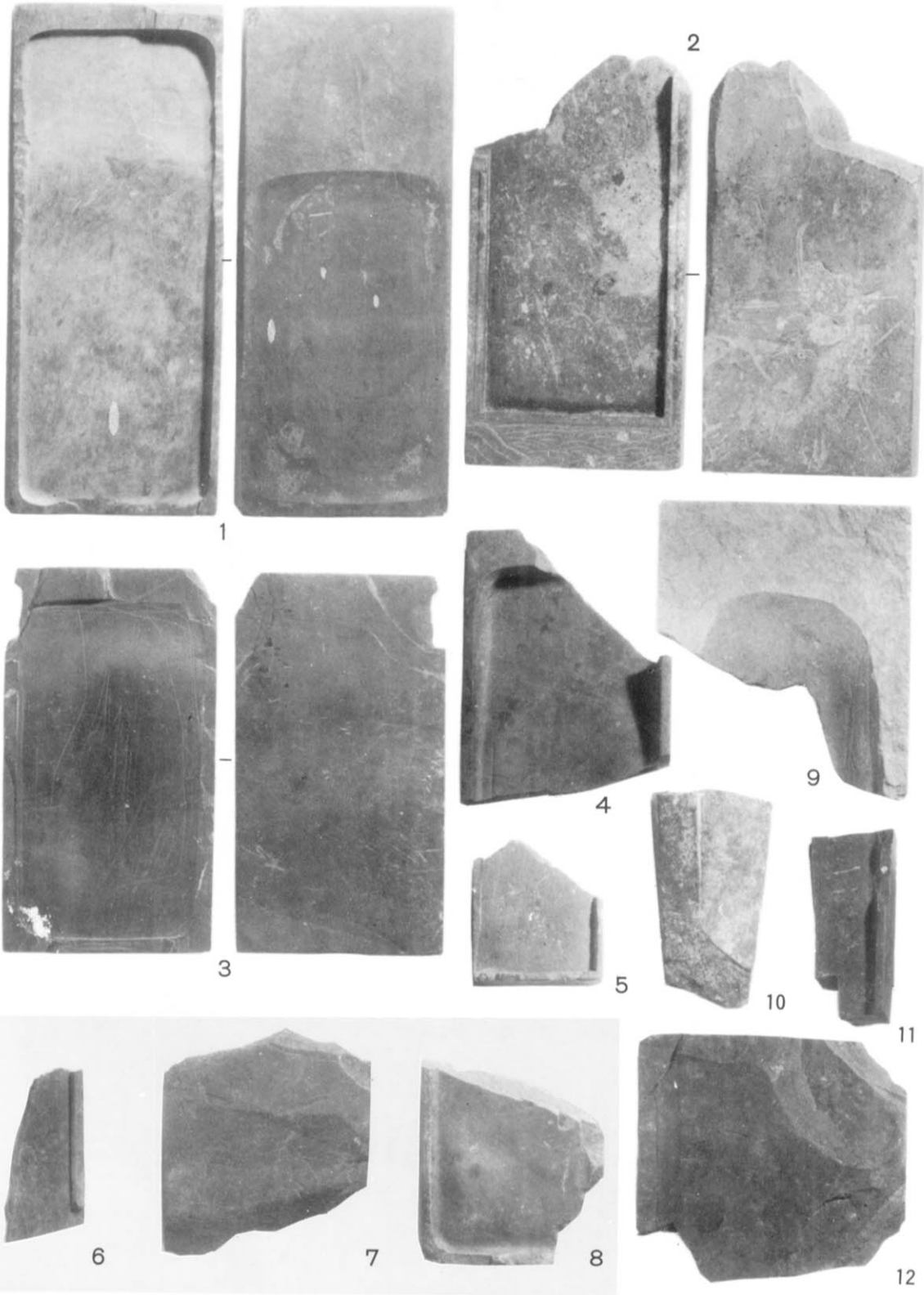
（小西資料）



図版三四　上宮地区6　銅製香炉蓋・銅製品残片・銅滓

（小西資料）

図版三五　上宮地区7　石硯



（小西資料）

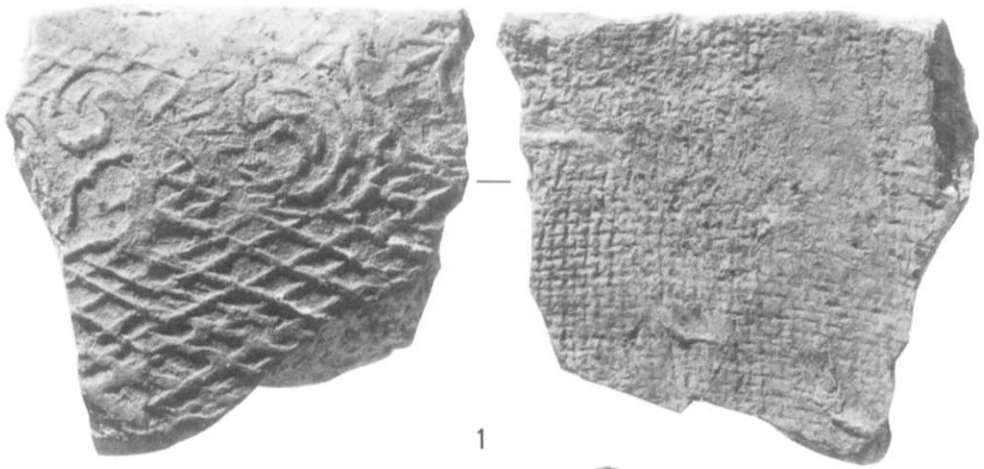
図版三六　下宮地区（御供屋）1　古瓦1





（九州大学・西正寺資料）

図版三七　下宮地区（山の内・大門・地藏原）2　古瓦2



1



2

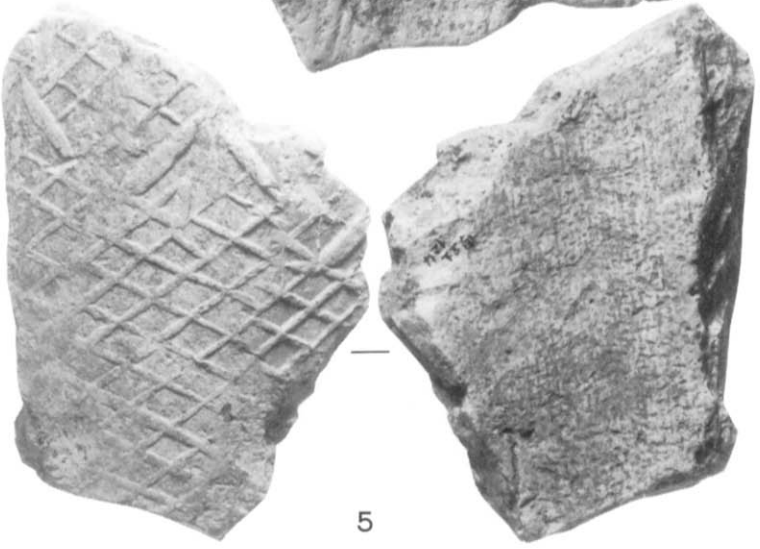


4





3



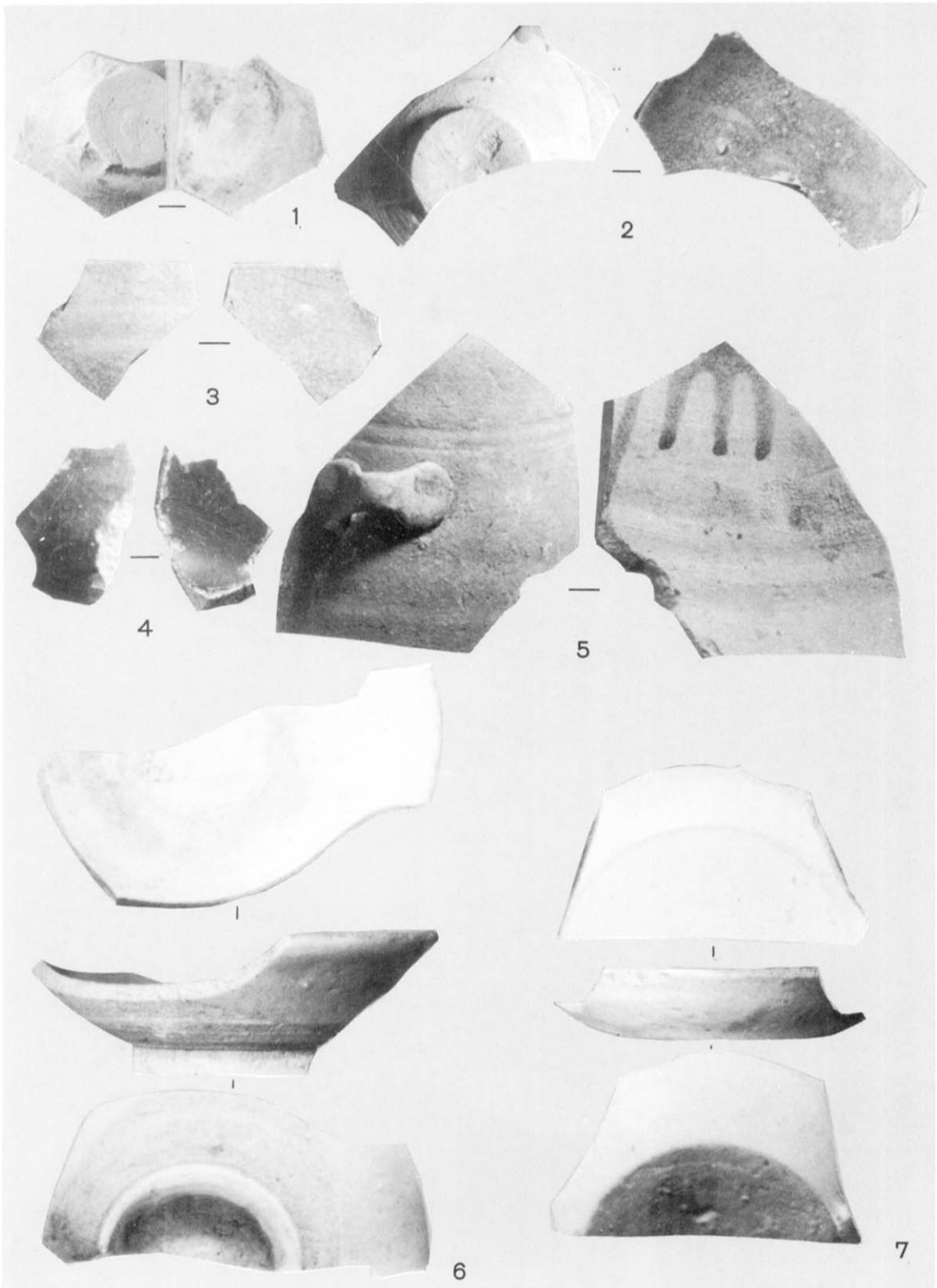
5

（小西資料）



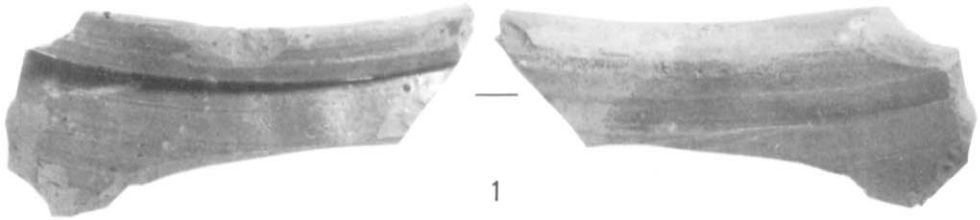
図版三八　下宮地区（大門・地蔵原）3　土師器・須恵器

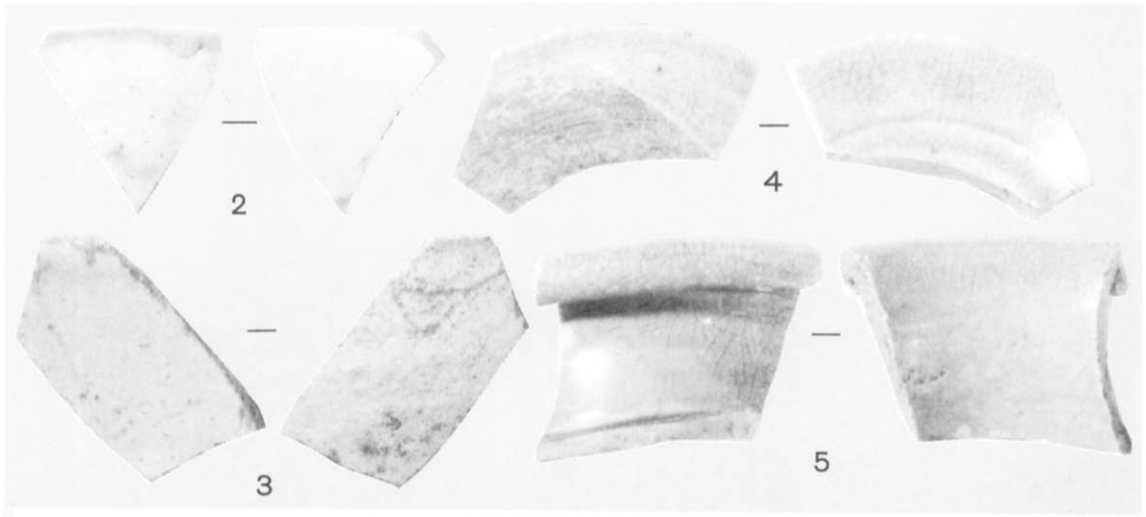
（小西資料）



1～5．A地点　6・7．B地点

（小西資料）

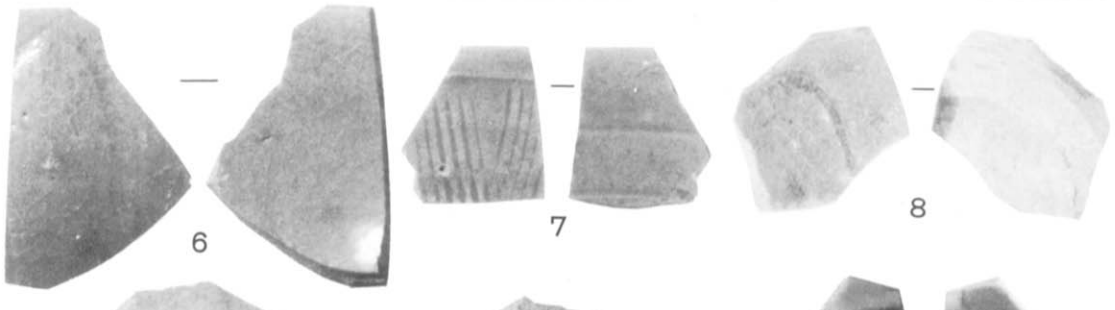

1


2

3

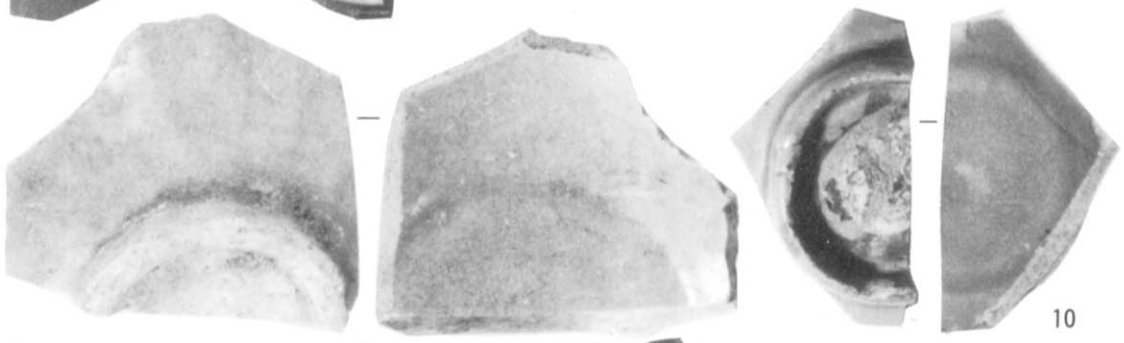
4

5


6

7

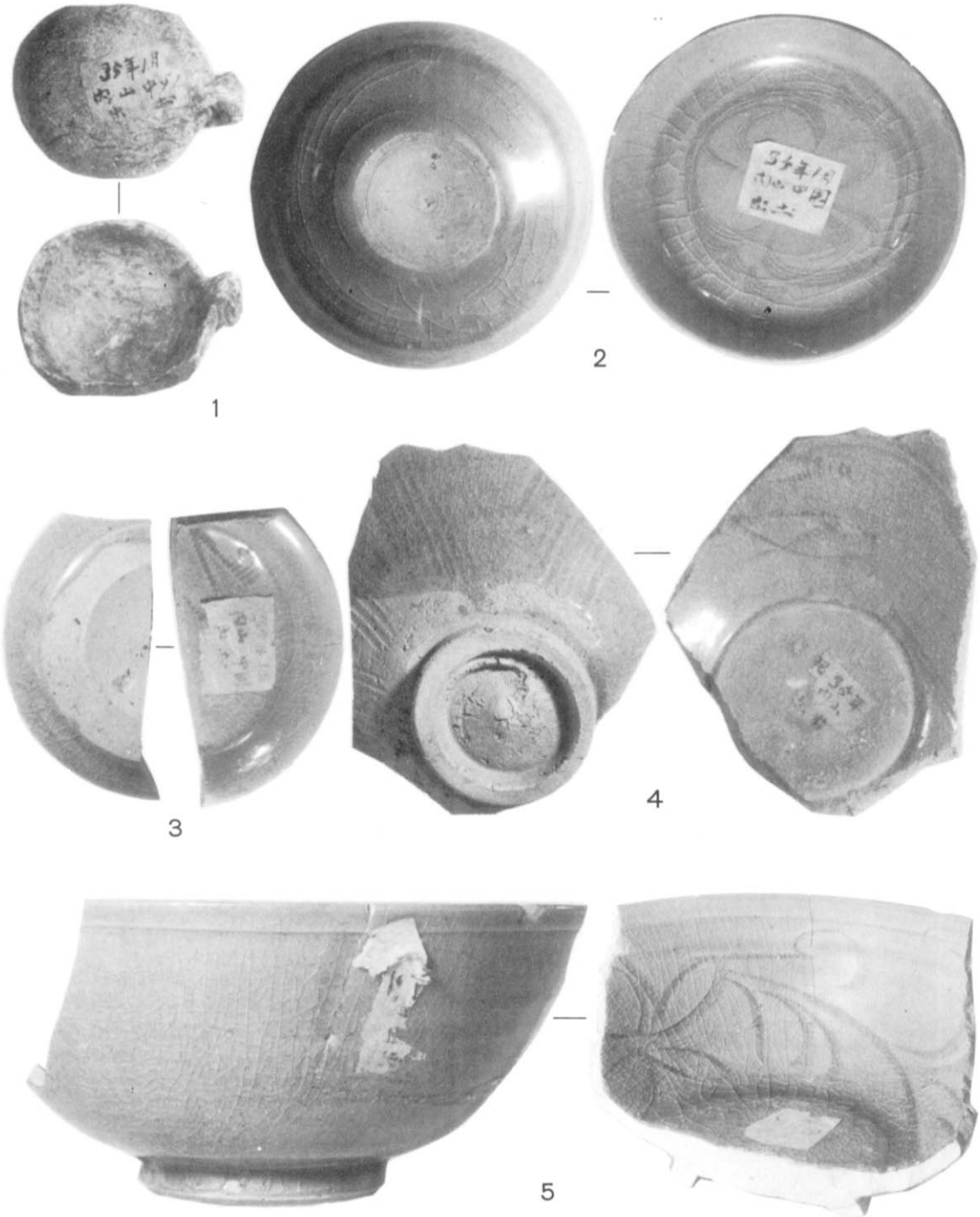
8


9

10


12

11



1

2

3

4

5

（西正寺資料）



図版四二　下宮地区(大門・地蔵原)7・辛野(中堂)地区・南谷地区1　中国陶磁・陶器(2)・石鍋(6)

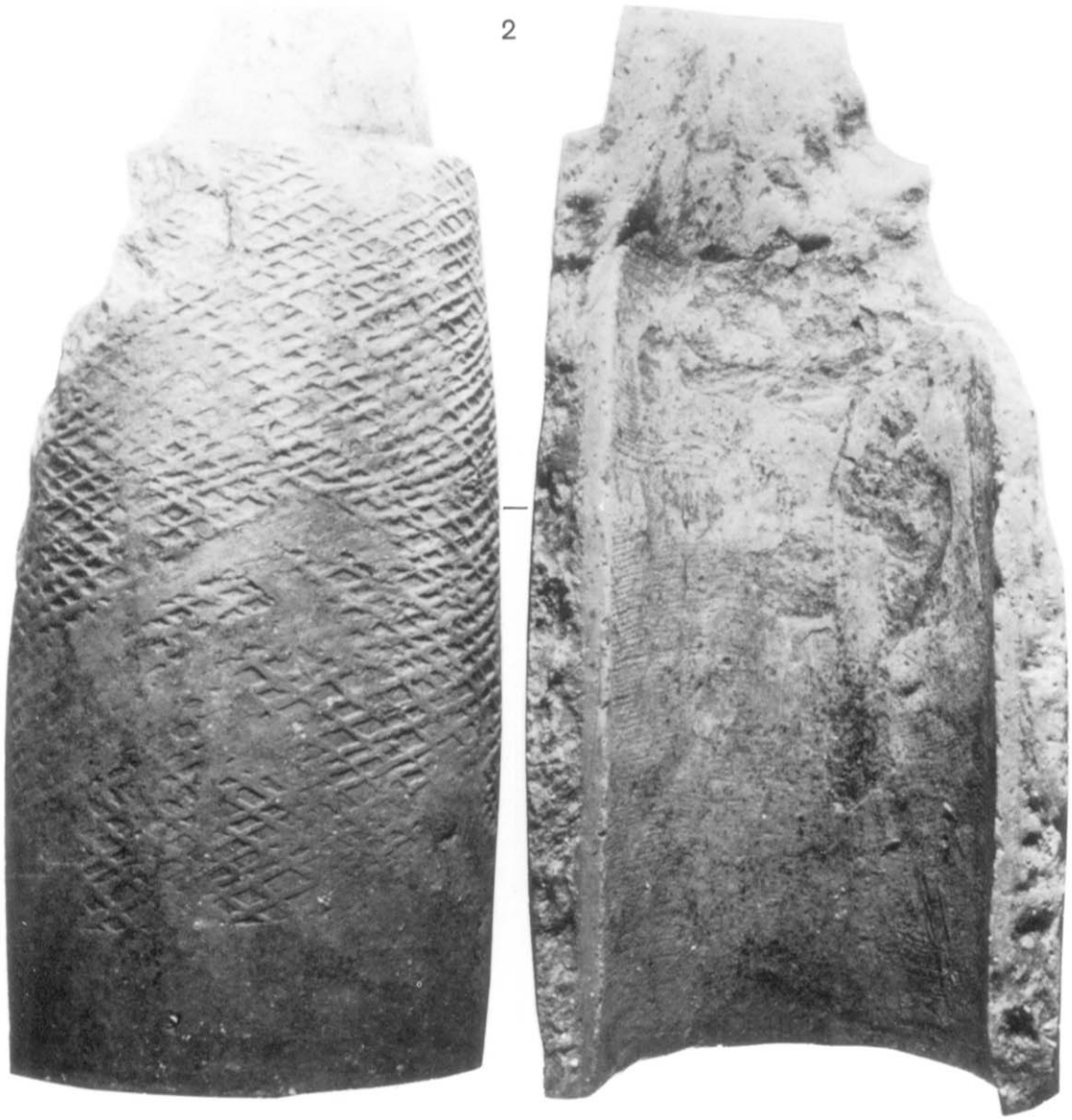
(1～4・6　小西資料
5　西正寺資料)

図版四三　下宮地区（山の内）8　古瓦4



1

2



（小西・大庭資料）



1（御嶽）



2（本谷）



3（本谷）

（小西資料）

図版四五

御嶽・本谷地区2・辛野(九重ヶ原)地区1　古瓦2・須恵器(下)



(西正寺・小西資料)



1



2



3



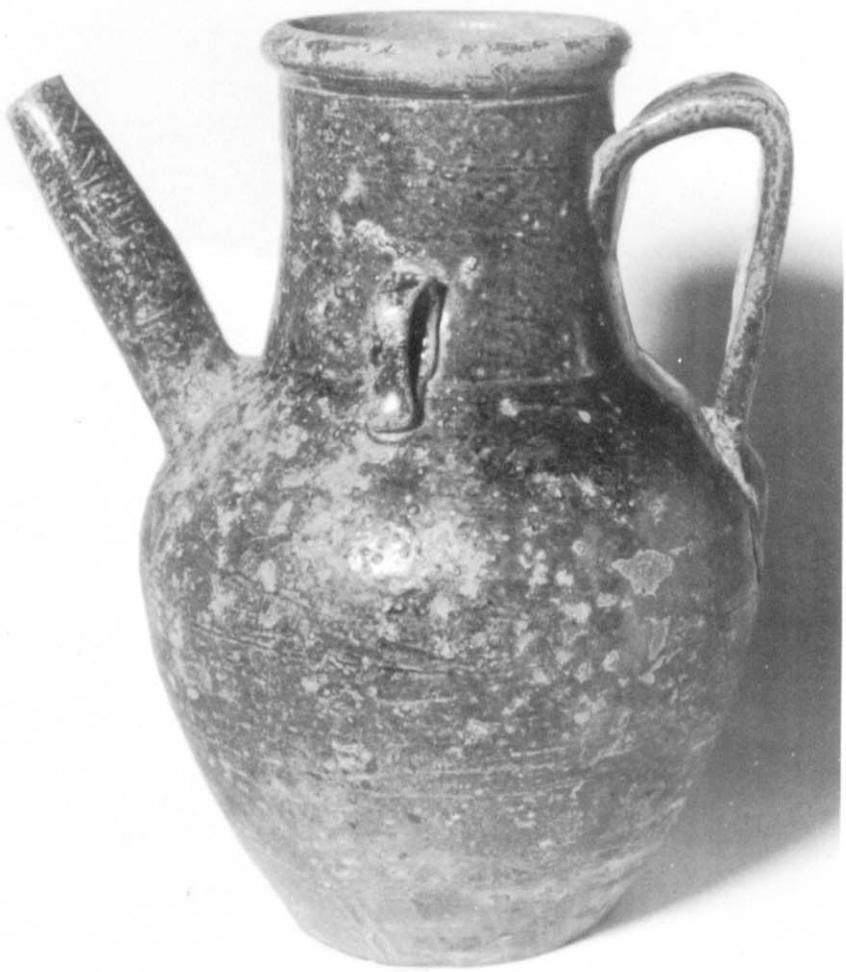
4



5

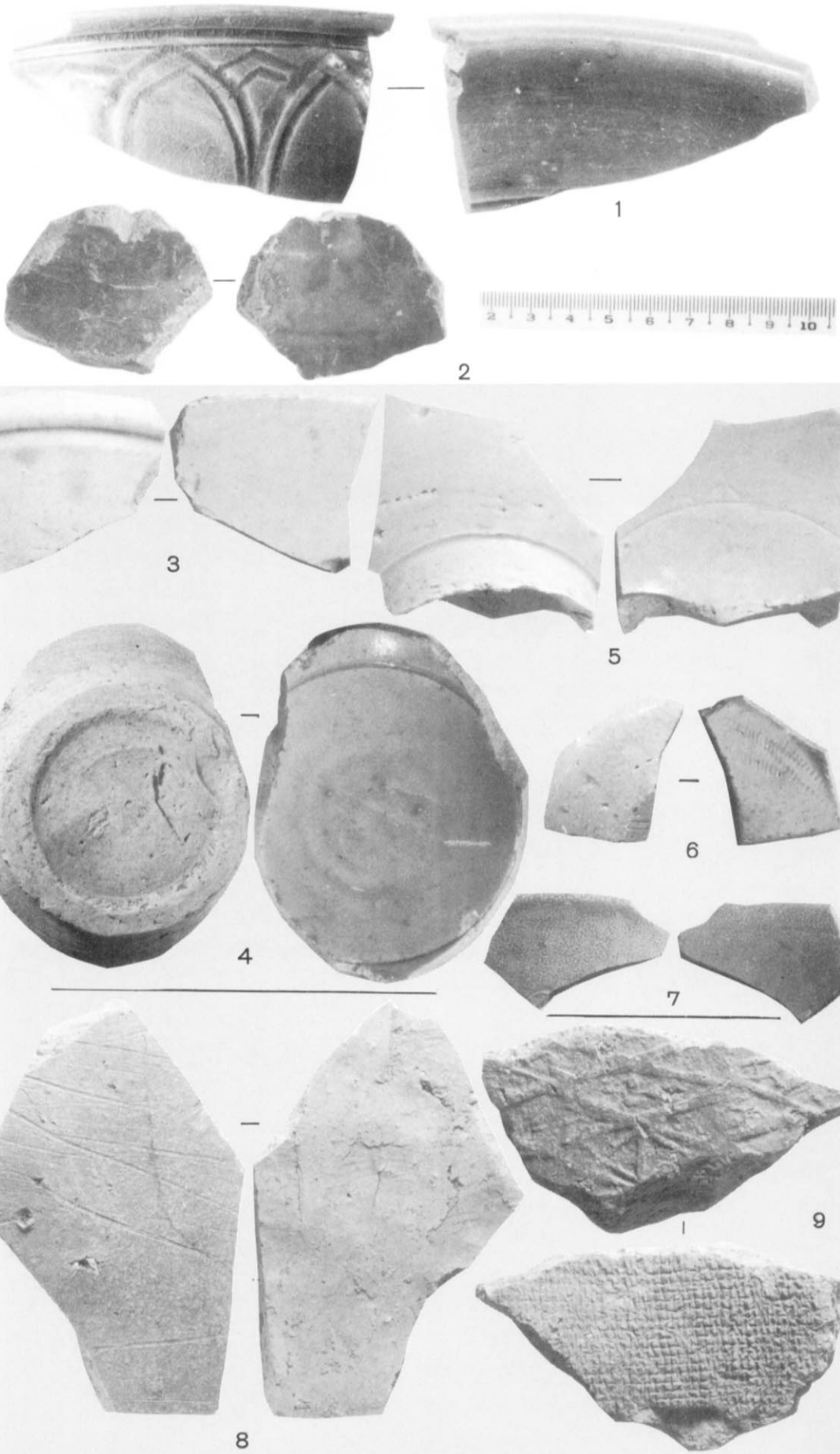
（大庭資料）

図版四七　辛野（九重ヶ原）地区3　褐釉陶双耳付水注（大庭資料）



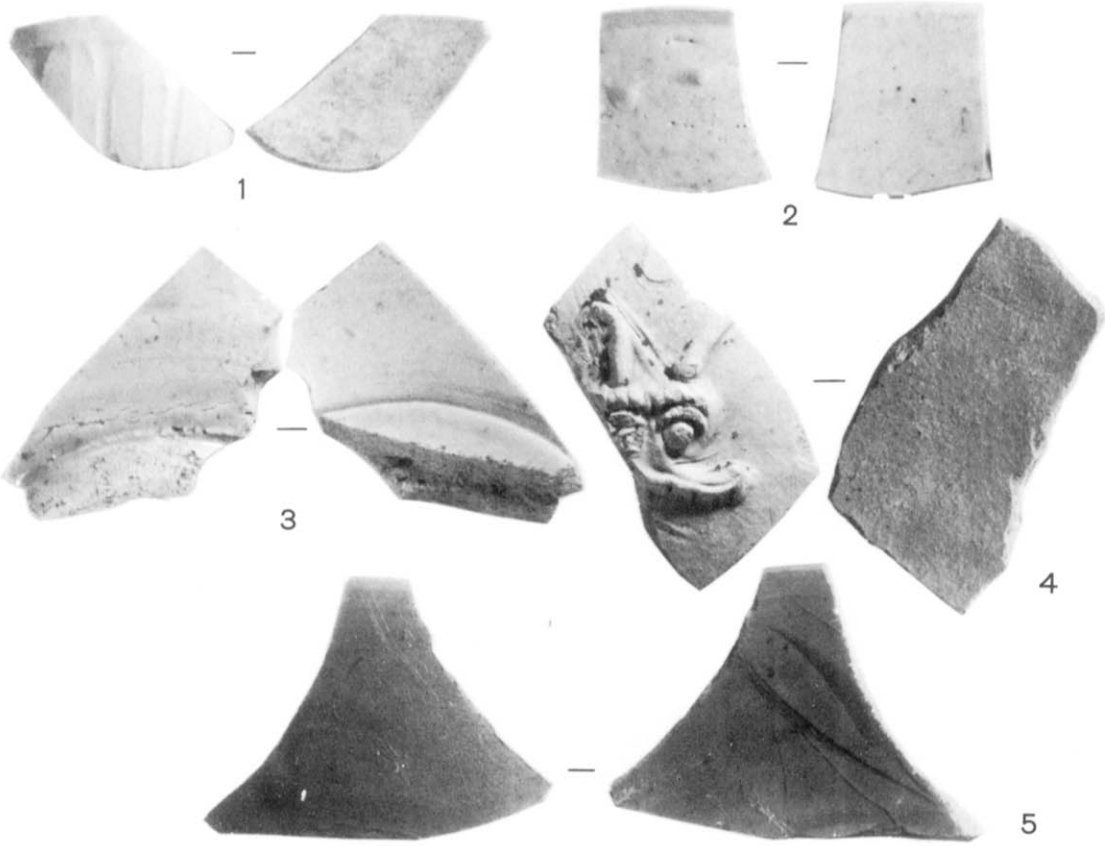


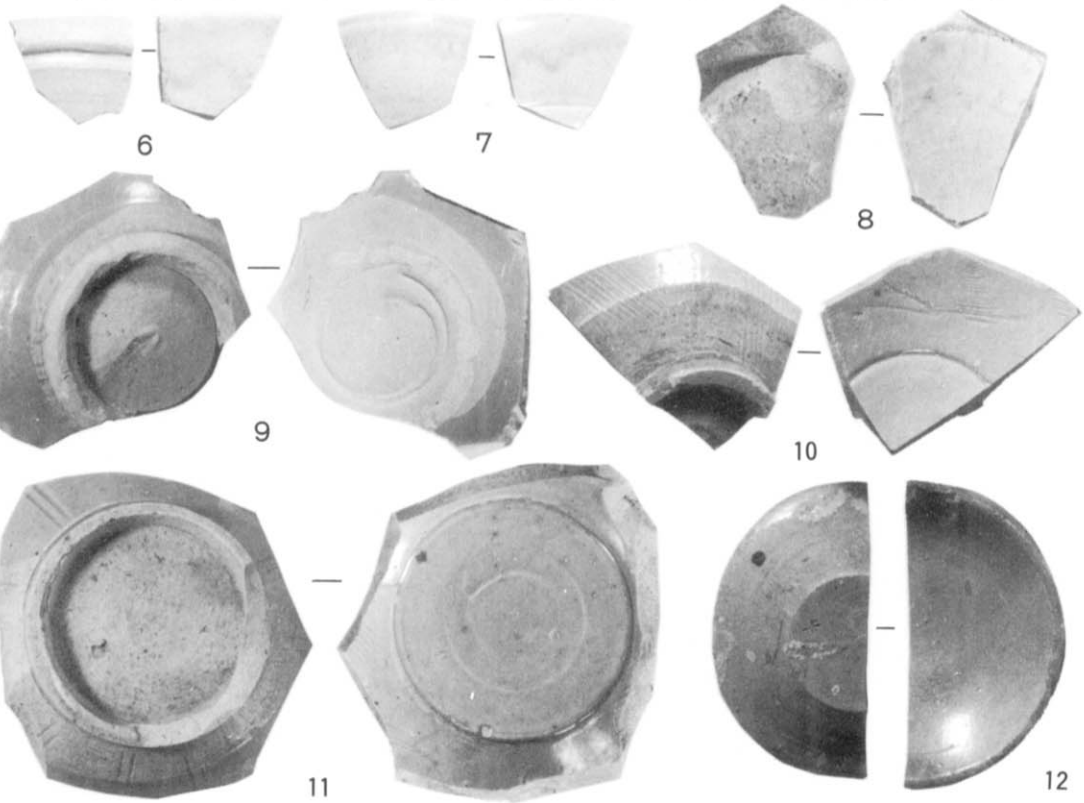




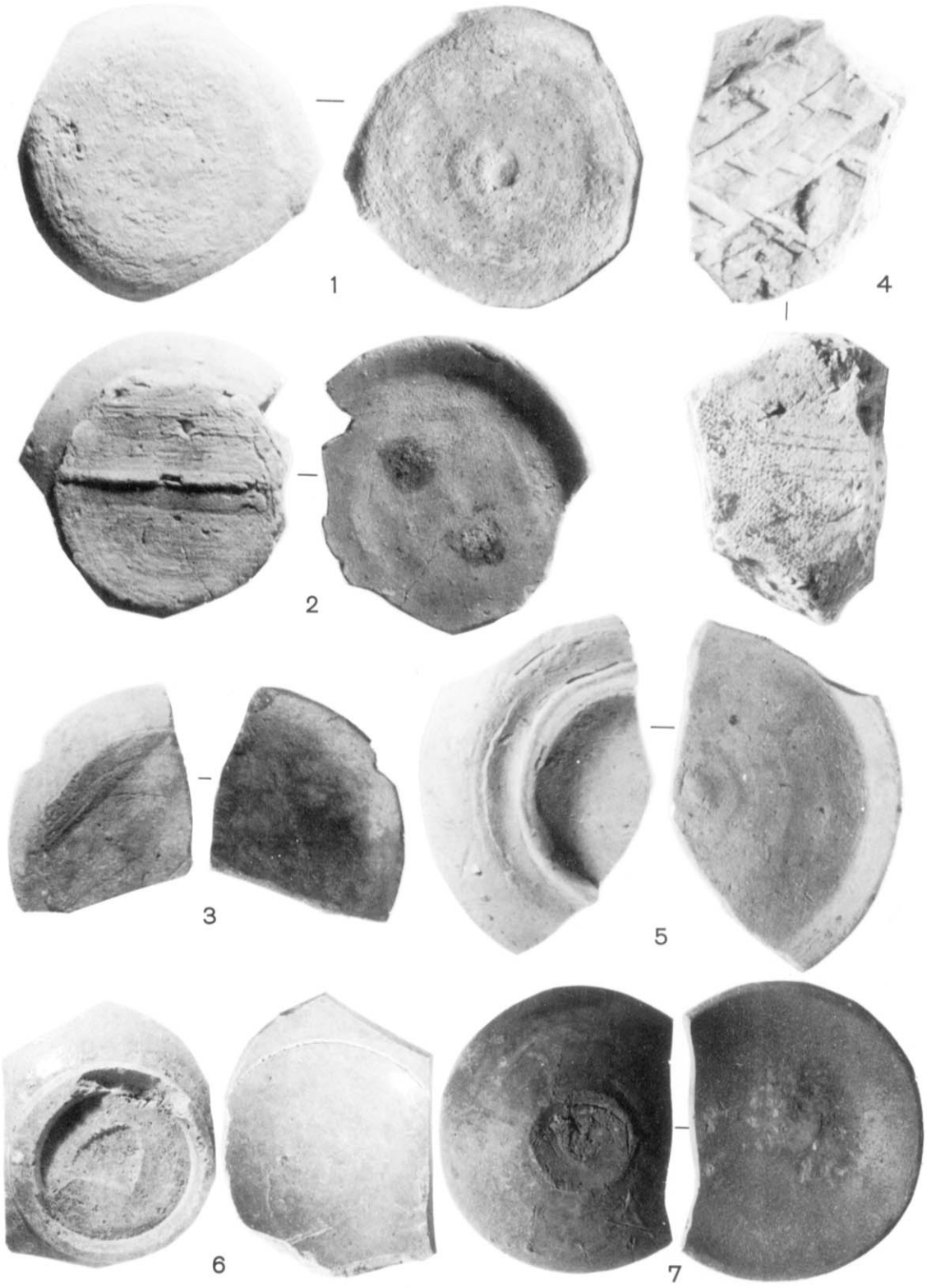
（小西資料）

図版四九　辛野（九重ヶ原地区）5　中国陶磁2（1～5・C地点、6～12・D地点）





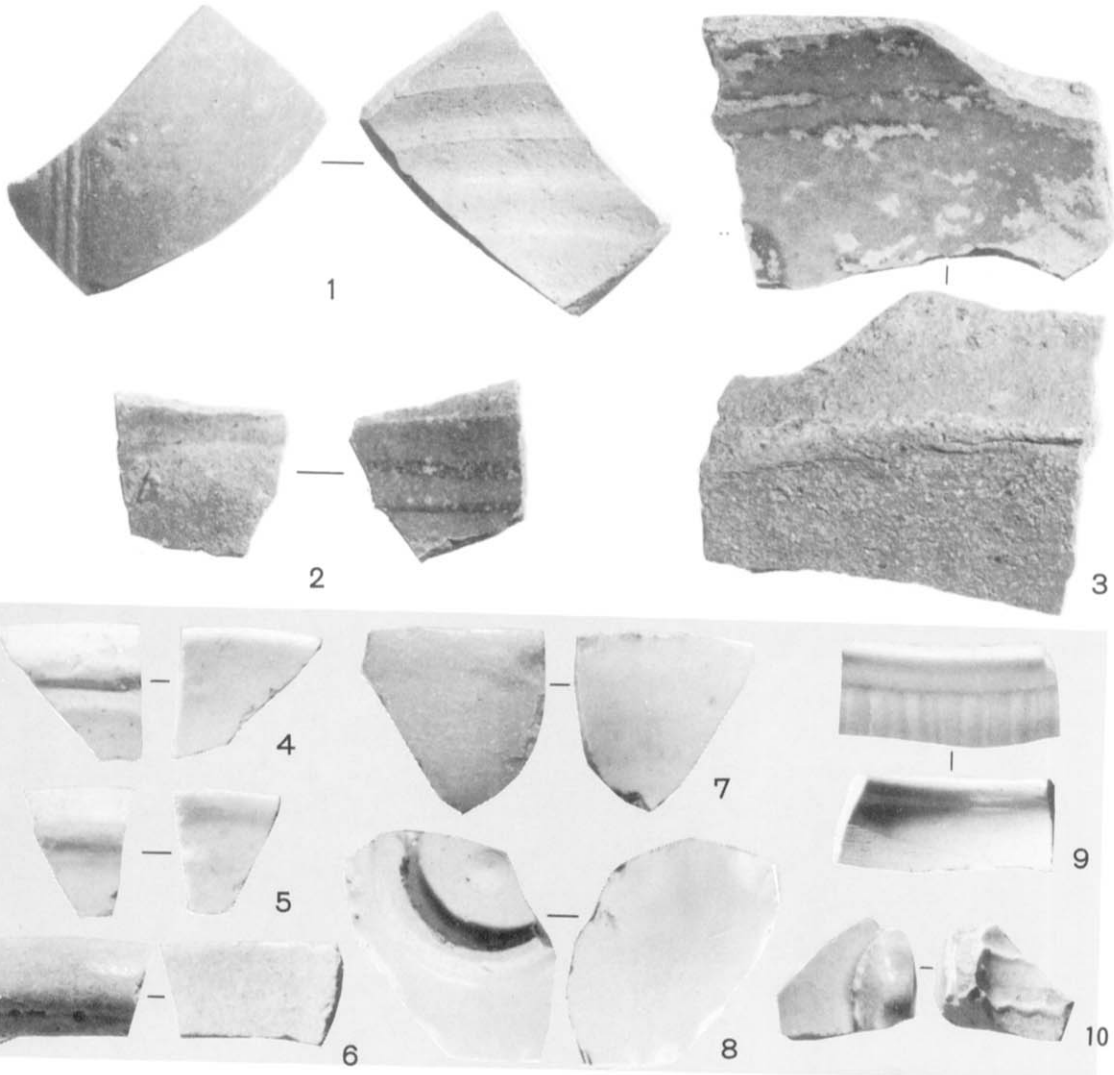
（小西資料）



図版五〇　辛野（九重ヶ原）地区6　土師器2・古瓦2（5）・中国陶磁3（6・7）（E地点）

（小西資料）

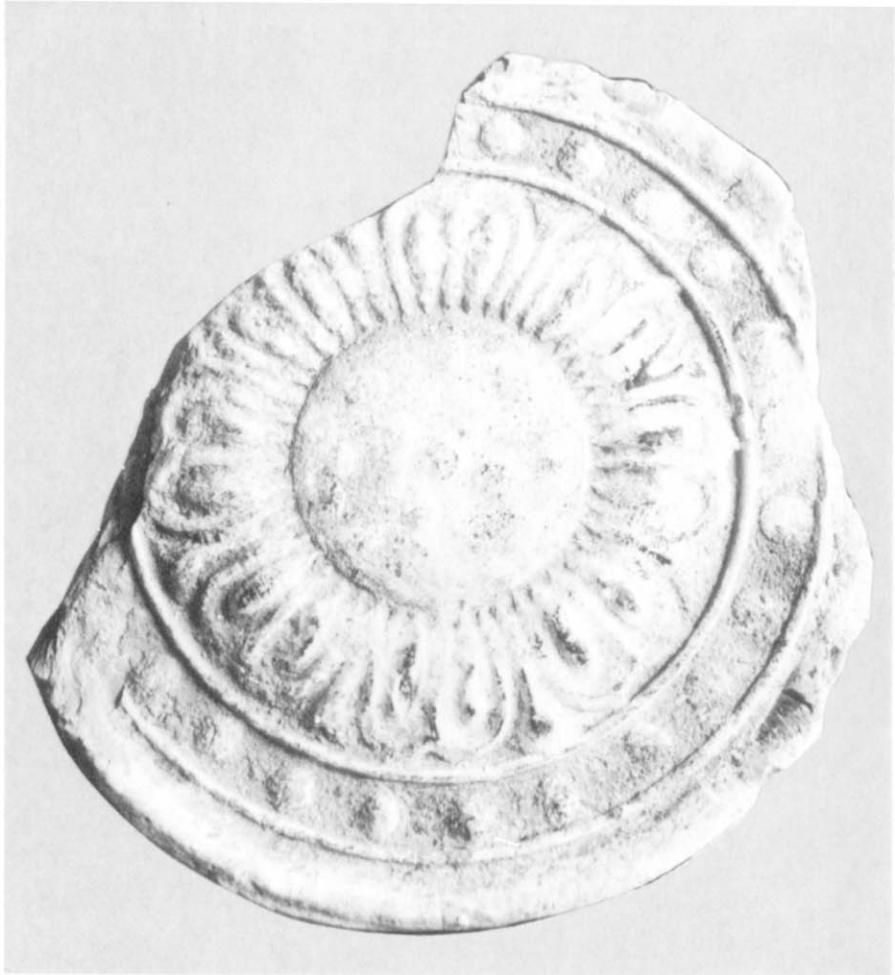
図版五一　辛野（九重ヶ原）地区7　中国陶磁4（E地点）




11


12

（小西・松田資料）

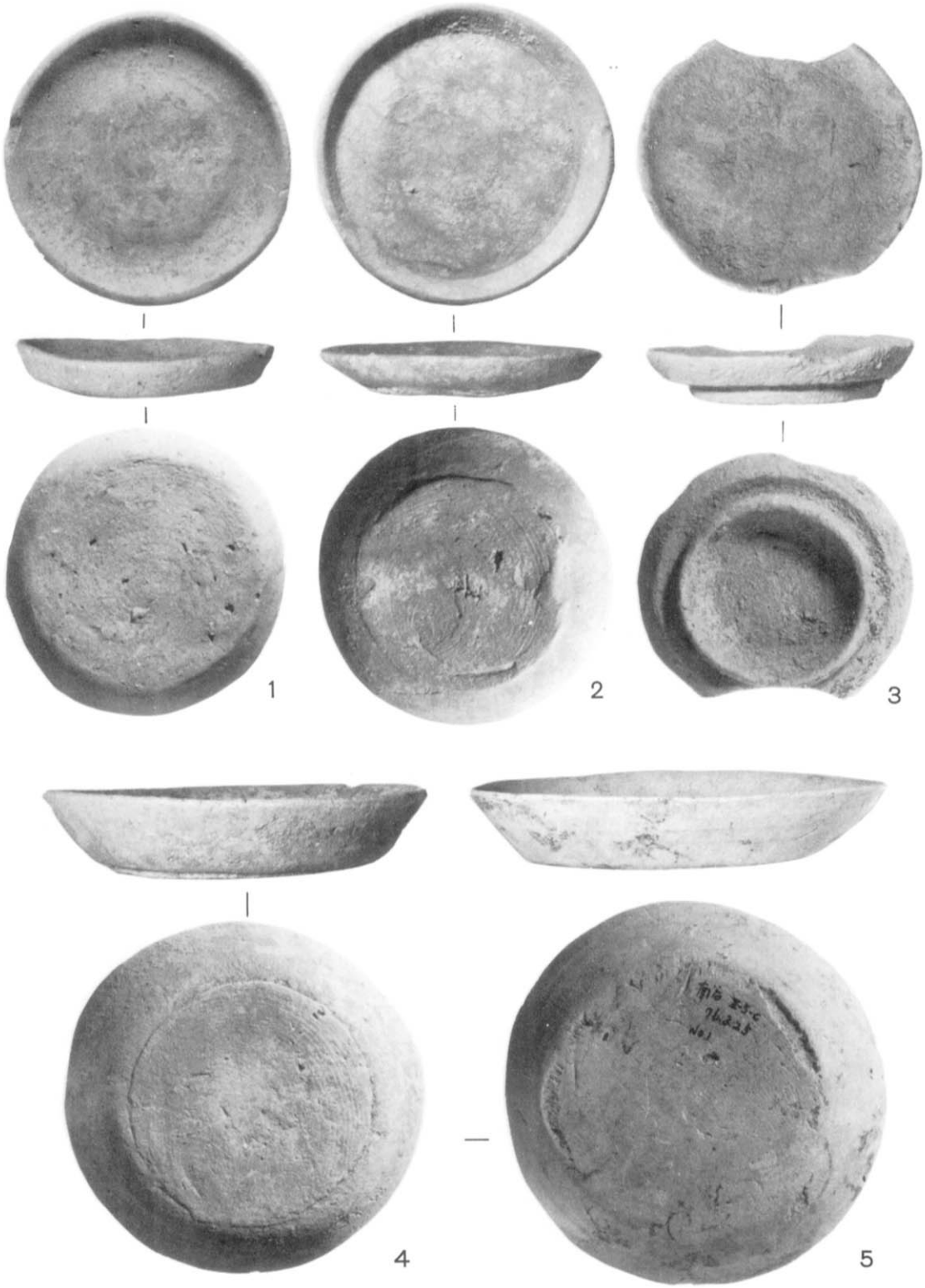




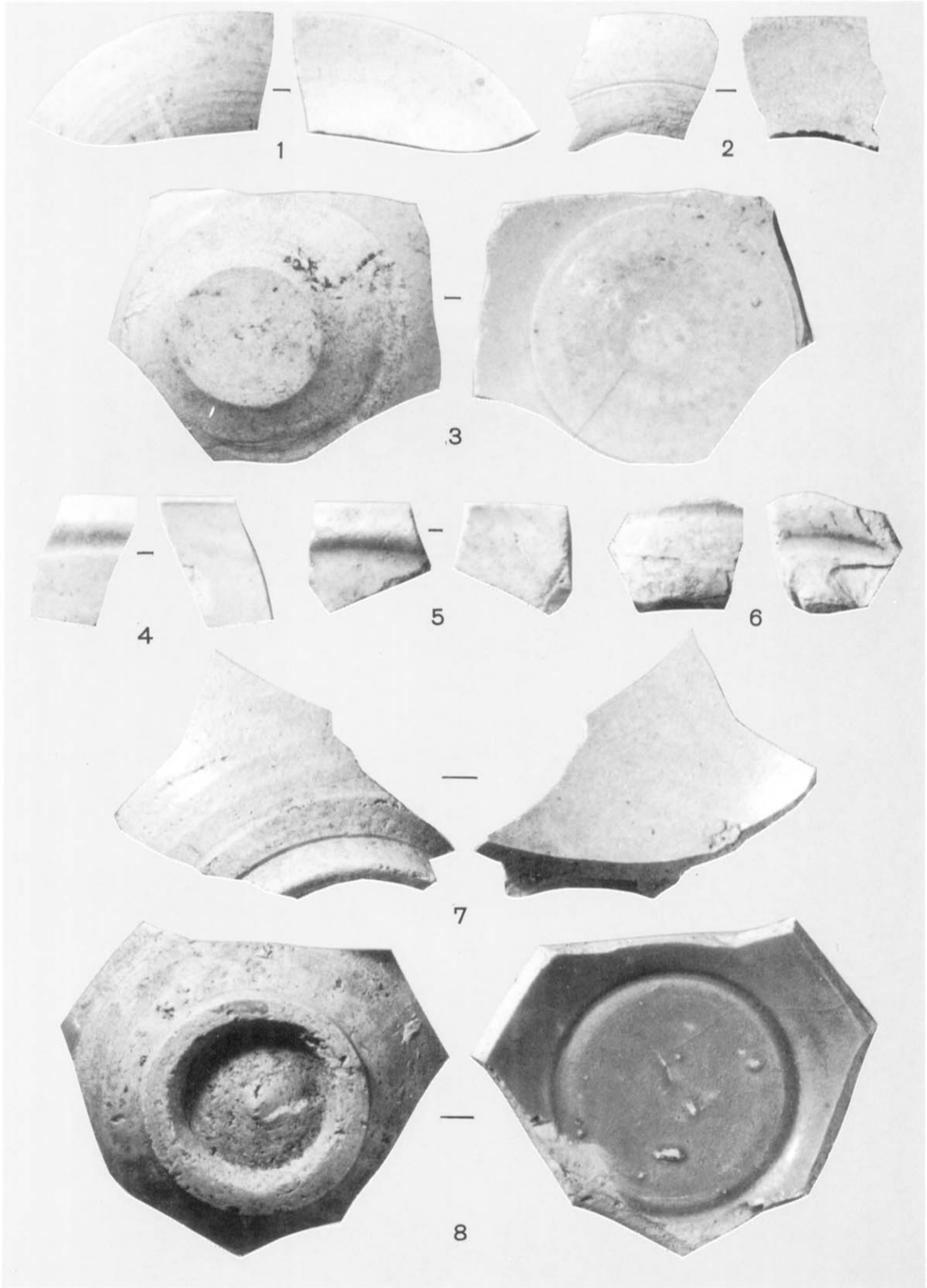
図版五二　南谷地区2　古瓦・中国陶磁1（下）

（西正寺・小西資料）

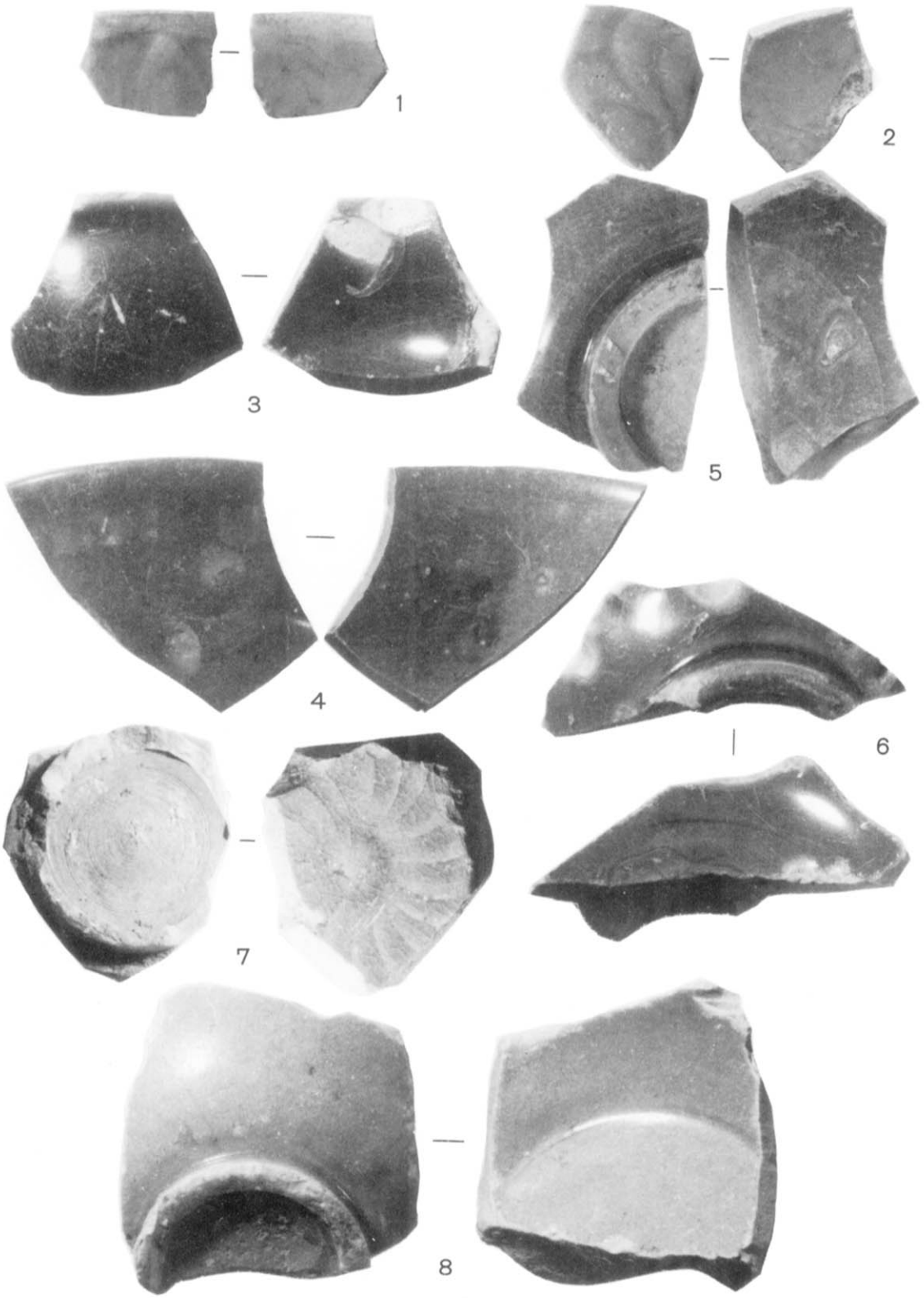
図版五三　南谷地区3　土師器



（小西資料）

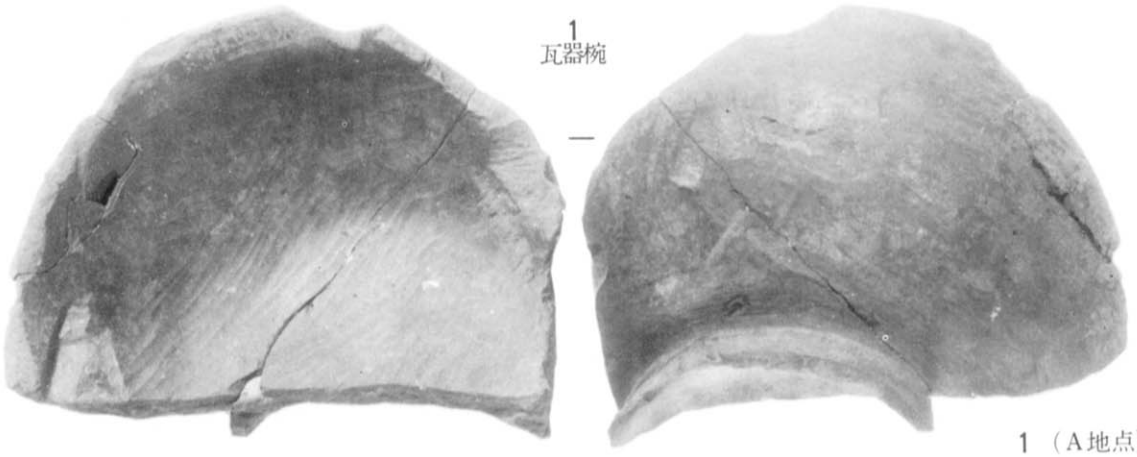

1
2
3
4
5
6
7
8

図版五五　南谷地区5　中国陶磁3（青磁）（B地点）

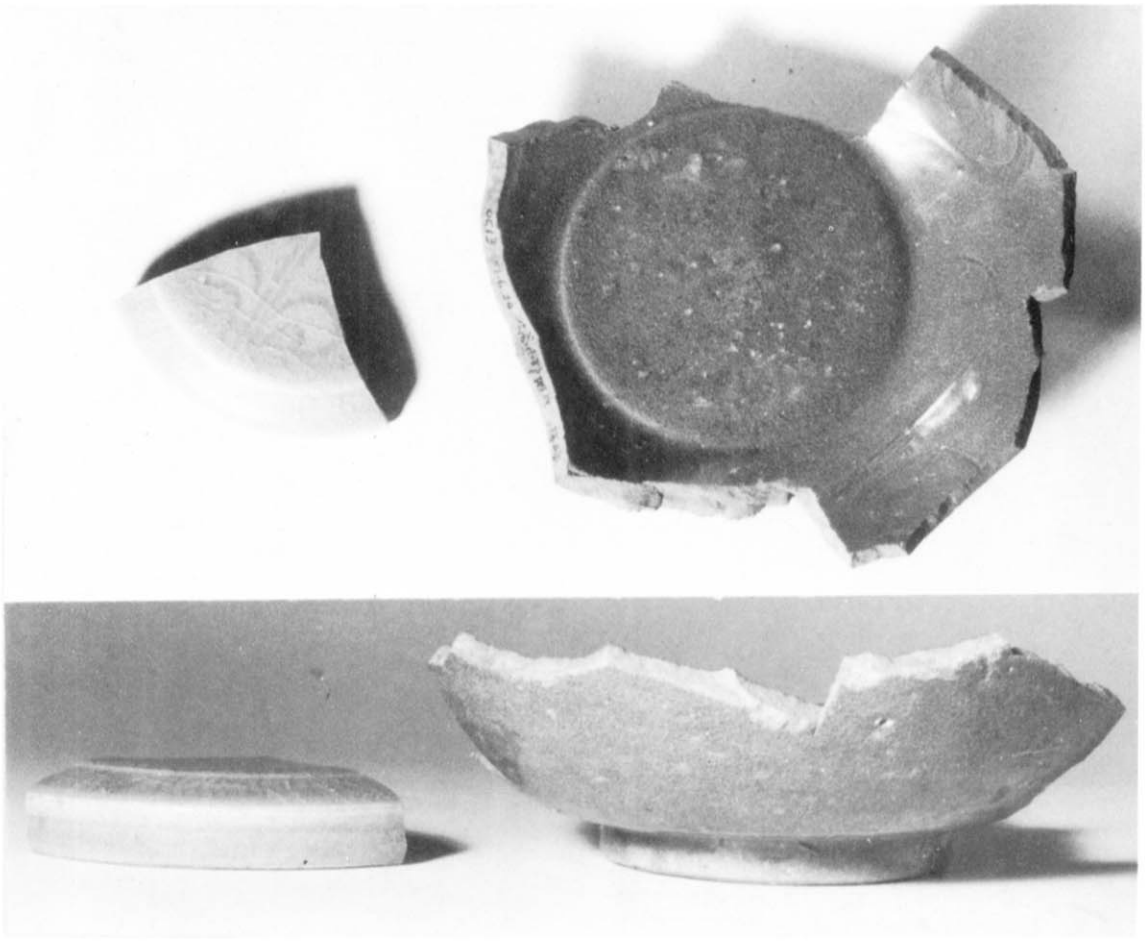


（小西資料）

1
瓦器椀



1（A地点）

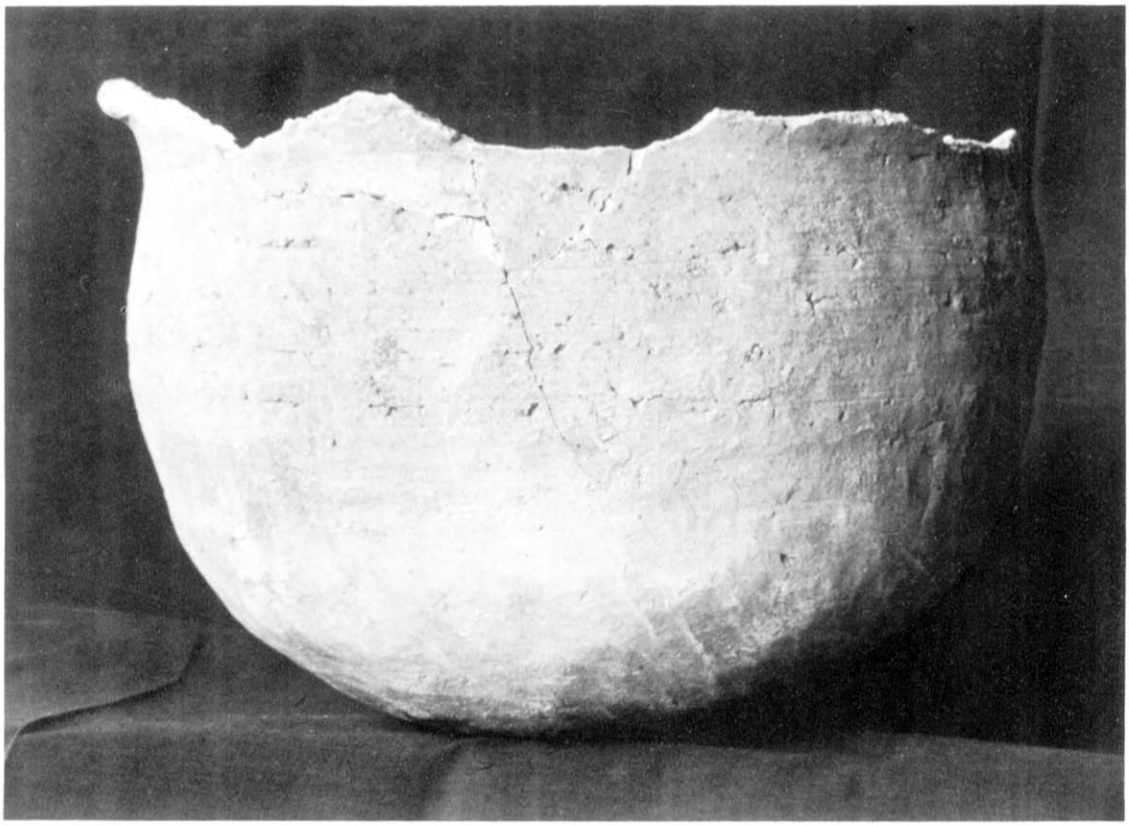


2（C地点）　3（B地点）

（小西資料）



花見ヶ丘出土藏骨器



北谷出土瓦質鉢

（西正寺・斉藤資料）

図版五八　宝満山経塚遺物1　銅製経筒







（河内資料）



図版五九　宝満山経塚遺物2　金銅菩薩形立像1（河内資料）

図版六〇　宝満山経塚遺物3　金銅菩薩形立像2（細部）

2

背面



1

正面



4



背面裾部

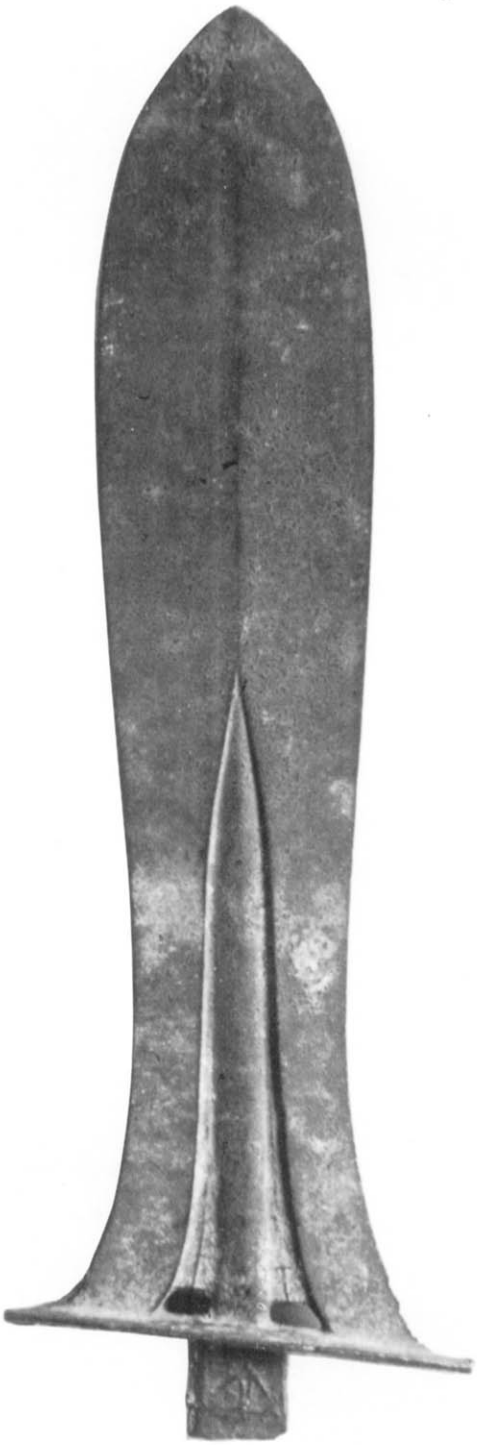
3



像底

（河内資料）

図版六一　下宮宝物1　銅戈



（全長38.0センチ）





図版六二　下宮宝物2　唐獅子（菊目石製）　一軀



吽形
(高さ85.0センチ)



阿形
(高さ90.0センチ)

図版六三　下宮宝物3　木造狛犬1　一対

図版六四　下宮宝物4　木造狛犬2　吽形





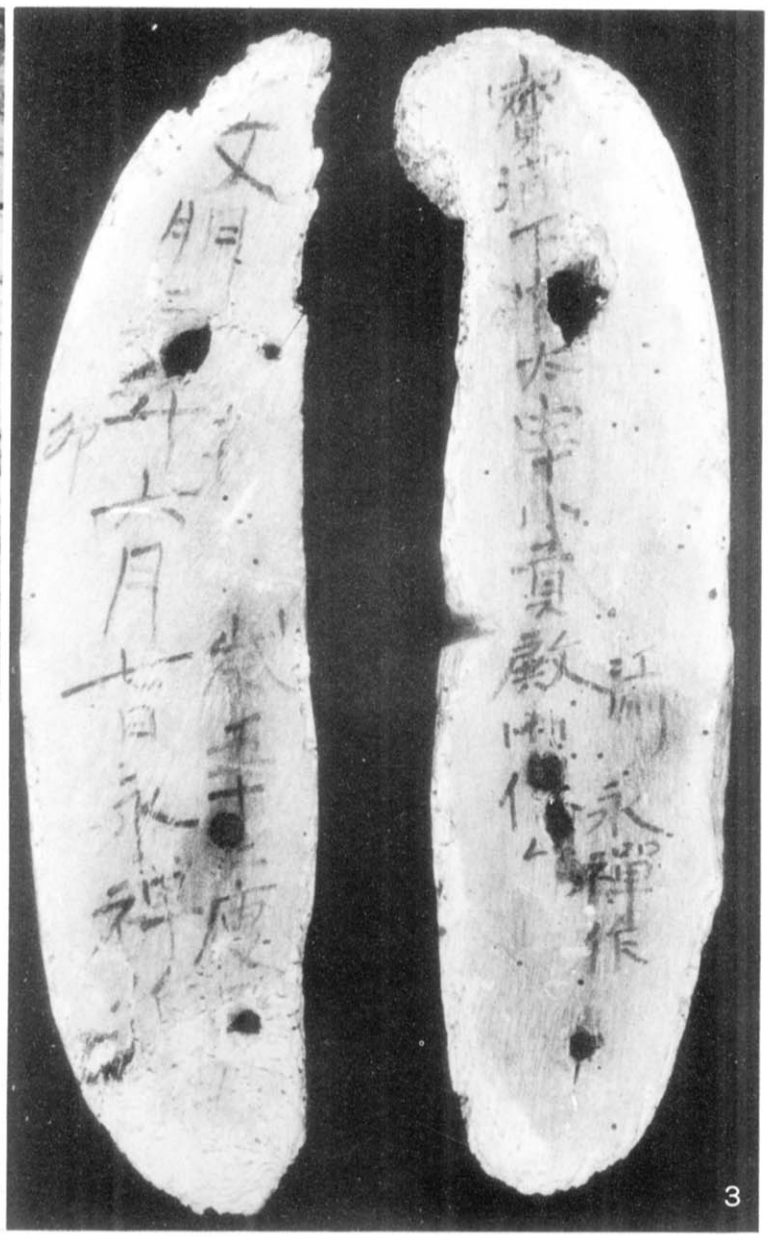




1



2



3

1.吽形狛犬体内
2.同上墨書銘
3.獅子頭左右眉裏
墨書銘(赤外線写真)

図版六六　下宮宝物6　水鏡・銅鏡1

水鏡



（径36.5センチ）

「キリーク」鏡



（径36.2センチ）

図版六七　下宮宝物7　銅鏡2

「聖母宮」鏡



（径45.7センチ）

「八幡宮」鏡



（径44.9センチ）

宝満山の地宝

——宝満山の遺跡と遺物——

昭和五十七年九月二十五日発行

編集　小田富士雄

発行　財団法人 太宰府顕彰会
福岡県太宰府市大字太宰府一一一二
電話（〇九二）九二四—七二二〇

印刷　有限会社 青雲印刷
北九州市小倉北区熊谷一丁目二一一三
電話（〇九三）五六一—三一二八